

日本応用心理学会

第28回大会

研究発表抄録集

1961年12月

東京教育大学

は し が き

日本応用心理学会第28回大会は、昭和36年10月14日、15日の両日東京教育大学において開催されました。幸い両日も好天気恵まれ、390名余りの参会者が180を越える研究発表を熱心に聴取するという盛況で、大会準備委員会一同深く感謝致すところであります。これもひとえに会員諸氏の熱意と学会に対する社会の期待を示すものといえます。

本学は戦争により建物の大部分を失い、その後、復興計画が進められていますが、研究発表に適した教室は少なく、その上食堂、その他の厚生施設も不十分で、参会者のみなさまにご不便をおかけしたことをここにおわびするとともに、各方面から寄せられたご厚意に深く感謝申し上げます。

一般発表申し込み数は216、発表数182、シンポジウム3、特別講演1でありました。本論文集の編集方針として一般発表は、400字詰原稿用紙で2枚以内、シンポジウム20枚、特別講演4枚を原則としてこの論文集を編集致しました。

終わりに、この論文集を編集するにあたり、日本応用心理学会事務局と、東京教育大学心理学教室のみなさんに、ご援助をいただきました。厚くお礼申し上げます。

昭和36年10月

日本応用心理学会
第28回大会会長 小保内虎夫

大会日程表

	10月14日(土)				10月15日(日)			
	午前 (9:00~12:00)		午後 (1:10~2:50)		午前 (9:00~12:00)		午後 (1:00~4:00)	
第1室 (合併教室)	教育Ⅰ 1~13	質問	シンポジウム Ⅲ犯罪・非行	特別講演および 総会	教育Ⅱ 1~11	質問	教育Ⅲ 1~12	質問
第2室 (S 105)	産業・職業指導 1~10	質問	シンポジウム Ⅰ産業心理		産業Ⅰ 1~13	質問	産業Ⅱ 1~10	質問
第3室 (S 106)	交 通 1~12	質問	シンポジウム Ⅱ人間工学		臨床・相談Ⅰ 1~12	質問	臨床・相談Ⅱ 1~12	質問
第4室 (E 205)	社 会 1~12	質問			一般・文化Ⅰ 1~12	質問	一般・文化Ⅱ 1~11	質問
第5室 (E 403)	検 査 1~12	質問			犯 罪Ⅰ 1~12	質問	犯 罪Ⅱ 1~12	質問
第6室 (E 405)	発 達 1~13	質問			人格・行動Ⅰ 1~13	質問	人格・行動Ⅱ 1~12	質問

第28回大会準備委員

準備委員長 小保内 虎 夫

委 員 中 野 佐 三 桂 広 介

上 武 正 二 丘 直 通

小見山 栄 一 長 島 貞 夫

辰 野 千 寿 永 沢 幸 七

成 瀬 悟 策 真仁田 昭

金 子 隆 芳 原 野 広太郎

藤 田 統

目 次

教 育

番号	発表題目	所 属	発 表 者	頁
1	児童の友人関係に関する一研究	東京教育大学	真仁田 昭	1
2	児童生徒における価値葛藤の解決基準について	日 本 大 学	長谷川 貢	1
3	青年における欲求体制の階層性について	富 士 短 期 大 学	駒 崎 務	1
4	スポーツ練習の中学生の心身に及ぼす影響について	藤沢市立第一中学校	植 田 稔	2
5	高校生のもつ理想的人間像(Ⅳ) —母親について—	埼 玉 大 学	山 根 薫	2
6	体罰の限界についての意識調査	野間教育研究所 田中教育研究所	○田中 博正 松原 達成	3
7	僻地児童生徒の心理学的研究(Ⅲ)第2報告 —飛騨山村児童のPFTについて—	岐 阜 大 学	宮 脇 二 郎	3
8	近親婚調査による児童の知能の実態(Ⅳ①②③)	静 岡 大 学	◎中石 沢 正 寿 ○石勝 川 正 透 ○塩田 井 晃 田 中 武 雄	3
9	語彙能力調査法の一検討	東京教育大学	福 沢 周 亮	5
10	英語学習の心理学的研究 —Pattern practice について—	教 育 大 学 〃 東京都小松川第3中学	永 沢 幸 七 小保内 虎 夫 小 沢 礼 子	5
11	乗法九九の一分析	横 浜 国 立 大 学	清 水 利 信	5
12	教科指導における実地見学の効果に関する一研究	岐 阜 大 学	石 黒 鈺 二	6
13	「中学入学初期における生徒の家庭学習の実態(一例)」	東 京 都 杉 並 区 立 高 南 中 学 校	萩 生 田 忠 昭	6
14	学級担任もち上りとクラスの反応傾向の平均化 (P.F.テストによる)	埼 玉 大 学	長 瀬 邦 三	7
15	Q分類による「教育」に対する態度の研究	福 島 大 学	徳 田 安 俊	7
16	保母の生活時間構造(保育園) —時間布置と活動内容について—	愛 知 学 芸 大 学	相 川 高 雄	7
17	Facial Exposure の読話成績におよぼす影響(1),(2)	N H K 東 京 教 育 大 学 〃	○豊尾 口 真 ○中野 島 碩 野 善 治	8
18	音楽による精神衛生(Ⅶ)	共 立 女 子 大 学	玉 岡 忍	8
19	精神薄弱児の描画と色彩(Ⅰ) ペンダーゲンタルドテストに依る描画の検討	都 立 青 鳥 養 護 学 校	○吉小 田 辰 小 小 里 進 林 小 出 雄 小 小 邦 進 吉 辰 雄	9
20	精神薄弱児の描画と色彩(2) 樹木および人物画の発達の研究	都 立 青 鳥 養 護 学 校	林小 邦 進 小 小 里 進 吉 辰 雄	9
21	精神薄弱児の描画と色彩(色の好悪の発達)	都 立 青 鳥 養 護 学 校	小 小 出 進 林 小 里 進 吉 辰 雄	9

番号	発表題目	所 属	発 表 者	頁
22	精神薄弱児の数量概念(1) —量的関係概念について—	東京教育大学 東京教育大学附属大塚養護学校	堅 田 明 義 稲 吉 千 代	10
23	精神薄弱児のコミュニケーション(9) —聞き方の能力に関する研究(2)—	東京教育大学 // 東教大附属養護学校	○清 水 寛 中 野 善 飯 田 貞 田 出 雄	10
24	精神薄弱児のコミュニケーション(9) —聞き方の能力に関する研究(2)—	東京都立青鳥養護学校 東京教育大学 東京都立青鳥養護学校 //	井 田 範 美 堅 田 出 明 義 小 枚 邦 進 雄	11
25	特殊児童(主として精薄児)の教育評価に関する一研究	東京元加賀小学校	岸 本 英 男	11
26	テーマ聴児の知能と学力の分析的研究 第一報告テーマ 聴児の知能構造の分析	ミツミ電機K K	水 野 誠 司	11
27	第2報告 聴力別による知能の差異について	東京学芸大学	堀 内 敏 夫	12

発 達

28	女兒の心身発達の相関に関する研究(6) —Acceleration と性格特性—	お茶の水女子大学 //	平 井 信 義 千 羽 喜 代 子	13
29	女兒の心身発達の相関に関する研究 —性格特性と体型、二次性徴、身体徴候との関係—	お茶の水女子大学 //	○千 羽 喜 代 子 平 井 信 義	13
30	生活環境が学習におよぼす影響	日本女子大学 // //	○児 玉 省 小 山 子 立 石 子 石 延 子	13
31	家庭のしつけの研究	日本女子大学 // //	児 玉 省 山 本 弘 裕 信 江 子	14
32	「乳児の行動観察」(第1報)	日本女子大学 八王子乳児院 都立八王子乳児院	児 玉 省 近 藤 高 男 鶴 田 郁 代	14
33	正常小児の follow-up study (第三報) —ゲゼル行動発達検査に見られた発達特徴—	仙台市精神衛生相談所 // //	大 脇 三 恵 新 井 清 三 丸 山 直 美	15
34	食物嗜好の年齢的变化	日本大学	○安 藤 公 平 岡 本 健	15
35	言語発達の指標としての接続助詞について	福島大学	田 口 孝 之	16
36	知的優秀児の特性に関する基礎研究第9報告	東京家政大学 東京港区立三光小	森 村 重 敏 外 村 近	61
37	青年期における自殺未遂の事例研究 —書簡を資料として—	東北大学	○針 生 亨 北 村 晴 朗	16
38	青年の宗教的関心と行為との関係	国士館大学	高 嶋 正 士	17

人 格 ・ 行 動

39	夫婦の性格的調和性に関する経験的仮説 II —社会心理学的側面— 仮説 I, II	東京家庭裁判所	日 上 泰 輔	18
40	創造性に関する研究 —臨床活動と宗教的実践について—	東 洋 大 学	恩 田 彰	18

番号	発表題目	所属	発表者	頁
41	精神統一による心理生理的变化について	防衛大学校	大谷 宗司	18
42	Autogen Training の進め方に関する研究	防衛庁技術研究 東京教育大学 河野教育研究所	林高橋 茂男 成長瀬 良幸 長谷川 悟策 河野 浩一 野 良和	19
43	Autogene Training 練習過程の研究 I. 一般的考察	東京教育大学 河野教育研究所 防衛庁技術研	高橋 良幸 成長瀬 浩一 長谷川 悟策 河野 良和 林 茂男	19
44	自律訓練法の練習過程の研究 II 問題点と対策	東京教育大学	成瀬 悟策	20
45	Autogene Training 臨床的適用の研究 I. 一般的考察	河野教育研究所	河野 良和	20
46	Autogene Training 臨床的適用の研究 II 事例報告	東京教育大学 防衛庁技術研 河野教育研究所	成瀬 悟策 高橋 良幸 成長瀬 浩一 長谷川 悟策 林河野 良和	20
47	意識的統御機能低下時の行動の変容 (IV) (1) 再び日本酒飲用時のロールシャツハ反応について (a)	福島医大 東北医大 東北医大	○菊地 哲彦 北村 正 佐藤 功 北村 正 大 山 彦 大 山 彦	21
48	意識的統御機能低下時の行動の変容 (IV) (2) 再び日本酒飲用時のロールシャツハ反応について (b)	東北医大 福島医大 東北医大	○佐藤 功 北村 正 北村 正 大 山 彦 大 山 彦	21
49	意識的統御機能低下時の行動の変容 (IV) アルコール飲用時の重複作業的選択反 応及び速度見越の成成績	東北医大 東北医大	○長塚 康弘 北丸 晴 九 山 彦 丸 山 彦	22
50	時間評価と疲労・興奮 (2) —時間評価に及ぼす作業の影響—	玉川大学	須藤 泰男	22
51	スポーツ適性のためのMMP I 改訂試案	都立両国高等学校 日本大大学	飯田 穎三 松井 雄 杉本 介	22
52	スポーツマンのパーソナリティ特性に関する研究	愛知学芸大学	末利 博	23
53	防衛大学校における矢田部ゴルフオード性格検査 (総括)	防衛大学校 防衛大学	近喰 秀大 大村 政男	23
54	指紋による性格の診断	中央大学	赤塚 泰三	24
55	攻撃性に関する研究 (3) —絵画攻撃性検査の試み・その2—	日本大学	花沢 成一	24
56	人間モナドの素性相位規制に関する —仮説の提出 (続)	京都大学	正村 史朗	25
57	きょうだいの組合せによるきょうだいの性格について	日本女子大 河野教育研究所	児中 玉田 小坂 省子 カヨ 美	25
58	性格の類型について (3) —Sociometric choices と性格類型—	東京工業大学 文京学園 東京教育大	○穂坂 山元 原 貞 堀 勝洋	26

番号	発表題目	所 属	発 表 者	頁
59	性格の類型について(4)	東京工業大学 " " 文京学園大学 東京教育大学	○稲山貞登 坂元勝昂 原堀勝洋	26
産業・職業指導				
60	組織体の心理学的研究第2報部・課間の関係について(1)	○秋山精鋼株式会社 日 本 大 学 " " 秋山精鋼株式会社	勝倉信雄 浅井昭雄 馬場祐祐 村井昌健	27
61	組織体に関する心理学的研究	日 本 大 学 " " 秋山精鋼株式会社	○村井昌信 浅井祐昭 馬場雄雄	27
62	監督者の指導性に関する研究(2)	立 教 大 学	天 野 剛三郎	27
63	無形物セールスマンに関する一研究 — 一田研式職業興味検査を中心として —	科 警 研	大 塚 博 保	28
64	教員の職業興味について	大 阪 学 芸 大 学	友 金 義 治	28
65	性能と性格との関係(作業性格検査23)	東京都職業適性相談所	板 倉 善 高	29
66	職業希望と卒業後の進路(希望進路複合類型)	大 阪 大 学 " "	増 田 幸 一 中 西 信 男	29
67	S D法による製菓会社の比較 — 3つの Concept について —	日本マネジメント協会 東 京 教 育 大 学	市 橋 広三郎 永 沢 幸 七	30
68	企業イメージの研究 (1) 企業イメージ・プロフィール(CIP)	○博報堂・調査部 東 京 大 学	山 田 俊 正 山 本 和 郎	30
69	企業イメージの研究 (2) 企業イメージの構造	○東 京 大 学 博 報 堂 調 査 部	山 本 和 郎 山 田 俊 正	30
70	従業員モラル調査におけるモラルと関心度との関係	広 島 大 学 " "	正 戸 茂一 磯 谷 昭 護 吉 森	31
71	従業員のモラル調査におけるモラルと関心の因子分析	広 島 大 学 " "	正 戸 茂一 磯 谷 昭 護 吉 森	32
72	宣伝色塗装車の塗装デザインに関するイメージ調査	広 島 大 学 " " 広島商科大学 神戸外国語大学	長 町 三 生 正 戸 重 茂 木 田 雄 郎 倉 盛 一	32
73	カナ文字タイピングの適性に関する研究	田 中 教 育 研 究 所 " "	○松 原 達 哉 茂 木 茂 八	32
74	カナ文字の識別に関する研究(第2報)	東 京 教 育 大 学 国 立 国 語 研 究 所 東 京 教 育 大 学	○阪 本 敬 彦 村 石 昭 三 加 賀 秀 夫	33
75	眼球運動の時間的研究(Ⅳ)	大阪府立公衆衛生研究所	大 谷 璋	33
76	眼球運動の時間的研究(Ⅳ)	大阪府立公衆衛生研究所 " "	○石 橋 富 和 大 谷 璋	33
77	某自動車会社に於ける人間関係管理についての調査研究	札幌医科大学 北 大 公 衆 衛 生	○後 藤 啓 一 三 宅 浩 次 斎 藤 和 雄	34

番号	発表題目	所 属	発 表 者	頁
78	自動車運転者の適性検査	新 潟 大 学	畔 上 久 雄	34
79	職場におけるBGMの実験的研究	宮城学院女子大学	泉 山 中 三	35
80	計算機 operator の職業適性に関する研究	東 京 教 育 大 学 〇 原 野 広太郎 長 島 真 夫	〇 原 野 広太郎 長 島 真 夫	35
81	購買動機と色彩	社団法人 セールス プロ モーション ビジューロー	田 岡 信 夫	35
82	仕事のステータスとモラル	明 治 大 学	松 井 賚 夫	36
83	質問紙評定と観察評定の比較による 口述応答評定基準の作成に関する実験(Ⅱ)		渡 藤 大 辺 田 塚 芳 革 源 彦 哉 藏	36
84	面接評価技術の訓練方式 一役割演技と集団討議による一	人 事 院	金 平 文 二	37
85	監督行動と共感性について(その2)	立 教 大 学 〇 山 下 昇男 豊 原 恒	〇 山 下 昇男 豊 原 恒	37
86	作業の変化と blocking	早 稲 田 大 学 〇 清 橋 上 長谷川 〇 原 本 田 健 司 〇 長 谷 川 雅 亨	〇 清 橋 上 長谷川 〇 原 本 田 健 司 〇 長 谷 川 雅 亨	37
37	共感性テスト試作報告(その3)	立 教 大 学	豊 原 恒 男	38
88	航空交通管制官に関する労働心理学的研究 (1) 序 論	東 京 教 育 大 学 〇 小 保 内 虎 夫 上 辰 藤 武 正 森 野 千 千 服 田 孝 政 大 部 川 雅 行 白 梅 学 園 短 期 大 学	〇 小 保 内 虎 夫 上 辰 藤 武 正 森 野 千 千 服 田 孝 政 大 部 川 雅 行	39
89	航空交通管制官に関する労働心理学的研究 (2) 主として職種別	東 京 教 育 大 学 〇 小 保 内 虎 夫 上 辰 藤 武 正 森 野 千 千 服 田 孝 政 大 部 川 雅 行 白 梅 学 園 短 期 大 学	〇 小 保 内 虎 夫 上 辰 藤 武 正 森 野 千 千 服 田 孝 政 大 部 川 雅 行	39
90	航空交通管制官に関する労働心理学的研究 (3) 主として訓練成績による分析	東 京 教 育 大 学 〇 小 保 内 虎 夫 上 辰 藤 武 正 森 野 千 千 服 田 孝 政 大 部 川 雅 行 白 梅 学 園 短 期 大 学	〇 小 保 内 虎 夫 上 辰 藤 武 正 森 野 千 千 服 田 孝 政 大 部 川 雅 行	39
91	計器読みとりにおける明るさ対比の影響	東 京 教 育 大 学 〇 小 保 内 子 虎 夫 金 大 小 川 隆 隆 白 梅 学 園 短 期 大 学	〇 小 保 内 子 虎 夫 金 大 小 川 隆 隆	40
92	計器読取に関する研究(5) 一計器の表示方式についての人間工学的研究(その3)一	立 教 大 学 〇 正 田 亘男 豊 水 原 口 恒 礼 〇 水 口 恒 礼 〇 正 田 亘男	〇 正 田 亘男 豊 水 原 口 恒 礼 〇 水 口 恒 礼 〇 正 田 亘男	40
93	計器読取に関する研究(5) 一計器の表示方式についての人間工学的研究(その4)一	立 教 大 学 〇 水 口 恒 礼 〇 正 田 亘男	〇 水 口 恒 礼 〇 正 田 亘男	41
94	自動車速度計の読み易さについて	慶 応 義 塾 大 学 〇 田 吉 瑞一郎 〇 垣 田 俊 郎	〇 田 吉 瑞一郎 〇 垣 田 俊 郎	41
95	TATによる自動車事故運転者の分析(3)	科 学 警 察 研 究 所	貝 沼 良 行	41

番号	発表題目	所 属	発 表 者	頁
96	長距離運転およびその同乗における 心身機能の推移について	科学警察研究所 〇宇留野 桑大塚野 大小	藤 淑 子 田 保 夫 塚 博 章 野 章 夫	42
97	自動車事故多発運転者のパーソナリティについて(Ⅱ)	科学警察研究所	小 野 章 夫	43
98	横断歩道設置についての研究 —不法横断の実態調査とその分析—	名古屋大学 〇内横	山 道 明 正 瀬 善 正	43
社 会				
99	団地の主婦の生活に関する一調査	関西学院大学 大阪府立大学 帝塚山学院大	仲 原 晶 子 松 原 太 郎 沢 井 常 樹	44
100	霞浦漁民の漁業に対する意識に関する一研究	茨 城 大 学 〇海木	野 悦 子 本 英 人	44
101	茨城県農山村住民の政治意識と投票行動について —問題と方法(Ⅰ)—	茨 城 大 学 〇磯林 木岡中	貝 信 太 郎 正 俊 邦 夫 村 山 超 之 原 弘 之	45
102	茨城県農山村住民の政治意識と投票行動について(Ⅱ)	茨 城 大 学 〇磯中 木岡林	貝 信 太 郎 原 弘 之 村 山 超 邦 山 正 邦	45
103	茨城県農山村住民の政治意識と投票行動について(Ⅲ) —政治意識と投票行動との解析—	茨 城 大 学 〇林磯 木岡中	具 正 信 太 郎 村 山 超 之 原 弘 之	46
104	コミュニケーション行動の発達の研究(Ⅳ) —小学生における非言語的コミュニケーションの理解様式(第二実験)—	新 潟 大 学	滝 沢 武 久	46
105	児童集団内における個人間の親和・反発反応の偏向 —社会的対比についての一考察	東 京 学 芸 大 学	田 中 熊 次 郎	46
106	郵便調査法に関する研究(Ⅰ)	金 沢 大 学	田 中 富 士 夫	46
107	民族に対する差別態度の変化と人格性要因との関係について	熊 本 大 学	葛 谷 隆 正	47
108	情 死 の 研 究	慈 大 神 經 科 〇大竹 与越 東京都監察医務院	原 健 士 郎 山 恒 寿 健 良 重 四 郎 永 重 四 郎	47
犯 罪				
109	法の社会心理学の体系特質とその基本的諸問題	東 北 大 学	安 倍 淳 吉	48
110	加害者の役割から見た浅沼事件	財団法人 民族科学研究所	池 見 猛	48
111	累犯経過に関する基礎的研究 Ⅲ	最 高 裁 家 庭 局	瓜 生 武	48
112	保護観察付執行猶予者の特性に関する考察(A)	法 務 総 合 研 究 所 〇中山 小池	河 本 通 輝 池 健 之 夫 二	49

番号	発表題目	所属	発表者	頁
113	窃盗犯罪者の研究(1) —保護観察付執行猶予者に関する一般的考察—	法務総合研究所 〃 〃	中河原 通之夫 山本 輝健 小池 健二	49
114	窃盗犯罪者の研究 —保護観察付執行猶予者の特性に関する研究(B)—	法務総合研究所 〃 〃	中河原 通之夫 小山 池本 〇山 輝	50
115	少年非行の予測に関する研究(第二報)	岡山県玉島児童相談所	須見 善六	50
116	質問形式と証言の関係について	科学警察研究所 〃 〃	佐伯 茂雄 西村 春夫	50
117	精薄非行少年の絵画統覚検査における 動物絵画と人物絵画との比較	東京教育大学 〃 〃	堅田 明義 〇篠原 睦治	51
118	少年受刑者の所内適応に関する研究 第一報 予備調査, 目的, 方法	信州大学 〃 〃 〃 〃	〇長岡 遠彦 新中 海川 五新 川 十 嵐 新 井 長 岡 猿 橋	51
119	少年受刑者の所内適応尺度(自己評定用)の吟味(その2)	信州大学 〃 〃 〃 〃	〇新中 海川 五新 川 十 嵐 新 井 長 岡 猿 橋	52
120	少年受刑者の所内適応尺度(自己評定用)の吟味(その1)	信州大学 〃 〃 〃 〃	〇五新 嵐 新中 海川 新 川 長 井 長 岡 猿 橋	52
121	少年受刑者の所内適応尺度(担当評定用)の吟味	信州大学 〃 〃 〃 〃	〇中新 川 五新 海 十 嵐 新 井 長 岡 猿 橋	52
122	少年受刑者の所内適応に関する研究 第1報 予備調査 [結論]	信州大学 〃 〃 〃 〃	〇新中 井 新中 海川 五新 川 長 嵐 長 岡 猿 橋	53
123	言語連想法による非行少年の研究 —①反応類型と臨床所見—	東京少年鑑別所 〃 〃	〇袴田 明 大 島 勲	53
124	言語連想による非行少年の研究 —②内容分析と臨床所見—	東京少年鑑別所 〃 〃	〇袴田 明 大 島 勲	59
125	TATによる非行性の識別	〇千法 少年鑑別所 法務横 総年鑑別所 長 野 少年鑑別所	〇佐藤 和夫 安井 香部 佐 藤 文 俊 哉 寛	54
126	MMPIによる非行少年の研究(第二報)	法務総合研究所 〃 〃	遠藤 辰雄 〇安 香 宏	55
127	非行少年のPAT適用(その2)	大版少年鑑別所 財団法人安全協会附 属産業心理研究所	〇菅 俊夫 倉 戸 ヨシヤ	55

番号	発 表 題 目	所 属	発 表 者	頁
<u>一 般 文 化</u>				
128	色彩の感情価について	東京教育大学 日本色彩研究所	富相馬 一 直郎	56
129	図形の美しさに関する心理学的研究	東京都婦人相談所 日本大学	○古妻 牧倉 節子 浅井 昌太郎	57
130	「色彩と情動」の生理心理学的研究	日本大学	○岡山 本岡 健淳	56
131	ランドの2色法による色再現の忠実度について	東京教育大学	水野 欽 司	57
132	白さについての一研究	日本色彩研究所	相馬 一 郎子 矢 和	57
133	視覚的記憶における刺激材料の特性について	関西大学幼稚園 大阪市立大学 大阪市立大学	米田 和 代ツ 浅谷 ミ嘉寿子	58
134	聴覚的記憶における刺激材料の特性について	○大阪市立大学 " 関西大学附属幼稚園	浅田 ミ ツ 淡谷 和 代	58
135	Hole-in-palm illusion に就て	信州大学	原 善 平	58
136	Gibson 錯視と異方性	東京都立大学	今井 省 吾	59
137	現象的速度におよぼす関係対象の数ならびに位置の効果	南山大学	佐藤 哲 夫	59
138	音方向知覚のオーディトリウムへの応用 (I)	宇部短期大学	重永 幸 男	60
139	心理学分野における人体の微小振動の研究	九州大学福岡県中央児童相談所	中村 昭 之	60
140	Perceptual dynamics に関する研究 第1報 序 説	日本大学	古賀 行 義	61
141	Perceptual dynamics に関する研究 第2報 静的刺激図形からのアプローチ	国鉄・労働科学研究室	清宮 栄 一	61
142	Perceptual dynamics に関する研究 第3報 動的刺激図形からのアプローチ	○日本大学	浅井 正 昭	62
143	法則発見過程の研究 (5) —成功確率と法則への確信度との関係—	慶応義塾大学	斎藤 幸一郎	62
144	ヨガの生理心理学的研究 (第一報)	日本大学	○山岡 淳健 岡本	62
14.	発達観についての考察	○福島大学 福島めばえ幼稚園	菊地 章 夫子 地 矩	63
146	ことばの認知閾を決定する要因について II —Personal な要因—	東京都立大学	加藤 義 明	63
147	本川博士の4色曲線の3色曲線化の理由	茨城大学	木村 俊 夫	64

臨 床 ・ 相 談

148	Rorschach Shading Response に関する一吟味	日本大学	内田 耀 一	64
-----	------------------------------------	------	--------	----

番号	発表題目	所属	発表者	頁
149	幼児のロールンヤツハ反応(Ⅱ) —知的サインについて—	東京都品川児童相談所	松本忠久	65
150	ロールンヤツハによる非行少年の性格像	日本女子大学 // // 愛媛大学	○児宮小平 玉本佐野智 省子美沙野和ひかる子	65
151	いちじるしく異常な Szondi Test 所見を示した粗暴非行少年の睡眠賦活脳波について	千葉少年鑑別所 // //	山川博隆 佐竹垣正	66
152	粗暴犯の衝動病理学的研究(4) —Destruktionstypen の犯罪学的意義—	千葉少年鑑別所 // // //	○佐山隆博 竹川藤和靖 藤川垣正	66
153	粗暴犯の衝動病理学的研究(5) —Sich-Abtrennungstypen の犯罪学的意義—	千葉少年鑑別所 //	○板垣正隆 佐竹三	66
154	情意変調治療の研究 第Ⅴ報 —情意状態の変動と連続加算作業—	東京少年鑑別所 //	齋崎轍 長谷川孫一郎	67
155	補聴器の使用による難聴児の学業不振治療例(Ⅰ)	千葉県教育センター 千葉市立院内小学校	大野桂 大熊喜代松	67
156	精神薄弱相談とその予後について(その1)	国立精神衛生研究所	桜井芳郎	68
157	精神薄弱児に対する投薬効果について —1卵性双生児にγ-アミノ酪酸を投与して—	東京都立青鳥養護学校	小出進	68
158	欠席状況管理の一試み	蕨市立第二中学校	久保田貞慶	69
159	精神分裂症患者のW A I Sによる知能構造の分析	日本女子大学 // //	児宮小平 玉本佐野 省子美沙野和ひかる子	69
160	神経質児に関するG S Rに依る研究	東京都立伊豆長岡児童福祉園	深津時吉	69
161	問題児に関する研究(第3報告) —左利き児の問題—	田中教育研究所 // //	○鈴木清 茂下茂達 松原八哉	70
162	恐怖症児の治療事例	東京学芸大学	品川不二郎	70
163	相談治療の一技法 —関係療法の立場から—	お茶の水女子大学 // // //	○鈴木隆悦 中村多美子 松本静美 黒江静康 松村平	71
164	幼児の心理療法(ケース・スタディ)	仙台市精神衛生相談所	朴沢一郎	71
165	学童緘黙の研究(Ⅰ)	群馬大学	内山喜久雄	71
166	関係療法における小集団活動の一考察	お茶の水女子大学 // // //	○中村悦子 鈴木隆多美子 松本静美 黒江静康 松村平	72
167	幼児グループに関する研究(その12・13) 集団遊戯療法について —その観察カテゴリーの検討—	東京教育大学 // //	○深谷和子 ○南忠正 上野千二 辰野	72

番号	発表題目	所 属	発 表 者	頁
168	幼児グループに関する研究(その14) Doll Play について —動物人形の使用とそれに現われた性差の検討—	東京教育大学 // //	○小高成 林野瀬 芳清 郎純策	73
169	幼児グループに関する研究(その15) 親子観察法について —観察カテゴリーの検討—	東京教育大学 // //	○杉山相上 原田田武 一章 昭倫夫二 章真正	73

検 査

170	Taylor の MAS と MMPI の不安尺度について		岩 脇 三 良	74
171	ヘロスベルグによる絵画完成テストの予備的報告 —児童の現実適応性の発達について—	白梅学園短期大学 // 仙台市小児精神衛生相談所 //	大 脇 園 子 E. Hellersberg 新大井 清三郎 三 惠子	75
172	パースネル・ワークにおける性格検査の試み(Ⅱ)	慶応義塾大学 // // //	○平山太斉 野崎垣藤田 恒瑞一郎 馨夫一郎 幸俊一郎	75
173	SAT-C による知能の診断について	田中教育研究所 //	茂安 木富 茂利 八光	75
174	ビネー検査と WISC 検査の比較研究(Ⅰ) 知能遅滞児について	東京都墨田児童相談所 //	小小 林野 重敬 雄仁	76
175	教研式新A Qについて	財団法人 応用教育研究所	平 沼 良	76
176	多肢選択法テストにおけるでため解答の実験的研究	人 事 院	寺 井 俊 健	77
177	スキー練習時における疲労測定を試み	日 本 大 学 // // ◎信州大学	松杉浅穂 井本井口 三功正貴 雄介昭子 美子	77
178	タイミングに関する研究	日 本 大 学 // //	松浅杉 井本 三正功 雄昭介	78

シンポジウム(Ⅰ)

パネル討論「産業界からの心理学への期待」	司会 立教大学 立製作所 精工工業舎 水戸総合職業訓練所	藤乘森浅村 本富岡野中 喜文道行兼 八夫一雄松	78
----------------------	---------------------------------------	----------------------------------	----

シンポジウム(Ⅱ)

人間工学	司会 立教大学	豊原恒男	79
1. Human factorengineer について	東京教育大学	小保内虎夫	82
2. 企業経営における人間工学	早稲田大学	坪内和夫	83

番号	発表題目	所 属	発表者	頁
3.	機 械 と 人 間	運輸技術研究所	青木和彦	83
4.	宇宙飛行における医学的・心理学的問題	航空医学実験隊	大島正光	83

シンポジウム(Ⅲ)

矯正心理と学校教育	司会	法務総合研究所	遠藤辰雄	84
1. 非行予測研究の現状と問題点		法務総合研究所	安香 宏	84
2. 学校における問題児の早期発見		東京都教育委員会	渡辺祐之	84
3. 矯正技術としての心理療法		中野刑務所	篠田勝郎	85
4. 心理療法の学校教育への適用		東京学芸大学	品川不二郎	85

特別講演

欧米における心理学界の現状		九州大学	秋重義治	87
---------------	--	------	------	----

教 育

児童生徒における価値葛藤の解決基準について (第1報)

日本大学 長谷川 貢

児童の友人関係に関する一研究

東京教育大学 真仁田 昭

(1) 目的 本研究の目的は、児童が学校における友人との生活で様々な問題場面に直面した場合、どのような行動をとろうとするか、また同様の問題場面において、多くの友人はどのように行動すると考えているか、そしてこの当人の行動傾向と、友人の行動予測の間には、どのような関連があるのか、などについて吟味することにある。

(2) 手続 A. この研究において取上げられた問題場面は全部で14である。それらは可能な限り、児童の生活にとって現実味のある場面を選ぶようにした。

B. 調査の実施に当っては、「……のような時、あなたはどうしますか、その理由は」と本人の行動とその理由について述べさせる14の問題がまず実施され、それと対応する「……のような時、みんなはどうすると思いますか、その理由は」と、友人の行動を予想させその動機について述べさせる問題は、数日において実施された。何れの問題においても、その回答形式は自由記述とした。

C. 被験者は小学校3年より6年までの生徒で、各学年とも50名前後である。

D. かくして得られた資料は、それぞれ問題ごとにその回答がまず類型化され、それぞれについてその頻数が取られた。

(3) 結果 A. 本人の行動と友人の行動予測の間には、ずれのあるものが多く、友人の行動よりも、自分の行動をより道徳的にするものが目立つ。そして、現実の事態をよく捉えて反応するというよりも、理想主義的な傾向での反応が目立つといえる。

B. しかし善悪の規準の明瞭な問題や、役にまつわる責任の明かな問題には、両者に顕著な善はみられない。つまり多様な行動形式のある問題場面で、この両者に大きなずれがみられるのである。

C. 発達的には全般的に一義的な結果はみられなかつた。

目的：児童生徒の生活には極めて多くの葛藤が含まれている。教育指導上には、かれらにおける葛藤のありかたを明らかにしておく必要がある。本研究は児童はどのような基準に従って、どのような解決をするものであるかについて、その主要な傾向を求めようとする。

方法：小学校1年から6年までの各学生の児童468名に対して種々の葛藤場面を与えて、(1)あなただつたら、そういう時にどうするか、(2)なぜそうするかを問い、その応答を求めた。ただし、学年の低・中・高の別に従って、与える場面を別なものにした。

結果：(1) 行動方向。葛藤場面に対して児童の決定した行動方向は、1場面に対して少なくとも2方向、多いものは9方向にも及んだ。(細分すればもっと多種となる。) 児童のとろうとする行動方向には予想以上の多様性があることが認められる。

(2) 決定基準。1つの行動方向について、その方向を選択する場合の基準となる理由にも、かなりの多様性が認められる。このことから見れば、動機の構造的性は児童においても一般にかなり複雑であることが推測される。

(3) 決定基準の分化。低学年における決定基準には、「叱られるから」「遊びたいから」「かわいそうだから」などが多い。中学年においては、前記のものの上に、「勉強が大切だから」「親が心配するから」「他のものに悪いから」「学校のきまりだから」などが加わる。高学年においては、更にその上に、「人に自分の真実を理解してもらいたいから」「人の前で恥をかかせたくないから」「約束どおりにやれないのは恥ずかしいから」「親に喜んでもらいたいから」「心の平和を乱したくないから」などが支配的なものになる。

青年における欲求体制の階層性について

富士短期大学 駒崎 務

研究目的 Maslow や Linsey が指摘するように我々の欲求は発達に従って低次欲求から高次欲求に階層的に構成されている。これについては我々の作成になる欲求体制検査を用いて社会的承認欲求や優越支配欲求よりも、独立、成就、愛情等の欲求が発達的に高次欲求であることがわかった。しかし低次欲求の強化は未発達の場合だけにみられる訳ではなく不適応状態におちいった場合で

も自我防衛機制が働き退行現象がみられる。そこで今回は不適応者がどの程度に低次の階層の欲求が強化しているかを検証しようと試みた。

方法 被験者には大学生(N=227)及び児相に來所したぐ犯少年(6例)を用いた。尚不適応者の抽出には大学の担当教官による4段階品等尺度法を採用しDクラスを25人選んだ。これらの被験者に12項目の高次欲求(独立,愛情社会的承認,優越支配)と8項目の低次欲求(食事,娯楽,自由行動,異性交遊等)を一对比較させた。

結果 ①不適応群(MG)は正常群(AG)に比較して著しく低次欲求(LN)が強い。(MGは高次欲求(HN)の粗点 $M=100.0$ SD14.7;AGは $M=121.0$ SD22.6これは $P.01$ で有意)②文化的生活に対する欲求,賞賛への欲求,友人からの同情,体力的優越等の欲求はMG,AG間に差がない。またMGは低次欲求のうち自由行動,娯楽,昼寝,遊び等の欲求が特に強い。③上位成績者(学内に於けるA段階者)はHNの粗点にして $M=122.0$ SD17.1D段階は111.0SD25.5で $P.15$ で有意とは云えないが上位者が高次欲求が大であることがわかる。(4)児相群はHNの粗点92で著しく低い。

結語 上記結果から不適応者は低次な階層の欲求を相対的に強く望んでいることがわかった。そこで不適応者の発見にこうした欲求体制の階層を検証する事がかなり意味ある事だと思われる。

スポーツ練習の中学生の心身に及ぼす影響について

藤沢市立第一中学校 植田 稔

実験仮説：心身の発達の過程にある中学生(男子)に、スポーツ練習のために夏期合宿を行つた場合、身体的、神経感覺的、精神的諸機能は合宿前に比較して低下する。

対象：中学バスケット部員(男子)24名,(実験群)運動クラブに入っていない中学生(男子)24名,(対照群)

期間：昭和36年4月18日～9月9日

方法：測定項目は身体的機能(体重,背筋力)神経感覺的機能(連続描線,疲労自覚症状),精神的機能(内田クレベリン精神検査)として,合宿前,合宿中(2回)の3時点で測定し諸機能の変化を考察する。(対照群は日常時に測定)

結果：(身体的機能)体重に減少の傾向は認められない。背筋力は合宿前の平均測定値91.7kg,合宿中81.7kg,88.9kgと減少が認められる。

(感覺的機能)連続描線(4cm)は合宿前平均3.92cm,合宿中4.15cm,4.09cmと4cmより大となり,感覺的機能の稍減退しているのが認められる。疲労自覚症状は合宿に入つて約40%の生徒が,なんらかの自覚症状を訴えて対照群とあきらかに差異が認められる。訴えたのは身体的症状がもっとも顕著であり,つぎに精神的症状,神経感覺的症狀の順である。起床直後の自覚症状はいずれの場合も上昇傾向が認められた。

(精神的機能)内田クレベリン精神検査の結果は群平均曲線としては非定型傾向は認めることはできなかったが,個々の例にあたると,曲線経過の悪くなった者13名,同じ7名,良くなった3名と稍精神的機能に変調を認めることができる。

結語：中学生のバスケットの夏期合宿において,合宿前に比較して軽度ながら身体的,神経感覺的,精神的諸機能に低下の現象が認められ,本実験の仮説は実証された。今後,体重が極度に減少する程度の練習を課した場合,また長期間のスポーツの練習が生徒の身体的,精神的,神経感覺的機能にいかん影響を及ぼすかということ考察しなければならぬ。

高校生のもつ理想の人間像(IV)

——母親について——

埼玉大学 山根 薫

1. 質問紙によって女子高校生の見た母親の姿を知ろうとした。質問の一つ一つに自由に記入させた。質問対象は1年生から3年生まで1,064名である。昭和35年1月の調査である。

2. 第1問 あなたのお母さんを見て,母親としての性質に満足していますか答えて3学年を通じて63~66%は満足し,22~28%は不満を示し,9~11%は黙して語らない。学年が進むにしたがつて不満が多くなる傾きをもっている。この無答の中には母をなくしたもの,肯否断じ難いというものが含まれている。一まずこの程度の答をしてはいるが,それは漠然たる感情の現われにすぎない。なぜなら進んで次々の質問に答えるにあたって,満足したといいながらも多くの不満を訴え,または黙せざるを得ないものが多くなっていくからである。しかも各問に対する無答は上級になると減少する。批判力の発達の結果と考えられる。

第2問 どういう点がよいと思うかに対して第一位から順に,1年生では「自由を認め理解している」「やさしく,思いやりがある」「相談相手になつてよく話し合ってくれる」という。2年生では「理解がある」「陽気,

明朗、気さく」「よく話し合ってくれる」をあげる。3年生でも全く同じである。以下約50種類に及ぶ表現で母の美点をあげているが、注意したいのは1年生六位多頻数の「母親が自らを犠牲とし、家庭で働いて」くれてよろしいという考え方である。この答は、上級生では美点ではなく、大いに排撃すべき欠点としている。第3、第4問とみていつたとき、今日の母親たちの中には、新しい時代における家庭生活に正しい方向を見つけようと努めている人々も多いが、他面娘からの批判に堪えられない性質をもっているものも少なくないことが明らかである。

体罰の限界についての意識調査

野間教育研究所 ○田中 博正
田中教育研究所 松原 達哉

目的 教育上、賞罰の価値は認められる所である。けれども、児童懲戒権の限界については、児童に自由を与えすぎのために、時に、教育上適切と認められる限界をはずれて、放任と専制との極端に懲戒が行われることがある。そのため、本調査では、教師が児童懲戒権についてどの程度の認識を持っているかを、具体的に調査した。

手続 近代日本教育制度資料26巻、昭33講談社刊の学校教育に関する諸規定中、児童懲戒権に関する所を参考にして (pp. 120, 121, 123)

16項目よりなる質問を作成し、項目毎に、それぞれ、許される、許されるか否か疑問、許されない、と3つの選択肢を作り、どのいづれかにチェックする形式で調査を行った。

調査期間は昭和36年6月であった。調査対象は小学校教師であった。1年担任教師5名、2年担任教師9名、3年担任教師8名、4年担任教師9名、5年担任教師8名、6年担任教師6名、専科教師8名、計53名であった。

結果 多くの教師が児童懲戒権の限界を認識していると思われるが、16項目中、大部分の教師が限界をわきまえていないのは、なぐる、けるといったことは許されないとしている項目だけであった。その他の15項目のそれぞれにおいては、許されるとされてるものを許されないと考えたり、許されないとされるものを許されると考えたりしている。また、注目すべき点として、許されるか許されないかのどちらかに判断されるこれらの諸項目について、判断が決らず、許されるか否か疑問というもののが非常に多いことが挙げられる。

僻地児童生徒の心理学的研究(Ⅲ)第2報告

——飛驒山村児童のPFTについて——

岐阜大学 宮脇 二郎

先に、第1報告として岐阜県吉城郡国府村老和^{おいわけ}気小学校における実態調査について述べてきたのであるが、今回は、やや別の角度から、彼等のパーソナリティがPFTにどのように反映しているかをとらえてみようとしたものである。調査期日及び対象は第1報告と同じく昭和34年8月、児童全員に施行したものである。調査方法は低学年は個別に、高学年は集団で行った。

RFT反応の分析結果を大略して述べれば次の如くである。先ず、E%においては低学年では高く、次第に低い値となって5、6年では標準以下となっている。内部因子をみるとE'の低さが影響していると思われる。I%においては全体に著しく低い値となって無反省的側面を示し、これはIの低さに関係しているようである。M%ではI%と逆に著しく高く、寛容さよりは無関心さを示し、主としてM'に関係しているようである。型としてのO-D%, E-D%, N-P%では低学年を除いて有意差はみられないが、GCR%においては、他の僻地児童における調査と同様に、著しく低い値となって、彼等の社会性の発達の未熟さがみられる。然し、低い中にも高学年になるに従って上昇する型を示していることは未熟なりにも社会性が発達の過程をふんでいることは望ましい事実であると云い得るであろう。超自我因子についてはE%, I%, E-E, M+I%等にその差が現われ彼等の無批判、無気力な面をのぞかせている。全体を通じて、又、正直さ、実直さという飛驒人の性格が伺われるのも他の性格検査と一致していることがあげられるようである。以上、要点的に述べてみたが、第1報ですでに論じた如く、文化的社会的な面で飛驒という山村にあっては今尚その沈滞性がみられ、良きにつけ悪しきにつけ問題が多々あるようである。

近親婚調査による児童の知能の実態(IV①②③)

静岡大学 ○中沢 正寿 ○石川 透

○勝井 晃 塩川 武雄

田中 敬二

I. 調査およびまとめの概要

すでに、日本応用心理学会第26、27回大会と、東海心理学会大会とにおいて報告した続報である。総合科学研究費(9112)およびロックフェラー財団研究費にもとづいて、「近親婚調査による日本人の遺伝学的研究」(代表者・国立遺伝学研究所客員・駒井卓氏)が昭和33、34、

35年度の3年間にわたって、静岡市立小学校12校、男女児童計約1万名を対象に行われ、精神測定班に所属するわれわれが実施した個別知能検査による測定第3年度（最終昭和35年度）の結果を資料とし、まとめ、報告するものである。

被験者は静岡市立小学校 On, N, H, M, Os の5校、男女児計2,891名。測定者は本学教育学部学生男女計90名。昭和35年7, 8月にわたって、田中びね一式個別検査を第1, 2年度と同様に実施した。

この報告は、近親婚の実態を明らかにする観点からまとめたものではない。この本来の目的に対しては、この総合研究の総括班が総合的に分析し、まとめ、発表することになっている。ただ、このような調査の性質から、近親婚に該当する児童とそれに必要な対照児童だけをピックアップすることが困難のため、一応、学級、学年、学校の全児童を対象にして調査を実施した。このようにして、個別知能テストを大規模に実施したので、児童におけるその実態はどのようにになっているか、これを記述的にまとめて報告することにしたわけである。したがって、「近親婚による児童の知能の実態」ではなく、ひろく「児童の知能の実態」の報告である。研究費の都合上、ここにかがげたような題名をつけざるを得なかった。

なを、今回の報告は、昭和35年度約3千人の測定結果を主にしてまとめたものである。分析・記述するために、結果にあげてある諸観点から分類し、主に平均値を中心として、児童の知能の実態の概然的傾向を明らかにする方向でまとめた。したがって、これを個々の事例にそのままあてはめて解釈したり、分類の諸観点がそのまま知能の優劣を左右する要因と考えられてはならない。

II. 結 果

(1) 全体結果の概観

昭和35年度5校全体をこみにして成績をまとめてみると、 $N=2891$, $M=104.5$, $SD=14.7$ となった。その度数分布を級間の大きさ16の最劣, 劣, 中の下, 中, 中の上, 優, 最優の段階にしたがって、正規分布への適合度を検定してみると、 $\chi^2=25.935^{**}(df=6)$ で有意に不適合になっていた。その中味は、本年度の場合、中の上の段階において理論度数よりも有意に少なく、最優の段階で有意に多くなっていることが原因になっている。

(2) 学校の比較

5校のI.Q.の平均水準を比較してみると中間地域のN校が106.8, On校が105.5, 市に合併した農・漁村的性格の濃い周辺地域のH校が103.3, M校が103.2, Os校が102.3の順位になっている。第1年度の中心部校のT校が110.2, 第2年度の山村のごく周辺地域のN校が98.5と、全12校を通してみると、中心→中間→周辺と規

則正しく水準が低くなっている。このような一定傾向を生み出す要因が何であるかは考究しなければならない問題である。

(3) 学年の比較

学年のI.Q.の平均水準を比較すると、2年=108.5, 3年=106.8, 1年=104.5, 4年=104.7, 5年=101.8, 6年=101.9となっている。第1, 2年度とも、3, 2, 1, 4, 5, 6学年の順序であるのに対し、今年だけ2, 3学年が逆になっている。各年度を通じて、2, 3年と1, 4年と5, 6年のおおよそ3段階のプロックを示していて、田中びね一の検査問題そのものと実施状況とを検討すべきことを暗示している。

(4) 男女の比較

全体の男女のI.Q.の平均水準を比較してみると、男=104.5, 女=104.4で有意差はみられなかった。

(5) 生まれ月とI.Q.

今年度分では、12月(M=107.4), 5月, 3月, 1月, 6月, 11月, 10月, 2月, 7月, 9月, 8月, 4月(M=101.3)の順位になった。3年度を通じてはあまり一定傾向はみられず、順位はかなり変動している。

(6) 同胞間におけるI.Q.の相関

今年度分、1124対全体では、 $r=0.391^{**}$ で各年度とはほぼ同程度で、有意だがあまり高いとはいえない。なを、同性同志558対の $r=0.494^{**}$ は、異性同志の568対の $r=0.353^{**}$ よりも、1%水準の有意差をもって高くなっている。

(7) 同胞数・出生順位とI.Q.

同胞数ごとのI.Q.の平均水準は1人=110.0, 2人=107.2, 3人=106.3, 4人=103.3, 5人=101.8, 6人=99.7, 7人=103.5, 8人=100.1, 9人以上=96.4となった。各年度とも、同胞数3人以内と4人以上をさかいにして有意差がみれるという一定傾向を示している。出生順位には特質がない。

(8) 親の職業・学歴と児童のI.Q.

親の職業による児童のI.Q.の平均水準は、専門的=108.2, 技術的=109.8, 熟練=104.3, 半熟練=100.5, 最低熟練=97.2, 農=103.4, 兼農=104.4, 漁=100.7となった。親の学歴では、父の場合、大学=108.2, 高専=112.1, 中等=108.7, 高小・小=103.7, 母の場合、高専=114.6, 中等=110.5, 高小・小=103.6となった。いずれも従来の諸調査結果と同一傾向を示している。

(9) 親の年令と児童のI.Q.

I.Q.の平均水準で比較してみると、はっきりした傾向や大きな差はみられないがおおよそ、父23, 4才~34, 5才, 母21, 2才~30才が高い。

語彙能力調査法の一検討

東京教育大学 福沢 周亮

問題 語彙能力調査法のうち附印法と定義法についてその長短を検討しようとする。

方法 第Ⅰ回——附印法(200語について意味をはっきりと知っている語に印をつけさせる), 第Ⅱ回——附印法(第Ⅰ回と同内容であるが, 配列が異なっている), 第Ⅲ回——定義法(比較的判定が明確に行ない得る25語についてその意味を書かせる)を1週間おきに行ない, 相互に検討した。被験者は女子短大学生。

結果及び考察 A. 被験者96人(3回とも出席した者)の面からの25語についての検討。①ⅠとⅡの附印法間ではかなりの相関が認められたが, 附印法と定義法の間では低かった。ⅠとⅡ— $r=0.502$, ⅠとⅢ— $r=0.197$, ⅡとⅢ— $r=0.289$ 。なお同被験者の200語については, ⅠとⅡ— $r=0.894$ 。②附印法は定義法より量が多くなる傾向が認められた。各回の%のMとS D(カッコ内)は, Ⅰ—48.3(11.99), Ⅱ—48.6(11.30), Ⅲ—36.9(7.99)で, 差の検定は以下のとおり。ⅠとⅡ— $t=0.178$, ⅠとⅢ— $CR=5.92$ (サインテスト), ⅡとⅢ— $CR=6.64$ (サインテスト)。B. 25語の面かの96人についての検討——附印法で得た順位と定義法で得た順位との間には高い相関が認められた。ⅠとⅡ— $\rho=0.964$, ⅠとⅢ— $\rho=0.891$, ⅡとⅢ— $\rho=0.940$ 。なおⅠ(161人)とⅡ(134人)の200語については $r=0.984$ 。C. ϕ 係数をとった13語(96人による)についての検討——各語についてⅠとⅡ, ⅠとⅢ, ⅡとⅢの各々を検討すると, ⅠとⅡの場合がやはり高かった。

以上の点から, 個人の語彙量を知るのに附印法を単独で用いるのは危険が多いと考えられる。しかしどんな語がよく知られているか, 集団内での順位などをみるには有用と認められる。

英語学習の心理学的研究

——Pattern practice について——

東京教育大学 永沢 幸七

" 小保内虎夫

東京都小松川第3中学 小沢 礼子

目的 Oral approach の中心である Pattern practice が, 学習効果の上に, いかにか影響するか, 昨年の夏休以来の被験者を継続的に実験して, 検討しようとするにある。 **方法** 被験者—東京都豊島区立西巣鴨中学校生徒一約120名, 期日—昭和36年8月3日~8月19日(夏

休中の約2週間), 教材—English Pattern Practice—Establishing the Patterns as Habits, および図表, 教案は印刷して毎時間配布, 器具—Tape recorder, synchroreader, record player。器具実験を始める前に, 次の3種のテストを実施した。practiceの終了後, 同一テストを課した。第1種テストは文法₁, 文法₂, 訳, 英問, 英作という順にわかれている。第2種テストは, Ⅰ部, Ⅱ部, Ⅲ部から成立っており, 第1部は文型3₃, 4₂, 21_b, 3₃, 81_{abc}, 4₁, 9₃, 6_{1a}, 6₂, 6₃, 7₄。第Ⅱ部は英作に関する問題で, 文型6₄, 7₁, 7₃, 91_a, 9₂, 9₃がそのなかにおこまれている。第Ⅲ部は副詞の位置を指定するテストで文型としては91_aと91_aである。第3種テストの結果は本報告では省略する。他方, オフサルモグラフィによる実験を行い, ドリルによって, 練習に伴う眼球運動の変化をあわせてしらべた。

結果 統制群と実験群にわけず, 練習群だけについてどういう項目が向上するかを分析した。第1種テストの結果によれば, 英作において, pattern practice の効果がみとめられた。文法₁の項目は, それにつぐ。第2種テストにおいては, 第1部の文型の問題において著しく向上進歩が見られた。これによって pattern practice が文型学習の habits を作るのに非常に効果があるものであることが証明される。第2種テスト英作の項目においては第1種テストほどではないが, かなり向上がみられた。オフサルモグラフィにあらわれた結果も, 逆行数も少なくなり, 読書速度がかなり向上した。

乗法九九の一分析

横浜国立大学 清水 利信

目的 乗法計算の能力が練習期間の経過と共にいかにか変化していくか, また加法の計算能力と乗法のそれとはその構成因子が同一と考えられるか否かを検討する。〔実験月日, 被験者〕昭和36年5月から7月にかけて, 毎週1度ないし2度のテストを, 鎌倉付属小学校の3年生と5年生とに連続的に実施した。

方法 テストは基数どうしの加法のテストと基数どうしの乗法のテストで, 問題数は各100題, 毎回, 問題の配列はランダムにし, 1分あるいは2分間の時間制限法でテストした。毎回の正答数を得点とし, 得点相互の関係を四分相関で表わし, この相関行列を完全セントロイド法で因子抽出し, 斜交回転法によつて因子行列を求めた。

結果 (1) 3年生は乗法九九を学習中であり, テストは九九の学習中から学習が終了ドリル段階に入った時期

まで行われた。この時間経過が結果に明らかに現われている。

(2) 因子分析の結果、両学年とも2因子が得られ、そのテスト布置は positive manifold をなしていた。

(3) 3年生の結果は、学習の初期の頃の乗法テストは一方の基準軸の近くに布置し、加法テストは他方の基準軸の近くに布置している。しかし乗法テストの後期のもは両軸の中間から次第に加法テストの近くに布置し、学習が進むにつれて、乗法が加法に近づく傾向がテストの布置から推察できる。

(4) 5年生の結果では、乗法テストと加法テストがそれぞれ一群をなして、各基準軸の近くに布置している。

(5) 基準軸の相関をみると、3年よりも5年の方が高い値を示している。従って、加法と乗法の機能とは次第に近似した因子構造になっていくが、5年生でもなお両者の間に若干の差異のあることがわかる。

教科指導における実地見学の 効果に関する一研究

岐阜大学 石黒 彰二

問題と方法：教科指導の中で用いられる実地見学の効果については、すでに一般に認められ、その長短が論ぜられている。しかしわが国においては、これに関する組織的実証的な研究はあまりみられないように思う。そこで、この研究では教科指導過程の中における二つの利用方法、すなわち導入の段階で用いる場合と終結の段階で用いる場合について比較しながら、実地見学の心理的特質とその効果を明らかにしようと思う。

被験者は、知能・学力・性格において、同等とみなされる中学3年の2学級104名。学習内容は社会科の「政治」の単元の一小分節である「裁判所」である。一方には導入の段階、他方には終結の段階にあたるように指導過程を調節して、同時に裁判所で公判を傍聴見学させる。比較のために裁判所に関する知識及び意見の調査、人権意識テストを見学前後及びか5月後の3回実施し、また直後に感想調査を課する。

結果：見学の場合にだけ、両群で取り扱われた事実の知識の習得においては、導入段階適用群の方がすぐれていたが、全体的総合的な知識理解については優位を示さない。調査の範囲内では、裁判に関する意見の大きな変化はほとんどみられないが、見学の際に具体的に経験し、かつ指導を受けた意見項目においては著しく変化するものがある。

裁判所に関する生徒の既成の観念（ステロタイプ）が、実地見学によつて著しく修正を受ける場合もかなりある

ことが、感想調査から明らかになった。しかしその内容については、個々の生徒がおかれた場面の特殊性によって左右される傾向がある。導入段階適用群では、見学対象に対する素朴な感動を示すものがやや多く、終結段階適用群では、裁判所の本質的なあり方を基準として批判的にみるものがいくらか多いようである。

「中学入学初期における生徒の 家庭学習の実態（一例）」

東京都杉並区立高南中学校 萩生田忠昭

1. 目的 家庭での学習において、生徒はどのような習慣性をもって、それを自発的に学習しているかについて調査しその実態を明確に把握することは、中学校の教育を効果的にするための計画の検討資料として大切な問題である。そこで、その際の時期、計画性、内容についてどんな関係があるかについて調べてみた。

2. 調査の対象 東京都町田市立町田第一中学校の昭和35年度入学者408名の1年生について、中学校用田中B式知能検査（日本文化科学社）を施行し、そのなかで知能（偏差値）上位、中位、下位とそれぞれ性別に35名ずつ無差別に210名を対象として抽出した。

3. 期日 中学入学3ヶ月を経過した7月1日に実施した。

4. 方法と結果 保護者の職業としては、会社員84名、公務員40名、自宅商22名、農業10名、工員21名、学校職員9名、医師歯科医師6名、運輸通信業8名、無職3名、その他7名、計210名。(A)「あなたは、いつ学習しますか」夕食前・夕食後・深夜・早朝・学習しない。そのうち一番多くの時間学習したものを○でかこみなさいと指示した。この結果をみると、男女ともほぼ同じ傾向にあることがわかり、その内容は、夕食後の時間を約64%のものが利用しているのが特に目立った。つぎに多いのが帰宅後夕食前までの時間である。(B)「あなたは学習の計画をだいたい決めてやっていますか」だいたい実行している・きまつているが守れない・きめていない。そのうちであてはまるものを○でかこみなさいと指示した。その結果、男女とも大部分のものがきめていない(53%)きまつているが守れない(25%)が目立った。(C)「学習はどのようにしてやっていますか」について、ここでは学年全員408名について質問法の自由記録による予備調査を実施して、そこで訴えている項目をまとめて10項目の要因をみだし、これを調査の材料として選択肢に用いた。「復習と予習を中心に毎日やる①・毎日きまった科目だけやる②・宿題をやってから好きな科目をやる③・その日のすきな科目をやりきれいな科目はパラパラめく

る程度ですませる④・できの悪い科目だけやる⑤・勉強しないとテレビを見ることができないのでやる⑥・たいくつの時は好きな科目をやる⑦・気がむけばやる⑧・ロウるさく云う兄が居るとやる⑨・宿題が終ってからできない科目をやる⑩」以上の各内容を知能でしらべてみると、上位群は①で約半数を占めているのに、下位群は1/5程度である。また、下位群で⑩が約半数に達するほど多くあらわれていた。しかし上位群でわずかに全体の1/6程度しかあらわれていない。そこで、全般的に考えてみると、知能の段階によって学習態度や意志に相違がみられることである。したがって、教師は、相談室などを利用して個人の能力が特性に応じて、それに適応した補導をなしとげることが大切である。

学級担任もち上りとクラスの反応傾向の平均化 (P・F・テストによる)

埼玉大学 長瀬 邦三

手続 第4.5.6学年継続受持ちの学級と5学年時編成替えになったのを選ぶ。前者をHo 後者をAc と呼ぶ(結局各1学級ずつに止まった)教師は30代で専門校か新制大卒の男子教諭でGCR中段階の人に限る。検査第1回目を5学年1学期第2回目を6学年1学期に実施。

結果 上記期間GCR変動の人数は両学級とも増加した者が過半数をしめたが、Ac 学級はその半数は4学年時からの持ち上りであるのでこれをW群とし他をR群として両群別にみるとW群だけは上記割合とは逆にGCR減少者が過半数を占める。次に学級別GCR平均並びにSDの1か年間の変化をみると標準に比べてGCRの方はいづれも低くSDの方は高い。然しその限りにおいて年間標準への接近がみられる。この結果に対してここで学級の反応傾向の平均化傾向といった。その傾向に両学級による違いがある。即ちGCR平均の向上度を検するためのt検定ではHoの方は5%水準で有意と認められAcの方は有意でない。又SDの縮小についてF検定にかけるとFoの相対的な差からHoの方がより集中的だといえそうである。次に学級別、年度別GCR間ピアソンの相関係数の示すところによると明らかにHoの方の得点の変動は著しい、Ac方は然らずといえる。

以上のような結果からHo学級の方の反応傾向の平均化は顕著であるのに比べてAcの方のそれは鈍っていること及びその渋滞の中にはAc学級内W群の反応傾向の無変性性、安定性というような1種の力動性によって(この点GCR, SD及び γ などの群別検討結果に拠るもこれを省く)Ac学級全体としての反応傾向平均化の渋滞が結果すると同時に他面R群の反応傾向平均化促進

という集団内力動性が働いていることが推定せられる。

Q分類による「教育」に対する態度の研究

福島大学 徳田 安俊

目的 教師の「教育」に対する態度の構造および、その態度の基本的因子をQテクニックを用いて研究しようとするものである。

方法 KerlingerのQ-sortカード(80枚)を若干修正して用いた。各カードの陳述に対する賛成・不賛成の程度に応じて、11段階にほぼ正規分布をなすように強制分類せしめる。80の項目は、A態度:(1)Restrictive Traditional, (2)Permissive Progressive と、B領域:(a)教育課程, (b)人間関係, (c)社会的一般的基準, (d)訓育のAB両者の組合せで8つのカテゴリーからなる構造をもつ。被験者は大学の教育学・心理学教官、小・中・高の教諭・校長および父兄をふくむ。

分類された項目はその段階に応じて配点され、カテゴリー平均によって個人の態度構造を見、上記の態度および領域間の差を分散分析によって検討した。被験者相互間のQ分類の積率相関による相関表を因子分析にかけた。

結果 1.教育学者・心理学者、小学・中学・高校の教師にはそれぞれ特徴的な態度構造があるように思われる。

2.分散分析の結果、大学教官の全員が態度の面でProgressiveであったが、その他の被験者では、それが有意でないもの、およびTraditional(有意ではないが)なものもふくまれていた。領域間に有意差のあるものは極めてまれであった。

3.因子分析の結果、三つの因子が見出されたが、IはProgressiveな因子、IIはTraditionalな因子、IIIは心理学因子と推定される。そう推定した理由は、Progressiveな方向への分散比との順位相関が、Iは0.86、IIは-0.24、IIIは0.44であり、IIIは心理学者だけに負荷していることと、因子配列(Factor Array)による検討も大体上のことを裏づけていたためである。ただしIIについてはなお検討の余地があるようにも思われた。

保母の生活時間構造(保育園)

——時間布置と活動内容について——

愛知学芸大学 相川 高雄

目的 保母の生活時間を保育内容と保育時間に焦点を合わせ、時間布置の状況とそれにとりあう具体的な活動内容の構造を明らかにし、教育職(小・中学校教諭)の

職務内容 (teaching load) と比較検討し、就学前児童教育に関する保母 (保育園) のあり方について参考に資する。また、保母の活動内容から保育計画の構成の参考にも資する。

方法 1日24時間を10分間隔に区分し、それに相応して、活動時間・活動内容を記入することができ、しかも、その活動内容について快・不快の報告ができるような調査票を作製し、これを保母に与え、記入報告させる。記入報告の要領は、1人の保母は、上記の調査票を1日1枚宛て使用し、これを1週間にわたり継続記入し、調査者へ報告する。このようにして、毎月宛1週間分報告し、1年間にわたり継続し、年間の状況を比較検討できるようにする。今回報告するのは、6月9日 (金) より15日 (木) にわたる1週間の生活時間の結果である。調査票数は7枚 (1週間分) × 46人 = 322枚である。

結果 以上の方法で得られた結果を、従前に得た小・中学校教諭の結果と比較すると、月曜から金曜までの間では、環境整備・給食・健康管理・退園児の指導などで保母の活動時間が多く、教材研究・個人研究・授業 (保育) ・生活指導・事務・会計・会議・研修・施設設備などでは、両者の差がみられない。教諭の場合は、男女を含むので、保母よりも家事労働が少なくなっているが、余暇や睡眠時間では、両者とも同様の傾向を示している。土曜・日曜の活動も両者同様の傾向を示しているが、月毎の傾向・幼稚園保母との比較検討を今後進める必要がある。

Facial Exposure の読話成績におよぼす影響(1), (2)

NHK ○豊口 真治
東京教育大学 尾島 頌心
〃 ○中野 善達

目的：話し手の顔面の見える部分によって、読話成績が、どのように影響をうけるかを明らかにする。

方法：8mm映画を用いる。顔面の見え方についての条件は、A—(全部みえる)、B—(口唇のみみえる)、C—(左側半分のみみえる)、D—(中央部、口の巾だけみえる)の四種。話し手は、特に話しことばについて訓練を受けた男子。但しろう学校教師ではない。送話された材料は小学校四年程度以下の語彙と文型とを用いて十種の文章を作り、その中の単語を変えて (妹はテレビが好きです。→弟は野球が好きです。おじいさんはすもうが好きです。僕は映画が好きです。) のように同種の文章四つずつ合計40文を作り、予備テストによって全体の読話の難易が等しくなるように、十文章ずつ四組のリストを作り、各条件一リストずつ用いる。

実験対象は三つのろう学校の小学部四年以上、中学部迄の児童・生徒171名 (男102名、女69名)。被験者は一回8名ずつ暗室に座し、前方2~2.8mのスクリーンにうつる顔を見て読話し、それを用紙に記入する。整理は、文節毎に正・誤答を調べ、文節 (文章) 毎の明瞭度 (正答率) を算出し、また各個人での得点を求めた。

結果 A条件での平均値は51.4, S D 21.4とかなり明瞭度が高く、以下、条件C, 平均値47.4, S D 18.8, 条件D, 平均値45.8, S D 20.5, 一番明瞭度の低いのが口唇のみの条件Bで平均値41.1, S D 22.0である。この順位は学校別にみても同じことが云える。

四条件での相対得点分布をみると、学校差が極めて大きいことがわかる。しかし各学校内での四条件の順位相関は非常に高く、全体の場合で $r_s[A][B]=0.87$, $r_s[A][C]=0.887$, $r_s[B][D]=0.88$ となっている。読話能力は一般に女子が男子に優ると云われているが、本報告でもそれが確認された。即ち条件Aで男子 (102名) の平均値47.4, S D 21.3, 女子 (69名) 平均値56.9 S D 20.3と女子の方が有意に得点が高い。 ($P < 0.05$) しかしながらここにも学校差が認められ、性差の顕著な学校 (男子平均49.5, 女子平均69.3のC校) と性差が認められない学校 (男子平均49.3, 女子平均55.2) もあるわけである。女子の優位は四条件を通じて常に保たれた。

文章 (文節) 毎に正答率を考察すると、(私は国語の勉強をしました。75.5%正答。おかささんはおそうじをしています。57.6%) のように被験者の日常生活に密着した内容の文はよく読話されており、逆に (ねこはどこにいますか。9.7%。冬休みに山へスキーに行きます。23.6%) などは低い値を示している。また、助詞、助動詞を含めて誤答の傾向にいちじるしく特徴的なものがみられた。

音楽による精神衛生 (VII)

共立女子大学 玉岡 忍

今回は消化を助ける音楽について考えてみたい。

Paul Sugarman は消化を助ける音楽として20曲を選定したが、その根拠は、Pavlov や W. Crile 等の説をもととしている。すなわち、「中耳の鼓膜の主要神経は舌の中心部で終り、それはまた脳髓に鎖っていて、味と音との感じを生ずる。それ故に、よい食物とよい音楽とは最も理想的に結合する。胃が消化不良になり幽門が閉された状態のとき、音楽をきかせることによって治すことができる……Pavlov」また「胃の働きはリズムカルであって、緊張、弛緩のリズムの波からできている。この

波は心臓のそれよりもかなりスローである。しかし心臓よりも、もっと胃のリズムは音楽のリズムに影響されることが大である。消化作用は腺と神経との2つのファクターによって影響されるが、音楽はこの両者に働きかける……胃の神経に関する限り、沈静的な音楽が望ましい……Crile」等である。Sugarman の選んだ曲目は大体この条件に適っている。私は東京都の小学校における、給食時にきかせる音楽を調べてみたが、非常に多種多様であり無統制であったので、Sugarman の曲よりも、もっと我が国の児童にふさわしい、しかも Crile 等の云う条件に適う曲を選んで、給食時にきかせるようにした。その結果はよいと云うことであるが、まだ報告するに足る十分な資料がえられない(編集の都合で選日の表が掲載されないのは遺憾である)。

精神薄弱児の描画と色彩 (I)

ベンダーゲントルトテストに依る描画の検討

都立青島養護学校 ○吉田 辰雄 小串 里子
小出 進 林 邦雄

我々の精薄児の描画への対し方にパーソナルな要因を中心とする診断治療的な見方と描画の内容の稚拙を中心とした発達的な立場に立っての理解の仕方と二つの面が考えられる。そして又そこに描き出されたものが、彼等の概念として本当に捉えたものであるのか否かの疑問が残る。この度彼等ほどのような心理的状况に於て亦 physical な条件に於て絵を描くのだろうかという事を主として S. kill を中心に捉えようと試みた。

対象 中学一、二年生52名 (m=35 f=17)

施行テスト (1) 知能テスト (鈴木ビネー) $\bar{M}=58.7$
SD=26.8

(2) 社会生活能力 SQ の $\bar{M}=61.7$ SD=27.0

(3) Bender Gestalt Test (評価及び内容の分析の準拠として Pascal & Suttell の方法に依つた $\bar{M}=114.4$
SD=54.0)

(4) 描画は課題として Yama/Ie/Hito を順に教示し同一画用紙 25cm×35cm に自由に描かせた。

結果及び考察 (1) Iq と BG スコアの $r=0.91$ Sq と BG スコアの $r=0.901$ で共に極めて高い相関があった。

(2) BG スコアを軸として各 Design の得点個所を中心に④水平線の模写の誤り、⑤図形の二重反復ふるえ、③非対称化、①点模写の誤り、②曲線模写の誤り、①角図形の模写の誤り、⑧欠如、⑤図の重なり、のカテゴリーに分析検討を加えると③④①⑤⑤にかなりの関係がみられる。即ち、BG スコアの減ずるに従い誤描の減少が窺える。

(3) 課題画の分析項目から Yama の描き方が直線曲線→彎曲線化、Ie は三角形的→四角+台形の形態、平面的→立体化が窺われ Hito に於て鼻口耳腕指の欠如の減少化はベンダーゲントルトの分析結果と類似の傾向がみられたが、腕指脚足の線描亦是耳指足の丸描は BG スコアに無関係であった。結論的に云える事は一義的に精薄児の絵にキャラクタースティックなものを強調するには問題があり、或る過程をたどって変化する様である。

精薄児の描画と色彩

(2) 樹木および人物画の発達の研究

都立青島養護学校 ○林 邦雄 小串 里子
小出 進 吉田 辰雄

目的: 精薄児の樹木および人物画を検討して、その描画発達の特徴をとらえ、さらに精薄児のパーソナリティ診断へ進めることを目的とした。今回は樹木描画の発達について報告する。

方法: 都立青島養護学校 中学部 1~3 年生 60 名 男 40 名 女 20 名、MA 6~10 才、CA 12~14 才、IQ 46~79。B 5 版大白紙 (縦長使用) に時間無制限で鉛筆をもって木を一本かくことを教示した。調査期間 36 年 5 月中旬。

結果: 男女 60 名の精薄児の樹木描画が幹、枝、葉、根、実および花の 6 部分の有無について検討された。MA 別に発達曲線を描いて考察した結果、幹は MA 6 才で頂点に達した。枝と葉は MA 7 才以後で頂点に達した。

根は MA 6 才が最高で以後減少している。実と花は 6 才のみに認められその後消失した。実や花を描くことは未成熟のしるしと考えられた。普通児と比較した場合、成就率 (描画) は、精薄児の方が低いことがわかった。樹木としての概念構成は、MA 7 才でほぼ完成していると考えられた。

作品の質については、MA の向上とともによくなっていった。平面的、叙述表現的な図式画から写生的、立体的に描くようになった。

一般に樹木画は部分数が少く、人物画より早期に頂点に達し、以後変化にとむ表現に変わる、といわれているが、本検討では例数が少いので結論的なことは言えないが、上のように言えるのではないかと示唆された。従って性格テストとしての有効性も今後の検討にまたれる。

精神薄弱児の描画と色彩 (色の好悪の発達)

都立青島養護学校 小出 進 小串 里子
林 邦雄 吉田 辰雄

精薄児の色の好悪の発達過程について、未分化から分化への移行と、色の内容的変移との二点から、特に前者

を重点的に考察する。

被験者：CA12～14。男子（IQ平均51。MA（5～7）（IQ平均69。MA（7～10）。女子（IQ平均52。MA（6～7）

方法：I形態色検査，24色のクレパスで，25個の小三角から成る正三角形を，好きなように，嫌いなようにぬらせる。II色の好悪一対比較法，赤橙黄緑青紫（純色）白黒，各4×6.3cmの色紙二色づつを台紙（灰明度16）にはったものを使用。IIIぬり絵。子供（男・女二人）が各二個づつ風船をもつ絵をぬらせる。

結果：精神発達に伴う色の好悪の発達が精薄児においても明確に認められた。(1)好きな色としての対象が発達と共に少数化，特定化する傾向も幾分みられ，(2)同一発達段階で同種類の色に好みが集中化する傾向がより明確でその集中度が発達と共に高まる。(3)MA8～10才（CA13才前後，IQ70前後）程度では色の好悪の分化がかなり明確だが，(4)MA5～7才（CA13才前後，IQ50前後）程度の段階では，極めて未分化な状態にあった。(5)しかし性差が大で，少くとも本実験 Lowgroup の発達期では，男より女の方が分化の度合が高い。(6)好きな色の傾向にも性差が顕著で，(3)の段階の発達期の精薄男子は，緑青黄，(4)の発達期の女子は，黄赤橙などが多く好まれた。(7)色系別では，男子は発達と共に寒色系が，男女の比較では，女子は暖色系が多く好まれた。(8)好きな色として明度の高いもの，嫌いな色として明度の低いものを選び，発達の（本実験対象の段階内では）その度が高まり好悪の明度差が大きくなる。(9)総じて嫌いな色の分化の方が早期，且明確に行われると思われる。本実験 Lowgroup の如き色の好悪未分化な段階に一対比較法のような好悪検査法を適用し好悪の色の種類について云々しても，その妥当性には問題ありと思われる。

精神薄弱児の数量概念（1）

——量的関係概念について——

東京教育大学 堅田 明義

東京教育大学附属大塚養護学校 稲吉 千代

精薄児の数量概念の形成の過程を知ることは，精薄児に「何を」「何時」「どのように指導するか。」というカリキュラム（数量領域）の編成を，適切，効果的なものにする上に重要なことである。

本報告は，この精薄児の数量概念の形成を見究める第一歩として，順序数の概念形成の前提条件と見られる多少概念および等量概念の理解ないしは把握水準とその特性を検討した。

方法 被験者：教育大学附属大塚養護学校生徒42名。材料：おはじき1,000個，キャラメル30個。

課題：等量判断，多少判断，二量比較，三量比較。

結果と考察 多少判断はMA4才～6才，二量比較，三量比較はほぼ8才程度，等量概念は8才前後で約7割位しか理解されていない。

学年別には二量判断は小学部中学年（CA8：6～12：2），二量比較は高学年（CA10：2～13：10），三量比較，等量概念は中学部（13：2～14：3）の水準で，ほぼ理解できた。以上の結果をさらに分析すると多少判断は中学年までで一応理解されているが，二量比較，三量比較および等量概念は全くアンバランスな発達を示していた。また，知能指数の高低にかかわらず，生活年齢が量的関係概念の形成に大きな力となっている。このことは生活経験の重要性を示すものである。例えば，おはじきの多少判断が出来なかつた精薄児がキャラメルの場合の多少判断は出来たことからわかる。以上，精薄児の多少比較概念は対概念としてでなく，対象の個別的特性として把握されていると考える。等量概念理解の困難さは日常生活場面での経験の乏しさに帰せられると考える。

精神薄弱児のコミュニケーション（9）

——聞き方の能力に関する研究（2）

東京教育大学 ○清水 寛 中野 善達

東京教育大附属養護学校 飯田 貞雄

目的 精薄児の言語情報の態度・能力をさぐる一つの方法として，田研式「コトバの聞き方テスト」を行い，精薄児の能力・発達段階との関係において研究をすすめてきた（第2回教心総会発表）。今回は主として，「テスト」の低位検査領域を問題項目別に分析することによって，精薄児の「聞き方能力」の特異性を内容的に吟味する。

対象・方法 精薄児104名（IQ50～75，CA10：4～19.7，MA5：2～13：0），正常児477名（小学校2年255名，3年222名），レコードによる集団テスト。

結果 精薄児の場合は，MA（IQ）が高い程各「低位検査領域」（田研「手引」参照）の成績は良好となるが，「D領域」（話しぶりの「よしあし」の判定，内容の感想・批判），「C領域」（大要をつかみ，話者の意図を理解），「E領域」（長い話の荒筋を，想像・推理を働かしてきく）は，「A領域」（簡単なコトバ），「B領域」（内容の適確な把握—主語・述語，修飾語の働き等）に比して，著しく劣る。正常児も類似的傾向を示すが，精薄児よりも全体としての成績は良好。通過率の面から各問を分析したところ，精薄児は次の如き特徴を持つ問題において，きわめて低い。(i) 数的処理を要求，(ii) 「コトバ」，「ことごと」のききとりと理解の上に，社会的価値（道徳・常識）判断において，一定のノーマルな水準にあることを前提，(iii) 問題提示が会話形成で行

われ、対話者の人間関係(目上等)と話しぶりの関係の理解、(iv)長い話における因果関係の理解。以上のことから精薄児の「コトバの聞き方能力」のおくれ、特異性は、単に「コトバ」の記憶・把握における問題にとどまらず、彼らの心理的メカニズム、社会的能力の発達の特異性という点から今後追求されることが必要とされる。

精神薄弱児のコミュニケーション(10)

—聞き方の能力に関する研究(3)—

東京都立青島養護学校	井田 範美
東京教育大学	堅田 明義
東京都立青島養護学校	小出 進
〃	林 邦雄

目 的

精薄児の聞き方の能力に関する調査の一つとして、M A 7 : 0 ~ 10 : 11 の精薄児に国語聞きとりテスト(NHK放送文化研究所版)を実施した結果を分析考察する。

方 法

①材料：国語聞きとりテスト小学校中学年用第Ⅰテスト・第Ⅱテスト ②被験者：東京都立青島養護学校(中学部高等部)生徒 N = 69, MA 平均 8 : 6, I Q 平均 63.0, CA 平均 15 : 11 ③実施：被験者を5集団に分け、それぞれの集団に第1週は第Ⅰテストを、第2週は第Ⅱテストを実施した。比較としての普通児群の資料はNHKのものに依った。

結 果

- (1) 各項目通過率比較では、第Ⅰテストは25項目中22項目、第Ⅱテストは24項目中20項目も普通児群の方が優れている。然しMA別にみると、MA 7才台では普通児群が断然優勢だが、MA 10才台では精薄児群に優れた項目が多い。即ちテストⅠでは17項目、テストⅡでは14項目が普通児群よりも優れている。
- (2) テスト総得点とMA・IQの相関関係は第Ⅰテスト MA 0.53, IQ 0.46, 第Ⅱテスト MA 0.64, IQ 0.47 であり、高くないが、MAに相関深い。各MA別によるCAの得点差は殆んどみられなかった。
- (3) 両テスト各項目における上下弁別能の小さい傾向は音韻のききわけ、語法に散見され、ききとりに関する項目は概して大きい。音韻語法に関しては、構えや生活環境の差などによる要因が、知的要因の他に特に影響しているのであろう。

* 参考文献 学校放送の調査と実験

(日本放送協会放送文化研究所)

特殊児童(主として精薄児)の 教育評価に関する一研究

東京元加賀小学校 岸本 英男

精薄児の生活実態は、如何なるものであるか、何に関心を持ち、何が生活の主軸となっているかを明らかにする事は、その教育を推進してゆく際の基礎条件であるが、従来それらは質問紙法や、観察法によっていたため、アプローチの方法としては、蓋然的である。本研究は、彼等自身の内観による表現を継続的に累積し、数的に処理して得た結論を基底として、その生活実態を明らかにした上で、教育評価の基準を仮定し、更にそれを生後三年間に於ける乳幼児の成熟発達を客観的に捕捉し得るか否かによって検証したものである。

その結果、この基準は、発達成熟してゆく人間のあらゆる機能を、細大もらさず捕捉しつくしている点で、極めて高い信頼度を持つ事が実証された。精薄児の教育は、その進度が極めて遅く、又各種の機能の成熟発達に多くのムラがあるので、潜在能力を見落したり行動の発達の評価に於て、顕型と原型を見誤る事による誤認も少なくない。それらの欠点を補い、全人格的発達として、マキシマな教育効果を期する上の判断の基準として、この研究はなされたものでもある。

その基準は、処理、観察、知識、理解、表現、創意、思考の七領域に於て、28の性能を指定し、更に140の項目を区分し、700の分類肢を演繹して、精薄児の可能性探索に、見落しのないように体系化したものである。

その結果、IQ 60台70台80台の子供は、その人格構造に於て何らの質的差異も認められず、僅かに、成熟発達の構造に於て、固定的か流動的か、速いか遅いかの差異が、週辺部に於て見られたに過ぎない。従って60台を精薄児の概念でとらえるならば、当然80台も捕えられねばならず、もし80台を普通児とするならば、60台も含まれねばならない。かくて精薄児の範疇を次第に狭く制限すると同時に、スローラーナー対策が幅広く立てられねばならぬ。

テーマ 聾児の知能と学力の分析的研究

第一報告テーマ 聾児の知能構造の分析

ミツミ電機KK 水野 誠司

目的 ろう児の学力、知能の実証については、全国的調査がほとんどないので、その実態を明きらかにするために本調査を実施した。本報告はそのうち知能検査の結果について考察する。

方法：1. 昭和35年10月より12月の間

2. 全国101校中31校の小学部6年生1,136名および中学部3年生994名, そのうち聴力の判明するもの小学部281名, 中学部155名, 計436名に知能検査, 国語算数の学力検査の三種を実施した。

3. 田中B式知能検査第1形式(B₁), 日本文化科学社結果およびその考察

本調査人員436名の年齢は小学部で11才から13才, 中学部で14才から17才までであり, その下位テストの結果である。

知能は知能偏差値にして35前後である。

空間的洞察力を要する迷路問題では13才14才で急にのびるが, 以後は停滞するに反し, 普通児は15才から停滞する。立方体分析の問題では11才~13才は停滞し, 17才で低下するまでの間はのびる。幾何学的図形構成の問題では普通児とかわらない。置換テストでは普通児が16才で最高を示すのに対して, ろう児では逆に低下するという差がある。数・形の知覚をみる異同弁別テストでは普通児とろう児の差はないが, ろう児では14才以後はのびがみられない。法則の発見・推理力をみる数系列完成の問題では普通児とろう児にあきらかに差がある。ろう児では14才で顕著なのびを示すが, その前後では停滞している。図形抹消テストでは両者の差がともにのびながら拡大している。

点は, 14才まで難聴のほうがろうより高い。したがって, 洞察・推理能力については, 難聴児よりろう児のほうが優れているといえる。これらの思考能力の基礎的・素質的な因子は, 聴力には, あまり関係がないと考えられる。

14才以後において, ろう児の下位テストの粗点が難聴児の粗点より優れているものには, 立方体分析・置換・異同弁別・抹消検査がある。これらの下位テストには種々の知的特殊能力がふくまれているものであるが, とくに知覚的要因が重要な因子として働いているものである。したがって, 知覚—視覚的因子は聴力の有無とは無関係であると考えられる。

以上, ろう児の知識の発達には, 全体的には, 聴力と関係はないが, 知能のふくまれる特殊因子別にみると, 聴力によって特殊な因子が強くあらわれてくるといえるが, さらに今後の検討を要する問題である。

第二報告 聴力別による知能の差異について

東京学芸大学 堀内 敏夫

1, 目的, 2, 方法は第1報告と同じ。

結果の考察

文部省特殊児童判別基準にたり, 全ろうである「ろう」児と, 残聴のある「難聴」に大別して, 知能偏差値を比較してみると, 12才児および17才児を除き, 11, 13, 15, 16才児はともにろう児のほうが難聴児より知能偏差値が高い。

この事実は, 主として素質的な知的能力を測定しようとする知能検査の方法, そのものが, 言語, 文字あるいは数字, 図形という経験的媒体を通じて実施されるものであるから, 一応の仮設として, 聴力が残存するならば, 知能の発達が促進せられるであろうという考えが, くつがえされることとなる。

また, 下位テストについて, 年令的・発達のみると, 迷路・数系列完成検査を除き, その他の下位テストの粗

発 達

女兒の身心発達の相関に関する研究(6)

—Acceleration と性格特性—

お茶の水女子大学 平井 信義

千羽喜代子

前回に引続き約700名の女兒の中、Acceleration に特色ある体型Bと、retardation に特色のある体型Eとの比較を、特に初経その他調査の正確な者について行った。その結果は次の如くである。

① 体型を中心として、二次性徴・身体異常徴候と関係は、B型は初経も早く、身体異常徴候も多く、青年期の精神成熟度も高く、E型はそれと対照的である。すなわち、B型は身心ともに早熟傾向にあり、E型は遅い傾向にある。

② B型・E型の頻度を学年別に見ると、B型はそれに左右されないが、E型は高学年になるに従って増加する。すなわち、身長が年齢より多く体重の少い子供の増加を意味する。また、B型は高1に頻発しているが、E型にはその傾向が認められない。

③ ①と②とより、B型が早熟傾向に、E型が晩熟傾向にあるのは、それが年齢的变化に依存するものであるか、小4～高3までを包括的に扱ったためであるか、いづれにせよ、B型は早熟女兒に、E型は晩熟女兒に認められやすい型であると云える。

④ B型及びE型的女兒について、矢田部、ギルフォードの性格プロフィールを求めてみると、B型、E型ともに平均型aと調和型dが多く、異常型に於ても両者に大差を認めない。各学年別の散布状態も同様である。従って、このような体型と性格プロフィールとの間には、特徴というべきものが現れていない。

ここに、早熟・晩熟の体型を取り出して性格との関係を論及したのであるが、Schickの言う如く、内分泌系と関係の深い二次性徴の同時性・非同時性との関係の方が妥当するよう思われ、目下追究中である。

女兒の身心発達の相関に関する研究

(7) 性格特性と体型、二次性徴、身体徴候との関係

お茶の水女子大学 ○千羽喜代子

平井 信義

前報にひきつづき、一般論としていづれの性格特性に

身体的成熟を示しやすいか、また二次性徴と身体徴候との間の関係を知るためにY G性格検査プロフィールによる各性格特性と二次性徴、身体徴候との関係を調べたような結果を得た。

調査年月日および対象は⑥報に同じである。

結果 (1) Y G性格検査プロフィール各型の年齢別変化は、平均型a型は各学年を通して約30%を占め、調和型d型は高学年になるにつれて減少していく傾向にある。外向的不調和型b、内向的調和型c、内向的不調和型e型は一定の傾向がない。

(2) Y G性格検査プロフィール各型とローレル指数およびCoerper-Hagen式体型図型との間には特定の関係を認めることができなかった。

(3) 次にY G性格プロフィール各型および情緒安定度と二次性徴(乳房・腋下毛・初経)および身体徴候との関係を調べたところ、二次性徴出現の早いものは平均型aをもつものと内向的不調和型eをもつ場合が多いが、必ずしも情緒的に不安定であるとは云えない。

また内向的不調和型eの身体徴候点が高く、内向的調和型c、調和型dの身体徴候点が高いこと、ならびに情緒安定度と身体徴候点の連合係数.33、特に中学3年から高校3年においては.77の結果から、身体徴候と情緒安定性との間にはかなりの関係のあることを認めた。

生活環境が学習におよぼす影響

日本女子大学 児玉 省 ○小山 雅子
立石 延子

本研究では、環境差が知的理解力、語い力、道徳判断力に及ぼす影響を検討しようとした。東京都内の山の手、商業地区、工場地区、家内工業地区バタヤ部落地区の小学5年の学童各地区平均100名以上に我々の準備した4種類のテストを施行した。検査は(I)家庭環境47問、住宅・電話・風呂・家具・楽器・図書購読新聞雑誌・参考書の有無と数量・幼稚園教育・けいこ事・家庭近隣の自然と社会状態(II)語い検査150問(都会生活・農山村生活・一般生活関係各50)である。

環境の文化度を評価するため一定の基準を設けて評点したところ、東京都千代田区A小学校生徒の家庭は平均67点、大田区B小学校の家庭50点、江東区C小学校45点、浅草D小学校49点、足立区E小学校41点となった。他方各地区の生徒の語い検査、知的理解力検査、道徳判断力検査に対する成績を二種類に整理した。一つは、問題全部に対して完全に答えた者と、問題の一部分を答えなかつたものの成績を合せて計算したものである。

結果 完全答案だけの結果でみると、千代田区小が三種の検査成績が1位で2位が大田区小及び浅草小、3位が江東区小、4位足立区小の順になる。しかし不完全答案をいれると各地区とも家庭文化度得点に於て著しく低下し、千代田区と大田区は語い検査でずつと低下して最下位になり、足立区だけ増加して一位になる。その他道徳検査でも点数の移動がありこれは千代田・大田には子供の能力の巾が広く、かなり低い能力の子供があることを暗示する。語い検査をみると、この事が一層はっきりする。足立区の子供は不完全答案をいれてもほとんど得点が変わらない。そしてそれを入れると三種類の単語のどれでも一位で書物など以外の生活から語いを得ていることを暗示する。

環境点と検査との相関 知的理解 足立(0.23) 江東(0.15) 大田(0.12) 浅草(0.31) 千代田(0.32) 語い 足(0.22) 江(0.23) 大(0.23) 浅(0.21) 千(0.29) 道徳足(0.24) 江(0.09) 大(0.24) 浅(0.29) 千(0.06)

家庭のしつけの研究

日本女子大学 児玉 省○山本 弘子
信江 裕子

親に対する質問85問と子供に対するもの130問からなる二種類のアンケートを作製し、東京都内の下町山手小・中学校2校ずつ、横浜市内中学1校、宮城県農村の小学1校(小学校6年、中学校2年)の生徒合計420名に対して記入を求め、またその親に対して記入を求め353部を回収した。問題の内容は家庭の雰囲気やきまり、子供の自己観及び親の子供についての評価、子供が画く理想像及び親が子供に持つ理想像、教師友人関係、兄弟関係、しつけ方等に関するもので、子供と両親の問題はできるだけ同一のものとし、また問題によって父母別々に質問した。

結果 まず現在行われているしつけの類型をみるために、きびしいしつけ(親の命令きまりを強行しようとする)、甘やかし型(子供のねだりに負ける)、放任型、拒否型(子供を理解、信用しない)、不一致型、民主型の類型に分類したところ、やかまし型、甘やかし型は約40%前後、放任型は20%乃至30%、不一致型20%前後、拒否型10%前後、民主型80%乃至90%の出現率を得た。民主型がもっとも多くついでやかまし型甘やかし型となっている。上の6つの類型について親の考えている点と、子供が親のしつけについての感じ方との食い違いを各項目に対する両者の反応差から求めたが、民主型と拒否型については両者の反応率はほとんど一致し、やかまし型、甘やかし型においては両者の開きが多い。すなわち、

民主的しつけや拒否型しつけについては親子間の受け取る印象は一致しているということで、その他については両者のうけとり方にくいちがいがあることを意味する。やかまし型では子供は親のしつけを親以上にきびしく感じ、甘やかし型では親以上に甘く感じていることを暗示する。また親の子供に期待する理想像と子供自身のそれでは、子供は勤勉努力、正直、意志強固が第一で、親では意志強固の代りに明朗快活としている。

「乳児の行動観察」(第1報)

日本女子大学 児玉 省
八王子乳児院 近藤 高男
都立八王子乳児院 鶴田 郁代

誕生から満一歳に至るまでの乳児については現在まだ研究が少なく、ことにその睡眠時間、その他の行動の種類や時間等については Ch. Bühler の60余名に及ぶ研究があるが、それ以外にはこれと比較する研究はほんの数名を取り扱ったものがあるにすぎない。

そこでこの問題に対して何とか研究の糸口を握りたいと思ってスタートしたのがこの研究である。方法としては、Bühler と同じように誕生から各1ヶ月毎に1回24時間継続観察しその各種の行動と時間を分類集計した。

対象は都立八王子乳児院の乳児3名をとりあげた。わづかの例で結論的なことは何も述べられないが、一応の傾向として云えることは、

- ① 睡眠時間が Bühler の結果と比較し、かなり少ないこと又 Bühler は新生時を頂点とし次第に減少し6~9ヶ月頃から一定になる傾向を示しているのに対し、ここでは、その様な一定の傾向は見られず、或る月は減少し又増加し、減少するという様な結果が出ている。
- ② 積極的行動の%が日本の乳児の場合非常に高く次第に増加の傾向を示しており、自発的行動は、Bühler のが月令と共に増加しているのに反し次第に減少する傾向が見られた。消極的行動については、Bühler の場合3ヶ月を頂点とし減少の傾向を示しているがここでは増加したり減少したりで一定の傾向は見られない。
- ③ Bühler の結果では1回の睡眠持続量は月令と共に増加しているがここではそのような結果は見られずむしろ減少の傾向さえ見られる。これは施設児は個人差を無視した機械的な世話を受けるため睡眠が中断される場合が多いことが原因しているとも考えられる。

大体以上であるが、やがて例数を増して Bühler のように5.60名にまでもってゆくつもりである。

正常小児の follow-up study (第三報)

ゲゼル行動発達検査に見られた発達特徴

仙台市精神衛生相談所 大脇三恵子
新井清三郎
丸山 直美

我々は小児の或症状が正常範囲を逸脱したものか、発達過程に出現しているのかを診断するのが困難である。「正常」とは異常でない事理想像価値概念、よい適応、平均概念を包含していると思われる。社会的経済的にも中位の小児について、多面的に研究して来ている。即ち生育歴・家庭環境・Infantogram・ゲゼルテスト・ロールツヤツハについてである。ゲゼルテストは1才頃から約半月おきに7回から8回、8名(男3, 女5)の中3名に4才時に鈴木ビネーテストを行った。検査態度のmovie撮影や行動観察・母親とのinterviewを主としてpersonalityの傾向を概括した。

8例共に標準値以上の発達傾向を全般的にたどっている。四行動中個人的社会的行動が特によく運動適応がそれに続き言語が少し下っているのが一般的傾向であり、月令による推移は各例独自の発達型を示している。1例は言語が最もよく運動適応個人社会的行動の順に下っていて、ベビーコンクール児の傾向と異っており知能検査の結果から優秀児と思われる。言語の始まりのやや遅れたのが1例ある。弟妹出生2例に出生前後テスト態度が依存的になり自立態度が劣り、飽きが見られた。その中1例にテスト不能が1回あった。又、1才から2才にかけてテストに飽きたり反抗的になったもの3例あった。全般的に現在までpersonalityに自立態度の劣るものが1例のみで、他7例は心身共に順調な発達を示している。体重、身長、胸囲、上膊囲を計測して作ったInfantogramでは、対象がベビーコンクール入賞児であったために、体重が平均値に比較してずっと大きい。肥満型と思われるものが大部分だが、今後の変化をたどって行くことは、他の性格特徴と合わせて考えるときに興味ある資料になると思われる。

6ヶ月間隔で2:6から行われたRorschach testから、次の様な結果を得た。

- 1) 反応数並びにCRは年令と共に増加する。
- 2) 全体反応は部分反応より少ない。
- 3) inquiryでdeterminantを求める事は困難で、3:6になってやっと全反応の中の1, 2ぐらいに決定理由をのべて説明ができる程度である。
- 4) 言語表現は単発的で形容詞をつけたりSentenceでのべる事は稀である。
- 5) 動物反応が圧倒的で、magie keyは4:0にな

ってもなくなるらない。

AnresやHalpern等の得た結果と比較すると3:0以後は反応数は多くなるが、反応決定因の説明、反応の言語表現などにprimitiveなところが見られた。それには、我々の被験児が社会的訓練に不足しているとか、perceptionの未分化、同室する母親への依存的態度が強い、日本語の場合のsentenceへの移行のむずかしさ等に起因するものではないかと思われる。

知能優秀児、R-testへ抵抗をもつ子供、母親妊娠によって退行現象があったり、祖母の養育に委ねられて、他と較べて我儘っ子である子供など、家庭での人間関係又特に体重の減少の時期など、知能的factorなどに多少問題をもつ被験児のプロトコルに幾分それらの影響があらわれている。

食物嗜好の年齢的变化

日本大学 ○安藤 公平 岡本 健

代表的な食物30種について、その嗜好が年齢的にどう変るかを調べた。調査対象は60歳以上の男192名、女218名、面接法で各食物に対する好悪を、5段階(1.非常にきらい 2.きらい 3.普通 4.好き 5.非常に好き)のいずれかに答えさせた。年齢時期については、児童期(14才以下)青年期(15~24)成人期として(25~39)(40~49)(50~59)(60以上)に区分して、各時期における嗜好の程度を、それぞれ回想的に答えさせた。

各時期を通じて好まれる食物は、男では(うなぎ、さしみ、もち、とろろ、すきやき、すし、てんぷら、そば、みそ汁)女では(すし、もち、さしみ、しるこ、卵やき、みそ汁、とろろ、緑茶)などである。きらいな食物に属するものは、男では(ふきのとう、なつとう、うめぼし、かぼちや、バター)女では(ふきのとう、なつとう、牛乳、バター、うなぎ、うめぼし)などである。全般的には食物嗜好の年齢的变化は、それ程著しくはないが、特徴のある食物を拾い出すと、年齢を加えるに従って好む傾向が増すものに(にんじん、緑茶、みそ汁、とうふ、とろろ、ほうれんそう)があり、好む程度が下降するものに(もち、しるこ、卵やき、たくあん、せんべい)などがある。

各食物に対する好悪の平均点から、食物嗜好の順位をつけて、男女間の相関を列位差法で求めると、0.69が得られた。男女差の著しいものとしては、うなぎのかぼやき(男4.2, 女3.1)しるこ(男3.7, 女4.0)卵やき(男3.7, 女4.0)カツレツ(男3.9, 女3.3)牛乳(男3.4, 女2.9)てんぷら(男4.0, 女3.5)すし(男4.0, 女4.4)

などが挙げられる。

各個人の各食物に対する嗜好の程度は、特殊の場合を除き、年齢的に著しい変化はない。

すなわち、食物嗜好は児童期から老年期に至る一生を通じて、恒常性が高いといえる。

言語発達の指標としての接続助詞について

福島大学 田口 孝之

目的 談話文の発達を学童期にとらえる研究は従来あまり行なわれていない。もともと談話文の構造は形態的に見て簡単なものが多い。仮りに、単文・複文に分類する普通的方式に従っても様相の一半は知り得る。だが、複文の質を問ひ、その接続助詞を調べることは更に重要であり、ここに言語発達の指標たるものを見出し得ると考える。

方法 集取した談話文のうち、複文を二つの系列から考察する。第1系列では①単なる前置き、②前提条件、③心然条件、④仮定条件、⑤並列条件、⑥格によるもの、⑦連体修飾の形をとるもの、⑧いわゆる総主のあるもの、の8種とする。第2系列では、上記①～⑤を更にその接続の様様によって(+) 継時、(0) 同時、(-) 反対の3種に分ける。両系列は互に交又すべきものであって、通説のように同列に置くべきではない、と考える。故に分類は形式的には $5 \times 3 + 3$ の18通りとなる。

このうち特に問題にしたいのは第1系列の①であり、かつ、その持つ意味である。また、ここで①だけを取上げる根拠は、この他がすべて各年令層の談話文に、ほぼ一様に、普く見受けられるからである。①の文例：2年の時、習ったんだけど、ずーっと早くするために。

(東京青柳小3年)

結果 1. ①は自由談話場面では小学3年生で初めて現われた。教室での学習時にも3年のに1例あつた。児童会での話文では4年生において複文の数29中10例あつた。

2. 使用される助詞は「が」か「けれど」であって、内的関連がないかまたは薄い二件を結合、一文に統一する役割を果すと認めらる。そうした精神発達に対応するものであろう。

3. ①の意に使われる上記の助詞の有無を指標に採れば、小学3～4年は言語発達上重要な時期となしうる。同じ傾向は充填法によるテスト形式をとった場合にも見出し得た。

知的優秀児の特性に関する基礎研究第9報告

東京家政大学 森 重敏
○東京港区立三光小 外村 近

1. 目的 知的優秀児の特性に関する基礎研究の一環として、知的優秀児IQ(WISC)BO以上の児童25名に、普通児25名を比較グループとして、それらの児童の観察文における文段の有無・字数と漢字の使用度・文章の形態・感想の有無・比較する態度等より、その特色をあきらかにしようとした。

2. 方法 4年前より引続き調査対象としている児童(生徒)に、9月7日午後1時より、平均1時間にとり、「朝顔」という題で作文を自由記述で書かせた結果を分析検討した。

3. 結果 ① 文段の有無ではNグループの皆無に対して、Gグループの約64%が段落わけをしていた。これはNグループが論理性や総合性に優れているからではないかと思われる。

② 字数と漢字の使用数ではNグループの平均字数約316字に対して、Gグループは約333字であった。しかし、Gグループは段落がないので、段落をわけたら、更に増加すると考えられる。従ってNとGとの差はあまり考えられないが、漢字の使用度では約13%対約24%でその差が見られた。

③ 文章中に擬人法を使用したり、感想を記述する点でもGグループが優れていた。

④ 比較する能力では、Nグループの約33%に対して、Gグループは約90%が比較対照して考察を進めていた。これは事物を多角的・多様的に思考しようとする態度のあらわれではないかと思う。

以上の結果から、作文を通して、優秀児の特性の手がかりが得られたように思う。

4. 今後の課題 この手がかりをもとに、更に文章構成法やTATによって、検討を続けたい。

青年期における自殺未遂の事例研究

—書簡を資料として—

東北大学 ○針生 亨 北村 晴朗

本報告は心中未遂の一事例についてその心中未遂行為を中心とした前後4年間にわたる本人自身の内面生活を従断的に追跡し、心理学的立場からの理解を試みたものである。I) 表面的に現れた事実の概要。中国地方の某国立大学教養学部在学的女子学生。21才。(事実a) 昭

和25～26年頃までは平凡な学生であった。(事実b)昭和27年8月、自宅に遺書を残し同年の男子学生と家出、二人で死場所を求め放心状態でアルプス山中を徘徊中捜索隊に保護された。(事実c)その後東京へ移り某宗教系大学に転学、相手の男性と手を切り安定している。

Ⅱ)資料の概要。a)残された手紙。昭和25年8月から昭和28年11月にわたるもので全部で42通。b)親友Fの報告。c)ポートレート(心中前、後について数葉)

Ⅲ)資料の解釈。(Ⅰ)で示した表面的に現れた三つの事実を結びつける心的ルートの追求について先ず心理学的立場からの接近を試みた。その結果、心中行為を中心とした当人の内面生活の展開を理解するには時期的に4つの心理学的構造の変容が区分さるべきことがわかった。即ち、第Ⅰ期。不安定な自我構造をもってはいるが、生育家庭の枠内に於いて心的バランスを保持している時期。第Ⅱ期。特定男性の出現によって彼を受け入れたいが受け入れるべきでないという葛藤の時期。第Ⅲ期。地理的要因(アルプス山中)によるバランスの喪失。非現実水準への逃避→心中行為。第Ⅳ期。未遂後、強固の自我の確立による安定回復期。

以上、三つの事実間の心的つながりを安定→不安定→安定の経過としてみるならばそれは弱体自我状態での均衡による安定からその喪失を経て確固たる自我の確立という人格の再体制化による安定回復の過程であることがわかる。

青年の宗教的関心と行為との関係

国士館大学 高嶋 正士

本研究は昨年度の継続であって、前回は特定地域を選定し、対象を農村青年に限定したが、今回は都内K大学及び女子学生(男N=197,女N=141)につき、同様な方法で、かれらの宗教心の有無および行為(態度)の傾向を調査した。<調査は1961年5月実施、回収率96%>

この調査は20項の質問紙からなる(うち宗教心に関するもの7項、その行為に関するもの13項)。

結果 前回と比較し顕著な差は、予想以上に宗教心のあることが認められた。(前回は宗教的関心よりは、行為にあった)。いまその主な項目について述べる。①宗教の必要性。男女とも70%以上絶対もしくはある程度の必要性を認め、否定者は5%以下であった。②神仏観。仏について“信ずる人の心の中に存在する”という内在的観心(男54%,女67%)が多く、神について“存在しないが人が想像して作ったもの”というみかた(男48.5%,女44%)が第一位をしめ、“わからない”とするもの仏

よりも神に多かったこと、これは日本の宗教の特色ともみられる。③地獄極楽観“人の心の中にある”(男43.4%,女50%)が第一位、否定および不明とするもの(男39.6%,女33.5%)若干みられた。これはその人の宗教意識の深さを示すとみてよからう。④家の宗教。知っているもの(男53%,女72.3%)が多く、女子に顕著。⑤自分の病気などの場合、死を考えるかについて、否定的回答(男47.8%,女30%)がやや多く、病気の種類によって思うもの五割強をしめている。⑥宗教行事への参加は、男子より女子に不参加的態度が多くみられはしたが、一般に行事内容によって態度を決定するものが多い。しかし部分的な、寺院、教会などの宗教行事への不参加的態度が強い。このことは今後経営者側の一考を要す点である。

この調査から、傾向として宗教的関心があっても行為を十分に示さない場合もある。

人 格 ・ 行 動

夫婦の性格的調和性に関する経験的仮説 II

——社会心理学的側面——仮説 I, II

東京家庭裁判所 日上 泰輔

東京家裁で古谷調査官が案出し私も改訂案作成に関与した夫婦関係役割テストは——

子への愛情、趣味理解、自分の親を大切に、男女関係清潔、食物の好み一致、計画的な生活、いたわり、教育方針支持、性生活調和、話し合い、親戚つき合い、政治的関心の12項目が夫婦共通の期待で、夫用；仕事理解家計のやりくり、家事熱心、身躰み、祖先祭祀、整理整頓、差出がましくない、経済的協力、服従、社交性と、妻用；家事理解、経済的能力、仕事熱心、暴力を振わぬ、酒を飲まぬ、家庭第一、家計一任、家族指導、賭博をしない、交際認許、家事分担、家事一任等12項目が前出12項目に加わったものである。

本テストは配偶者に関する一般的期待を尋ねる第一部、現実の配偶者の姿を批判する第二部、自己の役割認知の第三部から成る。

いま期待を分母にとり期待外れを分子にとり100を乗ずると期待外れ指数が算出される。相手が完全に期待通りの役割を果している場合は指数は0、完全に期待外れの場合は指数100となる。指数0から100の間に分布する。

解決	指数				計
	一方が ~70	69~31	一方が 30~		
離 婚・別 居	10	5	8 註2	23	
調 整・円 満	3 註1	4	6	13	
進 行 中		3	8	11	
計	13	12	22	47	

東京家裁での夫婦事件で役割テストを実施した47例は次の通り——

註1 —この3例は総てあきらめたから調整でき、註2 —この8例中相手が不貞3例、性格的に期待外れであったもの5例で離婚になった。

仮説 I. 一方の期待外れ指数が70以上の夫婦は不適応を来し易い。然しあきらめて要求水準を下げれば調整できるケースもある。

仮説 II. 一方の期待外れ指数が30以下の夫婦は適応し得る。然し不貞や性格面での期待外れが大である場合は、

いかに役割面で期待外れが小さくても、破局に至るケースもある。

創造性に関する研究

——臨床活動と宗教的実践について——

東洋大学 恩田 彰

心理療法における人格の再形成または宗教的実践に見られる人間形成は、何れも創造活動として考えることができる。両者は人間の創造性を養うという点で一致している。外国ではロージャーズ、フロム、マズロー、ムスタカスやケルマンなどが臨床家の立場から禅に関心を持ち、創造性の究明を行っている。

日本では佐久間鼎、佐藤幸治は禅と思考と人格との関係から、宮本美沙子は禅と遊戯療法との関係から、それぞれ創造性の問題を研究している。ここでは創造的態度の面から、創造性について考察する。

(1)現実の直視 創造的に生活することができるためには自然や人間に対するゆがんだ見方をすてて、現実を正視することが大切である。(2)現実的反応 現実にある対象に対して自分自身にあるすべての力をもって反応することである。そのさい自己に対する対象は、対象たることをやめて、自己はその対象と一つになってしまうのである。(3)探求的傾向 自己の本性を究明していくという点で、禅と心理療法との間に一致点を見出すことができる。(4)精神の集中 真剣に仕事にとりくむということは、ひとつのことに精神を集中してやるということである。(5)自己の経験 創造的態度の一つとして、自分自身の経験から考え、感ずるということが大切である。創造活動においては自我関与の度が強いわけである。(6)心理的自由 フロムによれば、心理的自由は自己自身から解放されることである。(7)可能性の発見と実己実現 創造活動を行うことによって、自己の中に可能性が見出される。心理療法は、クライアントが自己の可能性を見出し、自己実現を行えるように援助する活動である。これに対して禅は坐禅を通して、自己の本性を見出し、これを日常生活に生かし、真実の人間になるための実践である。

精神統一による心理生理的变化について

防衛大学校 大谷 宗司

我が国古来の神道で用いられていると言はれる“鎮魂”の修業について体験した心理的变化及び、自律神経緊張状態測定法のうち若干のものによる結果を報告する。

本方法の特徴は、受身の態度を被験者に持たせると同

時に、自動運動（筋肉的）を誘発させ、之を媒介として complex を解消すると言えるようである。

この方法はそれに従うことに非常に大きな抵抗が伴い、之を克服することによって自動運動が活潑となり、心理的な変化も順調に行われる如くである。この抵抗の現れ及びその克服の過程は、被験者の motivation の相異により変ると思われるが、特に第1回、或は第3回目頃に危機的な感じを深く経験するものである。

この第一の抵抗が克服されると、爾後、小抵抗を幾つか経験するが、その間積極的に参加するという態度が現れ、緊張の軽減、心の平静なやすらぎが経験されるに至る。

生理的測定は、各修行の前後に行ったが、手掌電気抵抗の増大、最大血圧の低下、最小血圧の上昇、心胸間隔の増大舌下温度の低下が見られた。これらの変化は大略方向は一定であるが、その変化量は微量である。

Autogen Training の進め方に関する研究

防衛庁技研	林 茂男
東京教育大学	高橋 良幸
〃	成瀬 悟策
〃	長谷川浩一
河野教育研究所	河野 良和

J. H. Schultz の考案した Autogenes Traing を、Kretschmer の方法、禪、ヨガなどを参照して臨床の利用をも考慮に入れながら我国で適用できるよう検討し、つぎのような試案を得たので発表する。

準備段階

静かで着ける場所を選び、一定の姿勢（安楽椅子、考える人型、仰臥、正座、結跏趺座、半跏趺座）をとらせ、眼を閉眼、半眼、開眼のいずれかにさせる。

標準練習

まず、安静感「気持が（とても）落ち着いている」および重い感じ「右（左）腕が（とても）重たい」の練習をおこない、これが実現したら順次、温かい感じ「右（左）腕が（とても）温かい」、心臓調整「心臓は（とても）静かにうっている」、呼吸調整「（とても）楽に呼吸をしている」、腹部「胃のあたりが温かい」、額が冷い感じ「額が冷い」の各練習をおこなう。

黙想練習

標準練習完成後、色彩心像視（個人色および特定色）、事物心像視（具体物、抽象物）、場面・情動経験、人物心像視、自己観照の5段階を黙想練習として順次おこなう。

特殊練習

臨床的利用の際は、補加的練習として器官調整法と自己鍛錬法の二つの練習をおこなう。

その他

練習の終了は体肢の屈伸、深呼吸、開眼の順でおこなう。練習回数は日に3回、1回あたり3度とする。また訓練者によるコントロールは週1回とする。

Autogene Training 練習過程の研究

I. 一般的考察

東京教育大学	高橋 良幸
〃	成瀬 悟策
〃	長谷川浩一
河野教育研究所	河野 良和
防衛庁技研	林 茂男

練習中にみられる反応を中心に、主として標準練習および黙想練習の練習過程を検討する。

標準練習

1. 重い感じの練習：右腕が注意の中心になるよう、右腕に留意させながら、さりげない態度で“右腕が重い”の訓練公式に受動的注意集中をさせるようにすると、最初の練習で約60%の練習者が右腕に重い感じを経験できる。1週間から10日位の練習で右腕以外の四肢にも重い感じが汎化するが、両腕・両脚に重い感じが汎化するまでには3～6週間かかる。

2. 温い感じの練習：比較的、練習は楽。両腕・両脚に温い感じがあらわれるまでには4～8週間の練習が必要。

3. 心臓調整の練習：心臓への留意がなかなかできず、練習もかなり困難。2～4週間で心臓率変化の練習に入る。

4. 呼吸調整の練習：練習は容易だが、2～3週間継続。汎化はみられない。

5. 腹部の練習：1～4週間で温い感じがあらわれるのがふつう。太陽神経叢への留意はむずかしい。

6. 額の冷い感じの練習：1～2週間で、額の冷い感じが出現。

黙想練習

1. 色彩心像視：2～8週間の練習で自発色が、さらに2～3週間の練習で特定色を視られるようになる。

2. 事物心像視：数週間の練習で具体物が視られ、さらに2～6週間の練習で、カタルシスの効果をもたらす抽象心像を視られるようになる。

以下自己観照的な心像連想をつづける。

自律訓練法の練習過程の研究 II 問題点と対策

東京教育大学 成瀬 悟策

実際に自律訓練法の練習をはじめてみると、その過程の進捗を妨げるような要因がいろいろ起こってくる。これは、標準練習・黙想練習・特殊練習の各々に起こるが、また、各練習のそれぞれの段階においてもいろいろ異って現われる。ここでは、約百例についてそれらをまとめ、一般的な問題点を考察し、その対策として有効であったものを述べてみる。

まず、練習に対する動機づけが重要な問題点で、練習開始、持続、新段階への移行などの諸時点でその工夫がいろいろある。

つぎにはいかにして弛緩の状態を得るかで、これには生理的・心理的両面からの弛緩が問題になる。弛緩との関連においてであるが、受動的注意集中の仕方を会得させねばならない、能動的でない何げない態度で公式（暗示）に注意することができるようになって、はじめて、公式の暗示暗示反応が起こりうると思われる。この暗示反応に成功することにより、受動的注意集中はいっそうでき易くなる。この受動的注意集中が恒常的に、安定してできるようになると、漸次、催眠に似たトランスともいべき状態ができてくる。自律訓練法は、自己暗示を利用しながら、終局的には、こうしたトランスを起こすことを目的とした技法だといいたい。

公式をさらに有効に実現させるには、公式の暗示身体部位への留意が必要である。その他には、練習から起こる副次効果による好影響の利用、悪影響の除去が問題になる。

それらの諸点に対して、規則的練習、人間関係、分割練習、緊張＝弛緩の繰返し、睡気利用、催眠利用、イメージ利用、短時間練習、軽（弱）練習などの効果が考察されねばならない。

しかし、まだ、これらの効果について、充分には資料が得られていないので、今後の詳しい研究が必要である。

Autogene Training 臨床的適用の研究

I 一般的考察

河野教育研究所 河野 良和

本法によりいろいろな臨床効果が期待されるが、臨床結果から考察を行う。

標準法：a) 弛緩。訓練により緊張解消が行われる。その結果、過度緊張に関係する訴え、例えば、緊張その

もの、不眠などが、訓練段階の初期から、容易に問題解消されることが多い。b) 受動的注意集中。自己の持つ問題点に、受身の態度をとることが、問題解消に有効らしい。対人恐怖、赤面恐怖などについての臨床効果から推測される。c) 自律機能の開発。心理的な問題のみに止まらず、内臓諸器官に関連した訴えの解消に役立つことが、実際に観察された。d) さり気ない態度での練習、b) と同様、自己の持つ問題に対し、このような態度の確立が、有効らしい。強迫神経症・頭痛などでの結果は、思わしくなかつたが、さり気ない態度の確立が、可能になるならば、好転が著しいことを推測することができる。これは、この二つの問題がさり気ない態度をとるには、余りにも、練習者が苦しい状態にあることが考えられるからである。e) 生理的効果。身体部位への注意集中による効果、例えば赤面癖、内臓関係の問題での結果から器官統制の効果を認めることができる。

黙想練習：Trance での心像を媒体にした、洞察の容易さと、その効果を認めることができる。

特殊練習：a) 器官法。標準法 e の効果を強めることからの効果として考えられる。b) 自己鍛錬法：心理的な面での自己統制、鍛錬を可能にする効果と考えられる。

以上の各面からの効果が臨床的に適用した場合に認められたので、その結果をまとめて報告した。

Autogene Training 臨床的適用の研究 II

事例報告

東京教育大学 成瀬 悟策

高橋 良幸

○長谷川浩一

防衛庁技研 林 茂男

河野教育研究所 河野 良和

Autogene Training (自律訓練法) の実際の適用の事例を報告する。

事例 I > T (大学院学生・男・30才・正常者)。

訓練姿勢 仰臥 (自宅) 安楽椅子 (相談所)。

眼 半眼及開眼 (89日目以後)。

訓練開始日 1961年5月15日。

練習経過 四肢の重い感じ：右腕・左腕・膝から下及腰・両脚の順で1～4日の間で重い感じを経験した。四肢の温い感じ：右腕・左腕・右脚・左脚の順で練習開始後(5月15日から数えて)9～10日目で出現。心臓鼓動調整：四日目に重い感じの練習中に早くも鼓動が感じられていたが17日目、はっきりとゆっくりするのが感じられた。呼吸調整：20日目。腹部の温い感じ：17日目以後、四肢の温い感じの練習をつづけている間にその温い感じ

が他の身体部位にまで汎化し、24日目には背中・腰に及び、又同時に心臓の練習もよりスムーズになつていた。37日目からこの練習に入り、3日後に温い感じが出現し、日を追ってその温い感じが全身に波及して行く。60日目前後には頸から下の全身に温い感が及び、同時に自然に顔にわずかながら冷い感じがあらわれた。額の冷い感じ：88日目から開眼でこの練習を始めた。開眼条件でもこの段階までの練習効果の出現し方に変化はない。順調に進み、約100日で標準練習の全過程を習得した。

訓練の効果 Tは元来 Client ではないが、四肢の温い感じの練習の段階から、夜安眠できるようになり、又腹部の練習に入ってから不安傾向が全くなり、心身ともに vitality が高まった。

事例 2 > K (大学生・男19才・対人恐怖・人前で極度に緊張、背部の筋肉が痙攣する)

訓練姿勢 仰臥。眼 閉眼。訓練開始日 1661年6月27日。

練習経過 1日目～7日目まで右腕の重い感じを練習し、右手首に重い感じを得たのみであったが、症状が消去した。4ヶ月を経た後でも問題は全然ない。

意識的統御機能低下時の行動の変容 (IV)

(1) 再び日本酒飲用時のロールシャツハ反応について (a)

福島医大 ○菊池 哲彦
 東北大学 北村 晴朗 佐藤 功
 大山 正博

第25回日本心理学会大会で報告された日本酒飲用時のロールシャツハ反応を各カテゴリーに分類した際に見られた変化は、主として「主体的自我」の機能減弱等の人格機能の変化の反映であると理解された。アルコール飲用条件と統制条件の順序を逆にした今回の実験でもそれらの結果を更に確かめ得、かつ若干の新知見を得たので報告する。

手続 日本酒飲用時のロールシャツハテストをはじめに行い、2ヶ月後に統制テストを行った。テスト時にP・G・Rの同時記録を行った。飲酒量平均 504cc、前回よりはるかに euphoric な感情状態を観察した。Ss は東北大学文学部学生のうち心理学専攻でない13名。以上が前回の手続と異なる主要な点である。

結果 統制群ではW%小、D%大、M、M%小、FM、Fc、CF、などは有意差なく、F、FC、FC%大。FC-(CF+C)は実験群で負、統制条件で正、 $\frac{VIII+IX+X}{R} \times 100$ は実験群で小に傾く。これらは日本酒が正しい外的刺激

受容を難しくし、内発的刺激とその展開が連想の主調となることを示していると考えられた。

D%は始めに実験条件を行った群の統制条件で最大(これまでの群間で)となる。FCは同様統制条件で最大となるが、始めに統制条件を経験した二回目の統制条件で最大となる。又、アルコールで小となるが、統制条件を始めに経験した群では、はじめからアルコール条件を経験する群ほど小とならない。これらは反覆の水路づけの一例である。上述の変化が、主体的自我の減弱内発的刺激的の優越などの機能的変化から説明された。またかかる反応形式には「投影性」が少く、投影は反応内容により多く参与すること及びその分析の具体例が連想活動の収斂性を示唆することについて検討された。

意識的統御機能低下時の行動の変容 (IV)

(2) 再び日本酒飲用時のロールシャツハ反応について (b)

東北大学 ○佐藤 功 北村 晴朗
 福島医大 菊池 哲彦
 東北大学 大山 正博

連想の収斂性を手掛りとする「主題分析」の事例を報告しつつ、日本酒飲用時におけるロールシャツハ反応の特性とその時の人格力動の状態像との連関が考察された。同時に報告(a)でふれられた日本酒飲用時の人格像がやや具体的に述べられた日本酒飲用時に記録されたG・S・Rの状態はT・A・T施行時のそれと酷似し、内発刺激及びその発展が、この際G・S・Rのの特徴を決めていると理解された。アルコール条件下では、例えばT₁/Rが小さいことによっても、いわゆる抑制が小さいことが知られるが、一方、統制条件における山数のG・S・Rの型は内発的processがその場合に少いか抑えられていることを示すと理解された。

反応の展開の具体例から、連想活動は、プロットのかなかに具体例から、連想活動は、プロットのかなかに具体的対象を認めること、つづいてプロットの中に自己自身をみとめること、プロットからはなれて自己自身と認知された対象との関係、それへの興味、関心、態度、評価、それについての回想などへと展開する経過が次第にはじめの段階を省略し、直接自己自身が表現されるようになることが示された。同時に、そこに表現される自己は、現在までの自己のすべてではなく、その中の一つであつて、酩酊の進行にともなつて、自己表現に直接性が出てくる一方、表現される自己はその一つのものへと集中してゆき、酩酊から一定の水準に達すると、連想はもはやその収斂点の周辺に低迷するだけで、他の領域への展開がみられない。このことは、精神活動そのものが、外界

からの刺激受容に困難になり、専ら内界でのみ営まれるようになって、最後に外界と無関係になってゆく経過と考えられた。この経過について理論的補足が行われた。

意識的統御機能低下時の行動の変容 (IV)

アルコール飲用時の重複作業的選択反応
及び速度見越の成績

東北大学 ○長塚康弘 北村晴朗
丸山欣哉

重複作業的選択反応では多様な刺激に対する選択反応動作と同時に、更に二つの課題をも並行して行わねばならず、速度見越では速度の正確な認知とそれを表現する動作反応との協応が要求される*。alcohol が意識的統御機能を低下させ、知覚系運動系両機能間の不整合を生ぜしめる結果、両実験での成績は変化（前者では反応時間の遅延、動揺度と誤反応数の増加、後者では評定時間の短縮化、動揺度の増加）するものと予想される。

本実験は前報告者の Rorschach と同時に行われた。S₁ は東北大生で飲酒群13名（見越実験では後述の様な2系列に各6名）統制群13名（同様に各6名）であった。

反応実験では、飲酒群での反応時間の遅延（飲酒群：前値平均 824.0ms→後値平均851.7ms で +3.36%；統制群 771.0ms→726.8ms で -5.73%の変化。両群の差は $P < .05$ で有意）。動揺度の増加（飲酒群17.8%→21.8% で +22.5%；統制群21.2%→18.2% で -14.4%の変化。 $P < .01$ ）。同時作業での誤りが減少しない事（飲酒群3.2個→3.0個で -7%；統制群3.2個→1.6個で -50.0%の変化。 $P < .05$ ）が見られた。予想された誤反応の増加は見られなかった。以上は飲酒後も刺激を正確に認知し反応せんとする構えはとられるが、動作行動にそれが適切に表現されなかった結果とみられる。

速度見越では key 押しによる動作反応群と key は使わず実験者によつて呈示された速度を自分の内的規準に照らして速い、遅い等という口答反応をする群との二系列を行つたが、前者での飲用者では僅かに評定時間が短くなつた（飲酒群 2546ms→2181ms で -14.3%；統制群 2028ms→2062ms で +1.7% の変化。 $P < .05$ ）。後者では差はない。動揺度では何れも異りがない。以上から飲酒は速度評定の内的規準には影響を及ぼさないが、動作を伴う判断には影響をもつといえる。

* 両実験の詳細については日本心理学会25回大会論文集486~487頁を参照されたい。

時間評価と疲労・興奮 (2)

—時間評価に及ぼす作業の影響—

玉川大学 須藤 泰男

目的：さきに日本心理学会25回大会で発表したように、時間評価と2点閾及びフリッカー値との間に、かなりの相関が認められた。今回は、実際に一定の作業をやらせて2点閾と同時に時間評価の変動をしらべ、両者の間に同様な対応関係がみられるかを検討する。

方法：作業の前後や中間で、時間評価と2点閾の測定を行い、更に作業後15分おきに1~2回、同様な測定を行つて、その推移を follow up する。時間評価及2点閾測定の方法は前回と同じ（25回大会論文集 p.55参照）。

一方、一連の測定によって得られた時間評価の変動（実験系列）については、それが作業の影響によるものであるかどうかをみるために、各 Vp が、その作業を行わないときの同時刻の時間評価と比較する。それには、作業当日の前後数日間に於ける同時刻の時間評価の平均（対照系列）との差をみる。

Vp は成人2、大学生1計3名。作業の種類は、クレペリン加算、知能検査、打叩、読書その他。作業の連続は最低5分から最長30分まで。

結果：時間評価と2点閾の変動は、かなり対応している。即ち、試みに一定の時間々隔をへだてた2回の測定値の変動が、一方は上昇（下降）するのに、他方は下降（上昇）するというように、時間評価と2点閾の推移がくいちがう場合は全体の20.4%にすぎない。

しかし、実験、対照両系列の差を t 検定すると、有意差がみられる場合は全体の半数に満たないが、その理由として、作業時間が比較的短かく、また作業内容も比較的軽いものが含まれているため、有意な疲労や興奮が起りにくい場合があること、また標本の数（ここでは時間評価の測定回数）が少ないこと、などが考えられる。

スポーツ適性のためのMMP I 改訂試案

都立両国高等学校 飯田 穎男
日本大学 松井 三雄
日本大学 杉本 功介

「スポーツ適性検査」として応用するためMMP I を改訂し、それを各部運動選手に実施し原版と改訂版とを比較検討した結果を報告する。

多くの被験者に対しMMP I を実施してきたが、(1) 550項目では検査時間が長く実施上の困難があり、疲労のため不正確になりやすい。

(2) 疑問点が非常に高点である。

疑問点が高点であるということは、他のスケールすべてが無効であることを示す。

日本で用いられているMMP Iは原版の翻訳版であつて、日本人の風俗、習慣やその他と可成り差異があつて応答理解に無理な点があり、そのため疑問点が高点を示してくるのではない。

(3) この検査は各人の身体的状態から各人の道徳的社会的態度にまでわたる広範な内容をもっているがスポーツ適性検査として応用して見たい。

手 続 1. 大学運動部に所属している日本の選手をふくむ71名を選び、対象群として運動部に所属していない学生50名を選んだ。

2. 疑問点の高点の項目を始めに削除した。

3. 各スケールの得点が原版の得点と対応できるように110項目を選択した。

結 果 1. 運動部の原版と改訂版との相関、一般のそれとの相関は14項目のスケールの平均運動部0.72、一般0.75であった。Ma スケールとLスケールが低く、今後検討したい。

2. 疑問点は原版より改訂版の方が低く、満足した結果が得られた。

今後運動部を類型別にして十分検討して行きたい。

スポーツマンのパーソナリティ特性に関する研究

愛知学芸大学 末利 博

研究の概要。オールポートの Psychograph にもとづいてパーソナリティの22項目にわたる7段階評定票を作成し、これによって高校3年生の男子174人(SG…中高校を通じてスポーツを組織的に練習しているもの69人、NSG…中高校を通じてスポーツ練習の経験のないものとこれに準じるもの105人)にパーソナリティの現実自己評定、理想自己評定、3人の友人による友人評定を実施してSGとNSGの差異を究明した。なおこの評定票の信頼性を検討するために前記被験者の内43人(SG21人、NSG22人)に4ヶ月間隔において再テストを行った。研究の結果の主なもの次は次のようである。

(1) 評定票の信頼係数は0.5~0.6であり、2回の評定票の一致度では現実自己評定、友人評定においてSGがNSGより有意に高いことを示した。

(2) 全被験者の各種評定結果をSGとNSGについて比較すれば、友人評定では3人の友人評定票の一致度がS

Gにおいて有意に高いことを示した。理想自己評定と現実自己評定の差(各被験者の22評定項目における理想自己評定と現実自己評定の差を求めプラス値とマイナス値を別々に合計してグループ毎にこの合計点の平均を求め、更にグループ毎にプラス平均とマイナス平均の絶対値の和と差を求めて考察の対象とした。絶対値和は理想自己と現実自己の偏差を示し、絶対値差は理想自己が現実自己より積極方向にはなれている程度を示すことになる)についてみれば、SGはNSGよりも絶対値和と差において有意に小さいことを示した。これはSGがNSGよりも理想自己と現実自己との人格像の偏差が小さいことを示しており、理想自己が現実自己よりも余り大きく積極方向にずれていないことを示しているものとみられる。この原因は生来的なものかスポーツ練習による習得的なものか明らかでないが、スポーツ練習のこの面への影きょうを暗示するものではないであろうか。

防衛大学校における矢田部ゴルフオード 性格検査(総括)

防衛大学校 近喰 秀大
日本大学 大村 政男

1958年6月、防衛大学校の精神衛生的管理の資料をうるために、学生群に対し矢田部ゴルフオード性格検査を実施した。その結果は主として防衛衛生学会においてなん回かにわたって発表してきたが、一般の学会では公表したことがないので、ここではその主要点を総括して報告することにしたい。

I 3群12特性における代表的傾向

情緒性、社会適応性、向性の3群に属する12特性の平均値と標準偏差は次のとおりである。なお被験者数は1年生464名、2年生440名、3年生400名、4年生387名、総計1,691名である。

抑うつ性10.12 (5.61), 回帰性9.01 (5.04), 劣等感5.82 (5.15), 神経質8.41 (5.20)。

客観性欠如7.29 (3.97), 協調性欠如6.56 (4.26), 攻撃性10.92 (4.44)。

活動性11.43 (5.13), 衝動性9.91 (5.02), 思索的傾向10.13 (4.79), 支配性欠如10.55 (5.48), 社会的内向性10.33 (4.95)。

II 不適応者の分類

情緒性と社会適応性の二つの尺度において、標準点がそれぞれ4あるいは5をとった特性が二つ以上あるもの、向性の尺度において内向への脱逸を示す特性が三つ以上あるもの——を不適応者とした。その内訳は次のとおりである。

神経症的パーソナリティ (10), 環境性的問題者 (21), 内閉的パーソナリティ (25), 情緒不安定者 (76), 社会不適応者 (52), 内向的脱逸者 (81), これらのうち重複しているものを整理すると, いちおう問題者と考えられるものは55名 (3.3%) に過ぎない。この結果は実際の不適応者の出現によって十分に裏付けされた。

指紋による性格の診断

中央大学 赤塚 泰三

目的と方法 従来指紋による性格の診断はできないといわれてきたが, その真偽をたしかめようとして, 牛島式簡易性格検査 (U), 淡路式向性検査 (A), 田研式診断性向性検査 (T), 精神作業検査及び自己の性格評価を行った結果と指紋型とを比較してみた。

被験者は中央大学生 (男), 昭和短大学生 (女) と家族。調査期間は昭和31年4月から昭和36年9月まで。

結果の概要 (1)△型 (蹄状紋系統) (男148, 女873), △○型 (蹄状紋と渦状紋同数) (男25, 女132), ○型 (渦状紋系統) (男102, 女587) とU・A・Tとの関係

	指紋型	平均値	段階
U式	△ {男	9.98	0
		11.46	0
	△○ {男	11.77	0
		15.24	-1
○ {男	18.74	-2	
	16.28	-1	
A式	△ {男	102.8	0
		107.9	0
	△○ {男	93.8	-1
		103.3	0
	○ {男	78.5	-1
		80.9	-1
T式	△ {男	58.43	+1
		55.65	+1
	△○ {男	45.73	0
		52.69	0
	○ {男	38.64	-1
		42.30	-1

△型は安定性が最も高く, 外向性も高いのに反し, ○型は最も不安定性に傾き, 最も内向的である。この傾向は男女ほぼ同様である。なお一卵性双生児 (女) の結果によっても, これときわめて似た傾向を示すことも判明した。

(2) 指紋型と精神作業との関係 (女)

指紋型 人数 疑問型 (F) 異常型 (P)

△	130人	27人~28.5%	17人~13.1%
△○	104	16 ~15.4	6 ~ 5.5
○	59	5 ~ 8.5	2 ~ 3.4

△型はFもPも最も高い出現率を示すのに反し, ○型は最も少ない。△型の方が作業が乱れやすいことになる。

(3) 指紋型と自己の性格評価との関係 (女)

主傾向をみると, △型はのんき (76.6%), 内向的 (73.3%), 決心がすぐつく (63.3%), 陽気 (56.7%), 怒りっぽくない (56.6%), 感情的 (43.3%) であるのに対し, ○型は内向的 (91.7%, △型より大), 決心がつかない (83.3%), 怒りっぽくない (58.2%), 陽気でない (50.0%), 感情的 (50.0%), のんき (41.7%) となつて対照的である。

結び 指紋型と性格とは有意の関係が認められ, 診断も可能と見られる。少なくとも△型は意志的・外向的な特徴を, ○型は感情的・内向的な特徴を形成する基本型と推定することができる。

攻撃性に関する研究 (3)

——絵画攻撃性検査の試み・その2

日本大学 花沢 成一

〔目的〕 応心27回大会 (金沢) に発表したものの継続研究であるが, 今回は男子用の一部の図版を改訂し, また新たに女子用を試作し, さらに集団的施行法を工夫してみた。本研究はその妥当性の検討を目的とする。

〔方法〕 図版は男子用・女子用それぞれ7枚。被検査者には手札大の写真版にした検査図版と同時に各図版ごとに質問を設けた検査用紙を手渡して, 集団的に行なつた。図版ごとの質問とは, 例えば「このひとは今なにをしているところですか」「このひとは今なにを考えているのですか」のようなもので, これに対して自由に記述させた被検査者は中学2・3年男子118名, 女子111名。

結果の整理は, まず被検査者をあらかじめ攻撃性の高い群と低い群とに分類したのであるが, その方法は教師2名に記入を依頼した攻撃性評定用紙 (日心25回大会論文集参照) を用いて行なつた。また本検査における被検査者の反応は, 6段階の評定基準に従つて量化することを試みた。例えば, 「怒っている」は1点, 「けんかする」は3点のように。

〔結果〕 1) 議論を好み批判的という面で攻撃性の高い者と低い者との中央値はそれぞれ, 男子では7.5対3.6, 女子では3.8対2.3, 運動を好む面での攻撃性高低両群の中央値は男子5.5対3.3, 女子2.6対3.1, 立腹してふてくされる攻撃性両群では, 男6.2対3.8, 女3.3対2.7, 暴力

的攻撃性では、男7.0対3.8、女8.0対3.1という結果であった。2) これらの結果は、運動を好む面での女子の場合を除いて、いずれも攻撃的な者のほうが得点が高く、Uテストによる検定も有意であった。3) 女子よりも男子の得点のほうが高い。4) 全般に得点が低いこと、また非常に攻撃的な者でも本検査結果は低い場合などが見られることは、今後検討を続けたい。

~~~~~

### 人間モナドの素性相位規制に関する 一仮説の提出 (続)

京都大学 正村 史朗

#### 1. 問 題

我々は第23回日本心理学会、第27回日本応用心理学会、第2回日本教育心理学会等に於て「人間モナドの素性相位の規制」についての我々の仮説の検証結果について報告したが、今回は此の規制に関する原理的な考察をとりあげる。

#### 2. 人間存在及びその形質変異についての我々の基本的な立場

我々は生物を一つの超巨大高分子として捉え、これに“モナド”という名称を用いることにする。そして生物における門、綱、目、科、属、種……の変異を生物モナドにおける一種の異性体的変異と考える。更に、人間の個性の相違も亦人間モナドにおける相位の異性体的変異に基くものとする。

#### 3. 人間モナドの素性相位の規制

人間モナドの形質は、先づ第一に、それを構成する本質的素材、即ち、人間モナドに特有のDNA、RNA、蛋白質分子その他の各種生化学物質によって規定される。

更に、それはそのモナド成立期の各発達段階における諸環境によって規制される。

尚、モナドの成立期には量的増大の「生長」(growth)と質的变化の「発育」(development)の二面があり、その発育段階の「移行期」には環境の影響を強く受け易い。人間モナドにおける此の「移行期」の主要なものとしては、胞胚期からう胚期への移行期、器官形成期から胎児期へのそれ、新生期、初生児期、乳児期、特にその前半期、青年期があげられる。

又、ある形質形成には夫々特定の環境が特定の段階期に於て特に有効に作用する。

我々が人間モナドの素性相位規制についてとりあげたのは、人間モナドの成立期における最大の移行期といわれる新生期における世界環境の相位である。

#### きょうだいの組合せによるきょうだいの性格について

日本女子大 児玉 省 中田カヨ子  
○小坂 明美

日女子研究室ではさきに藤本、園部が兄的、姉的、弟的、妹的、性格を識別するために設定した25項目が識別力を持っていることを見出したが、本研究はこれを延し更に兄弟、姉妹、兄妹、姉弟の組合せを設定しその組合せによる性格差を検討した。対象都内中学校同一校に上述4組合せのきょうだいが通学しているもの且父母健在なもの204組にアンケートによる調査。項目は性格的関係25、きょうだい関係17、日常生活50、学校10、趣味8、希望8、評価26、計144、CR検定により5%以上の有意差のある項目の中から報告する。(1)父に似ているのは一兄、母に似ているのは姉ただし弟が答える兄。(2)おしゃべりなのは一弟妹。(3)出来ることでも人にしてもらうのは一弟妹。(4)常にきちんとしているのは一兄姉。(5)小遣いを早く使うのは一弟妹。(6)調子にのり易いのは一弟妹。(7)仕事を丁寧にするのは一兄姉。(8)物事を親に相談するのは一兄姉。(9)仕事を最後までするのは一兄姉。(10)外で遊んで騒ぐのは一弟妹。(11)人に親切にするのは一兄姉。(12)面白い事で人を笑わすのは一弟妹。(13)自制心指導性があるのは一兄姉。(14)負けず嫌いなのは、叱られても気にしないのは一弟妹。(15)誰と仲がよいか一兄姉、姉妹で性別的。(16)きょうだい喧嘩で父は中立、母は女性に味方。(17)ほめられた時喜ぶのは一兄姉、姉妹、妹姉、弟兄姉。(18)慰めてくれるのは一姉妹、弟兄姉姉、妹姉弟。(19)人を見習えと云われるのは一弟兄姉妹。(20)父に反抗したくなるのは一兄姉、姉妹。(21)母に反抗したくなるのは一姉兄弟妹。(22)父母がいない時のびのびするのは一兄弟姉妹。(23)淋しがるのは一姉妹。(24)母の好きな点についての一致度一姉妹兄弟。(25)父の嫌いな点についての不一致度一姉弟兄妹。(26)父のどんな点を見本にするかの不一致度一姉妹姉妹、姉弟兄弟。(27)母のどんな点を見本にするかの一致度一姉妹姉弟、不一致度は兄弟が最大。

~~~~~

性格の類型について(3)

—Sociometric choices と性格類型—

東京工業大学 稲山 貞登
坂元 昂
文京学園 原 勝一
東京教育大学 堀 洋道

人間同志の結びつきの型には似た者同志が相異なる者同志が考えられるが、それは日常よく言われることである。何をもって似ているとし、異っているとするかの基準についてはいろいろ考えられようが、我々はそれを性格に限ることにする。先の因子分析の結果よりSHN型とZEP型が存在することが認められたので、そのような立場から被験者を分類し、選択の仕方との関係を検討する。

手続としては、女子高校生3クラス(A, B, C)に東京工大の性格調査表(S, Z, E, P, H, Nの6つのカテゴリーより成る)を与え自己診断させた。一方、ソシオメトリック・チョイスを行った。

性格類型を記入したソシオグラムを見ると同じ性格の者が集まっている傾向が目につくが下位集団成員全部がSHNとかZEPというわけではなく、異った性格の者が混入していることが多い。そこで二人の被選択者の性格を調べてみると、少くとも一人は自分と同じ性格のものを選んだ者がSHNは42例中23例、ZEPは39例中27例、全類型では110例中54例あり、二人とも異った性格の者を選んだ者がそれぞれ19例、12例、そして56例であった。このことからZEPは自分と同じ性格の者を選び易いがSZE及び全体としては、同じ性格の者及び異なった性格のものを選ぶ傾向は相半ばしている。従って、一般には性格が似ているということが選択の決定的要因ではなく、どちらの結合を示すかは他の要因(例えば席が近い)によると思われる。ZEPが同じ性格の者を選びやすいのはその社交性、暖かさの故に選ばれ易いからである。このことは6つのカテゴリーのうちZの得点において選択地位の高いものが低いものより高いことからもうなづける。

性格の類型について(4)

東京工業大学 〇稲山 貞登
" 坂元 昂
文京学園 原 勝一
東京教育大学 堀 洋道

東京工業大学心理学研究室性格調査表は性格類型テストであり、この適用について報告する。これは、性格の型から、適応の状態を予想することができた例である。

女子中学3年生の1学級63名に対する集団テストの結果、顕著なN型(Nの点5以上でH, Pの点はこれに比して低い者)をmal-Nとして26名、これに準ずる者(Nの点は5以上であるが, H, Pの点も高い者)をmal-N'として6名指摘した。一方、この学級に適応性診断テスト(長島・金子書房)を行なったところ、個人適応、社会適応のいずれか、あるいは双方が20パーセント以下以下の者24名があり、その内、18名はmal-N, 3名はmal-N'として指摘した者であった。残りの3名は、いずれもN型ではあつたが、Nの点が3.5~4.5の間のため顕著なN型とは考えなかった。我々の指摘した者で、残りのmal-N 8名とmal-N' 3名については、適応性のパーセントを30とすると、8名までが含まれ、また成就指数(教研式の新)が-14, -13というunder-achiever 2名が指摘されていることが判った。

適応がよいと思われる顕著なa型(Z, Eの点が高く、しかも明らかなP型)7名の指摘については、その内、3名は適応性診断テストの総計が90パーセントを越え、ソシオメトリーで中心的地位を占める正委員と、教師の判断ではクラスで人気がないが成績は1位であるという者と、教師の診断と自己診断の一致度が82%で最高の者である。この指摘外にも適応性テストの結果がよい者4名がいるが、いずれも個人適応に比して社会適応が劣る。

各種テストとの関係資料も示す。

産業・職業指導

組織体に関する心理学的研究

日本大学 ○村井 健祐 浅井 正昭
馬場 昌雄

秋山精鋼株式会社 勝倉 信雄

組織体の心理学的研究第2報 部・課間の関係について (1)

○秋山精鋼株式会社 勝倉 信雄
日本大学 浅井 正昭
馬場 昌雄
村井 健祐

組織体内におけるサブ・グループとしての各課が、互に他の課をどのように認知しているかをSD法を用いて検討した。

方法：小保内、浅井、C. E. Osgood らの Cross Cultural Study で日本人被験者を対象とした実験の結果抽出されたE・P・Aの3因子に負荷量の高い尺度各5組計15組を選出し、ランダムに配列した。それらの尺度上に各課のもつ全体的な感じを相互に評定させた。研究の対象として取り上げた課は次のとおりである。管理的部門—総務・工程 現場補助部門—機械・検査 現場部門—組立捲線。

結果：各課は自分の課の評定を含めて6課を評定し、各因子6×6課、計36の Factor Composit Score を算出した。E因子について見ると、現場部門を除いた4課はそれぞれ、他の5課よりも自己の課に対して高い数値を示しており、いわゆる現場に所属する課の組織体内における自己の課の位置づけの特殊性を反映しているように思われる。A因子については、機械課に対する他の5課の評価値、および機械課の自己評価値は他のどれに比べても高い値を示している。これは機械課はこの企業体におけるメンテナンス的役割りを果しているため、その活動性が認知されているものと思われる。

組立に対する、検査、工程、機械はいずれも一方向へ評価している。これはこの組織内における職制上の特性を示すものといえよう。

次にE・P・Aの3次元に各課ごとの他の課をどのように認知しているかを位置づけると、次のような関係が明かにされた。すなわち、現場部門(捲線・組立)は検査を殆ど同位置に認知している。これは現場部門において作業の内容が異なっても、製品を検査するという意味では殆ど同一の認知構造を持っていることが明かにされた。

1. 企業内の各係の関係をSD法を用いて、つぎの2つの角度から調べた。(1)集団の凝集性。(2)各係の相対的位置関係

2. 研究にあたって、凝集性と各係の相対的位置関係とについてつぎのように考えている。凝集性は、集団成員の共通的思考の枠組によって規定されるものである。この点、Lippitt, White らのwe-ness, Coch, French らの共通規範の分有という考えに近い。したがって思考の枠組は、SD法の Evaluation, Potency, Activity の関係枠の水準で測定しうる。SD法の Factor Composit Score によって示される各係の相対的位置関係にはいくつかの集落が考えられ、それは企業体の特殊性と関係がある。

3. 研究目的 以上の仮定にもとづいて

(1) 凝集性を規定する思考の枠組の共通性をSD法によって規定すること。

(2) SD法による各係の相互評価の平均値によって、企業を構成する各係の思考の共通性の相対的位置関係をとらえること。

〔第3報〕SD法による凝集性の測定

1. 方法 浅井がイリノイ大学と共同研究の結果作成した日本人用 Semantic Scale のうちから、E・P・Aの因子に因子負荷量の高い尺度15を選び、従業員の所属する係に対して尺度上に反応させる。

2. 被験者 某電器会社の総務、検査、工程、機械仕上、組立、捲線、各係の従業員

3. 結果・考察 7段階の尺度値の分散を各因子ごとに集計し、その分布状態と分散を求めた。われわれの考えでは、分散の大小が思考の共通性の程度、すなわち凝集性の程度を意味するものである。凝集性を思考の共通性の水準でとらえるという考想は、まだ試論として提出する段階であるが、今後他の方法で測定した凝集性指数と対応して、われわれの仮説を実証してみたい。

監督者の指導性に関する研究 (2)

立教大学 天野剛三郎

目的 前回においては、望ましい leadership とは、いかなる pattern を負荷している場合をいうのか、各組織階層について明かにされた。そこで今回は、それ

らの leadership pattern のもとでは、監督者としての機能がどの方向に、またどの程度に遂行されているのか、前回と同様、各階層の評定を通して明らかにすると共に、かれらの態度をも把握しようとする。

方法 調査対象、調査方法・調査期日は前回発表と同じ。用いられた質問紙は、a) L・T・S と b) 監督機能遂行度調査票(仮称)の二種。後者は、Ghiselli の同様な研究(1960)において用いられた check list (18項目)を更に発展させたもので、内容は三次元すなわち「管理一般」「作業関係」「人間関係」から成り25項目に及ぶ。反応は5段階法をとった。これを係長、班長(自己評定)、部下に check させた。反応には+2〜-2の各 score を与え、total score, category score を求め、L・T・Sの各次元との間に相関係数(ρ)を算出した。なお本調査票の信頼度については折半法で0.89の高い係数が得られた。

結果及び考察 1) 係長・部下の評定においては、a) のD次元とb)の各次元との間に有意な正の相関が認められる。またa)のL次元とb)の全次元の間で有意の負相関が認められる。2) 班長の自己評定ではa)のD次元と「作業関係」の間に有意な正相関が認められるだけである。3) 相関係数について両資料間で特に高い値を示したものをa)のD次元についていうと、係長では「作業関係」の0.88、班長では「作業関係」の0.64、「人間関係」は特に低く0.25) 部下では「人間関係」の0.78、である。4) 以上の結果を、前回の結果に照して考察すると、good supervisor は係長からは「作業関係」、部下からは「人間関係」機能の遂行をより一層期待されているに対し、poor supervisor は自ら「作業関係」に orientate していることが推察される。

~~~~~

### 無形物セールスマンに関する一研究 ——田研式職業興味検査を中心として——

科警研 大塚 博保

**目的** 証券、投資信託を商品とし主に外交により販売するセールスマンの成績の分析をし、職業興味検査との関係を求める。

**方法** 東京都内を業務地域とする某証券会社セールスマンで、経験1年前後の者と新規に採用された者について成績の分析をし、成績と採用時に課した田研式職業興味検査、性、年令、販売経験などとの関係をみる。

#### 結果及び考察

##### 1. 勤続1年群と新規採用群との成績比較

勤続群39名と新規群50名の成績について平均値差の検定を行ったところ高度に有意な差を以て勤続群の成績は新規群の成績より高かった。この理由としては、セールスマンとして淘汰されて生き残った者とそうでない者との差、及び、この職務での経験の獲得などが考えられる。

##### 2. 商品販売成績と職業興味検査(田研式)

勤続群及び新規群を夫々成績上位群、成績下位群の二つづつに分け職業興味検査との関係を検討したところ、新規群においては同検査は殆んど弁別性を有さないが、勤続群においては同検査の戸外、計算、奉仕、書記、説得が成績の上位群と下位群をよく分離する。これは豊原の研究で説得、奉仕、書記を挙げているのと殆んど同じ傾向を示している。

##### 3. 商品販売成績と年令

勤続群及び新規群の両群とも年令と成績の間には一義的関係がみられなかった。

##### 4. 商品販売成績の性別による差

新規群においては男性は最高成績から最低成績までを占めているが、女性は中間の成績を得ているが、勤続群では女性の方が男性に比して、かなりよい成績を得ている。女性としての特性を生かしているように思われる。

~~~~~

教員の職業興味について

大阪学芸大学 友金 義治

目的 テストによって測定される小・中学校教員の職業興味(教育者スケール)が各種グループによって如何なる差異を示すか、及び測定興味と職務の全体的満足感との関係を検討した。

方法 興味については兎玉ストロング職業興味検査、職務満足については Brayfield Rothe Job Satisfaction Blank を用いた。普通学級担任33名(男20, 女11, 不明2), 特殊学級担任29名(男24, 女4, 不明1)を対照とした。

結果 興味スコアの全体(M=90)及び7つの検査部門において、テスト群は基準群に比して、そのスコアは有意に低い。(A)と(B+)の段階を合せると、全体においては42%であるが、第1部以外の各部においては、それぞれ61%~77%を占めている。第1部職業種類は(A)段階42%、(C-)段階42%で、ひとり特異な分布を示している。この(A)段階の者の方が第2、3及び4部では高いスコアを持つが、第5、6及び7部では(C-)段階の者の方が高い。第1部のスコアによって全体スコアが大きく変化しているため、今後測定数を増し各項目毎の吟味が必要であろう。

各種グループの比較では、男一女、小学一中学の間には有意差はなく、普通学級 (M=51) - 特殊学級 (M=136)、勤続年数10年以下 (M=33) - 11年以上 (M=166) の間には、前者は5%、後者は1%水準で有意差が見られた。従って、職務の性質と興味との結びつき、職務経験の興味への影響が推測される。

満足感と興味との相関は0.13にすぎないが、(A, B+)群と(B-, C, C-)群では、満足スコアは前者が有意に高い。満足と興味は一義的に結びつかないが、両者の相互作用は否定できない。

性能と性格との関係 (作業性格検査23)

東京都職業適性相談所 板倉 善高

性能と性格とは互に次元の異なる精神的特性であるが、性能の発達に適した性格というものがあるようである。

東京都下20才前後の男女に、中心目測、図形描写、図形発見、位置発見、計算力、算数応用、言語能力 (同義語一反対語) の性能検査と、連続加算 (N式)、加算と書換の複合 (NV式)、桜花完成 (P式) などの作業性格検査を実施し、各性能点と各作業曲線型 (N正常型・U上昇型・D下降型・O突出型・I陥没型・S平坦型) との関係を見ると、

1. 図形描写、図形発見、計算、算数応用などの技術関係の性能は、連続作業の安定した持久性のあるものに高く、反対に、散漫な性格とか、ねばりの乏しい性格のものに低い。
2. しかし、言語能力の場合には、連続作業で即応性のあるもの、瞬間的反應の早いもの、つまり、感のよい呑込みの早い性格のものに高く、恒常で持久性のあるものは低くなっている。

次に、作業速度と各種性能点との関係をみると、

図形描写と算数応用に最も高く、次に、計算、位置判定、図形発見の順位で、言語能力の場合には作業速度とあまり関係がない結果となっている。(各検査とも被検者数1,000名内外)

なお、次に性能点の高いもの低いものの性格をあげると、

	中心目測	位置判定	図形描写	図形発見
(高)	b(N<N)	a(U<N)	A(N<N)	A(U<U)
(低)	b(O=O)	b(S=I)	b(O=I)	b(O=D)

	計 算	算数応用	言語能力
(高)	A(S<S)	A(N<S)	A(N<D)
(低)	C(U=D)	C(U=D)	C(O=O)

職業希望と卒業後の進路
(希望進路複合類型)

大阪大学 増田 幸一
中西 信男

問題 卒業後の実際進路は、生徒の在学中における職業希望の推移とどんな関係になるか、その職業希望と実際進路との複合的発達類型 aspiration-career compound pattern について考察しようとした。

方法 職業希望発達類型 vocational aspiration pattern の研究における調査対象であった大阪府と兵庫県下の中学校10校の生徒計899名につき、昭和35年4月、彼らの「卒業後の進路」を報告してもらった。

結果 899名のうち、就職した者317名、普通高校に進学した者443名、職業学校に進学した者127名である。(第1表一略す以下同)

それぞれのグループにおける希望進路複合類型を見ると、就職者においては、AAAaが最も多く、AAAbこれに次ぐ。職業学校進学者においては、AAAbxが第1位、AAAaxが第2位である。普通高校進学者においては、職業的類別がないので、上の2者と同様な観点から観察することはできない。(第2表)

試みに就職者と職業学校進学者を合計したばあいを見ると、AAAaが最多で、AAAbがこれに次ぐ。(第3表)

以上の諸類型において、「希望と進学に関係ある型」は全員444名中46.00%であるのに対し、「希望と進路に関係のない型」は34.00%で、前者の方が多く、また第3学年における希望に進んでいる型は26.13%である。

考察 上の結果から、職業的発達理論に関する推論がなされ、また職業指導の実践面に対する示唆が得られる。後者のひとつをいうと、生徒の職業希望に関する指導は、各学年段階において注意深く行わなければならない、上級学校へ進学し、もしくは何らかの職業に就職した後、その指導を継続しなければならない。

SD法による製菓会社の比較

— 3つの Concept について —

日本マネジメント協会 市橋広三郎
東京教育大学 永沢 幸七

目的 製菓会社7社を対象として、「会社」「広告」「製品」の Concept について、消費者はそれぞれいかなる image を持っているかを比較検討した。

法方 (1) scale の決定：連想法による頻度抽出法を用いて形容詞語を選定した。被験者は心理学専攻学生25名および女子短大生50名である。(2)調査対象：本調査は、都内居住者、成人350名（3才以上小学5・6年までの子供の母親）中高生300名（主として中学高学年生徒）小学生350名（主として小学5・6年生）(3)調査方法：集団面接および個人面接の併用。(4)調査期間：昭和35年12月2日～15日。(5)回収数：約800枚。(6)集計方法：回収資料を点検して sampling をほどこし、完全な資料をほとんど同数だけ選択した。成人120枚、中高160枚、小学200枚計480枚。

結果 (1)知名度の高い会社ほど反応が大きく積極的に現われ、低くなるにつれて反応は小さく消極的になる傾向が見られた。(2)「会社」および「広告」の Concept については強い反応の会社と弱い反応の会社は共に同じ傾向のプロフィールを示しながらそのへだたりが区別されるが、「製品」の concept については、プロフィールが入りこんでいる。これは「製品」の concept からの image が他の2つの concept のそれより一層具体性を持たせるためであろう。(3)「会社」によって消費者に抱かれる image の特徴は、清潔感を持った親しみやすいのしいよい感じの所でなければならない様である。こうした image を与えない製菓会社は消費者から見はなされるのではないだろうか。(4)「広告」においては、消費者に好まれる色を用い、読みやすく上品ですっきりした興味を引く親しみやすいものであることが要求される。(5)「製品」は、味と共に明かい安定した image が望ましく、子供に親しまれる個性を打ち出した会社が成功している。

企業イメージの研究

(1) 企業イメージ・プロフィール (CIP)

○博報堂・調査部 山田 俊正
東京大学 山本 和郎

CIP法とは Company Image Profile の略であつて米国の企業イメージのコンサルタント会社の社長であ

る John F. Bolger 氏によつて 1959. 10月の Journal of Marketing に紹介されている。彼によると企業の持つている性格はいくつかの特性 (trait) からなり従つて企業イメージも特性語 (trait word) によつて表現されるとしている。このテクニクの手続はこれらのカードに印刷された特性語を対象者に見せてその企業の性格を表わす語を選択させる。CIP の特長としてはSD法よりも Ideal Image (理想のイメージ) がとりやすく、企業イメージの濃淡やウエイトが選択された trait word によつて制定することが出来ることである。博報堂調査部も企業イメージの重要性からSD法だけでなくCIP法にも独自の研究を行つて来た。以下われわれのCIPについて説明する。

(1) trait word の選択

Bolger の如く辞典から選択せず先づ連想法を用いた。具体的企業各140社から4語づつ延1,400名に形容詞連想をさせ、その結果主要語122種、21,600語を蒐集し trait word の選択の母体とした。選択の基準として、2法が考えられる。①因子分析法を使用し主要因子の負荷量の高い語を選択する法、②連想の高頻度順に選択する法。われわれは実務的要請により後者の選択法を用いたが、①あらゆる企業に共通して高い頻度で出現する (20語)

(General word)

②ある特定企業に高く集中して出現する語 (7～10語)

(Special word)

2種の trait word を設定した。従つて trait word は各々の企業により s-word は異ってくる。

(2) trait word の呈示法—シート法—

Bolger のカード法を用いず一枚の紙に全 trait word を印刷して呈示。

(3) 選択数

ナイーブなイメージをとる為に、制限は加えない。

具体的に各企業に適用したことは理想イメージは5～6の trait word に集中傾向があり、また結果はSD法との相関は0.9以上であった。

企業イメージの研究

(2) 企業イメージの構造

○東京大学 山本 和郎
博報堂調査部 山田 俊正

1. 企業イメージ構造の抽出

手続 博報堂CIPに使用している G, word (一般的形容詞) 20に関して、相対連帯出現頻度表を制作する。その頻度表をもとに D² 法によつて因子分析を行い、第 I X 因子まで抽出した。

結果 抽出された因子をもとに、因子負荷量の大きいこと、内的整合性が高いことを基準として、次の4つの大きな因子と、その中にいくつかの従属因子を決定した。

- A. 信頼できるという特性 (信頼性)
1. 一流性 (VI) [一流の、伝統のある、古い]
 2. 安定性 (VII) [信頼できる、安定している]
 3. 発展性 (IX) [発展しつつある]
- B. 大衆的であるという特性 (大衆性)
1. 大衆性 (III) [大衆的、親しみやすい]
 2. 非大衆性 (I, V) [親しみにくい、小さい]
- C. 近代的であるという特性 (近代性)
- (II) [近代的、スマート、明るい]
- D. 活気があるという印象
- (IV) [活気のある、華やかな]

但し、第VII因子は、特殊なものとして除外した。

2. 各企業のイメージ特徴

企業別形容詞出現頻度分布をもとに、20秒企業の企業イメージ構造を検討してみた。信頼性(A)の高い企業は、商事、製菓、銀行、官公庁、出版、証券、乳業、電機、映画、化学。大衆性(B)に関しては、出版、映画、デパート、マスコミ、食品、ビール、化粧、近代性(C)乳業、電機、映画、化学、デパート、ビール、自動車、繊維、石油。活動性(D)商事、出版、証券、映画、デパート、マスコミ、化粧、自動車、水産。但し、鉄鋸は特徴がはっきりしない。

従業員モラル調査におけるモラルと 関心度との関係

広島大学 正戸 茂 ○磯谷 昭一
吉森 護

経営の諸方策を改善し生産性を高める目的で広く行われている「従業員モラル調査」は、従来その調査結果をモラル・スコアの形で分析、検討されてきたが、この場合それぞれの質問項目が従業員にとって、どれほど重要とみなされているかは見すごされている。

われわれは質問項目についての関心の度合と、その項目についてのモラルの両者を同時に調査して、

(関心度スコア) - (モラル・スコア) = D-スコアの
手順から得られる差の値 (D-スコア) により、従業員
モラルの、より有意義なスコアを知ろうと試みた。

某私鉄の従業員を対象に26項目の質問を満足度および
関心度の両者について、五段階で回答する質問紙法による調査結果によれば、従来の方法によるモラル・スコ

アの低い順位と、D-スコアの高い順位とでは、かなり
差異のあることが明らかとなり、関心度を併行して調査
することの意義があると思われる。

この調査では関心度は全ての質問項目に亘って比較的
高く、いずれも関心度+1で最も高い頻度を示している
が、特に給与関係の質問に最も高い関心が表れている。

関心度とモラルの関係は4つのタイプに分けられる。

A: モラルの低い者が高い関心度を示すタイプ

B: モラルの高い者が高い関心度を示すタイプ

C: モラルの高い者および低い者が高い関心度を示
しモラルの高低の中間の者が低い関心度を示す
タイプ

D: 両者の間に明瞭な関係がなく、モラルの高低に
かかわらず関心度のやや高いタイプ

Aは配置転換や組織の質問に、Bは会社との一体感の
質問に、Cは幹部、監督者、給与などに多く現れ、Dは
仕事や監督者に関する質問項目に現れている。

従業員モラル調査におけるモラル と関心の因子分析

広島大学 正戸 茂 磯谷 昭一
○吉森 護

企業体における従業員モラルの実態を把握するのが
究極の目的である。質問項目として出来るだけ従来から
よく用いられているものとし調査票を作成、広島市内の
某私鉄企業体において実施した。各自の満足感の記入と
共に、項目毎に各々の関心の程度を5段階で評定して
もらった。対象者は一般従業員から係長にわたり、又職種
として事務員、技術員、乗務員(電車、バスの運転手、
車掌)等である。その結果項目分析(good poor analysis
による)を通過した26項目について職場集団を単位(19
職場)として、所謂 Osgood の D-method による因子
分析を試みて、それぞれ5つの因子を抽出した。各因子
に多少危険を冒して命名すると、まずモラル調査票に
おいては第1因子は仕事を中心とする人間関係、第2因
子は仕事の好悪とその評価、第3因子として上役(トッ
プ)監督者に対しての満足感を示していると思われる。
一方関心については第1因子として general factor、第
2因子に職場についての関心、第3因子に給与について
の関心第4因子として仕事自体についての関心を示して
いるようだ。

そこで因子により抽出された若干の因子でもつて表わ
されるような次元の尺度を作り、profile の形でもって
従業員モラルを把えることが必要であろう。その時従

業員が如何なる問題に関心をもつかは加味されねばならないと考える。そのためにも各因子の命名解釈が適切でなければならないので、更に因子の意味を探索し続いて因子分析のQ-テクニックを適用して、因子の個人的負荷量を明らかにし、その両面から従業員モラルの基礎資料を得たい。

宣伝色塗装車の塗装デザイン に関するイメージ調査

広島大学	長町 三生
	正戸 茂
広島商科大学	木田 重雄
神戸外国語大学	倉盛 一郎

家庭電気器具のメーカーであるH, M, T, Mt 4大会社の宣伝色塗装車の塗装デザインのイメージ調査をD法によって行なった。

対象：世帯者618名（男311名，女307名）および中学、高校、大学の学生442名（男234名，女208名）を被調査者とした。

調査方法：Osgoodの研究による形容詞から因子負荷量が高くこの調査に適切なものを17語選び、それに対し各会社の塗装車の写真に対するイメージを7段階評定させた。世帯者は面接法、学生は集団検査によって調査した。

結果：(1)各会社の塗装車を見た経験者の比率はM社がもっとも高く、H社、T社、Mt社の順であり、この傾向は車輛所有数と車輛活動状況に大いに関連する。

(2)各会社の評定平均得点を比較すると、Mt社、T社が中庸の段階に近い評定をし、パターンも似かよっており、H社とM社は前者より軽い、よい、美しいに高い評定を与えている。特にM社が軽い、冷たいのイメージを与えているのは、塗装車が赤白青の3色のレイアウトでデザインされているのによるのであろう。

(3)4社を通じ男性よりも女性がより好意的な評価をしている。また男性は企業体および製品に対するイメージが介入する傾向がある。

(4)4社を通じ無職および主婦が高い評定の得点を与え、農林漁業は中庸に近い段階の得点を与えており、後者には地域的あるいは関心低さの特徴が見われている。

(5)製品を購入したものはその会社の塗装車に対するイメージは非常に好意的で、製品を持たないものとの間に大きな差異がある。

(6)17語の形容詞に対し、D法による因子分析を行な

い、配色の因子、興味関心の因子、価値的美的評価の因子を得た。これらが塗装デザインのイメージの主な要因と思われる。

カナ文字タイピングの適性に関する研究

田中教育研究所 ○松原 達哉
茂木 茂八

目的 カナタイピストの適性を、知能、事務的適性、身体的特性（年齢、視力、運動）、性格的特性、興味などの面から追究すること。

方法 カナタイピスト教室の生徒111名に、20日間同一指導者が、同一のCurriculumを、同一方法によって指導を行った。そして、20日間のタイピングの進歩率と誤答率とから4グループにわけて、知能、事務的適性、年齢、視力、運動・教科の好嫌、性格特性などについて比較検討した。グループ編成は、

Aグループ……1分間に83ストローク以上で、ミスが10分間に10ストローク以下のもの。

Bグループ……主として1分間に82～62でミスが10以下のもの。

Cグループ……主として1分間に82～52でミスが11以上のもの。

Dグループ……主として1分間に51以下のもの全部である。

結果 カナ文字タイピストの適性としては、つぎのような事柄が考えられる。

(1)知能偏差値53以上あることが望ましい。（特に、学習能力、選択反応能力、記憶力、注意力、弁別力、反応の速さなど）

(2)事務的適性は、偏差値55以上あることが望ましい。（特に、注意力、視察力、分解力、語いの判断力など）

(3)視力は、0.8以上あることが望ましい。強度の近視や乱視は適していない。

(4)タイプ開始年齢は、高校卒業から20才前後が望ましい。高年齢になるとスピードの向上やミスの減少が望めない。

(5)性格は、熱心でまじめで、落つきのある人が望ましい。

(6)このほか、手先の器用な人、国語など文科系に興味のある人、珠算、英文・和文タイプ、ピアノなどの経験者は、進歩が早い。

カナ文字の識別に関する研究（第2報）

東京教育大学 ○阪本 敬彦
 国立国語研究所 村石 昭三
 東京教育大学 加賀 秀夫

本報告は第27回大会発表「カナ文字系列の読みやすさに関する研究」につづくものである。研究目的は前回と同様。第3実験まで報告済みである。

第4実験 方法：行間を一定（4.5mm）にし、10種の字間×10種の有意味文、計100種を用意し、電報局員10名に読ませ、オフサルモグラフにより眼球運動を記録した。結果：A. 読書時間は字間 3.0mm, 3.25mm および 2.25mm あたりの狭い字間が速く読める。字間が広くなると、速さは急速におちていく。B. 逆行数は字間 3.0mm, 3.25mm が最も少ない。C. 停留数は、2.25mm および 3.0mm, 3.25mm が少ない。D. 不適応凝視数は 2.0mm, 2.25mm が非常に多い。E. 停留時間は、どの字間にも差はほとんどない。

第9実験 方法：ここまでの実験で最適と認められた字間3.25mmを一定の字間とし、9種の行間×9種の無意味綴文、計81種を用意し、瞬間露出により読ませる。結果：A. 行間 7.0mm, 8.0mm が最も多く読めた。B. 行間の効果は字間の効果ほど顕著でない。

第6実験 方法：字間行間の異なる9種の文章を489名に読ませて速度をみる。結果：A. 字間 3.25mm 行間 5.5mm が最も速く読めた。B. 字間のみについては 2.5mm, 3.25mm は 4.0mm より読みやすい。C. 行間のみについては、4.5mm~7.0mm がよい。しかし字間効果ほど顕著でない。

結論 以上行なった結果では、字間 3.25mm 行間 5.5mm 程度の配列が最も読みやすい。ただし行間は読みやすさに字間ほどの影響力を持たない。本研究は、活字印刷面の最適性の要因について、速度のみを問題にしたが、さらに、理解、疲労、印象のよさの要因についても調べる必要がある。

眼球運動の時間的研究（Ⅲ）

大阪府立公衆衛生研究所 大谷 璋

目的 眼球運動の反応時間で眼球運動の方向による差を見んとしたものである。

手続 a—被験者一成人（学生）10名

b—装置 被験者の眼から 30cm 前方に小型ネオン管を置き、それから等角度に16方向に放射状に視角 30° の位置に16のネオン管をつけた。点滅装置はデカトロン等による電子装置によった。眼球運動の記録は三渠測器製万能記録機によった。

c—方法 被験者は椅子に座し左右顛顛部と右眼眉上と右眼下に1組づつ電極をとりつけた。約10回の練習試行の後各方向につき4回づつ無作為順で本試行を行った。合図と共に被験者は中央を凝視した。凝視すると共に中央のネオン管が0.9秒間点燈しその後周辺の16点のいずれかに移動する。それを被験者は出来るだけ早く眼で追跡する。

（結果）周辺の16点に対する反応時間の場合分散分析の結果1%水準で有意であった。平均反応時間は被験者より右方に対する反応は 197msec, 上方には 210msec, 左方には 188msec, 下方には 234msec であった。要するに上下方向よりも左右方向に対する反応時間は短かかった。

眼球運動の時間的研究（Ⅳ）

大阪府立公衆衛生研究所 ○石橋 富和
 大谷 璋

目的 選択反応時間及び単純反応時間にあられる眼球運動の特性を、水平（左右）垂直（上下）4方向について検討し、同じ問題を触覚反応や言語反応について試みた過去のデータと比較する。

手続 装置及び被験者（10名）は研究報告（Ⅲ）と全く等しい。実験は次の5条件について行った。

1. 点条件……予め指定した位置（上下左右）への光点の移動を追跡
2. 点条件……上下又は左右の何れか一方へ移動した光点を追跡（2者択一）
4. 点条件……上下左右の何れか一方へ移動した光点を追跡（4者択一）

8点及び16点条件は報告（Ⅲ）に同じ。但し上下左右の4方向についてのデータのみ検討した。練習は各条件につき約4試行。本試行は各条件の各方向につき4回行ったが、最後の1回のデータのみ採用。刺戟の呈示順は各条件内でランダム。条件順は1点→16点。

結果と考察 分散分析の結果、実験条件差（選択数）と個人差についてはFは1%以下で有意であったが、方

向差及び上記3要因の交互作用については有意でなかった。そこで選択数の個々の差をテストで検定したところ、単純反応(1点条件)は選択反応の何れよりも概して早く、過去のデータに一致した。しかし選択反応では、選択数が増しても反応時間は上昇せず、逆に16点条件が最も早く、他の3条件の間には明らかな差がなかった。これは過去のデータに背反するもので、眼球運動の特殊なメカニズムに由るものか、或いはその他の要因(例えば期待や構え)に由るものかどうかは、今後更に検討を必要とする。

某自動車会社に於ける人間関係管理 についての調査研究

札幌医大心理 ○後藤 啓一
北大公衆衛生 三宅 浩次
北大公衆衛生 斎藤 和雄

企業の経営合理化が大いに論ぜられ、心理学もその実現の為に積極的に発言を行なっている現在、心理学が取り挙げている問題の一つに“企業に於ける人間関係管理”の問題がある。

我々も企業体内部に於ける人間的要素を重視し、経営管理的な観点から人間関係管理の為の調査研究をしたので報告する。

当社の組織機構として、スタッフ部門に総務課・経理課をようし、ライン部門としてサービス課、車輛業務課、配車課、中古車課、営業所2を揃え、社長並びに常務によって総括されている、従業員数150名の中企業である。当社の設立は昭和32年で未だ日も浅く、従業員平均年齢22.5才という他の同系企業に比し極めて若い特色を有している。我々は、会社の実状を知る為に組織を分析し、就業規則を吟味した。次いで従業員の実態を把握し、人間関係管理対策を講ずる為に、(1)モラル調査、(2)職務に対するイメージ調査、及び人事配置の適正化の為に(3)パーソナリティ調査を面接法及アンケート法で行なった。主な結果は次の通りである。(a)車輛販売に従事するもののモラルは一般に高いが、将来に対する職務の不安定感を抱く傾向が強い。(b)技術系の整備工達は自己の職務に対し明るい認知傾向をもつが、指揮系統の明確を望むものが多かった。(c)事務系社員のモラルには個人差大きく、不満の原因に職場の雰囲気暗さが述べられた。我々は以上の調査結果を資料とし、次の様な人間関係管理対策を講じた。(I)職場別懇談会開催、社内報の発行、教育訓練の実施、特に職務に対す

る役割認識を強調する研修会の開催、人事カウンセリング等を定期的にもつことにした。これらの効果については未だその端緒についたばかりなので別の機会に報告することにする。

自動車運転者の適性検査

新潟大学 畔上 久雄

目的：自動車運転者に一組の適性検査を施しその結果と監督者の日常観察とを比較考察する。

対象：〇〇官15名(上7中5下3名)

方法：1. 紙筆検査 (1)不安傾向診断 (2)診断的適応性 2. 個人実験 (1)選択反応 (2)視野 (3)深視力 (4)眼精疲労 3. 個人面接 4. 監督者の行動観察と操縦総評。検査日は昭和36年4月である。

結果：1. 不安傾向診断、危険域65以上1名、ただし各項目危険域7以上は6名、しかも2項目から5項目にわたっている。殊に対人(B項)が多い。

2. 診断的適応性、危険域65以上4名
3. 選択反応、 $M=409.2$ $SD=50$ -2が1名
4. 視野、 $M=156.8$ $SD=12$ -3が1名
5. 深視力、 $M=前1.45$ 後0.72 $SD=前1.10$ 後0.97 SD 大であり、-3が1名、-2が1名。
6. 眼精疲労、指針静 $M=右39.6$ 左38.5 $SD=右6.0$ 左7.5。動右= $右42.9$ 左47.2 $SD=右9.9$ 左8.6で疲労大、-2が2名。

		音 量				
		-	±	+	++	≡
静	右	5	4	5	1	
	左	5	2	8		
動	右		2	6	3	2
	左		2	6	4	1

音量の動は静より一だん強い。30才以上の指針は-で音量は大。30才以下の指針は+で音量は小。30才以上は静動の差は指針と音量とも大である。

7. 面接 心的動揺が具体的の姿になってくる。
8. 行動観察 精神力がすぐれている。
9. 操縦総評 上7名中3名、中5名中2名がどこかで-2、-3をもっている。下3名とも-2をもっている。

結論：わずかに被験者15名の結果であって、一般的にいえないが、1. 適性検査によっては不合格者も多少ある。2. 弱年技術修養中で今後の期待によるものもある。3.

いずれも性格、決意、態度、訓練などで心し、職業実行に向っているのはこの職場の特色と思われる。

職場におけるBGMの実験的研究

宮城学院女子大学 泉山 中三

この報告は最近特に産業場面で提供され、その効果が期待されている。いわゆる環境音楽についての調査にもとずく問題性の考察と効果測定の結果に関する若干の資料である。この種の音楽の効果を規定する要因としては音楽素材や提供条件とともに受容者の問題が夫々数多く挙げられるが、基礎研究の手掛りをうるためにすでに実施されている二、三の現場で調査を行った。その結果、(1)職場によって音楽の受容状況がかなり異なること、(2)提供前に反撥した者もその後の調査では抵抗を示さず、一般に好意である。(3)BGMの環境改善の効果は予想されるが、受容者の言語報告では十分に認識できない。(4)さらに音楽素材の生体の反応に与える効果の吟味も重要である、などが指摘された。

そのため、コンベア・システムの生産工場では作業量が一定である場合もあったが、ここでは動作時間研究の手続きが有効であることを認めた。すなわち、作業員の単位時間内における一工程の所要時間の変動値は漸増するが、その後音楽提供によってこれを或る程度軽減する効果があることを観察した。この傾向は午前よりも午後の疲労者において有意であった。次に、音楽素材選択の基礎研究として、音楽内容の評価に対する分析と、音楽刺激に対するGSR反応を実験的に考察した。その場合音楽を受容対象として意識したときと単純作業を課題として与えられ、音楽を明瞭に意識しないときでは結果がかなり異っていたが、音楽の構成要素としてリズムを主体とする内容がある程度の興奮水準を維持するのに適することが予想された。

このようにBGM研究は一方では人間の生体反応的基礎から始めなければならず、また同時にそれを提供する場面の環境特性、作業条件の理解の上にならなければならないということが唆示された。

計算機 operator の職業適性に関する研究

東京教育大学 ○原野広太郎
長島 真夫

目的 最近各産業の統計部門で、計算機 operator、

programer の養成が緊急事とされておる。また実務にたずさわる operator の職業病が問題化してきている。しかし、operator の適性にどのような資質が要求され、またどのような性格特性をもっていることが必要かなどについて心理学的考慮はほとんど払われていない。この研究は operator に種々のテストを荷し、その結果からこれらのテスト間に共通にみられる適性の内容を探り、operator の適性診断と適性配置の system を確立しようとする一つの試みである。

被験者 都内のある金融会社に計算機 operator として勤務する女子従業員21名であつた。

テスト 機械的職業適性検査、クレペリン精神作業検査、職業興味検査、矢田部ゴルフオド性格検査、タツピング作業検査。なお、管理者によって operator としての被験者の能力、性格が5段階評定された。

結果と考察 各テスト間の相関はつぎの通りである。機械的職適——クレペリン0.29、機械的職適——職業興味0.02、機械的職適——タツピング-0.06、クレペリン——職業興味-0.03、クレペリン——タツピング0.05、職業興味——タツピング0.24。このように各テスト間の相関はかなり低く、演者らが意図した適性の特性を見出すことはできなかった。そこで、Y-GとCSTの結果を含めて被験者の適性を総合判定した。テスト結果の総合診断と管理者の評価との一致度をみるとテストで適性優と判定した7名のうち6名は管理者評価と一致し、テスト評価で劣るとされた7名中6名は管理者評価と一致した。なお、一致しない被験者の特性をみると、職業興味、クレペリン検査の成績に問題があった。優る者と劣る者以外の被験者についても、両者の評価はほぼ一致していた。

購買動機と色彩

社団法人セールス、プロ
モーション、ビュロー 田岡 信夫

色彩が購買動機としてどのような強さをもっているかについては、個人のパーソナリティー、個人的好み、欲求不満の状況など、夫々諸個人の特性に負うところが多く、一概に、そのアプローチの方法(は、プロデュクティブな方法)に依存している。しかし、年令集団として、或いは、所得階層別の消費集団としてこれを計量操作的にその特性をとらえ、さらに製品個別の特性を計量的にとらえていくことも必要である。本調査はこうした観点から、1. Preference-Test (色自体の好みをしらべることを目的とする)

2. Adjustment-Test (好みの色に形容詞を与えて意味を附加させる)
3. Rating-Test (色彩に製品の形態を与えて、その好みをしらべる)
4. Rank Differencial Analysis (色自体の好みと製品の形態を与えた時の好みの順位相関をとることによって、色彩による撰択度の強い製品を明らかにする。

以上の諸テストを実施して見ることによって、年令別、所得階層別、製品別に夫々の色彩趣向の特性を計量操作的にとらえてみた。

色彩は、オストワルド色彩体系の中から白黒を含めて54色をえらび、テスト材料とした。テスト場面としては、東洋大学のテレビ、スタジオを使用し、照明、彩度に於て、一定のテスト条件を作成し、各グループ10名ずつをテスト対象として1グループ2時間にわたるテストを実施した。調査テストグループは30、対象者は300人である。テストの結果から、色自体の好みによって撰択される製品と、そうでないものがあり、また、男子と女子で相異なる。ネクタイは、色自体の好みと関係が比較的うすく、(男子のばあい)、ハンドバックに於てはその関係が高い(女子のばあい)、同様にして各種の製品のテストの実施が可能である。また、全体として相関の高い製品と、個々の年令集団に於て相関の高いものが製品によって存在する。

仕事のステイタスとモラル

明治大学 松井 資夫

調査の主旨 「職業に貴賤なし」と云われながら、現実には、それぞれの職業は固有の社会的ステイタスをもっている。同様に、一つの企業の中でも、職務はそれぞれにステイタスをもっているであろう。この研究は、職業間で意識されている職務のステイタス、その決定要因、職務のステイタスが職員のモラルに及ぼす影響を質問紙法によって調べたものである。

対象 都内の小金融機関の7支店に勤める男女非役付職員157名(内、女子48名)、平均年令;男23.4、女21.1、学歴;高校または旧中卒53.2%、高専大卒43.6%、その他3.2%。

調査方法と結果

④職務のステイタス——各支店に共通にある預金、貸付、得意先、出納、積金、総務の六つの職務のステイタスを、一対比較法で比較させた。結果は、男子においては女子に比較して、この六つの職務のステイタスの広がりやは

るかに広く、また、貸付、得意先が他の四つの職務に比べて極めて高く評価されることが判った。

⑤ステイタスの決定要因——各人に六つの職務中、最もステイタスが高く感じられるものと、最も低く感じられるものを挙げさせ、その理由を、それぞれ三つづつ記入させた。それによると、職務のステイタスを評価するに当って、男子は女子に比較して、その職務の金融機関本来の業務としての重要度を強調し、女子は、職務の属性(例えば複雑である、面白味がある等)に基づいて評価する傾向がみられた。

⑥ステイタスが職員のモラルに及ぼす影響——現在の職務に対す「やり甲斐」「興味」を調べると、男女とも、ステイタスが高いと思っている職務についている者は、ステイタスが低いと思っている職務についている者よりも、明らかに「やり甲斐」意識、「興味」とともに高かった。

質問紙評定と観察評定の比較による口述 応答評定基準の作成に関する実験(Ⅱ)

渡辺 芳彦 藤田 革哉 大塚 源蔵

実験面接 実験調査の結果から、項目を情意性、責任感、判断力、従順性、表現力、態度、総合の7特性とし、さらに各特性につきそれぞれ1問題を採択した。ただし表現力、態度、総合の3特性は観察の評定である。

これらの問題を用いて実験的に面接を行なった。

手続(1)被験者は昭和35年第1次新隊員採用時に、全国を北海道、東北、関東、関西、九州の5地区に分け、それぞれの被験者数、102、86、208、146、215、計757名を無作為抽出した。

(2)実施方法は評定手引と評定票により評定の統一を計った。

(3)評定基準は実験調査と同一である。

(4)実施日 35. 4、26~35. 5、10

結果

(1)実験面接の総合得点の分布状態は、正規型に近い曲線である。

(2)内部相関は、態度と総合の特性ではかなり高く、その他の特性では満足すべき結果をえた。

(3)Fテストの結果では、5地区の実験面接法に有意な条件差は認められなかった。

次に、同一被験者を入隊後3ヶ月間、実験面接と同じ特性について観察し、実験面接の結果との関係をみた。

(4) 実験面接と観察の x^2 の検定では、情意性、責任感、判断力、従順性、表現力、総合の特性で有意である。

(5) 態度を除いた6特性の総合得点で、両者の相関は北海道.33, 東北.25, 関東.52, 関西.41, 九州.48であり、この値は Miner .54~.57, Shen .55, Wait .47~.50などと比較して、必ずしも低いとはいえない。

(6) 実験面接と知能の相関は.38であり、知能との関係は、わずかながら認められる。

面接評価技術の訓練方式

——役割演技と集団討議による——

人事院 金平 文二

面接場面は面接者一被面接者間の複雑な相互作用の過程であって、面接評価は面接者の単なる個人的経験や熟練に頼ることができない性質のものである。したがって面接評価には高度の技術が要請され、これまで面接者個人の熟練に委ねられていたものを科学研究に基づいて体系化し、技術化することが必要であると考えられる。しかしこれらの面接評価技術の訓練は、単なる知識の集大成では効果は得られない。面接評価技術は、学習理論に基づく役割演技を自ら行ない、それによって得られる評定結果やその記録に基づく訓練参加者の集団討議によって自ら体得すべきなのである。これが面接評価に関する定型的訓練方式を作成したゆえんである。

I. 訓練課程の構成

第I部 面接の基礎的技法

第1課程 オリエンテーション

第2課程 面接評価をめぐる諸問題

第II部 個別面接法の技法

第3課程 自由面接法の技法

第4課程 標準面接法の技法

第5課程 非指示的面接法の技法

第6課程 圧迫面接法の技法

第7課程 臨床的面接法の技法

第8課程 診断的面接法の技法

第9課程 委員会面接の技法

等から構成されており、各課程では技法的に最も特徴的と思われるものに重点をおき、全課程の修了によつて評価技術を修得しうるよう編集されている。

II. 訓練対象と訓練スケジュール、指導者の役割

1クラス15名~20名、同一階層で編成、標準課程(3日間)、短縮課程(2日間)がある。

指導者は「導入」と「まとめ」を行なうほか、実習の

指導、討議の調整、発言の推進を行ない、非指示的な司会をし、技術的問題についてのみ指示を行なう。

監督行動と共感性について(その2)

立教大学 ○山下 昇
豊原 恒男

第25回日本心理学会に於て一部発表したが、その際、目下試作中の共感性テストが、監督者の適性を見出すに有効なものであることが示唆された。監督者というものは職務の命令伝達機関であると同時に、また、人間関係管理の第一線の重要な役割を果たす地位にある。対人的関係に於て、Empathy 或は social sensitivity を働かせて、相手の立場になって推察することが、必要な条件であろう。監督者にも、このような共感性が、資質として要求されるのではなからうか。これらの観点から監督者の適性検査としての質問が用意されている。

今回は、モラルとの相応関係をみることを目的とする。対象人員は、班長クラスの督者約120名、その部下としての従業員は約3,000名である。

NRK方式従業員態度調査を実施し、総合モラルと、特に「上役との関係」「上役の行う管理」の種目得点を得た。勤務成績を基準とし上位24%、下位24%をとり、それぞれ、上位群、下位群とし、共感性テストの項目分析を行い、有意な差のみられた項目についてウエイトを与え、得点とした。結果は、「上級との関係」の得点と一般的共感性得点とは相関がなく($r=0.03$) 監督的共感性得点とはやや高い相関($r=0.62$)がみられた。部下からみて良き人間関係を保っている上役は、監督的共感性得点が高いと認められる。従つて、これらの質問は、ある程度、リーダーシップの人間の側面を測定するに有効なものであろう。

他の2、3の会社の監督者に実施した得点分布からみて、上位群はプラスの得点範囲中位群は(プラスとマイナスの両方に分布)下位群はマイナスの範囲に得点分布し、かなり明瞭に分離して示されている。

作業の変化と blocking

早稲田大学 清原 健司 橋本 仁司
上田 雅夫 ○長谷川享子

目的：一般に緊張は行動を促進するが、過度の緊張は

行動を抑制する。従つて連続的に緊張を強める事ができるならば、個人の行動を最大限に、しかも最もスムーズにする緊張（良好な緊張）の度合が存在する。本研究は、(1)如何なる作業条件が良好な緊張を生ぜしめるか、(2)緊張の指標として従来最も重要視してきた blocking に、他の作業面及び生理的、主観的側面における変化を、併せて検討することを目的とする。

方法：(1)作業速度により強められる緊張、連続手指屈伸作業において、作業速度の上昇により緊張を強める。(2)作業課題により強められる緊張、連続色名呼称作業において、拮抗する色と文字の種類増加により緊張を強める。(3)作業状況により強められる緊張、連続数比較呼称作業で、成功欲求、失敗罰の回避欲求を高める事により緊張を強める。

結果：(1)手指屈伸作業では、個人のやり易い速度の1.2倍迄速度を上げた時、blocking は最小となり、作業経過は最も安定する。呼吸はやや乱れ、回数は増大、自覚（症）もかなり強い。(2)拮抗色文字が2種類の時、作業時間、誤謬、blocking、自覚（症）が共に最小となる。数比較作業では、要求水準を立てさせて作業を行った場合、誤謬、blocking が最小となる。作業時間及び自覚（症）はこれと対応しない。

結論：(1)楽な、単調な作業よりも、やや緊張を要する作業条件が良好な緊張を生ぜしめる。(2)一 a) blocking は誤謬と最も密接な関係にある。b) 単純な筋肉作業においては、生理的、主観的にかなり緊張が強まった時が、作業面での良好な緊張と対応する。c) 精神作業においてこの関係は、作業条件により一義的でない。

共感性テスト試作報告（その三）

立教大学 豊原 恒男

今回は第1報告（第27回金沢大会）と第2報告（立大心理・教育学科年報 No. 4）につづいて、筆者試作の共感性テストの採点基準が試行諸会社においてどのような結果になったかを報告する。

被験者は6会社における下級監督者が主体である。

結果1. 一般的共感性テスト（G型）20問の中、6会社に比較的共通な採点基準が得られたのは7問であり、監督者用共感性テスト（K型）では25問中、17問であって、全体として、45問中、24問というわけで約半分であり、問題の半分は、会社ごとに採点基準がバラつくという結果になった。

結果2. ここに問題例をかかげる余裕がないので省略

するが、今回試行した6会社において、比較的共通して優秀者が選択率の多い問題番号とその選択肢と、芳しくない監督者が共通して選択しているのを列挙すると、次の如くである。

優秀者の場合。G3b, G6c, G9a, G14a, G16b, G20c（を第2位におく）、K3b, K5c（を第3位におく）、K5d（を第2位におく）、K8c, K9a, K10e, K11c, d, K12a, K13a, K14b, K17c（を第4位におく）、K17d（を第4位におく）、K20c, K21d, K22b, K24c。

芳しくない監督者の場合。G9c, G20b（を第1又は4位におく）、G20c（を第1位におく）、K3a, G5a（第1位におく）、K10b, K14d, K15f, K19a, K20d, K21c, K22e, K24e。

以上の内容を総括してみると、芳しくない監督者は、比較的、平凡な、センスのない、また単なる「考」にすぎない選択が多く、人の気持を推察するという意味では、答のえらびかたが単純だという印象を受ける。

交 通

航空交通管制官に関する労働心理学的研究

(1) 序 論

東京教育大学 小保内虎夫 上武 正二
辰野 千寿 藤田 統
森 孝行 服部 政夫
白梅学園短期大学 大川 雅司

航空交通管制官は航空機の発着と運航に指示を与え、統御することを業務としている。我国では戦後米軍によって開始されたが、日本人管制官が米軍の下で養成されるにつれて、逐次米軍の管制下にあった飛行場が日本側へ移管され、昭和34年7月の管制本部の移管をもって運輸省航空局への移管はほぼ完了した。しかし、このように我国での歴史が短いこともあって、管制業務の労働心理学的側面については、ほとんど分析が進められていない。そこで、我々は、今後の研究の基礎的段階として、航空交通管制業務の三つの職種、つまり、管制本部・管制塔・GCA業務の諸特性を分析・抽出して、今後の管制官の採用・養成方法の改善、適性の発見と配置・転換の科学的遂行等に役立つような基礎的資料を提供しようとした。方法としては、管制官訓練所の出身期・研修成績に基づいて選出した被験者、すなわち管制本部員19名（埼玉県ジョンソン基地内）、管制塔員24名（東京国際空港12名、大阪国際空港12名）、GCA員19名（東京8名、大阪11名）、計62名に、8種目の検査、すなわち、検索、数的推理、記憶、時間知覚、注意配分、フリッカー、反応時間、狙準反応の諸検査を実施した。そのうち、検索・数的推理を除く6種目については、疲労度測定の意味もあって勤務前と後の2回にわたって測定した。結果は、主として職種別、勤務地別、訓練所出身期別、同成績別、勤務前後別、勤務時刻別に分析され、さらに各検査ごとにくわしい分析がなされているが、今回はその一部として、主として職種別、および訓練所の成績別の分析結果について報告することとする。

航空交通管制官に関する労働心理学的研究

(2) 主として職種別

東京教育大学 小保内虎夫 上武 正二
辰野 千寿 藤田 統
森 孝行 服部 政夫
白梅学園短期大学 大川 雅司

各検査の勤務前の成績分布は、大部分の検査ではほぼ正規分布に近い。正規性が保証されないものも分布は対象であるといえる。勤務後については、若干分布がかたよるが、ほぼ対象性が保たれる。

各検査のうち、検索・数的推理・注意配分検査の成績は、同検査の他職種（防衛庁一般職員、精工舎高工卒従業員、国鉄自動車優良運転手、国鉄現場職員）の平均よりかなり高い。しかし注意配分検査は一般文科大学生、大学院生のそれよりやや劣る。管制業務の内容からして、撰抜時のこの面のチェックおよび訓練時の考慮が必要であろう。3選択子反応時間狙準検査の成績は、国鉄従業員のそれとほぼ同水準である。ただ、ARTCC要員の狙準検査で焦躁反応が試行数の過半数をしめていることは注意を要する。焦躁反応はこれまでしばしば事故傾向者の特性と考えられてきている。

航空交通管制官に関する労働心理学的研究

(3) 主として訓練成績による分析

東京教育大学 小保内虎夫 上武 正二
辰野 千寿 藤田 統
森 孝行 服部 政夫
白梅学園短期大学 大川 雅司

管制官が航空職員訓練所（在東京国際空港）において受けた原則として6ヶ月間の訓練期の成績と今回実施した諸検査の結果との関係を追究した。

訓練内容は座学と実習とからなり、前者は論文試験、後者はチェックリストに基づき、減点法による実技試験をもって評価される。

被験者は比較、検討に便利なように全被験者62名中訓練成績の上位、下位群各20名を選択したが、研究計画時に予定されていたことなので、該当者は出身期、年齢、勤務場所、当該職種、職種歴などがほぼ同じで成績だけが異なる対を用いた。

訓練成績は出身期により訓練科目の内容や数、さらに評価基準にも若干の変動があるので、あえて特定科目の

得点に依存せず、総合成績に基づく序列を該当期生の総数で除して得た数値により順位づけた。

教的推理・検索検査に表われた知的作業能力には、若干上位群が優れているものの、大差はない。他の全検査については作業前に比較し、同後は両群とも当該機能の低下を示すのは当然としても、特に注意配分、反応時間値において下位群は著しい。さらにこれの検査は作業の前後を問わず両群間にはかなりの差があり、中でも注意配分が顕著である他、狙準検査で上位群の平均が前、後ともに遅延反応を示すのに対し、下位群では逆に焦躁反応にあるのは対照的である。

以上の結果から、今回の諸検査中、二、三については適性検査の一部としてかなりの有効さを認め、なお詳細に分析中である。

計器読みとりにおける明るさ対比の影響

東京教育大学 小保内虎夫 金子 隆芳
白梅学園短期大学 大川 雅司

航空機のパイロットが、明かるい外界から暗い計器板へ目をうつして目盛を読みとるという状況を想定し、両者の間の明るさの差が著しいとき読みとり時間がどのようにおくれるかを検討するのを第一の目的とする。またその場合、計器板塗装の明度の効果をしらべ、計器板の色彩設計上の資料を得ることを第二の目的とする。

実験は実験室内で外界と計器板との関係状況を模倣したセットでおこなった。外界条件の最高輝度は1170ミリランペルト、最低は4.5ミリランペルト、パネル面照度は最高2000ルクス、最低1.5ルクスにとり、この間の数種の段階をとった。またパネルと文字板の色については、黒、濃灰、中灰、薄灰、白の数種の組みあわせをつくった。結果として、外界輝度がたかい程、パネル面照度の低下にともない計器読みとりがはやく障害をうけるという当然の影響がみられたが、灰色パネルに、濃灰色文字板を配した場合はそれがやや緩和される。しかしそれでもパネル面照度が10ルクス以下になると急に読みとりが困難になる(外界輝度1170ミリランペルトの場合)。黒い文字板の場合はパネルの色による差は特に見られない。白いパネルに薄灰の文字板という例外的な場合でも100~2000ルクスの好適照度下では他の条件と差はない。外界とパネル面または文字板との輝度比を便宜上デシベルで表わせば、20~30デシベル以上になると読みとりが障害があらわれる。この場合、黒い文字板と濃灰色の文字板とでは、後者の方が5デシベルほど臨界輝度比がた

かい。結論として、パネルの明度の効果は特に観察されなかったが、文字板の明度は黒より濃灰色の方が適当である。

計器読取に関する研究(5)

——計器の表示方式についての人間工学的研究(その3)——

立教大学 ○正田 亘 豊原 恒男
水口 礼治

目的：第25回日本心理学会の報告に引続き、計器読取りに影響を及ぼす諸条件を吟味する。(1)精神作業を負荷し、その作業中の読取りは如何なる程度の干渉を受けるか、(2)意図的に筋肉疲労を負荷し、正常な状態での読取りと比較する。

方法：内径7cm、文字8mm、1桁数字0~10、中間1/10、1/2、中間なし3の種のダイヤル使用。(1)被験者は、実験中に加算作業を負荷される。加算は予め、テープレコーダーに一对の数字が at random に吹きこまれてあり、それに単語が挿入されてある。被験者はタキストスコープをのぞきながら、テープから聞える一对の数字の加算を行い、答を書取り、その間に所定の刺戟が提示されて、読取りを口答で行う。(2)エルゴメーターにより3kgの負荷をかけ、負荷後読取りを行わせる。被験者は何れも5名。

結果及び考察：(1)平均150.6個の加算作業中、精神業負荷実験下での書き落し率は平均18.8% (正常事態では0%)、刺戟別の誤読数においては、三刺戟の間にほとんど差がみられないことが目立つた。前回の実験では、三者の間に顕著な差がみられたことから、今回の如く、精神的な緊張を要する事態での読取りにおいては、刺戟に刻まれた目盛間に積極的な関係がないこと、すなわち、精神作業も同時に遂行する場合においては、読取りも大きな影響を受け、特に、細目盛の効果が減退することが結論づけられる。(2)エルゴメーターによる所定の作業の前後に測定されたフリツカー値には殆ど差がなかったが、被験者は相当の筋肉疲労状態で、読取りが行われた。この実験では目盛の少い刺戟では、普通の状態で読取った場合よりも誤読が多くなっているが、細目盛の刺戟では変化がみられなかった。従って、このような一時的な筋肉疲労の状態では、精神作業中のような影響はみられない。一般に、読取りは精神的緊張によって、より干渉をうけるものであると考えられる。

計器読取りに関する研究(5)

—計器の表示方式についての人間

工学的研究(その4)—

立教大学 水口 礼治 正田 亘

豊原 恒男

目的: パネル事態におけるダイヤルの誤読の現れ方について実験的に考察する。

方法: 装置~灰色のベニヤ板に直径8cmの円3つが水平に切り抜かれ、裏面にシャッターと刺戟が取り付けられた。V.P.の目の高さに水平で80cm離れている。刺戟~(その3)の(A)・(C)の二種各3枚づつ。手続~刺戟Aを3枚同時提示指示点無作為組合せにて20試行。20分休憩後刺戟Cについて同様の試行実施。露出時間3秒。読取り方向は自由であるが、順序は一貫させた。V.P.は読取った値を順次紙片に記入させた。被験者は5名で何れも心理学専攻者、結果の整理は読取順序と誤差の程度について刺戟A・Bが比較されるようになされた。

結果及び考察: 1) 読取順序に従って正確度は低下した。刺戟A・Bの最初の読取りでは67%, 57%であったが、3番目では48%, 58%なり、Aの変動が大きい。2) 過大・過小読取り別にみると、読初めは1目盛の誤読が多く。大きな読違は少い。3番目の読取りでは五目盛以上又は読落しが著しく多くなっている。これはA・B両刺戟に見られる傾向であった。3) 上述の関係についてA・B両刺戟を比較してみると、Cは1目盛の誤りが大きい、大きな誤りは少ない。Aはその逆になっている。4) 上述の関係は絶対誤差量で整理した場合でも変りはない。5) 刺戟Cに中間目盛がないので、完全正答は当然出来ない、1目盛程度の誤りを正反応として許容してみると、刺戟Aは読取順序による差には変りないが、刺戟Cでは順序による差はなく、しかも、常にAよりは正確度が高い。

総括: パネル事態での読取りは単独提示条件での読取りと一致せず今回使用されたAのような、目盛数の多い場合、どうしても目盛に惑われて読取時間を不足し、結果として最後の読取りが粗末になる。従つて、そこで起る誤りも5目盛以上又は読落しの誤が多い。

自動車速度計の読み易さについて

慶応義塾大学 太田垣瑞一郎

吉田 俊郎

1) 実験の目的: 実物速度計を直接対象とし、型や目盛の意匠による読み易さを、振動の有無と程度に関連させて検討する。

2) 1961年3月より6月にわたり、慶大工学部振動実験室において行った。被験者は心理学専攻者2名、機械工学専攻者1名、助手1名、計4名。

3) 実験条件と手続き: 丸形(大, 小)扇形, 長方形の4種の計器を用う。実験者は計器をモーターで回転させ、変圧器で任意に指針を定位し、「用意」の合図の後シャッターをすべらせ、計器面を露させる(計器面800Lux, 被験者の眼との距離65~70cm, 指針呈示位置は5等分された目盛の各範囲に同回数でしかもでたための順序に出すよう実験者が調整。露出時間2000)被験者は針位置を認めると同時にスイッチをおし、目盛を報告する。

4) 実験の種類: ①4種の計器について、被験者正面に計器を固定し、計器の傾斜を0, 30, 45, 60, 90度(0°は水平, 90°は垂直)にかえ、静止, 弱振動(片0.25G, 5~6 ϵ)両条件下で実施。②丸形, 扇形, 長方形の3計器につき、静止条件30度の場合、計器位置を正面から左右にづらせて実施。③丸形, 正面, 傾斜30度の場合、強振動(片0.5G, 5~6 ϵ)条件下で実施した。

5) 結果: 読み易さの指標として、読みの正確さ、認知時間、認知時間のSDをとる。分散分析の結果、各測定値には明かに個人差を認めたが、条件別の傾向はほぼ等しく次の結果を得た。①傾斜は30~40度附近が最も有利。②丸形が最も有利、次で扇形、長方形最も劣る。③目盛の右側より左側が読み易い。④計器設置は正面が最も有利、次で左側、右側は最も劣る。⑤静止、弱振動両条件では読み易さに差は認め得ないが、強振動では明かに不利である。

TATによる自動車事故運転者の分析(3)

科学警察研究所 只沼 良行

目的: TAT及び面接による資料にもとずき、事故寡少者との比較において事故頻発者の問題点を検討する。

手続: 1) 被験者—過去1年3ヶ月における事故回数5以上のタクシー運転者を事故頻発者(X)群・事故回数2以下を事故寡少者(Y)群とし、年齢、運転経験

年数、タクシー経験年数、学歴等の諸条件が大略等しくなるように10対の被験者を選んだ。2) 使用図版——TAT日本版8枚(カード番号、2, 6, 7, 8, 10, 14, 15, 16)検査の施行は標準通り。3) 面接調査——家庭生活及び職場生活に関する質問項目を定めて行った。4) TATの整理方法——①家庭生活についての言及、②職場生活についての言及、③感情調、④物語の結末、などについては5段階尺度による評価、⑤課題解決様式は肯定的、否定的、回避的の分類による、⑥欲求・圧力分析。

第1表 家庭生活についての言及(頻度)

群 \ 尺度	-2	-1	0	1	2	計
X	3	15	2	5	3	28
Y	0	8	4	10	4	26

第2表 職場生活についての言及(頻度)

群 \ 尺度	-2	-1	0	1	2	計
X	2	4	0	0	0	6
Y	1	6	3	3	2	15

第3表 感情調(%)

群 \ 尺度	-2	-1	0	1	2	計
X	18.9	47.3	19.7	7.9	6.5	100
Y	6.8	45.3	27.4	17.8	2.7	100

第4表 課題解決様式(%)

群 \ 項目	肯	否	回	計
X	33.3	12.8	53.9	100
Y	49.0	13.7	37.2	100

第5表 結 末(%)

群 \ 尺度	-2	-1	0	1	2	計
X	29.3	19.5	9.8	26.8	14.6	100
Y	13.6	13.6	25.0	31.8	15.9	100

結果と考察：X群で課題解決様式(第4表)の回避的なるもの53.9%、結末(第5表)における欲求不満、失望、失敗等(尺度、-2及び-1)の48.8%(Y群27.2%)等と問題とすべき傾向がみられる。しかし個別に考察すればX群の全部のものが問題性質をもっているとはいえず、また問題運転者と同様な性格の特徴を示すも

のがY群にもみられるのである。例えば、①劣等感を抱き、回避的かつ小心で、それらの程度の強いものがみられたが、かような人も事故を起す率が少ないものと推測し得る。しかしこの点については今後検討する必要がある。なお、本検査から、②X群で仕事上の悩み、不満を表現するものは家庭における不満、葛藤をも示す、③Y群で仕事への意欲、満足を示すものは家庭生活における満足、安定感を表わす、との結果が得られた。

長距離運転およびその同乗における 心身機能の推移について

科学警察研究所 ○宇留野藤雄 桑田 淑子
大塚 博保 小野 章夫

目的：長距離運転および同乗の心身機能にあたる影響とその場合、運転専従者と学生運転者に対する影響の相違を比較する。

方法：1. 機能テストは学生3名、専従者9名。2. 自覚症状および疲労部位調査は前者の他に学生20名。全走行距離約5,000キロ、日数22日。

結果：ICFF値は両群とも当初から1週間位は5%前後の低下を示し、その後は回復過程を通り後半1週間はまだ、著しく低下する。何れの測定点でも学生群がより低下している。

2. 日間傾向では、当初は作業前値に比べ、作業後および就寝前値は低下する。しかし7日頃から反対になる。これは、作業前値が他に比べ低下しているためである。この傾向は最後までつづく。前日の蓄積疲労であると考えられる。

3. 触三点弁別値は、作業前値に比べ、作業後値は低下するが、CFF値に比較して就寝前には回復する。

4. 身体疲労部位調査は非常に個人差がある。全体を平均してみると、両群とも第4日目頃から訴え数が多くなり15日目頃から急激にふえる。日間で比較すると作業後、就寝前、作業前の順で訴えが多い。

5. 自覚症状調査では学生群は日をおうて多くなる。運転専従者群は当初の1週間をのぞき、むしろ減少している。また前者の訴えは作業前に多く、作業後、就寝前に減っているのに対し、専従者は、朝の訴えが多い。

6. 項目別で、とくにA、Cを手掛りに両群を比較すると、学生群は前年は専従者よりつねに訴えが多いが、後半では反対に、A、Cとも専従者より少なくなっていた。

自動車事故多発運転者のパーソナリティ
について (II)

科学警察研究所 小野 章夫

1. 性格と知能が自動車事故を起し易い条件となるかどうかという問題について事故多発運転者群を事故寡少運転者群と比較して追求したこれまでの結果によると、性格については、シユナイダーの類型を基とし、それに若干の補足を加えた病理心理的分類に従えば、多発群には、抑うつ性、神経質、感情高揚性、自己不確実性、意志薄弱性、気分易変性などの傾向、つまりもっと概括的にいえば、神経質で回帰性の反応が、寡少群に比べて強いのに対し、寡少群には、粘着性の反応が、多発群に比べて強いという目安が立った。他方知能については、キャツテル知能検査の4つの下位検査の項目分析をしてみると、系列と母型の2つの下位検査において、多発群は寡少群よりその成績が劣るのではないかという見当が立った。そこで性格については回帰性反応率、知能については系列と母型の総合成績なる2つの指標と事故発生頻度との関係を見るのがこの報告の目的である。

2. 過去1年3ヶ月以内に起した事故が、皆無の者14名、1回の者11名、2回の者11名、3回の者6名、4回の者13名、5回の者1名、6回の者2名、9回の者1名、合計59名の東京都内のタクシー運転者に対して、市場式性格調査票(1)およびキャツテル知能検査を行った。

3. その結果、性格の回帰性反応率の、24~49%の間に事故頻度0~2回の者、33~52%の間に事故3回者、49~70%の間に事故4回者、63~83%の間に事故5・6・9回者が、それぞれ分布した。また知能の系列と母型との総合点の、14~22点の間に事故皆無および1・2回者、17~21点の間に事故3回者、8~21点の間に事故4回者、12~13点の所に事故5・6・9回者がいた。大体事故4回を境にして、事故頻度が多くなるに従って、回帰性反応率が増え、系列、母型の総合点が下る傾向をみた。

についての検討を愛知県警察より依頼され、現状の調査分析とそれにもとづく適正な横断歩道の設置基準を提案した。

調査は主として、不法横断者の実態の把握を目的とし、更に、二三の条件を設定して、不法横断の変化をしらべてみた。調査区域は名古屋市内の目ぬき通りである「広小路通り」と「南大津通り」のそれぞれ一区間をえらび、昭和35年11月から昭和36年2月にかけて実施した。

調査結果によれば、不法横断者数は全横断者数の約60%をしめ、不法横断の頻度は場所により異なるが、特に、信号機のない交差点で高く、不法横断のコースは緻密な垂直横断ではないが、概ね15m以内の区域での斜め横断が多かった。そこで、簡単な柵を試作し、不法横断の多い地点に設置し、また、交差道路の方にも横断歩道の道路標示をし、不適當な二三の横断歩道を閉鎖するなどの条件を設けて不法横断の状況を調査したところ、不法横断率は全横断者の40%にまで減少した。

調査結果の分析にもとづいて、不法横断防止のためには、適当な場所に柵を設けること、交差道路の方にも横断歩道の道路標示をすること、及び、歩行者専用の横断歩道標識を設けるなどの施策を講ずることが必要と思われる。そして、そのような施策を講ずれば、横断歩道の数は現状より減らしても、不法横断率を上げることはないようである。そこで、これらの施策と併行して、どのような場所に、どの程度横断歩道を設けるのが適当かについての横断歩道の設置基準を提案した。

横断歩道設置についての研究
——不法横断の実態調査とその分析——

名古屋大学 内山 道明 横瀬 善正

昭和35年の末に施行された新道交法では、横断中の歩行者の保護が強化されたが、それによって交通能率がひどく低下するようでは困るので、適正な横断歩道の設置

社 会

団地の主婦の生活に関する一調査

関西学院大学 仲原 晶子
大阪府立大学 松原慶太郎
帝塚山学院短大 沢井 幸樹

この調査は、大阪近郊のある公団住宅の主婦を対象とした実態調査から、20才代（テラス……49名、鉄筋……129名）30才代（テラス……68名、鉄筋……58名）の主婦を抽出して、主として主婦と子供の関係、夫との関係によって団地主婦の生活を探り、更にそれをうらづけるものとして、近隣関係、団地生活の満足度をとりあげた。

従来、家庭生活構成の要因として、形式的因子と実質的因子の両者が考えられてきた。団地の場合には、その形式的因子である(1)家族の人的構成、(2)経済的状態、(3)近隣、(4)住居の広さ。様式などについては、入居条件等による枠から大差はない。しいていえば、テラス、ハウスと鉄筋住宅の相違が(2)と(4)の二点に若干の差をもたらせ、やがては(1)の因子にも影響している。これらの相違が実質的因子である(a)家庭の生活形態、(b)児童への養護、しつけ。(c)両親の教養、態度などと、どのように関連しあっているかということについて、最初にあげた事項から分析した結果は次の通りである。

主婦の子供または配偶者に対する関係からは、テラス群と鉄筋群に差をみいだすことは困難であるが、これを主婦の近隣関係、団地生活の満足度と関連させてみると、テラス群の方がどちらかといえば心豊かに円満に日々の生活を営んでいるらしいということがいえる。このことは、同時に調査した帰属階層に、あきらかに反映している。

霞浦漁民の漁業に対する意識に関する一研究

茨城大学 海野 悦子
木本 英人

目的：霞浦は近年水利用の面から多くの関心をあつめ、茨城県の総合開発計画の重要な一環をなしているが、一方その漁獲高はここ数年来、とくにわかさぎ、白魚にお

いて減少傾向を辿っているといわれる。こういうなかで、霞浦で漁業を営んでいるものの漁業に対する意識を調べ、生業の条件との関係を通じその特徴点を追究した。

対象：調査地として

新治郡出島村牛渡——帆曳き網漁が主	91人
稲敷郡美浦村木原——定置網漁	32
行方郡麻生町麻生——その中間	91

の3ヶ所を選定し、各漁業組合員を対象に、調査用紙にもとづき個別面接を行なった。

結果：霞浦における漁獲高は漸減傾向にあるとみなされており、誰もがその将来に明るい見通しはもっていないが、漁業に対する執着という点では、この漁業への依存度により3つの地区でひらきがあり、牛渡、麻生、木原の順で小さくなっている。この依存度の大小は帆曳き網漁者とそうでないもの間でもちがいが、前者の方が大きく、これは漁業に従事するにあたってのモチベーションの差異におきかえてみることができる。漁種からくる条件の差地域上からくる差から、漁業者が互いに狭い競争心にかかれ“濫獲”という現象をきたし、漁獲高減少の悪循環をくりかえしている。また帆曳き漁者には専門的の性格の強いものも多く漁業への依存度も相対的に高いがそれが共通の利益であり結合せず、一方半農半漁のものも漁業への執着はありながら副業的態度から脱けえないので、これが土浦の業者、問屋に対し非常に不利な立場におかせる原因となっている。一般的にみられるこれらの狭い競争心—“隣り百姓的”心理と、漁業への副業的意識が原因となり結果となって霞浦漁業の現状を規定している面が大きいと思われる。

茨城県農山村住民の政治意識と投票行動 について——問題と方法（I）

茨城大学 磯信貝太郎 林 正邦
木村 俊夫 岡山 超
○中原 弘之

目的：茨城県選挙管理委員会の要請で公明選挙推進運動の方針樹立に関する基礎資料を集め、政治意識と投票行動の実態を把握する。

方法：面接法による。面接者は教官並びに心理学専攻学生が担当し、本年8月8～17日にかけて調査を実施した。

標本：標本地区として選管委によって稲敷郡美浦村第二投票区、真壁郡関城町第四投票区、那珂郡山方町西野内及び小貫投票区が選定され、各地区の選挙人名簿から無作為に標本抽出を行い、実査によって得られた標本は、

男199, 女220, 計419名であった。

調査票：14項目からなるフェースシートと6種目28項目からなる調査問題から構成され、口問口答を原則とするが、そのうち8項目はカードによる多肢選択法の形式をとった。問題と結果の概容：公明選挙運動の目指すものは、好ましい投票行動への啓発であり、従つて投票行動の適・不適を左右する要因分析が中心課題となる。性別・年齢・学歴・家族関係・家業・地域をⅠ次的因子、生活態度・政治的関心・政治的理解・選挙観をⅡ次的因子とすれば、①投票行動とⅠ次的因子、②投票行動とⅡ次的因子、③投票行動と両因子の関係を解析することにより投票行動に働らく要因が把握される。処理の結果、Ⅰ次的因子では性別・学歴・地域・年齢の順、Ⅱ次的因子では理解・選挙観・関心・態度の順に各々投票行動に寄与し、またⅠ次的因子よりもⅡ次的因子の方が寄与率が大きであつた。

以上の諸結果から、公明選挙推進運動によって指導啓発すべき方向づけ及びその可能性が明確化された。

茨城県農山村住民の政治意識と投票行動について(Ⅱ)

茨城大学 磯貝信太郎 中原 弘之
木村 俊夫 ○岡山 超
林 正邦

発表の主題：上記課題の一部として、現代の世相ならびに政治に対する不満と政治的関心との関係について考察する。

(1) 現代の世相ならびに政治に対する不満は、政治行動への motive としてはたらくと考えられるが、標本においては世相に対して不満を表明する者の数が明らかに多い。しかしながら、その内容は自己の経済生活・生産生活に直接関係したものが多く、また問題の捉え方はしばしば自己中心的で、世相を眺める視野の狭さが推定できる。しかもそれを地方政治の課題として取り上げ、解決しようとする態度に不足している。

(2) 世相に対して不満を有する者が、政治に対しても不満を表明するとは限らない。しかし世相に対して不満を表明しない者は、また政治的不満も抱かない傾向が顕著である。

(3) 世相または政治に対して不満を表明した者は、そうでない者に比して政治的問題に対する関心の度合は明らかに高い。

(4) 世相ならびに政治に対する不満表明の度合は、政

党支持の傾向に影響する。不満を表明しない者は、支持政党を明らかにしないことが多く、政治的態度が不鮮明である。しかし不満表明の度合と、保守・革新の支持率との間には、とくに明瞭な関係はない。

(5) 保守・革新の支持率の比較では、保守支持が多く、不満の政治的解決は保守党的な方式でなされることを期待している者が多いと言える。

(6) 以上の断言は、何れも推計学上十分な有意水準をもってなされ得る。

茨城県農山村住民の政治意識と投票行動について(Ⅲ)

——政治意識と投票行動との解析——

茨城大学 ○林 正邦 磯貝信太郎
木村 俊夫 岡山 超
中原 弘之

政治意識を投票行動にはたらく二次的因子群と考え、そのうちの因子として政治的関心が投票行動といかなる関係を有するかについて問題とする。

調査表の若干の質問項目を選び、被調査者の回答を統計的に分析した。政治的関心を町村政に対する場合と国政に対する場合とに分け、さらに回答内容により関心群と無関心群に区別する。つぎに投票行動を町村議会議員選挙の場合と衆議院議員選挙の場合とに分け、回答内容にしたがって論理的にみて望ましい投票行動の水準にあるものと望ましくない投票行動の水準にあるものとそれらの中間に位する水準にあるものと三分類する。そしてそれぞれの場合における政治的関心と投票行動との関連性を捉えようとした。

町村政段階および国政段階における両者の関連は、ともに有意の関係がみとめられた。ただ町村政段階では両者の間に介在する要因の影響によつて、国政段階における関連ほど明らかな傾向性がみられないのであろう。しかし関心の有無が投票行動の水準を左右している傾向はみとめられる。

一層抽象化された全体的な政治的関心と投票行動との関連を、前同様の手続によって検討した。一般的傾向として関心のある者の方がより望ましい投票行動をとる傾向が明らかにみられる。

しかし政治的関心が投票行動に関与するのは、理論的に云って政治的認識の因子を媒介すると考えられるので、政治的関心と政治的意見との関係を併せて検討してみた。両者の間には有意の関係があり、関心のある者ほ

ど政治的意見を持っている傾向を認めることができる。

コミュニケーション行動の発達の研究 (IV)

—小学生における非言語的コミュニケーションの理解様式(第二実験)

新潟大学 滝沢 武久

この実験は、昭和34年度文部省科学研究費による総合研究「コミュニケーション現象の総合的研究」の一環としておこなわれた研究の一部である。被験児童として、小学校1年生、2年生、3年生をえらび、彼らに、非言語的な形で、一定の伝達内容(模型図、見取図)を示したばあい、子どもたちは、どんな形で、そこから必要な要点を把握し、これを相手に説明し、また、この図をみない相手はその説明をどのように理解するだろうか。この問題を、発達的に検討するのが、この実験の目的である。

実験1. 材料として、ビュレットの模型図を用いる。ここから把握されるべき要点は、1. 機械の名称、2. 部分の説明、3. 動作の説明、4. 水の出る理由、5. 動作の結果、の5点であり、完全な表現(理解)を2点とし、不完全な表現(理解)を1点とし、まったく表現(理解)できぬものを0点とし、次の係数を算出した。

$$\alpha = \frac{d}{b}, \quad \beta = \frac{d}{a}, \quad \gamma = \frac{b}{10}, \quad \delta = \frac{a}{b}, \quad \varepsilon = \frac{c}{d}$$

(但し、説明者の表現得点をa、理解得点をb、再生者の表現得点をc、理解得点をdとする。)

実験2. 子どもに町の見取図を示し、一地点から他の地点へ行くための道筋を、地図なしに、他の子どもに伝達させる。このばあい、要点は、手掛りとして必要な目標物に関するものが6個と、方向づけの指示に関するものが6個ある。したがって、ここでは、次の係数を算出した。

$$\beta' = \frac{c}{a} \quad \gamma' = \frac{a}{12}$$

結果 実験1では、再生者は機械装置のシエマをつかって、説明者の表現を補うことができる。また、 ε は発達的に減少していくが、 δ は、3年生で再びふえるこれは理解力に比べて、表現がいちじるしく増大したからだ。実験2では、 β' が、1年生と2年生の間で、 γ' は2年生と3年生の間で、飛躍的に増大する。一般に、表現される文章数は、2年生になると急激にふえる。しかし、全文章数に対する長文数の割合が少くなるのは、3年生になってからのことである。

児童集団内における個人間の親和・反発反応の偏向——社会的対比についての一考察——

東京学芸大学 田中熊次郎

目的：児童集団にソシオメトリック・テスト実施すると、被選択(親和反応)および被排斥(反発反応)が、確率分布に比較して、いちじるしく極端にかたよる傾向がある。このような偏倚傾向のあらわれる原因は、個人の特性、自我防衛の機制、集団規範の感応、あるいは、社会的発達のパラドックスなどの問題から探求される。本研究者は、これらの規定因のほかに、社会的対比による強調化もはたらくものと考え、かような側面からの考察を試みる。

方法：(1)予備実験……表情略図(顔・身振)を単一刺激として提示し、快・不決の反応を求める。(2)本実験……ソシオメトリック・テストを実施した児童集団に、その成員と同数の表性略画を、無作為集団刺激および正規分布に近い集団刺激として提示し、選択(快)排斥(不快)を行わせ、それらの反応分布を比較する。

結果：(1)表性略画の選択・排斥の反応分布は、単一刺激提示よりも、集団刺激提示において、中心化の傾向を示す。しかし、確率分布と比較すると、いぢるしく偏倚している、この偏倚傾向は、ソシオメトリック・テストに、きわめて近似している。

(2)略画の集団モデルとソシオメトリック・テストとの偏倚傾向の近似度は、無作為の略画系列よりも、正規分布の略画系列の方が、より高い。また、児童集団の方が、学生集団よりも高い。

考察：児童集団内では、略画の集団モデルにおいて示される社会的対比による強調化に近いはたらきが、個人間の親和・反発の反応を偏倚せしめる一つの原因になっていると考えられる。

郵便調査法に関する研究 (I)

金沢大学 田中富士夫

郵便調査の欠点の一つは調査票を対象に送付しても、返信しない対象者が多いことである。しかし、返信率が単に低いだけで或る特定の対象者が返信するということがなく、若し返信者が全対象者からのランダム・サンプルと考えられるならば、返信結果からの推定値は精度が低いだけで特定の偏りはないとえよう。

この研究の目的は、返信者而非返信者が同一母集団に属しているか、あるいは異つた母集団に属しているかを

主として対象者の社会学的標識について吟味した。

結果の詳細は、表・図が掲載できないので割愛するが、返信対象者の群と非返信対象者の群とは、住所（地域差）、性、年齢、職業、学歴、生活水準等に於いてその分布の差があるとはいえないことが明らかになった。

しかるに、ある調査項目、例えば一日の新聞閲読時間を返信群、非返信群について調べると、その分布は2群間で差がみられた。

この事実には、調査票の基礎項目の標識について2群間に差がなくとも、調査が目指している項目では2群間に差を生ずる可能性を示している。従つて、基礎項目の標識については返信群が全対象者からの偏りのないサンプルであっても、別の標識については偏つたサンプルである場合があることを示している。

この結果を説明するためには、対象者の社会学的標識についてだけでなく、心理学的標識について2群を比較する必要があらう。つまり、返信する対象者と返信しない対象者の心理学的諸特性を明らかにする研究が行われねばならないだらう。

民族に対する差別態度の変化と人格性要因との関係について

熊本大学 葛谷 隆正

(I) 研究仮説 (a)より権威主義的な人格は、より非権威主義的な人格よりも、権威者の差別反対意見の方向により多く、差別態度を変化するであろう。(b)上の場合、権威者の意見が差別賛成のものであっても、同様の変化が見られるであろう。(c)しかし、非権威者の差別観は正の意見に曝される時には、より非権威主義的な人格の方がより権威主義的な人格よりも、その意見の方向により多く差別態度を変化するであろう。

(II) 被験者と研究法 熊本県立熊本高校(男)及び同第一高校(女)2年生約400名、それぞれ4 classes づつ。最初、権威主義尺度と民族差別態度尺度を課し、約10~14日後、権威者及び非権威者の意見を class 別に口答で課し、その後再度差別態度尺度に反応させ(S.36.6~9)、差別態度の変化を検討する。対象民族はアメリカ人・朝鮮人・ロシア人である。

(III) 実験結果 仮説(a)については、男女とも大体、仮説に近い状況を見ることができた。総じて、女子被験者においてよりも、男子被験者において、より明確にその傾向が観取された。(b)仮説に関しては、女子被験者の権威主義的グループはどの民族の場合にも、軽減方向への差別態度変化を示し、予想外であったが、男子被験者で

は、権威主義的グループも非権威主義的グループも共に、増大方向への態度変化を示し、しかも前者の方が後者よりも変化の割合が大きかった。(c)仮説が最もよく立証された。男女両被験者とも、どの民族に対する態度変化をみても、期待された方向への変化を示し、その状況が相当明確に観取された。但し全実験を通じて、態度変化に明確な有意性がみられたものは、(c)実験条件下の女子被験者のアメリカ人に対する態度変化についてだけであった。(a)(b)実験条件下で比較的女子被験者に期待される変化が窺い得なかったのは、差別的態度で差のみられない女子被験者が権威主義点で男子被験者よりも有意的に低い成績であったことに由るものと思われる。

情死の研究

慈大神経科 大原健士郎 竹山 恒寿
与良 健
東京都監察医務院 越永重四郎

情死を異性心中、夫婦心中、同性心中に分ち、15年間に都監察医務院で取扱った474件を中心として統計的成績を報告した。情死件数は年度別に見ると増加の傾向にあるが、自殺者総数に対する割合は必ずしも増加しておらず、昭和24年度に於て最高で5.4%を示している。過去15年間の情死の自殺者総数に対する割合は3.6%である。月別では1月が最高(11.6%)であるが著るしい差を認めない。然し鎌倉では観光シーズンに多い。男子が年長の者は74.3%、女子の年長者18.9%、同年令の者6.8%である。職業では単独自殺に比して女給、娼婦等が多い。10代に恋愛関係を動機とする者が多いが、年長になるにつれて他の諸因子の加わる傾向がある。無理心中は12.7%に見られた。後追心中は10代、20代初期に多い。夫婦心中は20代と60才以上の者に高率である。高令者には、無職、病弱者が多いが、これは単独自殺でも同様傾向を示す。同性心中は男同志が6件、女同志が17件で何れも10代後半より20代前半に多く認められた。

以上が統計的研究の要旨であるが、情死の研究では、この他に臨床的な研究、文化史的研究が併行して行われなければならない。そのため、症例をあげて、対人関係、中でも情死未遂者と家族間の葛藤、経済上の問題、男女の性格の組合せ、情死企図前の生活面の歪み、物の考え方、疾病の有無(身体疾患、内因性疾患)等の諸点について言及した。

なお、未遂者を中心とした臨床的な研究は熱海、鎌倉、横浜の病院を中心にして行い、文化史的な調査研究も併せて施行している。

犯 罪

法の社会心理学の体系特質とその基本的諸問題

東北大学 安倍 淳吉

犯行の社会心理学は法規準と社会に対する人の非適応条件に関する追究を中軸とすることはもちろんである。しかし、犯行が明確に把握されるためには、法（道徳）を積極的に遵守する人々の機制が明確にそれに対置され機能的動的に対比されなければならない。また逆に法遵守行動の機制は犯行機制との明確な対置においてのみ、その社会心理学の意味がはじめて明確となる。従って、犯行の社会心理学は必然的に法の社会心理学に移行体系化されざるをえず、そこに定位されなければならない。また法の社会心理学は法を積極的に維持適応する人々の社会・文化的諸条件のみではなく、犯行者の犯行場面はもちろん非犯行時の諸条件明確な諸条件の把握に貢献しなければならない。というのは、犯行者は基本的に社会適応場面を生活部分にもち、社会的生活のうちのみ先ず生存することが可能であり、それによってはじめて、犯行も可能となるからである。犯行とは反社会的行動場面を生活時の幾場面かにもつことによって、社会の中に生きる手段とすることを意味するにすぎないからである。従って、犯行者の諸問題は、非犯行者の機制との対決ばかりではなく、犯行者の非犯行場面の明確な意味の機能的な把握において、はじめて、その発生因や矯正条件を個体にそって的確に把握することが可能となる。また、非犯行者も食管法や軽犯罪法を犯さなかった者も少い。法の社会心理学は法に対するプラス、マイナス両側面の機制を総合的にとらえることにより、両側面にその必然性を把握する体系となる。この体系は犯行場面ならびに法適応場面を中軸にし、相互に緊密な関連構造をもちながら、トピックにそって問題群を形成することになるが、それぞれ人格および社会・文化含蓄性と歴史含蓄性の角度から機能的であるとともに歴史的 dynamics によって各行動場面の諸条件にそって構造的に処理されなければならない。そして接近場面の単位は、巨視的と微視的の接近を媒介にする中層接近を軸にしなければならない。また、明確な法適応グループと非適応のそれとの過程集団, juvenile delinquent または adult delinquent を法適応者と Criminal の間に重視しなければならない。

加害者の役割から見た浅沼事件

財団法人 民族科学研究所長 池見 猛

は し が き

全国の各大学心理学担当の教授、助教授、精神鑑定医、判事、検事、弁護士、公認会計士等約 200 名について浅沼事件をめぐる諸問題を調査をなす。

調 査 結 果

第 1 問 浅沼氏の加害者の役割

果した 39 名 40.02%, 果してない 50 名 51.6%, 回答し兼ねる 8 名 8.38%

第 2 問 浅沼氏が加害者の役割を果したと見る割合 33.0%

第 3 問 出版物に検閲制度の可否

必要とする 4.2%, 必要としないが条件をつける 4.2%, 必要としない 80.02%, 無回答 11.58%

第 4 問 三面記事担当者の刑罰規定の立法を必要とするか、必要とする 30.02%, 必要としない 54.2%, 必要としないが条件をつける 2.0%, 無回答 10.4%, 不明 3.1% (詳細は民族科学誌 10 巻 1 号を参考せう)

累犯経過に関する基礎的研究 III

最高裁家庭局 瓜生 武

目的および資料 本研究は、昨年の応用心理学会および本年の日本心理学会に報告した研究の続きをなすもので、目的は少年期累犯経過類型についての方法論的可能性を検討するものであり、資料は先きの報告と同一事例についての社会調査記録である。

方法 上記資料に基づき、累犯経過の型を規定すると考えられる諸要因乃至これらの間接指標となるもののうち、比較的確実に抜き出せる事項を選び、先きの報告で仮定した四種の少年期累犯経過類型ごとに該当事例百分率を比較した。

結果 単純財産犯の同種傾向群は、父母双方の未就学・義務教育未了、貧困、父母の欠損率が高く、フラストレーション要因が高い上、中学期長欠、低 IQ など資質面にも問題が予想され、且つ家族前科率高く、近隣がバタヤ部落等であることから、財産犯の不良規範学習の機会が極めて高いことが予想される。これに対して暴力犯への縮小定着を示す傾向群では、家庭経済、資質にめぐまれたものが多く見だし、非行原因としては近隣盛場

附近および徒博といった家族前科率の高いことが指摘出来、不良社会の専門化した手口への定着が縮少といった現象型をとっている可能性が考えられる。次に移行型の中心は、単純財産犯から暴力犯への移行型で、初期が単純財産犯の同種傾向を示す点で前者と異なるが、この群の要因特徴は、貧困、父母欠損といったフラストレーション要因が主で、不良規範の影響を予想させる特徴が少い。単純財産犯からの拡大傾向を示す群は四つの類型中最も例数が多く、少年期累犯の中心的な型と考えられるが、規定要因面では顕著な特徴がなく、機会的影響によって犯行形態が規定されるのではないかと予想される。以上は現象形態と要因との間に説明可能な関係を示し、この方法による分類の可能性が考えられよう。

保護観察付執行猶予者の特性に関する考察(A)

法務総合研究所 中河原通之 山本 輝夫
○小池 健二

目的：われわれは保護観察付執行猶予者に関する継続研究を行っている。本報告では先に再犯率に著しい差異の見出された年令と逮捕回数によるグループの特性を、性格、及び生活経歴の面から考察しようとしたものである。調査対象及び調査時期：昭和33年度中に東京保護観察所で受理した窃盗罪による、刑執行猶予者をグループ別に層化し、各層毎に層の大きさに比例するような標本をBグループ45人、Cグループ30人、Dグループ30人を抽出した。

調査時は、再入したものは35年11月、再入しないものは36年1月に行った。

方法：調査は面接調査と心理テストによって行われ、ここではその一部としてYGテストと生活経歴に関する質問項目をとり上げた。分析は主として各グループの分布の差異に注目して行った。

主な結果：(i) B-C間を特徴づけるものとして、兄弟数(B群大)及び社会的適応(主観的、客観的)の項目がある。

B-D間には比較的多く、特に有意性が高いのは、住居、職業、性格面では、神経質、社会的適応(客観性)、のんきさ、である。

C-D間を特徴づける項目はあまりなく、結婚、のんきさである。何れも性格面、及び生活経歴において二三の著しい相異点をもっている。

(ii) グループをまとめてみると、B・C-D間に著しい差が多く、生活経歴や、Y-Gテストの結果から、

B・C；Dを分ける項目は、住居(B-Cに親・妻と同居の者が多い)、職業(B-Cに職業のあるものが多い)、結婚Y-GテストにおいてはC(気分の変化：Dには気分の変化大)、N(Dは神経質なものが多い)。O(B-Cに客観的大)、C₀(Dは非協動的)、R(Dにのんき大)等であり、これからグループはB・C-Dに分けられるようである。

窃盗犯罪者の研究——(1)

——保護観察付執行猶予者に関する一般的考察——

中河原通之 山本 輝夫 小池 健二

目的：われわれは、刑の効果に関する研究と関連して、窃盗犯罪者の特性を探求し、(1)窃盗犯罪者の再犯率が他罪名犯罪者に比し著しく高いこと、(2)年令、逮捕前歴が再犯と密接な関係をもつこと等を知った(日本心理学会第24、25回大会報告)。そこで年令及び逮捕前歴により犯罪者をグルーピングした場合

(1) 窃盗犯罪者がいかなる特性を示すか

(2) 年令、逮捕前歴以外に再犯と密接な関係を示す要因は何か

を、この研究で明らかにしようとして試みた。

対象：昭和33年東京保護観察所新受執行猶予者914人。

方法：保護観察所の記録、確定裁判記録、警察庁指紋原票による受理後2年間の追跡。

結果：(1)窃盗犯罪者437人を4集団(I：逮捕前歴なし、II：前歴1～2回及び30才以上で前歴3～4回、III：25～29才で前歴3～4回及び25才以上で前歴5回以上、IV：24才以下で前歴3回以上)に分け、同一区分で得た他罪名犯罪者の集団と比較すると、年令、逮捕前歴と再犯との関係が、窃盗犯罪者において、より明らかである。

(2)窃盗犯罪者において再犯と密接な関係をもつ要因を示すと「処分前歴に身柄拘束処分あり」(24才以下前歴3回以上の集団における再犯率：86.5%)、「犯時職業なし」(86.8%)、「犯時住居不定」(88.7%)、「受理時保護者が非親族」(88.4%)、「保護観察開始時保護観察所へ不出頭」(93.5%)である。

以上の結果は、(2)に示す要因と再犯との関連を、他罪名犯罪者についても検討すること及びこれら以外に更に再犯と密接な関係をもつ要因を探求することの必要性を示唆するものである。

窃盗犯罪者の研究

保護観察付執行猶予者の特性に関する研究 (B)

法務総合研究所 中河原通之 小池 健二

○山本 輝夫

目的：本報告は考察(A)に続くもので、一般的考察により明らかにされた再犯率による各グループの特質を再入者に関して追及しようとするものである。当面の目標としては、(i)性格特徴及び態度におけるグループ間の差異。(ii)性格、知能、態度に関する類型とグループとの関係について考察することである。

対象及び調査時期：対象は考察(A)の中の再入者であるが、態度調査、心理テストとの関係で、第Ⅰ回(35年11月)、第Ⅱ回(36年3月)ともに調査対象になったもの、すなわち、取消刑により入所し、その期間中在所した50名である。

方法：目標(i)に関しては、グループ(B, C, D)及び、調査時での在所期間(1年6月以内、それ以上)の二要因による分散分析を利用し、(ii)に関しては、態度尺度値(36項目)、Y-Gテスト(12項目)、田中B式テスト(8項目)のテスト結果を正、負の二分割に分類し、各グループに所属する標本10名に対して、Q-techniqueによる因子分析を利用することにした。

結果の概要：分散分析によってグループが有効な要因と考えられる性格特徴には、神経質(B群に傾向が少い)、交互作用が有効なものとして、気分の変化(B群が小さい)、神経質、のんきさ(B群がのんき)が見出され、態度では、伝統的服従的な面にBC群が肯定的であることが見出された以外では特に顕著な点は認められなかった。

Q-techniqueによる人格類型に対しては、知的水準、情緒変易性、順応的態度などの要因の作用がむしろ強く影響しているようで、C群が典型的な傾向を僅かに示す以外ではグループの影響はほとんどみられなかった。

少年非行の予測に関する研究(第二報)

岡山県玉島児童相談所 須見 善六

目的：触法児童の再犯予測については第25回本大会に発表したが、今回は触法行為が未だ起らない時点に立っての予測を研究し、予測表を作成すると共に、不良化予防対策上の示唆を得ようとする。

方法一資料は岡山県玉島児童相談所に昭和29年4月以降

通告された触法児童(再犯のみ)のケースレコードと玉島市内小中学校(5校)から提出の調査票(小学校4年生以上)記載事項によった。触法群は100名、正常群は2334名(反社会的行動のないもののみ)を選んで次の手続をとった。①要因の選定：従来諸外国の研究により非行児と正常児の間に有意差の顕著な要因とされているもの12を選び、担任教師の評定をもとに X^2 検定を行った。②点数化：両群の%の差の比により重みづけした。③経験表の作成：各人の総得点を算出し予測の経験表を作成した。

結果： X^2 検定の結果は何れも顕著な有意差が認められた。点数化(重みづけ)の結果は「家庭の雰囲気」又は「親の態度の不良」20、「家族の欠損」15、「学業不振又は知能の低劣」13、「怠学」11、「性格評定不良」9、「非行者同居」8、「離家傾向」9、「孤独」7、「不良交友」6、「貧困(生活保護)」3となった。経験表による的中率は分割点を35.5としたとき両群を併せて99.0%。(的中しなかつた正常群の0.6%と触法群の11%の事例では非行の準備状態が起つたばかりで継続期間の短いものとか、評定が不明のもの等があった。)分割点(35.5)以上の得点のものでは小学校低学年より、高学年、中学校と移るに従って非行化するものが増加して居り、分割点以下の得点のものにはこの移行が見られない。予測表からは得点が35.5に達しないうちに指導に着手すべきであること、及び重みづけの結果からは予防対策は何れに重点を置いてたてらるべきか等の示唆が得られる。(更に同一校の中学生(15校)について触法通告はないが数回以上非行のある群(149名)と正常群(全く非行のないもの)6961名とを対象に同様の方法で予測表を作成したら上記の点数とやや異ったが、詳細は次回(第3回)の発表にゆずる。)

質問形式と証言の関係について

科学警察研究所 佐伯 茂雄
西村 春夫

目的 警察における少年補導という仕事の大半は「引き出す」面接であるといえる。そこでわれわれは、質問形式と証言(回答)の関係をまず吟味することによつて、少年補導面接の改善という課題に接近しようとした。

方法 いまからカラースライド写真を観せる。お互に話しをしないで観ることの2点を注意した上で、縦90cm横130cmのスクリーンに投影、被験者に1分間観せる。その直後この写真に関する質問紙を配布、回答

(証言)を求めた。(質問紙は暗示の少ないN形式と暗示問のみのS形式の二種類である。)

対象 東京都某区の某中学校の2年生2クラス99名である。(男53名,女46名)〔51名(男27名,女24名)の1クラスには質問紙のN形式のものを,48名(男26名,女22名)の1クラスにはS形式のものを配布,クラス間のIQ等には差はない。〕

結果 N形式の平均正解数は5.0/11, S形式のそれは3.8/11で,両者の間には差がみられた。しかし,それぞれの質問を比較した場合,かならずしもN形式の各質問はS形式よりも高い正解率を示していない。

N形式, S形式をまとめ肯定式, 否定式等の質問形式の方向から吟味すると, 堀川直義氏がすでに明らかにしているように, 肯定式の質問の正解率が, われわれの対象においても最も高い。しかし, その他の形式は, かならずしも堀川氏のいうところとは一致しない。(特に, 強制式(前提問))

以上のことは, 証言(回答)すべき事柄(中心的, 周辺の)に因るものと思われる。それは, 回答の慎重性指数からも暗示された。

したがって, 今後の吟味においては, 質問形式と証言すべき事柄等の組合せを慎重に考えてゆく必要がある。

精薄非行少年の絵画統覚検査における 動物絵画と人物絵画との比較

東京教育大学 堅田 明義
○篠原 睦治

目的 精薄非行少年(CA平均17才9ヶ月, IQ平均54)を被験者とした, 両テスト結果に差が見られるか, を知るために本研究を行う。

方法 (1)被験者—東京医療少年院の白痴級の者を除く約90名の内より, ランダムに36名を採用した。

(2)材料—「精研式主題構成検査成人用」12枚中, 図版番号7M, 2M, 3M, 8M, 6MF, 11MFの6枚をとり出し, 出来る限り, 動物にとってリアルな動物絵画対応板を作製した。

(3)手続—被験者を二グループにおけ, 1つのグループには, まず動物絵画テスト(以下AP)をうけ, 一週間後に, 人物絵画テスト(以下HP)をうけた。他のグループは, 前者とは逆の順序で, 2つのテストを受けた。
<比較基準> 小反応するまでの時間。(2)テスト時間。(3)まとまった物語が出来るまでの質問の数。(4)第1の質問がなされるまでの物語の文節数。(5)登場人物, 動物の

数。(6)導入された人物・動物の数。(7)結果の分析。(8)内容の構成度。(9)内的状態を示す文節の数。(10)非行場面の再現度数とその程度。

結果と考察 (1), (2)項のみ) 反応時間に関して, 両絵画を比するに, A・Pの方が, H・Pより, 遅くなる者の数をはるかに大きい。彼の心的状態をA・Pにて直ちに, 投射して言語化することの困難性を持つ者がより多く存することを暗示している。

A・Pが持っている現実水準の低さの故と, 解釈しうる, いくつかの根拠を指摘しうる。

テスト時間に関しては, 両絵画に明らかに見られる差は存しません。ただ, A・Pにおいて, ほとんどのカードで, 分散がH・Pに比して, かなり大であります。A・Pに対するテスト時間に個人差が大きいことを示しますが, CAが同じレベルの正常者とは, APに対する以前の問題として, 質的差異があると暗示されます。

少年受刑者の所内適応に関する研究 第一報 予備調査, 目的, 方法

信州大学 ○長岡 青遠 新海 安彦
中川 大倫 五十嵐齊一
新井 康祐 猿橋 孝雄

本研究は昭和34年“取扱困難なる少年受刑者の精神医学的ならびに臨床心理学的研究”として発表して以来引き続き今日も追求している問題である。

これ迄の研究を通じて強く示唆された点は取扱困難を規定する要因として社会的適応の拙劣さという傾向の認められる事であった, そこで所内に於ける適応状態を測定する尺度を作るに至つた。

この尺度が自己評定用尺度と担当評定用尺度である。かかる尺度を松本少年刑務所に在所中の少年から選んだ169名と担当教官に実施して 妥当性と信頼性について吟味した。妥当性吟味のために客観的基準として懲罰回数と懲罰日数及びこれ迄の研究で使用した項目からなる大まかな評価(3項評価—担当教官評定用)を採用し又, 信頼度の吟味には折半法, 再テスト法, 面接法を採用した。

以上が本研究の目的, 概要である。

少年受刑者の所内適応尺度（自己評定用）

の吟味——その1——

信州大学 ○五十嵐齊一 新海 安彦
 中川 大倫 新井 康祐
 猿橋 孝雄 長岡 青遠

目的：受刑者の所内における適応状態を把握する一方法である自己評定尺度は現在見当たらない。彼等の適応状態を知る必要上からこの種尺度の作製を試みた。

方法：対象者は前述した。実施は昭和36年4月25日から同月28日迄。再テストは同年8月11, 12日。所属工場および食堂で全対象者を数群に分け、正午前後に実施した。

尺度作製過程

1. 内外の尺度、刑務所職員および我々のこれ迄の受刑者との面接より得た知見等を手掛りとして、まず、個人的、社会的、職業的領域にふくまれる20の問題項目を選んだ。その後、問題として無意味なものや意味のあいまいなものを除外して13問題項目からなる第一次試案尺度をつくった。

2. 次に、この13の問題項目のそれぞれが、適応状態のより望ましい者より望ましくない者とを識別するかどうかを吟味した。その結果、識別し得ない2つの問題項目を除き、11の問題項目からなる第二次試案尺度をつくった。

3. この第二次試案尺度について、妥当性と信頼度を検討した。

i 妥当性：この尺度の得点から得られた Good group, Poor group の両群について、三項評価得点と懲罰回数それぞれの平均をみたところ有意差が認められた。

ii 信頼度：折半法と再テスト法で検討した。折半法では尺度全体としての信頼係数は0.57、再テスト法では相関係数は0.54であった。いずれの係数も真の相関は0でなかった。

少年受刑者の所内適応尺度（自己評定用）

の吟味——その2——

信州大学 ○新海 安彦 中川 大倫
 五十嵐齊一 新井 康祐
 長岡 青遠 猿橋 孝雄

自己評定用尺度が被験者に実施された後1ヶ月目、即ち、35年5月29日から6月3日迄約1週間に亘って、面接が行われた。その被験者は169名の中から無選択に51

名が選ばれた。面接は我々6名が2名1組となって行われた。面接に際しては、上記尺度に就いて質問し、特にその変化、及びその由因が注目された。その結果次の事が知られた。

変化をいやしくも1問に於ても示した者は49名、示さなかったのは2名であつた。之を第二次試案尺度（選11項）でみると、変化者44名、無変者7名であった。その変化者の変化項目数は第一次尺度で0～12個、第二次で0～8個、各々14.8%、16.5%であった。

質問項目の各々について、変化数を見ると、第一次で2～16、第二次で5～16であつた。

変化によって、各項目の合計点数は多少の影響を受けた。しかし、全体として0.76の相関を示した。第二次では得点は総得点205から17点増した。差引0及び±1の者が、40名であった。しかし、各項目に於て、得点及び減点の内部変化を見ると、第Ⅱの5問を除きすべて変化を示した。

変化を由因上、訂正④及び経過的に原因あって変化したもの③、更に、原因を意識しないか変化したものに区別すると、④は全返答数の3.7%を占めた。③⑤は変化の大部分即ち約13%を占めた。

その由因上の分類と、変化の傾向（良方向悪方向）との関係を見ると、④の大部分は悪方向へ、③⑤は善悪相半ばした。

刑務所内で不適応者として見られ易い者には、その意味での④が多く見られた。

変化は、各項目内で、その変化傾向を見ると認められる。しかし、その総合点でみると相関が高く、また、個人の得点の差引きは極めて小さい。

変化は、訂正に依るものもあるが極めて少なく、大部分は1ヶ月の経過に因するものである。

少年受刑者の所内適応尺度
 （担当評定用）の吟味

信州大学 ○中川 大倫 新海 安彦
 五十嵐齊一 新井 康祐
 長岡 青遠 猿橋 孝雄

目的 少年刑務所内における適応の状態を客観的に測定しようとする尺度の吟味。

実験手続 1. 小項目の吟味。2. 尺度全体の妥当性の吟味。3. 信頼度の吟味。

結果 1. 小項目の吟味の結果、社会的場面の「無口で独りぼつち」という行動特徴は、上位群、下位群の間の識別力なく、問題項目としては不適當であることがわかった。「不眠」「しよんぼり」「ほらふき」「おべんちやら」「無口で独りぼつち」「利己的で思いやりがない」等の諸項目は、懲罰回数との間に相関関係を認めず、さらに、「無口で独りぼつち」は、3項目評価との間に相関関係を認めなかつた。以上の結果から、「無口で独りぼつち」を削除し、担当評定用尺度をまとめた。

2. 上位群、下位群の懲罰回数、懲罰日数、3項目評価点の平均ならびに分布状態は、有意な差を示し、かなり高い妥当性のあることを示した。

3. 奇数項、偶数項の折半法による信頼係数は0.90で、極めて高い信頼度を示した。

4. 3月半の間隔をおいて実施した再テスト結果の間の相関係数は、尺度全体で0.74、個人的場面のもの0.76、社会的場面のもの0.71、職業的な場面のもの0.49で、かなり高い信頼度を認めた。

5. 自己評定用、担当評定用両尺度の間の相関は余り高くなかつた。

6. 本尺度は有効な尺度であると考えられた。

少年受刑者の所内適応に関する研究

第1報 予備調査

〔結論〕

信州大学 ○新井 康祐 新海 安彦
中川 大倫 五十嵐齊一
長岡 青遠 猿橋 孝雄

少年刑務所において、受刑者がその環境に対し、いかなる適応状態を示しているかを客観的に把握しようという意図により、担当評定用尺度と、自己評定用尺度の2種を試案した。今回は、これらの尺度について種々の面から、妥当性および信頼性を吟味した。

まず、各項目の妥当性の検討の為の客観的な示標としては、懲罰回数と3項目評価をとりあげた。

この2つの示標による妥当性の検討結果によれば、いくつかの項目は、懲罰との間には有意な相関がなくとも、3項目評価との間には相関がある。このことから、本スケールが適応をかなり広くとらえようとしているものであることがわかる。これはスケール全体として妥当性を検討した結果からもうらづけられる。

つぎに、スケールの信頼度の検討には、再テスト法、折半法、面接法を用いた。

結果によれば、(1)担当評定用尺度はかなり信頼度が高いといえる。(2)自己評定用尺度も、第1回と面接時における得点との相関が0.76という点から、信頼性があるといえる。なお、再テスト法による結果をみると、相関がひくくなっているが、これは、年月の経過によつて変化するという事が大きな原因をなしていると思われる。

また、担当評定用尺度と自己評定用尺度との相関がひくいという事は、方法上の違い、ならびに各尺度のはかろうとしている面がある程度ずれている事によるものと思われる。

以上、結果を総括してみると、本スケールは現段階においては充分役立つものといえる。

言語連想法による非行少年の研究

—①反応類型と臨床所見—

東京少年鑑別所 袴田 明

○大島 勲

目的 非行少年に実施した言語連想検査の結果を反応類型の面から分析し、その特徴または問題点を明らかにする。

対象 少年鑑別所に入所した少年で精神疾患のない者235名(男197, 女38)

方法 早大式言語連想検査第二型式を用い、いわゆる読み書き式の集団検査法によつた。

結果・考察 (i) 全般的な特徴は、心情連合(34.5%)内連合(27.7%)が対応する年令の標準に比してきわめて多く、諸種の外連合(27.3%)が少いことである。これは非行少年に感情的自己中心的な態度が優位なことを示している。(ii) 知能が低くなるにつれて心情、性状、動作などの連合は増加し、上位連合や外連合は減少しているがあまり顕著でない。この傾向は従来からいわれていることであるが、相対的なもので、たとえば心情連合の全体的な優位は説明しえない。(iii) 年令別にみると一貫した傾向はない、たとえば心情連合は最年長の19才で最大頻数(37.4%)を示している。精神発達が生生活年令に伴うならば、年令とともに外連合は増加し心情連合、内連合は減少すると考えられるが結果からはそういえない。(iv) 中卒以下の学歴と高退以上の学歴に分けても大差はない。(v) 心情質問診の結果とはかなりの相関がみられた。即ち、心情連合、性状連合は変調が重症な者に多く、上位、場所、要素、共在等の連合は軽

症の者に多い。しかし変調の重さと一義的な関係はなく、変調の質的な内容により異っている。ただ非行少年には感情の表出の激しい「発散タイプ」の少年が多いためこのような結果になつたとみられる。(vi) 問診、非行歴、行動観察を総合して問題の多い群と少い群に分けると、(v)と同様な結果がえられたが更に一貫した傾向がある。臨床経験も考慮すると、心情連合、内連合の多少と「非行性」または処遇の難易との相関が推測される。(vii) 以上は男子少年の結果であるが、女子少年では心情連合(41.1%)は一層多く、外連合(23%)は一層少くなっており、より「未成熟」の特徴を示している。

言語連想による非行少年の研究

——②内容分析と臨床所見——

東京少年鑑別所 ○袴田 明
大島 勲

目的 非行少年に実施した言語連想検査の結果を、反応の内容、個人差など質的な面から分析するにある。

対象・方法 前掲と同じ。

結果・考察 (i) まず非行少年にきわめて多い心情連合の内容を分析すると、男子少年では、快感情を表わすもの43.5%、不快感情を表わすもの40%、願望11.7%、感情的な意見その他8.7%となつており、女子少年では、それぞれ、37.7%、40.3%、13.7%、8.4%となっている。

不快感情、願望が標準に比してやや多いようで、特に女子少年において、この傾向がいちじるしい。これは非行少年の生活環境の暗さ、収容による欲求不満などをある程度反映しているのではないかとみられる。なお、もっとも出現度の高い反応語は“すぎ”、“きらい”、“きれい”、“いや”、“こわい”などであった。

(ii) 全反応を終了するに要する時間と心情連合の多少との列位差相関係数を35名の少年について求めると0.31で有意ではないが、正の相関を示している。ここから、心情連合の多さはたとえ「早く終りたい」といつた反応態度と関係があるといえそうである。いずれにせよ、心情連合は安易で、皮相な反応態度を表わすといえよう。

(iii) 情意変調の程度と反応類型の間にはかなり一貫した関係がみられた。しかし、前述の如く、変調の重さと一義的な関係があるのでなく質的な内容により異っている。たとえば、過感性が高度変調で性状連合の多いケース、強迫性が変調で類似連合の多いケース、爆発性が高度変調で添加連合の多いケースなどがある。これらは情

意状態の特質と反応類型の間になんらかの関係があることを推測させるが、まだ推測の域を出ない。また同じ心情連合でも抑うつ的なものは不快な内容が多い。

(vi) その他の内容では、けいさつなど官感に対する不満、反感が強いこと、よわむし一なさけない。“ゆうき” —“おとこ”、“こんじよう”などに非行少年の価値観がうかがわれる程度であった。

TATによる非行性の識別

○千葉少年鑑別所 ○佐藤 和夫
法務総合研究所 安香 宏
横浜少年鑑別所 井部 文哉
長野少年鑑別所 佐藤 寛

目的：我々は、昨年来、TATが非行性の識別に可能か否かを検討してきたが、そのうちの一部は第25回日本心理学会及び第8回矯正医学会において報告した。今回は、少々趣きを変えて、人間関係を中心に、非行群の示した特性について考察を進めたい。

方法及び対象：第25回日本心理学会大会発表抄録を参照されたい。分析の方法は、物語の対人関係が、Heroのみか、家族との関係か、家族以外のものとの関係かに分類すること、及びその情緒的面的について、Heroから脇役へ向けられたもの、脇役からHeroへ向けられたもの、夫々に親和・拒否感情を把え、これを組み合わせる9個の組に分類することである。

結果と考察：細かい結果は、紙面の関係で省くが、いづれも著るしい差異は認められなかつたが、5%レベルで有意差のあったものを既に報告したNeed, Press, Vectorの結果とマツチさせて考察すると次のようにいえる。

- 1) 非行群は、刺激が「あいまい」な時には、家族と結びつけない。
- 2) 非行群は概して、圧力を環境的なものにとり勝ちで、洞察力の不足と他罰的傾向を表わしている。
- 3) 非行群は、一般に人格が未成熟で退行的な面が多く、欲求が願望に転化しやすい。
- 4) 非行群は、性的な関心がつよい。
- 5) 「非行群には温い親子関係の設定が少く、あっても自分が庇護的立場で示される」という藤戸の意見やHoward Mitchelの「中流階級云々……」の説は、我々の結果では肯定しえぬが、同じ藤戸の「両親が死亡したものは、親について述べないか、述べても良い感情や羨望を叙述する」という意見は、ある程度支持しうる。

MMP I による非行少年の研究 (第二報)

法務総合研究所 遠藤 辰雄 ○安香 宏

目的：昨年の27回応心、本年の25回日心に発表したMMP Iによる非行少年の研究に引続き、今回は、ハサウェイ・モナケシによる非行性尺度 (Dq)、クラークによる再犯性尺度 (Rc)、ミールによる正常性尺度 (N) について、従来と同様非行群と無非行群との比較により、その非行性診断ないしは識別力を検討し、今までの結果とあわせて、各プロフィールについての個別的な識別判定を試み、将来におけるMMP Iによる非行予測研究への見透しを吟味することを目的とした。

手続：検査・採点方法などはすべて従来と同じである。男子の年長群 (高校生一鑑別所少年)、年少群 (中学生一初等少年院生)、女子の年長群 (高校生一中等兼特別少年院生)、年少群 (中学生一初等少年院生・教護院児) という4通りの非行・無非行両群の対照を設定した。

結果：各群とも、Dq・Rc はその得点平均が非行群において有意に高く、識別力に有効さが認められた。男子についてのみ、有効プロフィールについて各臨床尺度毎にその偏倚得点 (無非行群の平均T得点より10以上) の分布を、非行・無非行両群の間で検討してみると、Pd・Pa が非行性のサインたり得ることが判った。そこで、①有効プロフィールにおいて、Pd 又は Pa に偏倚があること、②同じく、Dq 又は Rc に偏倚があることに対して、それぞれ非行得点1を与えることにし、①Fの粗点が16以上のもの、②総合非行得点2以上のものを、それぞれ非行者と判定した。

男子中学生と男子初等少年院生について、この個別判定を行なってみると、無非行者を無非行者とし、非行者を非行者とした割合は74.8%、非行者と判定したものの非行者において占める割合73.9%、非行者と判定して非行者であったものの非行者において占める割合81.6%であった。

非行少年のPAT適用 (その2)

大阪少年鑑別所 菅 俊夫
財団法人安全協会附属産業心理研究所 ○倉戸ヨシヤ

目的 PATの日本に於る妥当性をみるという一連研究の一端として、前回と同様、少年鑑別所入所少年にテストを施行し、あわせて入所少年の人格構造を知ろうと

した。

施行期日 1958年8月20日～1961年8月19日

施行場所と被検者 大阪少年鑑別所。上記期間中に上記に入所した少年189名。内男子88名、女子101名。

方法 テスト結果を、(1)男女別、(2)年令別、(3)入所回数別、(4)非行種別、(5)家出の有無、(6)共犯、単独犯により比較する。

結果 全体的にみて「依存性」、「動揺」、「ソシオフィリア (社会関心性)」、「受動」などが強く、これら頻度の高い項目での、それぞれの比較に於いては有意な差はみられなかった。しかし頻度の少ない項目を含めると以下の結果を示した。(1)男が「ソシオホビア (社会恐怖性)」に、女が「愉快な気分」に有意に傾いている。(2)13～15才群にのみ「被攻撃性」、19才群にのみ「高い攻撃欲求 (延滞と拒絶的)」がそれぞれ有意にみられる。年令の発達と共に増加しているもの——「高い攻撃欲求 (延滞と拒絶的)」逆に減少しているもの——「ソシオホビア」、「被攻撃性」がそれぞれ有意。(3)初入では「ソシオフィリア (身体的関係)」、「空想」再累入では「低い作業持続性」が有意に目立っている。(4)窃盗と他では「被攻撃性」、売春と他では「弱い情動」、粗暴と他では「ソシオホビア」、窃盗、売春、粗暴の比較では粗暴の「ソシオホビア」がそれぞれ有意にみられる。(5)今回の家出があるかないかでは有意差なし、(6)共犯では「空想」が単独に比べて有意に高くみられた。

今後の課題 少年鑑別所に入っていない被検者との比較。同じ非行をしたものでもケースを多く収集して、同非行中でのパーソナリティ類型を考察したい。

一般文化

図形の美しさに関する心理学的研究

東京都婦人相談所 ○古牧 節子
 日本大学 妻倉昌太郎
 浅井 正昭

色彩の感情価について

東京教育大学 富家 直
 日本色彩研究所 相馬 一郎

色彩設計において、その色の持つ心理的・感情的側面が重要であることはいうまでもない。色の機能とか色彩感情とか呼ばれているものがそれにあたるだろう。筆者等は、これらを量的に測定しようと試みている。単色については、いろいろな尺度（例えば、暖い—寒い）を用いての研究が現在なされているが、多色配色については全然行われていない。

今回の目的は二色配色について感情価を求めることが出来るかどうかを検討すること、もし求められれば、尺度間の相互関係をみて色彩の感情的側面を記述するのに必要で、十分な次元を求めるための予備的知見を得ようとするものである。

手つづき：材料は5×6.5cmの白紙に3×2.3cmの色紙を2枚並べて貼り、成人男女26名に昼光下で評定させた。並んでいる色紙2枚のうち右側は必ず純色（R, O, Y, G, B, P）で他はランダムに選ばれた色である。評定尺度は次の通りの両極に対形容詞をもった7段階尺度。やわらかい・かたい、かるい・おもい、なめらかな・ざらざらした、温和な・きびしい・愛らしい・にくらしい・あつさりした・くどい・すんだ・にごった・つめたい・あたたかい等々の計25。

単色の場合に比べて特に評定しにくいということもなかったし、ほとんどの評定が、ニュートラル・ポイントに集まることもなかった。各色について判断の中央値をとり、尺度毎にプロフィールを描いてみると、純色の感情価によって二色配色が決定される尺度群と、二色の組合せによって決定される尺度群の2群に尺度を分離出来そうである。あたたかい・つめたい、はでな・じみな等には純色の特徴がそのまま現われ、安定した・不安定な、すんだ・にごった等は組合せによって決められるようだ。

実験美学の研究には従来多くの実験が行われて来たが、この種の実験の多くは美しいと判断された特定の図形を追求することに主眼がおかれて来たように思われる。しかし特種な図形のみが問題とされるべきではなく、美醜得点と図形条件との間には何らかの関係が認められるのではないかということが考えられる。そこで次のような問題を明らかにするために、図形の中でもっとも単純な四辺形を用いて実験を行った。

本研究の目的 1) 刺激条件と美醜判断との間の相互関係を吟味する。すなわち刺激の変化に対応して、美醜判断にもなんらかの関係が認められるかどうか。2) 四辺形のような単純な図形的美醜を決定する要因はなにか。3) 美的判断の場合にも、感覚における閾に類似した美醜の分岐点 (zone) のようなものが認められるのであろうか、あるいはかような zone は存在せず刺激の変化に伴い一様に変化するものであろうか。

実験方法 被験者11才～22才男6名。10才～20才女4名。刺激図形、白いケント紙製の四辺形144種（一辺60mm²の正方形を最大として、5mm stepで縦横を縮少して行ったもの）実験は1対比較法によって行い、結果はZ' scoreに換算され、各被験者のZ' scoreの平均値をもって、各図形的美醜得点とした。

結果・考察 1) 四辺形的美醜判断の重要な要因として、大きさ、プロポーションが考えられる。2) 大きさ、プロポーション等の条件と変化と美醜判断には対応したなんらかの関係が認められた。3) 感覚の場合のような厳密な意味の閾ではないが、美醜判断の場合においても同様に、全体との関係において分岐点となるような zone が認められた。

「色彩と情動」の生理心理学的研究

日本大学 ○岡本 健
 山岡 淳

色彩と情動との関係については従来さまざまな研究がおこなわれてきたが、色彩によつて誘発された情動は色彩の種類によつて如何なる様相を呈するかということを生理心理学的に研究する手始めとして、今回脳波、

Plethysmograph, Minor Tremor, 呼吸曲線を同時記録して若干の検討を加えたのでここに報告する。

手続 ①暗室閉眼安静の状態で約3分間上記諸現象を記録する。②つぎに同じく暗室内で開眼させ、完全に暗順応すると思われるまでこれを続ける。③赤,あるいは緑色の刺激を,ゼラチンフィルターを通じて被験者の視野一面にはりめぐらされたスクリーン上に投写する。④7分間刺激を投写した後再び安静状態で3分間の記録をおこなう。⑤つぎの刺激色について上記の手続をくりかえす。

結果 脳波(P-O誘導)刺激呈示後急速に α 波の抑制を起すが,赤の方が緑よりもその変化が急峻でありまた抑制の度も強い。刺激後は赤,緑いずれの場合も α 波が急速に元の水準に回復するが,赤の方が回復がやや遅いようである。PTG(右手第2指)赤,緑とも刺激呈示後振幅が徐々に減少し,刺激除去後安静時の水準に回復することは脳波の場合と同様であるが,その変化は脳波の場合ほど急激でなく極めて緩慢である。また後効果は赤の方に強くみられる。MT(左手手掌部) α 帯(8~13c/s)は赤,緑とも刺激呈示後急速に減少し,刺激を除去するとともに回復を始めるが,減少の度は緑の方が大きい。また θ 帯(4~8c/s)には刺激前,中,後期を通じて著しい差異は認められないが, α 帯にたいする比率は赤の方が大であった。被験者の内省によればこの期間かなりの不快を伴ったとのことである。MTの β_1 帯(13~20c/s)ならびに呼吸曲線においては刺激の前,中,後期を通じて変化は認められない。

ランドの2色法による色再現の忠実度について

東京教育大学 水野 欽司

ランドの2色法色再現の手法に基づく2色画像をオールドツクスな3色画像(カラーフィルム)と色再現の忠実性について比較し,2色法の実用化に対する示唆を求める。主として以下の点に注目した。すなわち被写体の色が観察者に既知の場合において,2色画像,3色画像それぞれの単独評価と,両画像並置における2色画像の評価のちがいを,および被写像の色配列の状態,「無秩序性」対比配置などが忠実度評価に及ぼす効果を見た。被写像としては見慣れた具体物であって完全に色が定まっている「煙草」の箱の群を用いた。さらにその際,背景の色を赤緑黄青に変化させ対比効果の働き方をみた。2色画像のスライド作成はランドとほぼ同じ。3色画像は市販のカラーフィルムによった。評定は煙草の実物の色

を10としたときどの程度劣るかを減点法で行った。観察者は6名。結果は,一般に2色画像は3色画像に比べて,評価はやや低いが,かなり良い色再現が生じた。2色画像のみの場合と,3色画像と並べて見た場合とを比べると,単独呈示の方がごくわずかに評価が高いが,ほとんど変わらない。このことは,2色画像に対する評価は,それ自身かなり安定したもので,単なるプロジェクションによって補充された色ではないことを示す。対比を強めるように色を配置した場合は,3色画像も2色画像も対比効果効が働き,色味が強調され評価が高まる。また概していえば,3色画像ではどの色に対しても評価は平均しているが,2色画像には,不均性がある。フィルター色に近い赤,緑系の色はよく,純度の高い一部の黄,青では悪い。いずれにしても,2色画像は,やや露光が不正確の3色画像に比べれば,より満足し得るものであることがわかった。被写体の持つ意味構造や形が色の評価へどう関与するか追求すべきであろう。

白さについての一研究

日本色彩研究所 相馬 一郎
矢部 和子

目的 いわゆる Preferred White といわれるものの範囲を検討し, D. B. Judd の白色指数式のこのようなあいにおける適用の可否についての検討をも併せて行うこと。

実験 3センチ平方の無彩色100段階色紙の明度9.5~6.9までの40枚,およびR, YR, Y, G, B, P, R Pごとに滴下法により作製した明度9.3~9.5, 彩度1以下の色紙76枚。背景は黒。北窓自然昼光 1000Lux 前後の下。第1実験A. 色判定の専門家10名に4回づつ無彩色段階での白さの範囲を指定させる。B. 指定された28番目までの色紙をランダムに提示し, 白を選ばせる。第2実験A. 男女大学生各50名に有彩色の色紙76枚をランダムに提示し, 白いか, 白くないかを判定させる。B. 色判定の専門家10名に4回づつ各色相毎に, 白さの範囲を指定させる。C. 選定された58枚の色紙をランダムに10枚づつ提示し, 白い色紙を選ばせる。D. 80%以上白いとされた色紙により同横の手続きで白い色紙を選ばせる。E. 50%以上白いとされた色紙を一对比較法により順位づけを行った。

結果 無彩色では明度が高い方が白いと判定された。80%以上白いと判定されたのは明度9.1までであった。100名の大学生により, Blue, Purple 味が比較的多く白

いと判定され、白さに対する何らかの概念のあることが判明したので専門家による家験を行った。全体として、Green, Blue, Purple 味の白が選ばれた。

個人によっては、Green, Blue, Purple 味がやや濃いやあも白としている。最も白いと判定されたのは、Green, Blue 系の一番色味の少ないものであった。D. B. Judd の白色指数公式での白度順位と実験結果との順位相関は低かった。数式については今後の検討を要すると思われる。



視覚的記憶における刺激材料の特性について

関西大学幼稚園 米田 和代
大阪市立大学 浅田 ミツ
大阪市立大学 渋谷嘉寿子

本研究は、視覚的記憶において刺激語の特性 (Syllable の数, 材料の種類) 刺激呈示法が直後再生に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。刺激は無意味綴の4字~10字の7つの系列で、これを4種類作った。呈示方法として連続呈示法(呈示時間は5秒間)、間隔呈示法(1秒呈示、1秒休憩を5回反復)を用いた。KYS 万能可変刺激装置に接続され、6ボルト空球を刺激カードの前面30cmの上部両隅にとりつけられた暗箱の中をのぞかせ、直後再生法で筆答させた。被験者は平均IQ110、視力1.2~1.5の学童9才児、11才児各40名である。結果の処理として刺激毎に正答指数を算出し、それを(1)呈示方法、(2)刺激字数、(3)刺激材料との関係を求めた。結果:(1)直後再生には連続呈示法と間隔呈示法の間には大した差がみられなかつたが、全体として間隔呈示法がすぐれている。これは字数が多くなるほど強くあらわれ、11才児より9才児に顕著にあらわれている。(2)刺激字数の差によつて再生に差がみられた。即ち、字数の増加に伴い正答指数が減少する傾向がみられた。しかし6字の正答指数は、4字、5字のそれよりも優れている。なお6字は実験に際して最も緊張度の高い最初の系列である。(3)同じ無意味綴材料であっても、その内容によって再生の難易度が著しく異なるところがみられた。このことは刺激材料の質的差異が再生に大きな影響をもたらすのだといえるが、一方刺激として用いた各文字の見誤りということが誤答のFactorをなしている場合も考えられる。そこでこれらについては各刺激文字をノイズスクリーンでおおい、そのもたらす情報量から誤りの要因を分析しつつある。



聴覚的記憶における刺激材料の特性について

○大阪市立大学 浅田 ミツ
〃 渋谷嘉寿子
関西大学附属幼稚園 米田 和代

本研究は、聴覚的記憶において刺激語の特性 (syllables の数, 材料の種類)、刺激呈示法が、直後再生に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。尚本報告は、浅田が行ってきた児童の記憶、知覚に関する継続研究の一つである。刺激は4音節~10音節の7種、各音節数につき4種、計28種の無意味綴りである。呈示方法として連続呈示法(5秒間に1系列の刺激呈示)、間隔呈示法(1秒間に1字宛呈示)を用い、BKアナウンサーがテープに録音したものを直後再生により筆答させた。Ssは平均IQ110、聴力正常な学童9才児38名、11才児40名である。結果の処理とし刺激毎に正答指数を算出、それと(1)呈示方法、(2)原刺激の音節数、(3)刺激材料の種類との関係を求めた。ここで刺激材料の種類とは、同一音節数の刺激についてそれを構成する内容の相違を意味する。結果:直後再生には連続的呈示法がすぐれ、この傾向は9才児に於て顕著である。(2)刺激の syllable の数と正答指数の間には明確な函数関係は成り立ち得ないが、音節の増加に従い指数が減少する傾向がみられる。刺激の音節数の差が4以上に及ぶ時何れの年令も音節の多い方が明らかに再生が困難となる。刺激の音節数が6以上になるとその差が2~3でも再生に有意な差を示し、6音節以上では syllable の僅かな増加が把持に大きな影響をもたらすといえる。(3)同一音節数でもそれを構成する音節の内容(破裂音、鼻音等)により再生の難易は著しく異なる。(4)米田が報告した視覚的記憶と本結果を比較すると両年令とも視覚的記憶の方が容易であり、記憶し易い材料が視覚と聴覚とで異なるようである。現在、吾々は上の資料により直後再生実験で生ずる誤り再生を知覚受容器、伝送系の問題としても、とりあげ分析を行っている。



Hole-in-palm illusion に就て

信州大学 原 善平

この発表のねらいは、紙紐で作った直径10種の環とボール紙で作ったやはり直径10種の円盤と紙製の細長い円筒とを使って、Hole-in-palm illusion の起る理由を説明するにある。

まずこの環を自分の前方に掲げ環を通して月を凝見すると、互いに一部分をかみ合い、そのかみ合った部分を通して月が凝視される左右二つの環の虚像が見える。これが二重像である。ところで、この場合、右方の環は左眼に映った虚像であり、左方の環は右眼に映った虚像である。ここで、月を右方の環の真中辺へ移動させる。この時、環そのものは、左眼の前方にあるから、もし環がボール紙で作った円盤であるならば、月はそれに遮えざられて左眼には見えないが、右眼は左眼に映った虚像を通して月を見ることが出来る。今度はボール紙の円盤によって前と同様なことを行う。すると右方の円盤を通して月が凝視される。環を使ったのは二重像を起し易くするためであり円盤を使ったのは、興を一層増さしめるためであり、月を凝視したのは、より遠いものを見る方がこの現象を起すのに、より効果的であるからである。

最後に左手の掌を左眼の前方におき、細長い円筒を右眼の前方におき、これを通して月を凝視すると、月は左眼に映った掌の真中辺を通して凝視されるのである。掌に円い穴があいていて、これを通して、月が見えるので、これを illusion と呼んだのである。この場合、細長い円筒を用いて、実際の掌が右眼へ入らないようにし、左眼に映った虚像が実像のように思えて、事実と反することが起っているように見えるところに、これが illusion と呼ばれる理由がある。

さらに、これを深く考えると、両眼で月を凝視する態度をとると、掌の穴から月が見えるという中樞による一種の体制化のために、虚像がより実像のように見え、その円穴を通して、月が凝視されるところに、これが illusion と呼ばれる一部の理由があると思われるのである。

Gibson 錯視と異方性

東京都立大学 今井 省吾

問題 この実験では、彎曲錯視に与える異方性の効果をみるため、Gibson 錯視(直線を大きさ等しい円弧で適当な曲率と距離をもってはさむばあい、(|, 直線が附加円弧の彎曲方向と逆に曲ってみられる現象)図形が実験図形にもちいられ、直線の彎曲錯視量と図形全体の回轉条件との関係が主に吟味される。

〔実験 I〕(目的)：回轉条件とともに、附加円弧の曲率条件による直線の彎曲錯視効果の測定。

(方法)：回轉条件 7 種、 $0^\circ \sim 90^\circ$ 、 15° おき、図形 $\text{C} \rightarrow \text{D} \rightarrow \text{E}$ の変化、および附加円弧の曲率 3 条件(中心角、

5° 、 15° 、 30°)。標準刺激は附加円弧、変化刺激は直線を含む、 $\rightarrow 1 \rightarrow \text{C}$ 、15 段階の図形。単一刺激法。判断は C 、 D 、 E の 3 件法、極限法 ($\uparrow \downarrow$ 、4 回)。錯視量は直線としてみられる円弧の曲率(中心角)の値。直線と兩附加円弧との距離(最短) 1 mm。直線と弦の長さ、6 cm。線の太さ、直線 0.5 mm、附加円弧 1 mm。視察距離 1 m。被験者、4 名(男 3、女 1)。

(結果)：直線の彎曲錯視の方向は附加円弧の彎曲と逆。附加円弧の曲率強まるとともに ($5^\circ \sim 30^\circ$)、直線の彎曲錯視量の水準高まる。回轉にともなう錯視量曲線は山型、極大位置は回轉角 45° 。山型は曲率 30° 条件が最も頂上鋭く、 5° 条件最も平たい。

実験 II (目的)：回轉条件とともに、Gibson 図形を分解した直線と片側円弧との布置条件による直線の彎曲錯視効果の測定。

(方法)：実験図形は実験 I の曲率 15° 条件の分解による 2 種、A(|, B|)。他の手續・条件は実験 I に準ずる。

(結果)：回轉にともなう錯視量曲線は頂上平たい山型、極大位置は回轉角 45° 近傍。A、B 条件間の錯視量の水準差はほとんどない。

実験 III (目的)：回轉条件とともに、直線と弦の長さの条件による錯視効果の測定。

(方法)：実験図形は直線と弦の長さ 2 種、A', B' ($l = 2, 10 \text{ cm}$)。曲率 15° (一定)。他の手續・条件は実験 I に準ずる。

(結果)：回轉にともなう錯視量曲線は頂上やや平たい山型、極大位置は回轉角 45° 近傍。A', B' ($l = 2, 10 \text{ cm}$) および実験 I の曲率 15° 条件 ($l = 6 \text{ cm}$) 間の錯視量の水準差はほとんどない。

現象的速度におよぼす関係対象の数ならびに位置の効果

南山大学 佐藤 哲夫

Brown が明らかにした現象的速度の諸条件の 1 つ“運動の場の周囲の等質性を減らすと現象的速度が増す”ことについて、Cartwright は“等質性が減って関係対象の数が増すほど位置の変化に対して敏感になり、現象的速度は増す”と述べた。筆者はこの場合、関係対象の出現の位置によって出現の数の効果に差があることを予想し、一連の実験を行なった。

標準・変化両装置を並べ、各装置の中央にあけた横長の切口の中を、一定間隔で描いた黒正方形を移動させる。変化装置には何らかの関係対象が描かれている。被験者

に変化速度を標準と等速に見えるまで調整させる。〔実験1〕運動対象の移動に平行な長辺の外の位置では、関係対象の数を増すほど現象的速度は増した。〔実験2〕運動対象の移動に垂直な短辺の外の位置では、関係対象の数を増しても現象的速度に変化がなかった。〔実験3〕短辺の外の位置において一定面積内で関係対象の数を増しても、現象的速度は変化しなかった。〔実験4〕関係対象が切口の辺（長辺でも短辺でも）に近いほど現象的速度が増す傾向がみられた。また関係対象が切口の辺に接した場合は、短辺にくらべて長辺中央の位置の方が現象的速度が大きかった。

結論：予想どおり、関係対象は出現の位置によって出現の数の効果に差がある。短辺そのものが既に関係対象の性格をもつ故に、短辺の外に出現する関係対象は、その図形性によって碇泊点として現象的速度を増させるのみで、その数の増加は現象的速度に影響を与えない。他方、長辺の外に新たに出現する関係対象は切口を短縮するに似た効果をもつから、その数が増すほど現象的速度は増す。

音方向知覚のオーディトリウムへの応用 (I)

字部短期大学 重永 幸男

本研究は残響時間を異にする三種の音空間内で電気迷聴器を用いる場合と用いない場合とで音方向定位が如何になるかを明らかにし、より理想的オーディトリウム建設のための一資料を提供せんとするものである。

装置、方法、実験系列に関しては日本心理学会第25回大会発表論文集103頁を参照されたい。

結果 1) R_1 、第一系列においては左右 90° に提示された音方向定位の判断は、平均 $4,000\text{c/s}$ で 78° 、 650c/s で 66° にあるものとされた。このことは R_1 内におけるこの方向(90°)の音方向定位は正中面 0° および斜前方 45° の場合とは全く異なっており等質的でないことを示している。更に正中面 0° に提示された音刺激の方向定位は右方 2° にあるものとされた。これらのことは多重回路で音伝送をしたり聴覚領域における運動知覚が問題視されている今日のオーディトリウム建設の際に重要な問題になることである。これらの結果も音空間の構造が変われば当然変化することが考えられる。Knudson と Harris (1950) および Brüel (1951) はオーディトリウムの室体積に関連した最適残響時間に関する研究をしているがこの空間構造の変化においても前述の現象を無視することは出来ないであろう。

2) 第二系列(電気迷聴器を使用する系列)においては左右方向定位の判断は全く逆聴された。斜前方 45° に提示された音刺激の判断は 59° となり客観的位置よりはるかに外側であると判断され、正中面 0° も右方(6°)に定位された。

3) 第三系列の結果は第一系列と類似しているが 45° の定位が 59° となり客観的位置よりはるかに外側に判断された。

4) R_1 内では 650c/s が $4,000\text{c/s}$ より中央部に近く定位された。

以上のことは空間構造が異なると可成り変化すると思われる。残響附加が聴知覚に如何なる意義をもつか今後の問題にしたい。

心理学分野における人体の微小振動の研究

九州大学福岡県中央児童相談所 中村 昭之

Psychologia (1961) 日本心理学会 (1961) に於て、人体の微小振動 (Minor-Tremor, M. T) について報告したが今回は引続き坐禅中のMTの変化、並に呼吸運動について報告する。被験者は、曹洞禅雲水 (43才、27才) の二名であり、結跏趺坐し、定印を組んだ、左手拇指球より、MTを検出した。呼吸運動は硫酸銅電極を下腹部の皮膚上に直接に装置し、その上から禅帯を締め着物等による障害を除去した。測定は禅定の開始から終了迄の全過程を収録したが、途中で、一息半歩で緩歩する経行が行われるので此の間の測定は中止した。

結果：禅定開始から終了迄、10個づつの呼吸曲線を選択し、その10個の各々について考察した。

(1) 呼吸数、N氏、最底2.6回(毎分)最高(6.2回)、K氏、最底(4.5回)、最高(6.5回)で、両氏共、経行後著明に増加した。

(2) 一呼吸は、呼気(expiration)と吸気(inspiration)より構成されているが、その比率をI/Eで表示すると、N氏、禅定開始後三分間ではI/E=1.01で、I>Eの関係にあったが、其の後I<Eと変化し、最底0.47、平均0.78であった。K氏の場合では、禅定開始後経行迄I>Eの関係にあったが、経行後I<Eと変化し、平均0.75であった。

(3) 脈搏については、両氏とも漸増の傾向が見られ、N氏について云えば、禅定後10分では273、20分では294、25分では300、経行後5分では273、10分では291、30分では312となった。K氏についても大体同様の傾向であ

った。

(4) 10個の呼吸毎に、その平均偏差を求めると、大体40呼吸位迄は、MDの値は大きい、其の後減少する。K氏の場合、坐禅開始直後MD=3.32であったが、其の後減少し、最低1.29となつた。経行直後再び3.32と上昇するが、其の後1.02となり、坐禅終了後、普通の状態、3.83であった。

(5) Minor-Tremor では、両者とも β_1 の増加が顕著であり、 α 、 θ 帯域群の出現率は低下した。禅定開始直後は、両者共、 $\alpha > \beta_1 > \theta$ 、又は $\alpha > \theta > \beta_1$ の関係が見られたが、経行後では、 $\alpha = \beta_1 > \theta$ 、若しくは $\beta_1 > \alpha > \theta$ と変化し、坐禅終了後は禅定開始直後の状態にもどつた。

Perceptual dynamics に関する研究

第1報 序 説

日本大学 古賀 行義

心理検査はそのはじめ一般心理学の実験にもとづいて考察され、主として感覚・運動的なものであった。ことに一般的に弁別能は知能の指標であるとすら考えられた。しかしそれで実際の較果を取ることができなかつたので、その内容は漸次、複雑高級となり、従つてまた心理学的な基礎は薄弱となつた。因子分析的研究は、ビネー検査に先き立って初まり、ある点において、それを理論的にバック・アップしたようであるが、研究が進むにつれて、総合的な測定或は評価の手段は、それぞれの下位検査の特徴を隠蔽することが明かにされた。スピアマンは一般因説を主張するに急であつたが、なお広い因子として動揺(O)固執(P)意志(W)など、知的因子と情意的因子の関連に論及し、サーストンも知的因子の探求にそつて、情意的因子との関連を見出し、とくに彼が知覚的力動と名づけた2種の完結因子のごときは、注意に価する。かような因子論的研究は、たんに知能の高低を明かにするばかりでなく、そのプロフィール的観察は統一的機能としての因子の性質を個人的に問題として、いろいろな独創的な能力が如何なるものであるかについての知見をもたらした。この種の研究は知能と情意との競合を明かにするとともに、個人の能力とその涵養に有力な手段を提供し、新しい検査の領域を開拓することとなるであろう。

従来、情意或は性格検査法として一般に行われているのはは少くないが、それらは質問紙法に類するか或は投影法的検査で、充分な実験的制約下におかれてない。とくに後者は実験者に対しても被験者に対しても、問題が

構造化されていないために、被験者の反応もその解釈とあまりに自由である欠陥を蔽うことができないのである。それで吾々は知的因子の分析と連関して見出され、おそらくその根源が情意の裡に横はるとおもはれるものを、スライド或は映画による刺激境遇を設定し、すでに提供されている力動的因子を確かめた新しい因子を見出すために、実験的検査を試みようとするのである。

Perceptual dynamics に関する研究

第2報 静的刺激図形からのアプローチ

国鉄・労働科学研究室 清宮 栄一

I 従来、知能検査は、将来の社会的行動を必ずしも予測しない。可能性としての知的水準を充分に駆動する何らかの力や、中枢領域の体制化の特性を想定することによって、この欠陥をある程度補い得るかも知れない。

この力や特性は、情意または他の何らかの支配を受けるものと想像される。これらを全体的に把握した時に、社会的知能とも呼んで差支えないものが明らかにならう。今回は体制化の特性を取上げる。差当り、一領域における体制化の強弱と、二領域間の交通状況の測定から出発する。高水準の領域と低水準の領域は互に力を作用し合っていると思われるので、複雑な条件に支配されることの少いと思われる低水準領域である知覚領域の測定に手掛りを求めてみた。

II 領域の体制化力の測定 力の弱い刺激に対する体制化力を測定してみる。一つは、いき値近くにある物理的強度の弱い刺激に対する体制化力を、他は物理的強度は強いが、心理的強度の弱い刺激に対する体制化力を測定してみた。

III 二領域間の交通状況の測定 交通は、各領域の力の相対的強度または勾配と境界面の強さの函数であり、交通によって、各領域の体制は、正または負の方向に変化する。今回は、体制が負の方向に変化と思われる色と形の知覚領域の交通を取上げた。色と形の知覚は、従来から、知能や情意と関係づけられて研究されているので、この立場からの接近も可能と考えられたからである。

IV これらの実験は、社会的知能測定のはんの第一段階であつて、今後、各種の方法を導入して、この因子群をあきらかにする予定である。

Perceptual dynamics に関する研究 第3報 動的刺激図形からのアプローチ

○日本大学 浅井 正昭

われわれは序説および第2報に述べられた立場にもとづき、いろいろな刺激条件を設定し実験を進めているが、第3報では観察対象が運動する刺激を使用した実験の結果を報告する。実験を計画するにあたり、次点を考慮した。(1)客観的に結果が数量化されるもの、(2)個人差を顕著に表わすもの、(3)反応に安定した信頼度が認められるもの、(4)集団検査が可能で、経済性の高いもの。

刺激材料：Schmidtの色一形、仮現運動検査をもとにして次のようなフィルムを作成した。刺激図形はカラーフィルムの一こまが同心円上に緑色円—赤色長方形、赤色円—緑色長方形を2回交互に配列してあり、被験者が形態を知覚する場合は右回転、色彩を知覚する場合は左回転の仮現運動が見られるようになっている。このフィルムを被験者に2分間提示、全体的印象が右回転か、その逆かを反応させ、それぞれその時間を記録した。

結果：形態比 = 右回転時間 / 右 + 左回転時間を求め、被験者の形態視の指標とした。この値は理論的には0～1に分布する。反応の信頼度を検討する方法として、2分間の反応時間を12分割し、ランダムに6区劃×2の形態時間間の相関を見たところ、かなり高い値が認められた。さらにこの指数は少数例ではあるが、0.36～0.94に分布し、顕著な個人差を表わしている。この指数はさらに従来検討されている、色彩型—形態型との類型とも対応し、またわれわれが並行して行なっている、色—型相互作用を見る実験との対応も考えられるので、両者の指数の関係を検討している。

今回の実験では右回転を形態視としたので、現在その逆の刺激についての検討を進めている。

法則発見過程の研究(5)

——成功確率と法則への確信度との関係——

慶応義塾大学 齋藤幸一郎

予測にもとづく二者択一行動を行なう場合、連続的に試行をつづけてゆく過程において、予測が適中する確率が大きい場合の方が小さい場合よりも急速に、被験者の反応はあるなんらかの型をもったものとなりやすいのではないか、ということを検証するのが本研究の直接

の目的である。

装置および方法 被験者に向って赤または白の球の出る出口があり、被験者用の押ボタンが二つある。被験者は、次に出る球が赤であるか白であるかを予測し、赤であると思ったら赤の押しボタンを、白であると思ったら白の押しボタンを押し、自己の反応をできる限り多く適中させるように努力するように指示された。8名の被験者のうち4名は、at random に約80パーセントの確率で適中するような場面で、残りの4名は約60パーセントの確率で適中するような場面で、それぞれ連続100試行があたりえられた。

実験者は試行ごとの被験者の行動(押された押しボタンの色)を記録した。

結果 被験者の反応系列をそれぞれ64試行ずつ第1、第2、第3 Section にわけ、各被験者、各 Section ごとに、情報理論において用いられていると同様の計算方法によって、系列の第1次、第2次、第3次、および第4次までの反応1つあたりの Uncertainty (情報量)を算出し、それにもとづいて大凡次のような結果を得た。
a. 成功確率80パーセントの群の方が60パーセントの群よりも反応の Uncertainty が小である(すなわちある意味で法則的に反応する)傾向がみられた。
b. どちらの群においても、第2 Section において、第1および第3 Section よりもやや Uncertainty の高い時期を経過する傾向がみられた。
c. 統計的検定の結果では上記の結果は有意ではなかった。

ヨガの生理心理学的研究(第一報)

日本大学 ○山岡 淳 岡本 健

従来ヨガは心理生理的変動を伴うといわれている。これを客観的に検討することを試み、その第1段階として65、68歳の男子(訓練経験6年以上)に坐位冥想(20～30分間)させた。そして脳波(FPOの各単極)、指尖脈波(右中指)、Minor Tremor(左手掌)、呼吸運動を冥想前中後約60分間にわたり連続記録し、かつ、分析器でP、O脳波の $\alpha\beta_1$ 波およびMTの $\theta\alpha\beta_1$ 波を10秒ごとに積分し併記した。

結果 1. 脳波の α 波積分値は、冥想中はその前後よりも明らかに増大している。これは笠松章氏らの坐禅についての報告と類似している。2. 指尖脈波の振幅は冥想に入り始めると同時に、急激に増大し始め、約5分後には約60%増大、以後冥想終了まではほぼ一定である。冥想終了により急激に減少するが、冥想前よりは約30%

大である。3. MTは、冥想に入つて数分にして α 帯域値が増大し、 θ 値が若干減少する。冥想終了により、 $\alpha\theta$ 値は冥想前のレベルにそれぞれ減少・増大する。安静状態におくと漸次 α 値が増すとされるので、冥想に入ることにより急速に精神的安静状態に入るものと予想できる。4. MTの α 値に対する θ 値の比をみると、冥想中はかなり減少し、冥想終了後直ちに増大する。不快感情により θ 値が増すと報告と合わせ考えると興味深い。5. 呼吸回数は、冥想中はその前後よりも約40%減少している。6. 脈搏数は冥想前にすでに増加傾向がみられた。そして冥想中は漸次減少し、終了後実験開始時のレベルに近づくようである。しかし、これは被験者の不慣れのせいかもしれない。7. ブザ、ベル、光による影響には冥想前中後でとくに著明な差は認められなかった。

総括 これらの諸変化から、ヨガ冥想により、かなり急激に精神的安静状態に入ることが予想できる。またこれら諸現象相互の関連の検討を続けることも意義あるものと考えられる。

発達観についての考察

○福島大学 菊地 章夫
福島めばえ幼稚園 菊地 矩子

Common-sense psychology 中にある発達観——子どもの発達を知覚するフレームを知るのが目的である。Walters, J. S (1957) がアメリカの母親(白人・黒人)・看護学校生らについて、子どもの責任性をどう知覚するかを調査した50項目の中から30項目を選び(例、注意されないでも食事の前に手を洗うことができる)質問紙を作成した。調査対象は福島市内の某私立幼稚園年長組の母親120名(平均年齢33才、学歴は大部分が旧制中学・新制高校卒、地方中都市の中流階層に属する)および福島保母学院の発達心理学受講生45名。

各項目について「何才位になったらできるようにならなくてはいけないか」を、男の子、女の子別に質問した。解答は1年間隔の満年齢、年齢の中央値・平均値について比較した。

・母親グループは他のグループ(アメリカの母親、保母学院生)よりも、必要年齢を低くみる傾向を示した。性差の意識の程度は保母学院生が強く、母親(J)・母親(N)・母親(W)の順である。性差のみられた項目のほとんどで、女の子の方が必要年齢が低い。保母学院生の解答は全般にステロタイプ化している。・男の子だ

けをもつ母親・男女双方の子どもをもつ母親・女の子だけをもつ母親の間にはあきらかに反応の差がみられ、このことは特に男の子のばあい著しい(上記の順に必要な年齢が低い)。・子どもの社会的成熟度(牛島式社会的な生活能力検査)との関係についても、成熟のすすんだ子どもの母親は必要年齢を低くみる傾向を示し、このことは男の子について明瞭にみとめられた。・母親のもつ子どもに対する期待(品川式親子関係診断テストの期待型の項目)との関係は、一義的な解釈ができなかった。さらに検討を加える予定である。

ことばの認知閾を決定する要因について II

—Personal な要因—

東京都立大学 加藤 義明

第25回の日本心理学会では、「ことばの認知閾を決定する要因について I」で、personal な要因以外のものをとりあげた。

今回は特に personal な要因を取扱う。

目的：ことばの認知閾が personal な要因により如何に影響されているかを決定すること。

手続き：personal な要因を、興味、欲求、不安という三つの点でとらえ、一方 Bruner, Postman, McGinnies 等の実験方法と同じ手段で実験を行った。興味、欲求、不安をとらえるために用いたテストは、① Allport-Vernon の Value Test, ②基本的欲求テスト, ③Cattel の不安スケールである。実験で瞬間露出されることばは、いずれも四文字の清音片仮名であり、上記テストのItem に内容が関連のあるものである。(例、ハウソク、ハツメイ etc) 文字の提示のしかたは、タキストスコープにより、20msec より 5 msec づつ露出時間を長くしてゆき、正しい反応が与えられた時の時間をもって、認知閾とした。被験者は約100名。

結果：(1) Value Test の結果と認知閾との対応関係を見ると、Postman, Bruner, McGinnies 等の結果とは正反対の結果を得た。即ち、理論、経済、審美、社会、政治で高得点を示した者が、低得点を示した者より認知閾が高かった。これは、興味を持ち、価値を認めた事柄ほど認知閾が高いことを示している。(2) 欲求に関しては、テストの八つのカテゴリーについて、各々 positive 語(例、アイスル)、と negative 語(例、ニクシミ)に分類して検討した所、欲求の強い者程、positive 語の閾が低く、negative 語の閾が高いことが明らかとなった。(8カテゴリー中6つは5%以下の危険率で有意差あり)(3) 不安については、不安の高い者程、不安語

の閾が高いことが明らかになった ($P < .05$)



本川博士の4色曲線の3色曲線化の理由

茨城大学 木村 俊夫

本川博士の測定された網膜の感電性閾電圧より導出された色覚要素の反応曲線としてのRYGBの4色曲線は眼の基本反応曲線と考えられるが、単なる4色系ではこれを載せる座標は正四面体座標系となり、諸種の実験的事実と矛盾するし、また、これから諸種の色覚曲線(比視感度曲線・色相弁別閾曲線等)を導出できない。

そこで、Y軸をRG平面の2等分線上に含む如きRYGBの3軸より成る立体直交座標系を考え、視細胞より大脳視中枢に至るまでの多くのStageの中の一定区間にかかる4色過程を措定し、その区間より更に上部のStageに於いてYがR、Gに一定の機制に従い解入すると考える。

その解入方程式を幾つか仮定して検証した。

結 果

$$R' = R + RY/R + G$$

$$G = G + GY/R + G$$

なる正比例按分方式が事理に最適なること、従つて本川博士のRYGB曲線を上記により変換したR'R'B曲線こそが眼の基本反応曲線と呼ばれるに相応しいことを実証した。



臨床・相談

Rorschach Shading Response に関する一吟味

日本大学 内田 耀一

目的 第27回日本応用心理学会に於て「児童の修正B.R.S」について発表したのが、この時、Shading%の値が非常に低くなることを指摘した。これは児童が陰影を見ないで形にのみ注目した結果なのか、それとも実際には見ているが、言語表現が未熟なために陰影を無視したかのような印象をテスターに与えた結果なのか、あるいはテスターの技術が不十分であった結果なのか。このいずれかであろう。これらの疑問を明らかにするために考えたのが本実験である。

手続 被験者は中学1・2年男子30名を実験計画法に基づいて選び、Rorschach Card IV, V, VIを竹井ハーバード式タキスト・スコープにて20, 30, 40, 50シグマの時間を与えて反応させた。質疑は各反応ごとに行った。(刺激は乱数表にて無作為に与えた)

結果 Card IV, 時間の経過とともにF反応が少くなり、 $p = .02$ で逆にFc反応は多くなり5, 19, 21, 20で $p = .20 < .01$ であった。Fc反応らしいが、Fc反応と決定できない反応があり、仮にFg反応とした。これは2, 2, 1, 2で $p = .95$ で有意差はなかった。各時間ごとの反応の種類をDeterminant Range=DRで表わした。これも9, 7, 4, 5で $p = .50$ であった。他の反応はここでは省略する。

Card V. FM反応, F反応, Fc反応, Fc'反応など、どれも有意差はなかった。

Card VI. Card IVと同じようにF反応は少なくなる傾向がみられたが有意差はない。しかし、Fc反応は4, 14, 18, 10で $p = .025$ であった。この結果から有意な差があるといえる。

結論 Card IV, VIとも時間の経過とともに、F反応は少なくなり、逆にFc反応は多くなる傾向がみられた。 $(p = .005 \sim p = .010 \text{ Card IV, V, VI})$

この結果からCard IV, VIともかなり高い率でFc反応が表われ、その表われ方は40シグマに於て最も多く発生するといえる。



幼児のロールシャッハ反応(II)

—知的サインについて—

東京都品川児童相談所 松本 忠久

ロールシャッハによる非行少年の性格像

日本女子大学 ○児玉 省 宮本美沙子
小佐野和子 平野ひかる
愛媛大学 越智 信子

目的 前回に引き続き今回は幼児のロールシャッハ反応で知的活動がどの様にあらわれるか、特に成人の場合に用いられる指標が幼児の場合にも妥当か否かを検討する。Ames その他の研究からも予想されることは精神発達に伴いロールシャッハ反応の種々の知的サインが増加することであるが、これらは単に生活経験の豊かになることから生じているのかも知れない。そこで生活年齢を一定にした場合にも IQ の高低により差がみられるかを分析しようと試みる。

方法 被験者は都内幼稚園と保育所から下記の条件により選出した。1) C A 5; 0~6; 0 2) 両親揃っている 3) 家庭の経済が極端でない 4) 性は区別しない 5) IQ が下記の者(鈴木びね一式) (a) IQ 127~142 (H群) 20名, (b) IQ 95~106 (M群) 38名, (c) IQ 70~80 (L群) 7名, 合計65名, 手続は原版を用い Klopfer 法に従った。

結果 三群に 1%有意水準で差のあったのは R (H = 25.4, M = 19.6, L = 12.5) P (H = 4.3, M = 3.0, L = 1.6) Av Form Level (H = 0.77, M = 0.35, L = -0.08) Content Range (H = 6.95, M = 5.60, L = 3.71) であり, M 反応の出現者は有意水準 2% で H 群に多く, 結合性反応と F. L. Credit は 1% 水準で H 群に出現者が多かった。A% は有意差はなかったが, IQ の高い方程低くなっていく様である。(H = 53.7, M = 57.8, L = 65.2) W% にも同じ傾向がみられる。(H = 28.0, M = 31.5, L = 42.2)

考察 幼児の場合でも知的活動即ち対象把握の正確さ、経験の統合、創造性、生産性及び興味の多様性等の診断がかなり有効に行えると考えられる。しかし幼児の知覚や統覚或は論理の特異性から別の角度からのアプローチも必要であると思われる。IQ の裏付けとして用いれば最も効果的であろう。

ロールシャッハによる非行少年と正常児を識別する指標として, Dd%, S%, M, Σ C それに A% の 5 つの角度と, それに感情分析の Hostility + Anxiety の 6 つの角度が使用できるようなことを前回の大会で報告したが, いまこれらの角度を使って非行少年 327 名について検討を加えたところ次のような類型とその出現率を見出した。同時に非行少年と IQ を match した正常児(N)における出現率を示す。

(1) M 無 + S 多型 (31.5 : N 27), (2) S 無 + M 無型 (21.1 : N 26), (3) Dd 少 + S 無型 (9.8 : N 15), (4) S 無型 (8.9 : N 12), (5) S 無 + M 無 + Σ C 無型 (7.0 : N 4), (6) S 多 + M 無 + Σ C 無型 (5.5 : N 2), (7) Dd 無 + S 無 + M 無 + Σ C 無型 (4.3 : N 4), (8) Dd 少 + S 多 + M 多 + Σ C 少型 (2.4 : N 1), (9) Dd 多 + S 多 + M 無型 (2.1 : N 2), (10) Dd 多 + S 多 + M 少 + Σ C 少型 (2.1 : N 0), (11) Dd 少型 (2.1 : N 2), (12) Dd 無 + S 無 + Σ C 多型 (1.5 : N 1), (13) Σ C 少型 (1.5 : N 4) この数値によると上述のような角度を用いても, そのまま簡単にそれだけで識別指標になるとは考えられない。幸いに A% 及び感情分析の Hostility と Anxiety がほとんどの場合正常児より高いことが, かなり決め手になる可能性があるが, これだけでは充分とはいえない。診断のきめ手は結局のところ前述の 6 条件をおさえて, かつ一つ一つのケースをそのプロトコルをみてバランスの著しく崩れているものを取上げていくことではないかと思う。

類型の意味 類型が種々雑多で凡そ正反對的な印象を与えるものもあるが, これは非行性が多種雑多な性格を包含することを示す。神経症的なもの精神病質的なもの(爆発性のもの, 意志薄弱性, 発揚性, 抑うつ性, 無気力性のものを含む)精薄的なもの偶然的に非行化したものもある。従って抑圧委縮型の欲求不満者は爆発や反社会性にだけ満足を見出し感情冷血型は正常な行為も非行も満足度において同一のことだし, また最初からノイローゼ的に偏倚しているものもある。非行者群はこういう人たちを包含していることを考えると, その性格像はこれを映さなければならない。ロールシャッハ像が雑多になるのも当然である。

いちじるしく異常な Szondi Test 所見を示した粗暴非行少年の睡眠賦活脳波について

千葉少年鑑別所 山川 博臣
佐竹 隆三
板垣 正子

Szondi Test 所見の中次の諸項目を粗暴犯罪への危険性を暗示する要因として取上げた。

I. 攻撃性, サディズムに関するもの:

- 1) +! s; S 0+, -+, ±+ サディズム欲求
- 2) Sch ++, 0+ 権力人(Machtmensch)の自我

II. 爆発性に関するもの:

- 3) -! e 激情の蓄積
- 4) P--u, 0- 激情の蓄積と発作的解放
- 5) e = -, 0, ±, + <<e>>欲求の大きな動き
- 6) Epileptiforme Mitte 癲癇型実存
- 7) Tötende Gesinnung 殺意症状群
- 8) P-+, -0, -±, 0+ カイン欲求

III. 破壊の否定に関するもの:

- 9) -! K Destruktionsdrang (破壊欲求)

IV. 現実離反に関するもの:

- 10) -! m Sich-Abtrennung (離反欲求)

以上の10項目の中5項目以上の発現をみた10名につき、脳波所見を検討した結果次の如き興味ある知見を得た。被験者は、千葉少年鑑別所に入所した粗暴少年10名で、脳神経疾患の既往歴なく、年令16才以上20才以下で、IQ70以上のもの。脳波は、安静時、強制過呼吸3分、ラボナ錠 100mg 投与による睡眠賦活時について検査し、観察法により判定した。

その結果、正常域2例、境界域3例、異常の疑い5例を得た。安静時所見では mixed wave の多発が特徴的に認められ、過呼吸賦活の影響は4例に(+)と判定し得た。睡眠賦活では、Fr ないし Pa 0 wave burst が5例に見られ、睡眠抑制脳波の発現期ないしそれ以前に出現した。

この所見は、脳の器質的疾患を疑うには弱い異常性であるが、機能的な問題性との対応が考えられてよいのではないかと考え、なお引き続き例数を増して観察したい。

粗暴犯の衝動病理学的研究(4)

—Destruktionstypen の犯罪学的意義—

千葉少年鑑別所 ○佐竹 隆三 山川 博臣
佐藤 和夫 酒川靖一郎
板垣 正子

被検者は千葉少年鑑別所に過去3年間に入所した非行少年1,000名で、各被検者に10回プロフィール個別法による Szondi-Test を施行した。従つて今回の研究の考察の対象となった資料は、10,000個の衝動プロフィールである。

L. Szondi の衝動学説によれば、破壊・攻撃に関与する要因には、次の2型が区別される。即ち

- a) エロス型 (die erotische Form): + s
- b) 自我型 (die ichhafte Form): - K

自我欲求に於ける -! K 機能、即ち拒絶の否定による破壊は、死 (Thanatos) の要因である s と密接な本質的な関係があり、屢々現象の上では区別し難いこともあるが、両者を混同したり、同一視してはいけぬ。だが現象像に於いてこの2つの型が一致する場合があるが、かかる場合はその破壊力は、死の衝動 s の Mortido 並びに K-自我の否定源の両者に由来すると考えられる。我々はこのような症例を1,000人の非行少年の中85人に見出している(+! s -! K: 85)。然しこの2つの型は夫々独立して別個に現われることも勿論あり得る(+! s: 68, -! K: 166)。我々はこれを実験的に且つ可視的に確証したのである。

我々は1,000人の非行少年のプロトコルの中に、少くとも -! K の所見を含んでいる(それが純粋な形であれ、他の要因と結合して現われるにせよ) 症例を317人に発見した。即ち略3人の中に1人の比率で数多く見出した。しかもこの317名中158名即ち49.8%が、殺人、傷害、強盗、暴行、恐喝、強姦等の所謂粗暴犯であった。この発現率は必ずしも高いとは言えないが、-! K 欲求が粗暴犯罪への危険性を暗示するのを否定する程低いものではないと考える。

粗暴犯の衝動病理学的研究(5)

—Sich-Abtrennungstypen の犯罪学的意義—

千葉少年鑑別所 ○板垣 正子
佐竹 隆三

Deri, Walder 等の研究によれば、一般に正常人が -! m 反応を呈することは極めて稀であり、浮浪児、売

春婦、犯罪者、自殺企図者、精神病等に屢々認められるという。即ち-!mは本来、非社会性乃至は反社会性への素質を示すのであって、暴力的破壊や攻撃の原動力ではあり得ないし、又直接的な関係は認め難いと言わざるを得ない。しかし現実には、我々の非行少年についての経験を徴すると、所謂粗暴犯の中にはその根底に-!m欲求がうごめいているのを観察するのである。特に最も顕著な形で発見されるのは、所謂殺意症状群である。それは、Affektmörder (-e, -p, -m)にしても Elternmörder (-e, Sch, 0 0, -m)にしても、Raubmörder (-e, -k, -m)にしても、その構成因子中に必ず-mが含まれている。即ち殺人者の心理の根底には、孤独、虚無、絶望等を意味する-mの欲求が明らかに存在しており、これが何等かの役割を演じているのである。以上が、-!mが粗暴犯罪とは無縁と考えるよりは、暴力行為への準備性を意味するものであり、その惹起を容易ならしめる基盤と考える方が妥当と考え、-!mを特に取上げた理由である。

我々の今回の資料では、1,000人の非行少年中-!mの所見を認めたもの175人で、この中81名即ち46%が所謂粗暴犯であった。これは破壊否定人類型(49.8%)と比較しても決して少なくないし、-!mタイプの非行少年中の略半数が粗暴犯であるということは注目すべき所見と思われる。又前述の殺意症状群については、粗暴犯中59.6%がこれを示し、中でも、常識的に粗暴傾向が強いと思われる強盗、殺人群が、各々80.8%、66.7%と有意に多くなっていることは注目に値しよう。



情意変調治療の研究 第V報 ——情意状態の変動と連続加算作業——

東京少年鑑別所 鱈崎 轍
" 長谷川孫一郎

当所の外来を中心に研究してきた心的安静と心的作業を主とする心理療法について、これまでの結果をまとめてみると

1. 情意変調の治療には、まず病識をひきだし、闘病意欲をたかめることが基本である。しかし、慢性例は病識が保たれにくい。

2. 現行の知能検査の反復測定からは、情意の変動に伴う知力の変化を捉えにくい。しかし Subtest によっては、変調の著しいほど、検査時の条件によって影響されやすく、とくに慢性の重い変調の消失によって、作業量の上昇と均衡の回復が顕著であった。

3. 情意の変動のしかたをとらえるとともに、患者自身が、じぶんの心の容態を自覚していくような経過診断の方法として、心情質問診と心的作業を中心に考えていく。この研究の一環として、連続加算作業の検討を今回とりあげる。

連続加算25分法(クレペリン法)は外来患者に3カ月間隔で、1分法は家庭内で毎日、5分法は収容少年に毎日、隔日に実施してきた。なお他の資料(小中学生)も加えた。25分法の判定は変調の重さにはかなり合致するが、反復測定には不適當である。総合判定からは、慢性重症で異常型、急性軽症で定型、その中間例で疑問型を多くとる、また休効率、初頭努力、V字落込み、誤謬数は重、軽症で差がみられた。これらも反復によって不規則に変動してしまう。

慢性と急性とを初期の変動から区別するには毎日1分法(とくに作業量の変動から)が有効であり、これを詳細にみるには、5分法が有効であり、絵日記(心の日記)などとあわせて行うことによって、患者の自覚をたかめるのにも有効であると考えられる。



補聴器の使用による難聴児 の学業不振治療例(I)

千葉県教育センター 大野 桂
千葉市立院内小学校 大熊喜代松

目的: われわれのクリニックでは日々多くの問題をもつこどもを診ているが、本症例の如きは割合めずらしい。ということは現場には実はこのようなこどもが案外に多くおり、しかも知られぬままに放置されているためではあるまいか。この意味でわれわれは本症例にとくに注意を向け、その問題の解決を計るとともにこの種のこどもの問題の解決に少しでも寄与したいと考えた。

方法: 研究の立場がこのように臨床心理学的のものである以上、当然のことながら、われわれはいわゆる主訴及びその起始、経過、従前の指導にはじまって環境の状況、生育史、身心の状態等、およそ診断に必要なあらゆる資料を収集し、それによって一応の診断を行ない、それに沿うた治療を試みようとした。

対象: 小3男児、昭36.5.2受付当時8:1、C県F市立F小に所属。

主訴: 担任によれば、①勉強ができない。2年2学期はオール2の段階。②難聴の疑いあり、そのためか発音が中にもこもる感じ、③無口、④孤独、利己的、人と協力せず、⑤自主性、持久力なし、⑥落着なし、⑦その他すべ

て芳しくない。母によれば家では①明朗活発だが、あまりにも粗暴、②人の話がよきこえないらしい、③外へ出ると一言も口をきかない等である。

諸々の資料：紙数の関係上すべて省略。

診断：主として中枢神経性の難聴による学業不振及び行動問題。難聴の程度は中等度。

処置：補聴器の使用にまず慣れさせ、つぎに常時使用させ、普通学級でとくべつに配慮を加えて指導する。家庭では親の態度を改め且つこの種の児童に理解ある家庭教師にある期間治療的指導を頼むこと。

経過：現在少しずつ所期の方向に向いつつある。

精神薄弱相談とその予後について（その1）

国立精神衛生研究所 桜井 芳郎

国立精神衛生研究所附属の精神衛生相談室では昭和27年に業務を開始してから昭和35年度迄に534名の精薄児の相談を受けつけている。これは全児童相談の33%に当たっている。

精薄児の性別は男子60%、女子40%、年齢は1才～19才に広く分布し男子では6才、7才、11才、女子では6才が目立って多い。彼等の精神薄弱の程度は魯鈍41%、痴愚25%、白痴13%、測定不能・不明21%で男女差はない。親の相談理由は多種多様で、しかも単一の問題だけではないが最も重点をおいていると思われる主訴を中心に知能の発達に関する問題、行動上の問題、性格上の問題、学習学業に関する問題、言語に関する問題、身体の問題、しつけに関する問題、その他の問題に分類した。

もっとも多いのは学習学業に関する問題で、次いで行動上の問題、言語に関する問題等である。相談理由を年齢別にみると乳幼児では身体、言語についての相談が多く、小学校就学が近くなると言語、行動に関する相談が多くなり入学後は学習学業に関する問題や行動上の問題が多くなる。

これらの精薄児のその後の適応状況、問題の推移を調べる為に第1回目の follow up 調査として精薄児の現在の状態、現在の問題点、親の考え方、態度ならびに精薄相談についての感想、要望等につき質問紙法による通信調査を実施した。回答率は男子34%（107名）、女子36%（78名）である。彼等の年齢は6才～27才に及んでいる。回答ケースの実態は来所全ケースにくらべ白痴、測定不能・不明級がやや多いがその他はほぼ同じ傾向を示している。現在の状況は学校へ行っている33%、家にいる22%、勤めている12%、施設に入っている12%、病気

で寝ている10%、死亡8%、無回答1%である。彼等の精薄の程度と適応状況、親の精薄相談に対する感想、要望等について興味ある資料が得られた。

精神薄弱児に対する投薬効果について

— 1 卵性双生児にγ-アミノ酪酸を投与して —

東京都立青島養護学校 小出 進

先に、精薄児百余名について、集団実験を行い、その結果を報告したが（1960年日本教育学会）、本実験では、服薬者と非服薬者との個体条件、環境条件を等質化し、実験条件を整備するために、一卵性双生児を選び、効果の精密な測定を意図した。

実験方法 実験児（E）にはγ-アミノ酪酸1日3gを、対照児（C）には擬薬を投与した。＜投与期間＞35年6月～10月、35年11月～36年1月、計6カ月間。＜被験者＞一卵性双生児1組男子、投与前のCA16:1。＜検査方法＞投薬開始前、投薬後4カ月、6カ月及び投薬中止後4カ月の4回、次の諸検査を行った。

鈴木ビネー知能検査、WISC、P.F.T.、形態色検査ベンダーゲスタルト検査、脳波検査など。

実験結果 <知能検査> IQの上昇点では、ビネー法、WISCによる両結果とも（E）の方がより大きい。（C）にもIQ5～6の上昇がみられるが、テストに対する馴れと、養護学校入学による心的安定などの要因によるものと思われる。＜P.F.T.＞ 発達的に特に関連のあるGCR、外罰的反応、内罰的反応、特に内罰的反応において、（E）はより著るしい変化をしめた。＜形態色検査> “好きなぬり方” でぬられた色の明度の上昇や、その色数の減少などの発達に則した変化や、色の好悪の分化が（E）においてより顕著であった。＜ベンダーゲスタルト検査> （C）にはほとんど変化はみられなかったが、（E）には明かな好転がみられた。＜職適検査> 馴れの影響が大きく薬剤効果についてはいずれとも結論し難い。＜脳波検査> （E）にθ波の減少、α波の増加、電圧の正常化などの変化がみられた。服薬中止後も両者の差は保たれている。

結語 効果に過大な期待をかけることはできないが、効果を全く否定することはできない。測定された変化が日常行動にまで明かな影響を及ぼし得るかどうかが問題であろう。

欠席状況管理の一試み

蕨市立第二中学校 久保田貞慶

各種の相談活動は専門的に行われることと広く行われることが車の両輪とならなければならないが、最近、大規模な学校が増加していることに鑑み、数量解析的な解り易い実態把握の方法として、生産工程で良く使われている品質管理の考え方を欠席状況に適用しようと試みた。

本報告で取り上げたのは、各地で流感が、猛威をふるった本年1月より3月までの期間で、在籍数1,000名程度を日安として、主として、埼玉県南地区の学校について検討した。

流感がはやりだした際、県教育局から、欠席率が5%を超える時は学級閉鎖、10%を超える時は学校閉鎖してもよいという基準が示されたが、本報告では、品質管理図でふつう管理限界としてとられている $\bar{x} \pm 3\sigma$ を使い、先の基準も併わせて参考とした。

まずK中学校(1,450名)について考えてみると、この期間の学級閉鎖時を除く $\bar{x} = 47.37(3.27\%) \sigma = 12.59(0.87\%)$ で、管理限界 $\bar{x} \pm 3\sigma = 9.59(0.66\%) \sim 85.14(5.87\%)$ となるが、一月の後半から2月のはじめにかけて、すでに流感の症状が見受けられるので、この値は高すぎるものと思われる。W中学校について、少しくわしく調べてみると、年間をとおした34年度(982名)では、 $\bar{x} = 20.40(2.08\%) \sigma = 7.13(0.73\%) \bar{x} \pm 3\sigma = 0 \sim 4.27\%$ となる。35, 36年年について調べた場合とあわせても、欠席状況は1学期より2学期さらに3学期と増加する傾向にあり、出来れば学期毎の管理限界を求めものが望ましいが、年間を通しては、 $0 \sim 4.27\%$ を基準とした。この値もやや高いようだが、それだけに限界外を重く考えてよい。

なお特別なことがない限り、管理限界の下限は負数となってしまうが、長欠数をもってこれにあてるとなれば、長欠児の動勢も把握しやすくなると考えられる。

精神分裂症患者のWAISによる
知能構造の分析日本女子大学 児玉 省 宮本美沙子
小佐野和子 平野ひかる

此の研究は、Wechsler, Schafer 及び Rapaport 等が、Wechsler Bellevue 又は WAIS を使って、異常者の知能構造を識別した研究を参照しながら、日本版の

WAIS を使って、上述の人たちの追試をかねて、比較研究を試みたものである。とりあげた対象は、はっきり分裂症と診断された男子52名、女子53名、計105名で、年齢層は、大部分は20~30才だいである。

結果を要約して述べると、

1. 従来は、分裂症患者の言語性知能は、動作性知能より高いと云われていたが、この研究では、言語性知能の方が高いものと動作性知能の方が高いものが、ほぼ同率である。

2. 分裂症患者の各下位検査評価点を、正常群のそれと比較すると、Wechsler の研究では、分裂症の言語性得点が正常群のそれを上まわる傾向を示しているが、この研究では、言語性、動作性の別なく、全体に3~4点分裂症の方が成績がわるい。

3. 分裂症の知能構造のプロファイルの特徴として、大体次の4つの類型がみられる。

I. 理解, 単語, 積木 > 知識, 類似, 完成。

II. 算数, 単語, 積木 > 理解, 完成。

III. 数唱, 積木 > 類似, 単語。

IV. 下位検査成績間の差が僅少。

4. 各下位検査得点間に6点以上の差のある項目は、正常群にみられない程、そのずれの度合いが多い。分裂症患者の場合、下位検査得点間に大きい開きのあるのは、思考における崩潰を暗示している。また従来、言語的なものに単語の能力はあまりおちないと云われていたが、この研究では必ずしもそう云えない。単語 < 数唱, 単語 < 積木の頻度は、正常群のそれとは1%の危険率をもって有意の差がみられる。また個人差が多い為、単語や知識の高いものもあれば、低いものもあるといった具合である。

結論としては、あまりはっきりした類型化、公式化をすることに、危険があると云える。

神経質児に関するGSRに依る研究

東京都立伊豆長岡児童福祉園 深津 時吉

神経質児とは一般的には、nervous habits を有するものと考えられているが、これを具体的且つ客観的に判定することは非常に困難である。そこでGSRの客観的なscaleに依りこれらの判定の手掛りとするのが可能かどうかについて実験的研究を行った。前回の実験(第3回小児精神々経学研究会)に於いて conductance の面から一応その可能性を見ることが出来た。ここでの実験は更に細かく分析研究するためにGSR施行中に於け

る spontaneous reaction の問題と、刺激から反応開始までの latent time の問題を追跡してみた。

実験の方法として4～5才児44名を既成の概念に従い habit disorders を有する幼児を nervous gr.にこれらの習癖を全く有しないものを normal gr.とし、その間に於ける差を検討してみた。刺激はブザーを使い、各被験児に対して3回づつの刺激を与えた。

この結果は spontaneous reaction については nervous gr.の方が多く現われ、それが情緒安定度によるものであろうという考察が加えられた。latent time は normal gr.に於て刺激毎に減少の傾向が見られ、nervous gr.は3回の刺激に対して殆んど変化が現われない。第3回目の刺激に於ては両者の差は有意なものとなった。この点に関しては「精神的疲労」「精神機能の低下」等の概念が考えられ、考察を加えたがこの問題については今後の実験に依る証明をまたねばならないであろう。しかし一応の結論として前回の実験を支持する結果を得ており、GSRを手掛りとした神経質判定の可能性を大にしたものと考えられる。

問題児に関する研究（第3報告）

—左利き児の問題—

田中教育研究所 ○鈴木 清
茂下 茂八
松原 達哉

本研究所でとり上げている総合研究の1つ‘問題児に関する研究’の一環である。東京都を中心とする幼稚園児、保育園児9,297名を対象としての調査から、男46、女22の左利き児が報告された。それらの子どもの親と教師が、左利きをどう考えているか、どのような態度で子どもに臨んでいるかを明らかにすることによって、左利き児に起り易い問題の所在をつきとめようとしたものである。質問紙による調査であるが、その主なものと結果の概要を示すとつぎのようである。

イ. 左利きの程度、書字、描画、はしをもつとき、ハサミやナイフをもつときその他について、いつもかときどきか、で調べると、約50%が‘いつも’の中に入る。

ロ. 発見の時期。2～3才の間が80%である。

ハ. 矯正をはじめた時期。3～5才の間が60%である。

ニ. 左利き児の出生順位。長子、末子、一人子の過保護な環境にあるものが80%が多い。

ホ. 家族の左利きとの関係。55.8%が家族のだれかに左利きをもつ。

ヘ. 左利きを矯正しようとして起った障害。反抗的になる、神経質になる、夜尿する、がもっとも多く、それぞれ約10%である。

ト. 左利きへの考え方。絶対に直さなければならぬ、という問題の態度が、両親の間に11.5%もある。

チ. 矯正のし方。体罰とか、左手をしぼるといった強制的なものがそれぞれ約6%ある。

けっきよく、左利きは、それ自身子どもの本質の問題ではないが、周囲の見方、扱い方に、子どもの問題をひき起すような誤ったものが少なくないことが示されている。

恐怖症児の治療事例

東京学芸大学 品川不二郎

症状……9才1ヶ月の男児。恐怖心がつよく特に便所に対する恐怖心がつよく便所にいかれない。

しかし、他の症状もあり、夜尿・偏食のほか反社会的行動がみられ、しかも対人関係においては消極的である。つまり、矛盾的な症状がみられることが特徴である。

原因の考察

乳幼児期以来両親が多忙のため、女中にまかせきりであった。その女中の性格が矛盾的であり、溺愛と体罰とが交錯するものであった。この矛盾的な養育態度によって人格形成の過程が矛盾に満ち、エネルギーの集中統一を妨害しているものと考えられた。

処置治療

子どものエネルギーを自発的に一方的に統一することに主眼をおき、方法としては、フィンガー・ペインティングを利用した。

また他方では家庭における「自由遊び」を奨励し、積極的なエネルギーの発散を目標とした。

結果 便所の恐怖と夜尿は1ヶ月で治療された。

しかし、消極的態度はその後まで残り、学習意欲の発生前にまでは6ヶ月後も望ましくはない。この点で第1次的主訴は解消したが、第2次的主訴が生じてきた。この点に関する治療指導には、全生活的領域にわたる必要があろう。

相談治療の一技法

—関係療法の立場から—

お茶の水女子大学 ○鈴木 隆子 中村 悦子
松本多美子 黒江 静子
松村 康平

I. ①母親集団・子ども集団・治療者集団の3者集団を活用する相談治療における技法を明らかにする。②この相談治療活動は、子どもグループ6名、母親グループ6名、治療者グループ4名の3つのグループ、計16名によっておこなわれる。この治療者グループの4名は2名ずつにわかれて、子ども集団と母親集団の活動に参加する。各集団における2名は、それぞれ主・副の相談者または監督者の役割を担当する。③関係を結ぶ3つのグループのひとつとは、関係の担い手としていずれも変革における主導的役割を果たす。④関係の担い手である各自は、人間関係的活動を通して、緊張の解消、関係の回復と洞察、人間関係への積極的参加の構えをもつようになることをめざす。

II. ①各個人が集団活動を通して、人間関係を関係的に把握しながら、変革の方向を洞察して、変革を促進する認識が育ち、その体験が日常生活の創造的活動に役立つことをねらう。②話しあい活動に参加する主相談者は、次のような役割をとる。a. 初期：メンバー相互の理解を深めること。自由形式による話しあいを多くもつ。適時問題解決のための心理劇を施行する。b. 中期：自由形式による話しあいから、テーマ中心の話しあいに進む。家庭内の問題を中心とする心理劇を展開する。子どもの担当者1名が母親グループに参加。母親は参加観察者として、子どもグループ活動に参加する機会をもつ。c. 後期：自由形式による話しあいから、広く人間関係に関する問題中心の心理劇を展開する。CAT図版を媒介にして、相手と自分とのずれの発見、また欲求圧力関係をとらえて話しあいを進める。d. 集団活動の発展に即した治療者の技法については、発表8を参照。

幼児の心理療法（ケース・スタディ）

仙台市精神衛生相談所 朴沢 一郎

今回は、当 clinic で心理療法を試みた症例の中で最少の一例を報告する。来所時、2才11ヶ月の男児で、毎週1回の play を4回、隔週 play を4回計9回丁度

3ヶ月の therapy で治癒した。（自6-15, '61, 至9-14, '61）

母親の主訴は、「わがまま」「物怖じする」「瀧涙で困る」etc であつたが、ゲゼルの test を試み診断会議を経て「母親の過保護に基因する習癖異常」と考えられ、play-therapy と母親の Interviews を併行させる方針をとった。ゲゼルの test は、therapy に入る以前と therapy 終結時の2回施行したがその結果比較は次の如くである。

第1回〔6月8日〕 第2回〔8月31日〕

運動	103	114
適応	111	114
言語	99	114
個人—社会	107	130

動作かん慢、慎重さ大人びている→場面に馴れて動作堅くない

なつかない感じで指示に従わない→割に強情なところあり指示に従わない

あまり口をきかない返事をしない→小声ながらしっかりと答える

motor 年齢相応の雅拙さみられる→のびのびと子供らしくなる

Play-therapy の方法は、non-directive method をとり、自由遊戯法を用いた。play の経過は、初期の段階では、専ら砂場（室内）における水いたづら、中段では、玩具類（玩具点検→ままごと道具→鉄砲・ピストル→乗物玩具及び積木という順に興味対象が移行）やがて、玩具を媒介としながらの言語反射可能となり、終結段階に入る。〔育児について両親の洞察見られるに至る〕

学童緘黙の研究（I）

群馬大学 内山喜久雄

目的：緘黙症状の除去および積極的な発言態度の形成のための方法の構成ならびにその効果に関する検討をおこなう。

対象：小学校学童22名（うち男児10名、女児12名）いずれも学校において全く発言せず、緘黙症状を呈する。ただし家庭においては大部分が普通に話し、残りの者もやや口数がすくない程度である。

方法：治療場面を以下の5段階に分け、いわゆる脱感作的効果により、環境に対する tolerance を増強する。

第I段階（導入段階）——場所は宿直室、治療者と対象児の個人面接。児童は名前を呼ばれたら元氣よく“ハ

イ”と返事する。年齢や氏名を質問されたら大きな声で答える。とくに本段階では対象児とのレポートの構成に意を注ぎ、以後の段階への重要な手がかりとする。第Ⅱ段階（馴致段階）——普通教室で対象児のほか、親友1～2名同席。“おはようございます”“さよなら”など簡単なあいさつをする。第Ⅲ段階（促進段階）前段階の場面に友人さらに4～5名、学級担任教師を加え、皆の面前で簡単な文章を声をあげて読む。第Ⅳ段階（現実段階）——普通教室で国語の授業場面、指名されて起立、前段階であらかじめ練習させておいた文章を読ませる。第Ⅴ段階（自発段階）——学校内の任意場面でA教師からB教師へまたその返事の伝言を対象児に伝達させる。実施に当っては対象児とのレポートの構成にとくに留意する。各段階の間隔はおよそ1週間とし、適宜の伸縮ないし、段階の増減はさしつかえない。

結果：治療成績は本方法による治療有効17例（77%）、不変2例（9%）、不能3例（14%）であった。

考察および総括：本研究は desensitization を基盤とした1種の toleration 法で、これにより緘黙症状の77%を治療した。

関係療法における小集団活動の一考察

お茶の水女子大学 ○中村 悦子 鈴木 隆子
松本多美子 黒江 静子
松村 康平

本研究は、発表5と関連のある研究である。

基本的立場 ①集団関係を基盤として3者関係を発展させる。②集団の成員に、集団関係の担い手としての自発活動が促進され、他の成員の自発活動をも尊重するような集団経験を深めて、集団教育治療の効果をあげる。③そのために、治療者（監督）、副治療者（副監督）、子ども（演者）の活動に即して使用される技法と、それに必要な役割と資質を明らかにす。

監督の技法——導入期から遊戯場面成立まで——①透過鏡的技法 ②目的介在3者の技法（トリプルの1技法）③back up の技法 ④follow up の技法 ⑤鳥瞰の技法 ⑥場面制限の技法 ⑦監督者の配置転換によるback up の技法 ⑧clean up の技法 ⑨統合化の技法（トンネルの技法） ⑩物媒介集団化の技法（市場の技法） ⑪自我確立を誘う技法（所有自我と自我の分離技法） ⑫物に関する集団成層化の技法 ⑬焦点化の技法（焦点転移の技法）

副監督の技法——監督の技法に対応する技法——①位置

安定化の技法 ②場面屈折の技法 ③follow up の技法 ④開通路の技法（くぐり戸の技法） ④場面展開の技法 ⑥situational-monolog の技法 ⑦back up の技法 ⑧moving-with の技法 ⑨wondering の技法 ⑩場面内構造化の技法（showing の技法） ⑪2者演示の技法 ⑫standing-with の技法 ⑬焦点化の補助技法

事件の発端に関する分析—対人・対物・對自己関係を中心に、事件に対する監督の技法・およびその結果もたらされる集団関係の発達を分析測定する。なお、監督の技法に必要な役割、監督の資質、および遊戯場面成立以後の技法、役割、資質などについては次の機会にのべる。

幼児グループに関する研究（その12・13）

集団遊戯療法について

——その観察カテゴリーの検討——

東京教育大学 ○深谷 和子

○南館 忠智

上武 正二

辰野 千寿

これまで我々は、非社会性児を対象に、集団遊戯療法をすすめて来たが、観察室中の子供の行動を記録するにあたっては、M. Parten, S. H. Newhall, 田中熊次郎などの研究をもとに、社会的参加の度、リーダーシップ等に着目した観察カテゴリーを作製し、それに基づいた観察、記録を行って来た。即ち、集団競争的行動、斗争的行動、自分勝手な行動、社会的に何もしていない、一人遊び、傍観的行動、平行遊び、連合遊び、協同遊び、等であった。

しかし、これらのカテゴリーは、正常な子供の行動を分類するには有効であるかもしれないが、対象を非社会性児に限定した場合、その治療過程中的徐々に生ずる行動の変化をとらえるには、step が大きすぎた。なぜならこれらのカテゴリーの半分以上は、非社会性児には、あらわれない行動を分類したものであるから。

そこで我々は、とくに非社会性児の観察室内での行動を記録するために、新しい観察カテゴリーを作製し、これによって、観察を行うことにした。新しいカテゴリーの特色は、①非社会性児の行動が、より社会的に変化する過程を鋭敏に、とらえようとしている。②集団遊戯療法を行う理由は、各メンバー間のインタラクション、コミュニケーションを利用して治療を促進し、又それが、スムーズに行われるようになったことを、治療の成功の一つの目安と考えてよいのであるから、カテゴリーを

そこで行われているいるコミュニケーションに着目したものとしたことにある。

その詳細をここに掲げることが出来ないが、全体のわく組は次のようなものである。まずN——その子供の心理的環境に、他の子供が入っていないように思われ、又コミュニケーションを持とうという意図も見えず、そのチャンスも殆んど無い場合。P——子供の心理的環境の中に、他の子供が入って来ているように思われるが（又コミュニケーションの意図があるように思われるが）まだコミュニケーションを行なうにいたらない場合。又はそのチャンスを持っているような場合。C——ことばや動作で、コミュニケーションが行われている段階。これは更に、S——送り手としての行動。R——受け手としての行動。F——SとRがうまく短時間内に交換されている場合、とに分けられている。

これら N, P, S, R, F は、さらにこまかく、よりコミュニケーション的なものへと分けられ、全体として、前コミュニケーション段階からコミュニケーション段階へと、直線上に並ぶように工夫されてある。

被験児は、3才6ヶ月より6才7ヶ月までの、非社会性児で、原因が主として家庭環境や親のしつけ態度にあると思われるもの33名。これを二群にわけて、週2回ずつ9回の観察を行った。観察室内にいる時間は1時間。play 開始後10分後に15分の観察。10分のインターバルの後さらに15分。計30分の観察が行われた。観察単位は30秒。1回に60の観察単位が算出された。

結果は、グループ全体が、N→P→Cへのあざやかな変化を示した。しかし個々の子供について見るなら、④ほとんどNはかりの段階からPの段階へとすすんだ子供。⑤N, PからCにまで達し、ほとんど問題行動を消失した子供。⑥全く変化の見られなかった子供。の三種類がある。しかし、この観察室内でとらえられた行動の変化（進歩）が、そのまま日常生活場面に汎化するものかどうか。ここでの変化と治療の成功との関連については、まだ検討の余地が残されている。

幼児グループに関する研究（その14）

Doll Play について

——動物人形の使用とそれに現われた性差の検討——

東京教育大学 ○小林 芳郎 高野 清純
成瀬 悟策

目的 前回の報告で、正常児の場合、女兒は男児より play 全般に亘り活発な反応を示すことが明らかにされ

たが、特に使用人形の分析結果、人間人形では明白な性差が認められたが、動物人形には殆ど性差がなかった。この点に着目し、用具差即ち、動物家族人形・人間家族人形夫々の使用上の差が、両性の Doll play の積極的な展開に関連することを予想した。

方法 前回の人間人形の家族構成と対応した動物（犬）家族人形11個の他、家具・積木など材料・手続は前回同様（応用心理学論文集第13輯参照）。被験児は都内幼稚園児男女各10名（平均年齢5才11ヶ月・平均知能130.4）、山の手巾流以上の子弟で、かなり健全な家庭的背景を持つ正常児を教師評定により抽出。

結果 動物家族人形使用により、両性の play は活発化し、性差は前回より減少。即ち、人間人形を使用した前回と比較し、①家族人形～両性共より多数の人形でplayを展開（ $P < .05$ ）、特に男児の使用率が高まり（ $P < .01$ ）性差は減少。②家具～一部を除き両性の使用率は上昇（ $P < .2$ ）、但し女兒がより多く使用。③興味～女兒がより強い興味を示したが、動物人形の適用で、両性共興味の強さの増加を見せた。④内容～両性共、家庭内の人間関係を表わすお家ごっこをより多く展開（ $P < .02$ ）。⑤時間～両性共、遊戯・綜合各時間で増加、潜在・物語各時間で減少、特に男児の遊戯時間の増加は大（ $P < .01$ ）。⑥行動～被験児の各行動量の発現率中、特に、普通家庭生活を表わす play が両性共増加（ $P < .05$ ）、但し全般的に女兒が男児を凌駕。以上、動物家族人形の方が、初回の play では、少くとも動機づけ・導入・展開などの面で効果を持つといえ、就中、男児playの活発化は、今後の Doll play 応用に有用な示唆を与えている。（研究協力者～石井愛子・鎮目邦子・西村英子・藤本径子）

幼児グループに関する研究（その15）

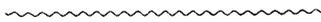
親子観察法について

——観察カテゴリーの検討——

東京教育大学 ○杉原 一昭 山田 章倫
相田 貞夫 上武 正二

親子遊び観察による親子関係の診断に、Bishop や Moustabas の観察カテゴリーを簡便化したもの、つまり、単位時間内に生じた最長の行動を親、子別々に取りあげ、行動の出現頻度をもって親子間行動の特徴を推測する方法をとっていたが、これでは、具体的な interaction の様相を把えがたく、一つの行動の特質の差を表わしきれなかった。又、行動の意味よりも行動の形式に

よる分類になりやすく、カテゴリーが粗く漸進的な治療過程を把えにくかった。そこで、今回は親子間の行動を親と子の interaction という点を重視し、行動をその行動の生じた状況の中で意味を持つものとして把えることに努めた。まず、一つづきの親子の行動をとり、一方の行動を、相手への働きかけと、相手の働きかけに対する反応との二つの面から見た。カテゴリーは、遊戯場面を構成し相手の自発的行動を促進するかどうかという点から、協調的行動、応答的行動、受動的行動、伝達の行動、無視的行動、否定的行動、規定的行動、強制的行動の8段階にした。そして働きかけを縦軸、反応を横軸上にとり、親子の interaction を座標上の一点として表わし、親子関係の推移は頻数のみでなく具体的に座標上の点の移動で表わせるようにした。この方法で、子に非社会性の問題のある母子6組を集団療法の進展に伴い前後2回観察したところ、母子ともに強制的な方向の行動関係が減少し、協調的な方向の行動関係が増加し、子に非社会性の問題のない母子の観察結果に近づく傾向を示した。又、今までの方法では表わしきれなかった細かい行動の変化も把えることが出来た。しかし现阶段では、座標上の位置と、親子関係の型、治療効果との対応については、はっきりしたことはまだ云えない。



検 査

Taylor の MAS と MMPI の 不安尺度について

岩脇 三良

不安の評価をすることは臨床面で、中心的な重要性を帯びてきている。Taylor の MAS は特に有名であり、これを利用した研究は数多い。この尺度が MMPI の中から選ばれた項目より成立していることは周知の通りである。しかし、MMPI に関する諸研究によると、不安を測定するために、数多くの尺度なり、指標が発表されている。Taylor の MAS はそのうちでも比較的新しく発表されたものである。

本研究は、防大生217名を被検者として、MMPI を実施し、MMPI から引出される5つの尺度を利用し、更にキャツテルの不安尺度 (CAS) を併用して、それら諸尺度間の相関を算出した。MMPI の不安尺度は、Taylor の MAS の他に、Winne の神経症尺度 (Ne)、Welsh の不安指標 (AI)、Modlin の不安得点 (AS) Purcell の不安トリオ (Pur) である。

これら尺度間の相関は $P = .01$ で有意であり、全体として共通因子を測定しているといえるようである。Purcell の尺度が一番、共通因子をもっているようであるが、Welsh の AI と CAS は幾分異った地位にあるような結果が示された。

しかし、MMPI の単独尺度 Pt と、以上の諸尺度とは非常に高い相関を示すことが証明された。すると、わざわざ、いろいろな尺度を新設することは余りほめたことではないといえる。尺度の項目を選択した精神病医あるいは心理学者群によって不安の概念に差があり、異つた尺度が生れてくるものと思われるが、MAS を始め、再考を要するであろう。

MMPI の妥当性尺度のひとつ K と、これら不安尺度 (あるいは指標) との相関も負の方向に高いことは、質問紙形式の不安尺度一般の使用に対し、ひとつの警告を与えるものである。



ヘロスベルグによる絵画完成テスト
の子備的報告

——児童の現実適応性の発達について——

白梅学園短期大学 大脇 園子

E. Hellersberg

仙台市小児精神衛生相談所 新井清三郎
同 大脇三恵子

パースネル・ワークにおける
性格検査の試み(Ⅱ)

慶応義塾大学 ○平野 馨 山崎 恒夫

太田垣瑞一郎 斉藤幸一郎

吉田 俊郎

Horn-Hellersberg テスト(H-H テスト)は 6.6cm × 9cm の4角12個から成り各々の四角の中には2乃至6本の無意味不規則の線が描かれている。被験者はその線を使って四角の中に絵を描く様指示される。このテストの目的は、個人が与えられた現実場面への適応しているかを測定診断する事にあり、Hellersberg によつて研究的臨床的に全年令に亘って広く利用されて来た。本研究ではこれを日本人に使用する予備段階として5才から12才までの児童110名に施行した結果を報告する。

〔被験者〕宮城県塩釜市浦戸第二小学校と浦戸中学校生徒。2～3名ずつの小グループ検査中行動観察、終了後詳細にわたり個別的面接を行つた。

〔結果〕絵の構造即ち与えられた線の使い方をヘロスベルグの発達スケールに従つて分類した処、学年毎に特徴のある適応傾向が見出された。幼児学級(5・6才)児の絵の30%は線を見殺したなぐり描き及び線と無関係な事物を描く“Stage Z”であり、54%は線に促される余り事物を描き得ない“Stage Y”であつた。1年生ではStage Zは10%、2年以上では皆無となる。しかし1, 2, 3年の過半数はStage Yに止まる。4, 5年で線が事物の一部として知覚され(“Stage X”)同時にまとものある絵(Stage W)も増し、6年、中1年でStage Wが絶対多数となる。内容は2年生頃までは動物、身辺の事物、遊びが多い。3, 4年頃の内容は著しく乏しく、5年以後には漫画、テレビドラマ、乗物(男子)、伽嘶、少女画、家(女子)等が多い。問題児例(チック)では正常児の該当年令より低い段階の絵が見られ、H-H テストの診断テストとしての有用性が認められた。

(本研究は36年度文部省科学研究助成金の補助を受けた。)

慶応大学学生相談室では学生に205項目の性格検査を実施し、学生に援助をあたえている。前回大会では本性格検査の妥当性に関する三つの角度からの検討を行なつたが、今回は項目分析による検討を行なつた。項目分析は全項目の項目別反応数の検討並びに各特性についての全項目のG・P分析を行なつた。

項目別反応数の検討結果、被験者の1/4以上が“わからない”と答えている項目が13項目発見され、又、男女の反応数の間においてCR検定で有意差の見られる項目も発見されている。

G・P分析は男女それぞれについて各特性ごとに反応の上位群1/4と下位群1/4をとり、その間の弁別度はMosier及びMcQuittyが提唱した比率の差の有意性を決定するための臨界比検定を適用した。この際各項目で“わからない”と答えているものの数は按分して加算した。

この検討の結果、危険率1%以上の項目はその特性から削除した。又、男女いずれかが1%以上の項目も同様に削除した。更に1%以内で合格した項目でも反応が偏つたのが特に目立った項目は削除した。

項目の中にはその表現が不適切であつたために弁別性に疑問が残ると推定された項目があつたので表現を改め、向性では内向性と外向性が正しく対照的になる項目だけを採用してバランスの不均一を是正した。

本検査は一般性格検査として使用されることを主な目標とする所から、従来の第一特性の神経症的傾向を全面的に除外した。

以上、今回の項目分析結果128項目を残し、今後引続いて項目の補充等を行なっていく。

SAT-C による知能の診断について

田中教育研究所 茂木 茂八 安富 利光

知能の意味についてはいろいろな説があるが、われわれは「知能は学習能力である」という考え方に基つて、小学校高学年用学習能力診断知能検査(Scholarstic Aptitude Test for Children)を作成した。検査問題の構

成はつぎのようである。

検査 1	統覚検査
検査 2	語意異同弁別
検査 3	同図形発見
検査 4	数象計算
検査 5	類推検査
検査 6	左右弁別
検査 7	同頭音単語の発見

これらの下位検査と学力 4 教科との関係を調べたところ、検査 2, 4, 5 は国語, 社会, 算数, 理科のどの教科とも高い相関関係がみられた。

そこで、検査 2, 4, 5 (以下第 1 群と呼ぶ) および検査 1, 3, 6, 7 (第 2 群と呼ぶ) の成績と学業成就度との関係をみたところつぎのようになった。

(グループ)	(成就値マイ ナスの人数)	(成就値プラ スの人数)
$M_1 > M_2$	35.5%	64.5%
$M_1 = M_2$	44.4%	55.6%
$M_1 < M_2$	65.0%	35.0%

M_1 : 第 1 群の評価点平均 M_2 : 第 2 群の評価点平均
(小学校 5 年生 101 名)

このことから、われわれは第 1 群の成績と第 2 群の成績との相対的な比較によって知能のタイプをつぎのように分類した。

- A. 学習型知能 第 1 群の成績が第 2 群にくらべてかなり高位の方へかたよっている傾向がみられるもの。
 B. 準学習型知能 第 1 群の成績がやや高位の方へかたよっているとみられるもの。
 C. 一般型知能 第 1 群と第 2 群の成績がいずれに多くかたよっていると判別しがたいもの。
 D. 準不振型知能 第 1 群の成績が第 2 群にくらべていくぶんか下位の方へかたよっているとみられるもの。
 E. 不振型知能 第 1 群の成績が第 2 群のものよりもあきらかに下位の方へかたよっているもの。

ビネー検査と WISC 検査の比較研究 (1)

知能遅滞児について

東京都墨田児童相談所 小林 重雄
小野 敬仁

本実験においてはビネー検査として鈴木ビネー検査を用い WISC との比較において、知能遅滞児の特徴を明らかにしようとしたものである。今まで為されている比較研究においてはテストの問題が解消されていない。

従って、この研究は先ずテストの同質化をはかり、ビネーでは 2 人のテストが同一個人に施行しても平均誤差が ± 3 程度まで調整が行われた。(WISC も同様に調整した。)

被験者はあきらかな身体及び言語障害をもたない IQ 35~85 までの児童 39 名 (男 22 名, 女 17 名)。

方法はビネーと WISC を 2 人のテストが分担して行い、WISC 先行、ビネー先行児童及びテストの順序は同質になるように配分した。

結果: ① WISC の方の IQ が高い児童は 39 人中 14 名でほぼ 2/3 がビネーの方が高く WISC が高く出るとはいえない。

② 動作性が言語性より優れている。即ち 39 名中言語性の高い者は 7 名でサインテストで、 $CR = 4.17$ で ($P < 0.05$) あきらかである。

③ 全般の相関比は鈴木ビネーと WISC の総合とでは .775, 言語性 .850, 動作性 .824 で非常に高い相関を示している。

④ 被験者をビネーを基準にして、IQ 50 以下, IQ 51~70, 71 以上の三群に分け相関を調べていくと、ビネーとは言語性との相関が高いことが見られるが、境界児においては .339 と特に低くなっている。

⑤ 被験者中に一卵性双生児が含まれており、両者は鈴木ビネーの IQ はまったく同じで WISC のプロフィールに差が認められるが、これらはパーソナリティーにおける差異によると思われ、検討中である。

教研式新 AQ について

財団 応用教育研究所 平沼 良
法人

Franzen は $AQ = EQ / IQ \times 100$ によって成就指数を算出しているが、これには問題がある。

知能と学業成績との相関係数は約 0.6~0.8 であるが、知能偏差値の高いグループは一般的に学力偏差値は知能偏差値より低く、知能偏差値の低いグループはその学力偏差値は知能偏差値より高い。このことは Pintner はじめ筆者ならびに応用教育研究所の研究でもこのことは立証されている。

Franzen の成就指数は知能と学力とは完全に相関するという仮定のもとに算出されている。しかし、事実は両者の関係は上記の研究のごとくであるので、Franzen の方法によるときは、常に知能上位のグループは AQ は 100 以下となり、知能の下位のグループは AQ 100 以上となって、それぞれ相応の学力を示しているにも拘らず、

一方は過小評価となり一方は過大評価される結果となる。

故に、A Qの合理的な求め方は、学力を直接各人の知能に比較するのではなく、その個人の学力偏差値を、同じ知能偏差値のものの平均学力偏差値に比較すべきである。

教研式新成就指数

$$= \frac{\text{個人の学力偏差値}}{\text{同じ知能偏差値のものの平均学力偏差値}} \times 100$$

また、この知能に対応する平均学力偏差値は同一母集団によって比較せらるべきものであるのは勿論である。今回の研究は、全国から規模別によりサンプルを抽出した。そして同一母集団に対し、教研式学年別知能検査と、教研式小学D形式標準学力検査を実施し、その両偏差値にもとづいて新A Qを算出した。その数値は教研式計算図表によつて、容易に求められるように考案した。

註 紙数の関係で図と表を省いてあるので、くわしくは東京教育大学構内応用教育研究所のパンフレット「成就指数に対する新しい構想(筆者)」を参照されたい。

多肢選択法テストにおけるでたらめ解答の実験的研究

人事院 寺井 俊健

結果 5 選択肢のテストの実質的な guess (でたらめ解答)の正答率は0.161程度であつた。これはほぼ6 選択肢の場合の理論的期待値に相当する。また guess の大きさは項目によつて非常に異なつているので、適当に項目を選択すれば(これには項目の弁別値が有効)更に guess を小さくすることも可能と考えられる。なお多肢選択法テストの得点が guess のない得点と信頼性を等しくするためには、1.5~2 倍程度の項目数が必要である(これに最も影響するのは guess 以外の測定誤差の大きさおよび項目間の等質性などである)。

方法 1. 5 選択肢の項目20からなる教養テストを高校生258名に施行して正しいと思う答を一つ選択させ(正答は一つだけ)、同時に選択の理由を記述させた。これを正解できた題数で採点するとともに、「問題が要求する正当な思考その他の過程を経て、ただ一つの選択肢を正答として決定した題数」を解答理由から判定して guess のない得点とした。

2. この兩種得点間の相関を折半テストの間について算出し、相関係数の attenuation の修正式から逆に多肢選択法および guess のない得点の信頼性係数として0.723および0.887を得た。

3. この値を Plumlee, L. B. (Psychometrika, vol. 19, 65-70) の公式を發展させた次の式に代入して、純 guess 換算正答率(完全に確実に正解した項目以外は一律に完全な guess で解答したとみなした場合の guess 正答率)として0.161を得た。

$$k = \frac{n-M}{\sigma^2} \left[1 + \frac{1}{(r_0/r) - 1} \right]$$

ここで k : 実質的選択肢数(この逆数が guess 正答率)、 n : 項目数(満点)、 M : 平均点、 σ : 標準偏差、 r : 信頼性係数、 r_0 : guess のない得点の信頼性係数

4. 同様に多肢選択法テストがこれに等価な guess のない形式の何題(n_0)と信頼性が等しいかは次式で与えられる。

$$n_0 = n \left[1 - \frac{n-M}{k \cdot \sigma^2 (1-r)} \right]$$

スキー練習時における疲労測定を試み

日本大学 松井 三雄 杉本 功介
浅井 正昭
◎信州大学 樋口貴美子

目的 合宿訓練によるスキー練習時における疲労の継続的变化を調査する。

調査測定種目および方法 I. c f f 値: 山越セクター方式フリツカー値測定器を用い降下値5回の平均値を求めた。II. 疲労自覚調査用紙: 国鉄労研・橋本邦衛氏の作成した自覚症状記入票を使用し、A項目、身体的症状、B項目、精神的症状、C項目神経感覚的症状について分析検討をする。

調査日時 昭和36年2月24日夜から3月2日昼までの間、朝7時~8時、昼11時30分~12時30分、夜17時~18時にフリツカー値の測定をおこない、同時に疲労自覚調査用紙の記入をさせた。

調査人数 日本大学文理学部体育専攻生、男子61名、女子13名のうち全調査測定に欠測値の殆んどないもの男子9名女子7名。

結果の考察 フリツカー値は5回測定の平均値をみると、男子は最高44.8、最低34.1、女子は最高42.2、最低32.4の間を変動し、男女とも個人差が著しく、その第1日目の朝を100として変動値を継続的にみると、特殊のものをのぞいては、男女ともよく似た傾向を示している。それは第3日目朝を最高としてその後低下し、5日目の昼は第1日目の前夜の値まで低下している。また男女ともフリツカー値は朝は、その前夜に比べて高くなっている。疲労自覚症状は、A項B項C項の症状ともかなり顕著

な個人差が認められ訴え数の平均値は男女ともA項がBC項に比して多くなっている。男女を比べると、女子は男子に比してBC項症状が顕著であり、精神的、神経感覚的の症状が、訓練日数が経過するに従って高くなる傾向があり、ここに性差がみられた。フリッカー値と自覚症状の変動には関係はみられなかったが、スキー合宿訓練日程にこの結果が1つの参考になるとおもう。

タイミングに関する研究

日本大学 松井 三雄
 〃 浅井 正昭
 ○杉本 功介

研究の目的 スポーツ活動において、タイミングの問題は非常に重要な事柄であります。例えば、野球のピッチングのインターバルを変えたり、変化球を投げたりして打者のタイミングをはずすというごときは、タイミングの問題をうまく使った例であります。

反応時間というものとは刺激-反応の間を、どれだけ短くすることが出来るかの問題であります。タイミングの問題では、刺激に対してどれだけ正確に反応出来るかということが問題であります。

今回のタイミングに関する研究では、野球部学生と一般学生との間で、タイミングの問題を比較検討することを研究の目的とした。

研究方法 (1)実験器具、竹井式電子管クロノスコープ、竹井式万能速度調整器、反応鍵。(2)刺激。縦5mm横50cmの間を移動する赤線。(3)刺激線の速さ。A板左から右へ9cm/sec。B板右から左へ9cm/sec。C板左から右へ9cm-4.5cm-18cm/sec。(4)反応。あらかじめ定められた場所(↑)と赤線が一致したときに反応鍵をおす。反応は練習3回後20回反応。(5)被検者。日本大学野球部学生10名。一般学生8名。

考察 (1)タイミング・エラーの絶対値は一般学生より、野球部学生の方が小さい。(2)3種類のA板、B板、C板の絶対値の平均偏差の小さい者ほど、野球の打率が高い。(3)タイミング・エラーの変動係数は野球部学生が一般学生より小さい。(4)ずれの代数和では、野球部学生がB板、C板で遅れめに反応しているが、A板は早く反応するという傾向がある。一般学生では、C板で遅れめに反応する人もいるが、大体において早く反応する。以上のことから野球の練習というものが、この種のタイミングの正確さの養成に役かっているといえるのではあるまいか。

シンポジウム(I)

パネル討論

「産業界からの心理学への期待」

司会	立教大学	藤本 喜八
	日本光学	乗富 丈夫
	日立製作所	森岡 道一
	精工舎	浅野 行雄
	水戸総合職業訓練所	村中 兼松

乗富丈夫氏

技術革新時代といわれる今日の時代には、昔の労務管理の考え方は通用しない。新しい時代の労務管理に対する心理学的アプローチについて、期待を寄せているものである。

(1)政府のかかげた所得倍増計画を実現して行く過程において、科学技術者の不足が見通されており、近年科学技術者養成が叫ばれているが、私は、科学技術者の養成だけではピッコになると思う。それだけでは、所期の所得倍増計画も達成されないにちがいないと思う。それと並んで、サービス部門と労務管理部門の人材の養成を心がけなければならないと思う。換言すると自然科学の発展と社会科学の発展とが平行しなければならない。

(2)技術革新に伴って、職種の変更や仕事の構造変化などが、急速且つ急激である。このような変化に必ずずる人事管理上の措置について、基礎的研究を進める必要がある。

(3)戦後産業界の焦点の一つはヒューマン・リレーションズであったし、多くの研究者や実務家が血道をあげて来たが、理論からも実用からも、それほど進んたとは思えない。企業は、人が人を使う組織であるから、われわれは能率的な適切な人の使い方を求める。それと関連して、教育訓練の方法についても、有効な教訓を得たい。

(4)昔の労務管理は環境調整に力点を置いていたが、それだけでは人間の労働力を最高に発揮させることはできなかった。今日、われわれはもつと内面的なところに立ち入った労務管理を求める。人々をして真に喜んで働けるようにするにはどうすればよいか、モチベーションの研究を進めてもらいたい。ただし理論だけでなく、現場的に実行可能なやり方で研究してもらいたい。

(5)これまでも、またこれからも、職場にはたくさん

落伍者たちが出る。この落伍者たちを、事前にまたは事後に、どう取扱ったらよいか、働く人々の職場における悩みをどう取扱いどう援助したらよいか、という問題もある。いわゆる産業カウンセリングが、これに答えるものだと思うが、今後益々重要になるものと思う。

これらはすべて、産業心理学に対する私の期待の一端であるが、最後に、卒直に言わせてもらえば、一般に心理学者の言うことや研究報告は、どうもわかりにくい。心理学者の研究は定性的にとどまって数量化されないからだろうと想像する。今後、定量的な基準を認定することが、産業と結びつく第一歩ではあるまいか。

森岡道一氏

根本的には、乗富氏の考え方と同じだが、少し角度を変えて、私見を述べる。

企業の中で人を使って行く場合の、われわれの立場は、企業があるから人が使われるのではなくて、人間のために人を使い、その人を幸福にするために人を使っているのであって、その結果として企業が成り立つのだ、という立場である。

人は、企業という組織の中にあるとともに、人のために働くのであり、企業は、人が人のために何かをなすところ、人が人を使うとともに、人が人に使われるところである。人が、その心と身体とを活動させるところである。

換言すれば、人間をして人間たらしめる、ということが、戦後の企業の立場である。このような立場に立つわれわれとして、当面している問題で、心理学に期待するものを、二三あげて見ると

(1)戦後の教育をうけた青年が企業に入って来て、戦前派の古い人たちと対立している。これは、どの企業でも重大な問題となっている。管理者が昔風の考え方や経験から得た知識だけで青年を扱うことが非常に混迷を招いているように思われる。そこで労働青年の心理がもっと解明されなければなるまい。

(2)従業員をして、自発的・積極的にやらせるように動機づけるにはどうすればよいか。すなわち、人間を人間たらしめるための訓練の方策如何、ということである。この問題には、人間の心のはかり方が発達することが前提となるかも知れない。

(3)日立製作所では、昭和二十九年以来心理、教育、社会の各学科の卒業者を相当数採用して、これを全部教育部門に投入している。これは、従来、一般の労務管理と教育訓練が別々に取扱われていたのに対して、同

じものだと考えるからである。企業は生きた人間の心と結びつかなければならない、人間の心をつかむことがすなわち教育だ、一人一人の心に接する体系的な場としては、教育訓練が最良だ、それはセルフ・デベロップメントの動機づけを促進する活動であり、それが労務管理そのものだ、と考えるからである。

なおこの機会に、私の苦言を呈しておきたい。

- ①これまでに出ている心理学書は、抽象的な標準的な平均的な人を扱うにとどまっているように思う。個性的な、生きたひとりひとりの人間の場合に、それをどのように手直して適用すべきか、という方法が不足していると思う。
- ②日本人と外国人では同じ心理ではあるまいと思うの。に、従来の心理学者の研究には、アメリカその他の外国の心理学の直訳的導入が多いようである。日本人的特性を加味した心理学でなければ、日本の企業には役立たないと思う。

浅野行雄氏

私は、自分が使われている立場だから、その立場で最近見聞した事例を三つ挙げて、皆様の御参考に供したい。

(1)ある会社が、ある年、都立高工卒業生中の最優秀者を選抜採用して、その会社の中央研究所へ配属した。研究所だから優秀な人間を、という考えからである。ところが数ヶ月の研修期を終えたあと、本人から退社願を出して来た。そのわけを聞くと、「会社に入って見ると大学出でない人間扱いはされない。研究所ではそれが一層はげしくて、雑用しか与えられない。その上、研究所から現場へ行かせて貰いたいと思って、様子をさぐると、研究所出は現場では排斥されることがわかった。私は、やめて、昼間の大学へ進む」という。こうして、結局彼はやめてしまった。

そこで翌年は、成績が優でなく中以上のもの、そして使い走りをよくしそうなものを選抜採用して、中央研究所に配属した。これは人事部門会議の承認を得てやったことだが、実行した晩には、中央研究所から文句が来た。「何もできないものを入れた」という。そして配置転換を求めて来た。

こうして、この会社の中央研究所には、どんな人間が必要なのかわからなくなった。

(2)ある会社では、製品に対する苦情が多いので、製造工程のどこかにモラル低下の部門があるのではないかと推察した人事課長は、モラル・サーヴェーをやらうと計画した。ところが上司から差しとめられた。それは、「組織の原理は、従業員の不満をきいたり相

談することではない。命令服従だ。モラル・サーヴェーの本質は、従業員の不満を、ワザワザあばき立てるような性質のものではないか」という論拠である。この論拠は、一見頑迷のようだが、これまでの心理学者が全然目を向けなかった観点ではあるまいか。

(3)給仕の任務にメールガールの仕事を含めようとしたら、それはメールガールの仕事だからいやだ、もしどうしてもやらせるのなら、退職するという。仕事のインフォーマルな価値づけと仕事の割振りとの調和をどうするかという問題がある。

村中兼松氏

最近の産業界の重要課題は、人力の不足と技術革新ということである。この時代において心理学が当面している課題は、次のようなものだと思う。

- (1)職場の人事の採用方法と配置方法が昔から少しも進歩していない。今日の時代に実際に役立つ適性検査の心理学的研究が求められている。
- (2)第一線監督者と青年労働者との間の断層が著しい。現代の青年労働者の心理を理解し、これを正しく訓練し、正しく取扱うこと、若い労働者を働く場面において見つけ、その場面に実際に適用できるデータを提供せねばならない。
- (3)人力不足に伴って中令層や高年令層が再雇用される例がポツポツ出て来た。この動向は今後一層進むと思われる。この人々の再教育と取扱い方に関する研究が必要である。
- (4)作業がスピードアップされるにつれて、常習的な職場不適応者がかなり発生している。職場不適応の原因の探究、治療が求められている。単調感を少なくするためバック・ミュージックの試みも考究されてよいのではないか。もちろん不適応者の発見と対策として、産業カウンセリングに対する期待は、益々高まることと思う。
- (5)TWIやMTPなどの訓練方式は、まだ、日本の国民性に適合したものとなっていないと思う。もう一度考究し直す必要があると思う。それと関連して、教育における評価（効果測定）の研究がまだ不十分だと思う。

〔質問〕

津久井氏（中央大） 企業における教育訓練の収益性と人間形成の理念との間に矛盾が生じないだろうか。もしその両者を調和させることができるとするならば、その論拠はどうか。

乗富氏 その両者の調和ということは確かに問題である。企業における教育の理念は新しいことであって、その

問題はまだ未解決だと言ってよい。ただし、私見としては、所得倍増計画と企業の公共性意識が、両者を調和させるものと思う。教育という長期投資を、短期的収益性というバランスシートで拒否する企業は、今日ではほとんどない、と思う。

将来は、全国民を公立高校で教育するようになると思う。

木村氏（茨城大）

私は、これまで度々、諸会社に心理学卒業生を採用するようすすめたが、将来の処遇という点から気がすすまない、というのが通例である。仮りに採用する気になった会社でも、採用試験の問題は、法経と同じものなので、事実上、門戸が閉ざされている。心理学者が産業に貢献したくても、ここに厚い壁がある。

日立製作所は、どうしていられるか。

森岡氏 日立では、昭和二十九年以来、心理、教育、社会の諸学科から合計十一人採用した。採用方法は法経とは別にしてはいる。仕事は、教育計画、PR測定、教育現場、工場教育実務、カラーTVの研究などである。将来の処遇については、入社後の、会社の実態に関する活動と能力によって、部課長に昇進するのであって、専攻には拘泥しないから、質問のような心配はない。

ただし、心理学専攻生も、入社後、いつまでも生のままの心理学を振り回してはこまる。社内のいろいろな部門と接触して、課題を解決するのに心理学的な視点に立って協力するのでなければならぬ。独り合点の心理学でなく、誰にもわかるようにしなければならぬ。永岡氏（関東学院大） 日本心理学会で、産業界のある人が心理学無用論を述べたが、どう思うか。私は心理学の立場からする経営コンサルタントが可能だと思うが、どうか。

森岡氏 私は、心理学無用論はもっていない。人間を使うことに役立つ理論、そして独りよがりでない理論を心理学に期待する。コンサルタント的な立場でなくて、企業の実際に、身体ごとぶっつかって行く心理学者を求める。

乗富氏 これまでの心理学者は、スタッフ的な立場に立って、批判、解釈、分析に終始して、実践的な処方を示さなかった。リーダーシップを獲得するには、実践者でなければならない、knowledgeだけに止まらないうで、実行力を伴った wisdom を求める。

その意味で経営コンサルタント的な行き方には、賛成できない。

~~~~~

## 質疑応答

(問) 津久井(中央大学) 企業体のもつ経済性、収益性と、人間における倫理性、人間性がどのようにして統合されていくのか。どうすればよいのか、乗富氏に伺いたい。

(答) 乗富 私企業で教育訓練をすることにそもそも背反性がある。教育投資と生産性がバランスするかどうかをみる以外に、定性的に見ることは不可能である。教育投資は長期投資である。企業上の投資は短期をたてまえとしている。したがって企業者が地域に奉仕するというような社会的自覚に立つという前提がなければ困難な場合が多い。社会的責任の一つとして、企業者が考慮して良いのではないかと。むずかしい問題である。

(問) 木村(茨城大学) 各会社を廻って、心理卒業者の採用依頼をすると、“心理出をせっかく入社させても、法経出と異って主要なポストのコースに乗せてやれず、本人にも気の毒だから”と断られることが多い。

(答) 森岡 日立製作所では心理出を5名とっている。彼等は、

- ① 本社で教育訓練計画の立案
  - ② 本社でPR・宣伝効果
  - ③ 学校で先生
  - ④ 工場で教育訓練実務
  - ⑤ 研究所でカラー・ダイナミックス研究
- を、それぞれ担当している。

心理出は課長どまりであるという考え方は理解できない。課長になる基準があるわけではない。法経出といえども学校で得た知識で働いているのではない。専門がなんであれ、実務を通じて企業内に自己の専門を調和させ、皆の日常の仕事の中にそれを流し込み、他のジョブと接しつつ、企業を統合して行ける人が管理の位置につくのである。専攻がなんであっても同じである。

(問) 潮田(亜細亜大学) そもそも心理学の根本的な考え方について産業界は理解不足ではないか。また心理学者は産業界について理解不足である。産業人はこまかい心理学的技術の理解よりも、根本的な考え方を会得すべきではないか。

(問) 永丘(関東学院大) (1)「心理学を忘れなければ

産業界ではうまくいかない」といわれるが、どうか。(2)心理学出身の企業コンサルタントというような立場が今後可能なのではないかと。

(問) 乗富 (2)事象の解明とその評価しか心理学はやっていないと思う。実行が問題だ、コンサルタントでなく、現場のラインの統率者として人の心理を把握しなければならぬ。そのような実戦に従事して貰いたい。本でも学べることでなく、第一線に出て貰いたい。コンサルタントならむしろカウンセラーであって欲しい。実戦に踏みこんで行かなければ心理学はおとろえる。

(答) 森岡 (1)心理学を忘れなければ……云々のことならば最初から心理出を採用しなければよい。私はそんな風には全然考えていない。(2)コンサルタントという形も有用であろうがそういう外からの心理学というより、自分の身体の中の心理学であって欲しい。現在のコンサルタントは机上の空論であることが多い。

(意見) 兼子(早稲田大学) (1)今後、産業人として伸びる心理学出身者を作るように大学が努力すべきだ。マーケティング担当者などは、こまかく技術を習得すべきだ。そういう人は部長・課長・コンサルタントとかいうのではなく、スペシャリストとして行くべきである。

---

## シンポジウム(Ⅱ)

---

### 人間工学

司会 立教大学 豊原 恒男

本シンポジウムは、後に掲げる如く、東京教育大学小保内虎夫教授、運輸省技術研究所所員青木和彦氏、防衛庁航空医学実験隊長大島正光博士、早稲田大学工学部坪内和夫教授の四氏において頂き、不肖小生が司会者となって開催された。

講演題目および要旨は後載の各氏の抄稿をみて頂くこととするが、それぞれ、心理学、工学、医学の立場から人間工学の問題を説述された。小保内教授は、人間工学の語源また、人間工学を推進していくために必要な諸方法、さらに現在、人間工学が推進されている有様を主体として述べられ、これにつづいて、青木和彦氏は、機械と人間との系の関係し合いをかたを中心に、そして心理学への期待と希望を具体的に説明されたことは、心理学界

に益するところが大きかったと思う。大島博士は、現代の脚光を浴びて注目されている宇宙旅行の問題を出発点として、医学の立場からとりあげられた人間工学的諸問題の各次元を系統的に説明された。坪内教授は、企業経営の見地から、そして製品の購買者との関係において人間工学の問題がある点を述べられたが、通常、人間工学が生産面の場に限定されて説かれているのに対し、新しい分野を指摘されたものとして、意味深い点があった。

## 1. Human factor engineer について

東京教育大学 小保内虎夫

最近、わが国でも人間工学という言葉が使われているが、アメリカでは、これとともに Human factor engineer という言葉も使われ始めている。人間工学は、第二次大戦中、心理学者が中心となり、これに工学者、生理学者などが加わって開拓した領域である。戦後、その領域が拡がり、他の専門科学者も人間関係の業務に従事するようになり、それらを含めて Human factor engineer と呼ばれるようになった（専門雑誌も刊行されている）。しかしこれと人間工学者との区別はまだ厳密に確立されていないようである。

Human factor engineer は、エンジニアとしての経験、資格をもち、そのうえ心理学の上級学位を有するものか、さもなければ心理学科で人間工学を専攻したものの名称である。

しかし、現実には、そういう経歴をもたない人もこの種の業務に従事している。第1表は工学心理学協会が、民間会社について調査した結果である。（1960年）

第 1 表  
人間要因専門職

| 専攻分野        | 学位  |     |     |      | 計 |
|-------------|-----|-----|-----|------|---|
|             | 博士  | 修士  | 学士  |      |   |
| 心理学         | 375 | 240 | 130 | 745  |   |
| 社会学・人類学     | 30  | 31  | 34  | 95   |   |
| 工学          | 3   | 21  | 82  | 106  |   |
| 理学          | 7   | 3   | 14  | 24   |   |
| 数学・統計学      | 3   | 5   | 7   | 15   |   |
| 商学・経済学      | —   | 5   | 34  | 39   |   |
| 教育学         | 7   | 8   | 13  | 28   |   |
| 医学          | 7   | —   | —   | 7    |   |
| 生物物理学       | 1   | 1   | 3   | 5    |   |
| 生理学         | 5   | 3   | 1   | 9    |   |
| その他文学       | 5   | 12  | 12  | 29   |   |
| その他の社会科学    | 5   | 8   | 17  | 30   |   |
| その他の物理・生物科学 | 4   | 6   | 15  | 25   |   |
| その他の他       | —   | 2   | 11  | 13   |   |
| 計           | 452 | 345 | 373 | 1170 |   |

表からわかるように心理学者が大部分を占め、ついで工学者であるが、他にも各種科学の専攻者が含まれている。

工学心理学協会は、human factor engineer に対する社会的需要の増大にかんがみ、心理学科および工学科（工学部）における専門家養成方法、カリキュラムなどについて検討し、大学当局への提案をなしている。わが国では、こういう事態からはなほ遠いが、心理学者自身はもちろん、一般社会の人々にもこのことを知ってもらおう方がよいと思います。

## 2. 企業経営における人間工学

早稲田大学 坪内 和夫

企業が、経営活動を行っている場合に、人間工学が関係を持つてくる所が、2ヶ所ある。その第1は、その企業が生み出している製品にたいしてである。製品の設計が行われるに当りこれまで、純工学的な立場とか、外観上の美的要因だけが、重視されてきた。しかしこれらの製品は、何れどこかで誰れかの手によって使用されることになるのである。そこで、どうしても製品設計が進行してゆく過程の中に人間工学の考え方を取り入れなければならなくなってきた。人間工学の原理をよく生かした製品があらわれれば消費者からは当然歓迎されることになるのだから、販売量の増加という形で企業にプラスをもたらすことになる。

その第2は、これらの製品を作り出すための製造工程や、その働きを助けるためのサービス部門としての事務作業などにおいて見られる人間・機械システムにたいして人間工学を適用してゆくことである。このことによつて、生産現場では工員等の仕事が行いやすくなるし、事務などもスピーデイに行えることになる。したがって企業全体としての能率が高まり、生産性も向上してくるといふプラスの効果があらわれてくることになる。

今後各企業体では、人間工学の知識を蓄積し、これを実際面にアプライしたいと益々願うようになるであろう。そこで応用心理学の専攻の方々には、次の2つの道が開けてくる。その1は、人間工学を根本において支えている基礎データを形ち造っていただくことである。もう1つは、このようなデータを使いこなす人間工学のスペシャリストになっていただくことである。丁度、人間関係論が企業の中に心理学の新らしい道を作ったのと同様に、人間工学もまた心理学、工学、経営学等の特異な境界領域を、構成して

ゆくのではないかと考えている。

### 3. 機械と人間

運輸技術研究所 青木 和彦

#### 1. 機械系における人間特性

機械は人間の能力を拡大する補助手段として、人間の力や、エネルギーの大きさ、作業速度、作業精度を高め、また単一作業の繰返しや危険、到達不能作業に対する遠隔操作などに利用される。

機械の制御は一般には作業結果を見作ら行なわなければならない。人間以外の機械部分は、多くの場合、その特性が解析可能で、近來制御工学の発達が著しいため、数学的表現が進み、各要素は伝達関数の形で示されることが多い。

人間を、この総合した制御系の中の一要素と考えるとき、その特性が機械系と同一表現で示されると、統一の取扱いができ便利である。人間特性は力、位置などの制御に対しては、せいぜい2次微分～比例～2次積分までをフィードバックできるようであるが、簡単には絶対おくれを含み、例えば

$$e^{-sT_1} G(1 + sT_2) / (1 + sT_1)(1 + sT_2)$$

などの伝達関数により近似できる。〔 $T_1$ 、 $T_2$ は一次おくれ時定数、 $T_3$ は予見〕

#### 2. 機械の自動化

人間の操作能力には、限界個人差や環境気分、状態による変化、誤った判断や動作などがあり、制御要素として理想的でないため、精度、依頼度の高い作業を行なうには機械を自動化する必要がある。運輸機関や家庭用機械、原子力関係など、人命に直接大きい影響を持つものに第1に必要な、種々の自動式安全装置から1制御の自動化による特性向上、さらに判断力や記憶能力を持ったものへと進んできている。

#### 3. 心理学にお願いしたいこと

##### 1) 要求の明確化

機械の合理化のためには、人が機械を利用して何を行ないたいかの要求を、機械も含んだ生活系全体として、人の本性や社会情勢その他を考えにいった総合研究により定めることができれば、工学はこれにより具体的な目標を得るため、自然発生的に機械が進歩する場合に較べ実現の時期が促進され、目的によく合ったものが得られ必要な技術が進歩しよう。

##### 2) 人間特性の把握

人間工学として入力側ではフィードバック方式(視覚、聴覚、触覚、運動感覚、温度感覚など)の影響(受感能力)、

出力側では力、速度などの限度、制御能力などの把握のため実物やシミュレータなどによる研究が必要である。さらに人間の受感、判断、行動各能力の基本として脳、神経、筋肉その他における基本メカニズムの解明が進むにつれ、特性の表現が更に合理的になり、コンピュータや自動制御とのマッチが容易になるのみでなくそれらの手本としても役立つであろう。

#### 4. 結言

機械が自動化はじめあらゆる面において進歩し、人間が危険、疲労、苦痛、飽き、緊張などを伴うルーティン・ウワークから解放され、創造的な仕事にのみたづさわれるようになることが、人々の幸福への一目標であるように思われる。

#### 4. 宇宙飛行における医学的心理学的問題

航空医学実験隊 大島 正光

宇宙飛行を行う場合に人間工学の問題は最も大きな課題として考えなければならない。宇宙飛行の場合には発射前の待機、発射、軌道飛行、軌道からの脱出、大気圏再突入、着陸水の過程のすべてがうまくゆくことが必要である。しかも必要とする情報は極めて多く、C. H. Hopkins のまとめたものでも37種類である。宇宙船の人間工学についてはその環境条件として、第1に宇宙船の内部環境であるが、これは宇宙船内の気圧、 $O_2$ 、 $CO_2$ 、温度、湿度等であり、外部環境条件としては紫外線、宇宙線、放射能、種々の宇宙塵といわれているものなどがあり、また宇宙船そのものの条件として振動、輻射熱、騒音などの問題があり、visualな環境として宇宙視(space vision)といわれている諸問題、直接、間接的な視覚の諸問題がある。なおこの外情報をするための仲介的役割をはたす計画については宇宙飛行の Navigation としての諸問題があり、宇宙船内部の Work space の問題は姿勢が臥位姿勢である処にあらたな問題がある。

なおO-Gあるいは Weightlessness といわれている条件での種々の operation と生活の問題は地上ではおこり得ない条件である処に問題があり特にこの場合体力維持のための方策としての宇宙体操を考慮しなければならない。なお時間的要素としては反応時間が oscillatory reaction time の問題という新しい課題が解決される必要にせまられている。

心理的諸問題、Survival の問題など人間工学の上で解決されるべき多くの問題をもっているのがこの宇宙船の人間工学の問題である。

## シンポジウム(Ⅲ)

### 矯正心理と学校教育

司会 法務総合研究所 遠藤 辰雄

少年鑑別所や少年院など非行の進んだ少年たちを対象にして生まれた知見と、小学校や中学校などの問題児に対して得られた知見とを、お互いに提供し交換しあって、一貫した非行の予防・矯正の体系化に寄与することができたというのが、このシンポジウムのねらいである。しかし、問題は極めて複雑多岐にわたるので、発見の仕方とその処置という2点にしばって、まとめてみることにした。

#### 1. 非行予測研究の現状と問題点

法務総合研究所 安香 宏

非行少年を扱っていると、もっと前になぜ手を打たなかったのだろうかと悔まれる点が少ない。現在行なわれている非行予測研究は、少年たちがまだ非行におちいない前に、将来非行におちいるかどうかを確率統計の上に立って、予見しようという試みである。しかし、この研究には、次のような問題が横たわっていて、その進捗は容易ではない。

- ①予測を単なる鑑別、診断、予後と混同していること。
  - ②“非行”の概念すなわち判断の基準がいろいろあること。
  - ③予測因子のとりあげ方が区々なこと。
  - ④予測はふつう処遇や治療との関連を考えていないこと。
  - ⑤予測は対象の人権を無視し、“運命的なレッテル”を貼ることに終りやすいこと。
  - ⑥予測は、ふつう専門家でなくても判断できるような少数の限られた因子による機械的な処理に重点がおかれ、個別的な臨床の場においてはじめてとらえられる人格の微妙なダイナミックスはこれを無視していること。
- 以上の問題点から、心理学的には、“現在存在している、しかも将来変り得るもので、しかも一定の理論的仮説を媒介として、非行という人間行動の規定因子となり得る”ものを探し求め、それを予測因子としてとりあげてゆくことが重要と思われる。かかる因子は、経験上、グリュックのとりあげた原因的因子よりはむしろ特性的因子であることが次第に明らかにされるようになった。

たとえば、心理検査(ロールシャッハ・テスト, TAT, MMPI, PFT, SCT, YG自己診断など)や行動特性評定尺度(ブリストル社会適応表, ムーニーの問題行動チェック・リストなど)などは、非行のあるものとなしものをつまびやく識別できるので、そこから非行に結びつく識別因子を、さまざまな条件設定の中で吟味してゆく研究こそ、真の心理学予測研究であると考える。

#### 2. 学校における問題児の早期発見

東京都教育委員会 渡辺 祐之

1. 学校における問題児とは、警察が街頭補導の対象にするそれとは大分性質がちがう。警察は刑法犯や特別法犯のほか、22種のぐ犯・不良行為をとりあげているが、学校の場合はそのうちいくらかを含むとしても、そのすべてがあるわけではなく、粗暴、窃盗から物をいわぬ子、もしくは自殺または自殺未遂の子に至るまで、いわゆる反社会的行動、非社会的行動まで含み、顕在非行・潜在非行を広く対象とする。さらに学校差、地域差を考えると内容・質がちがってきて、複雑な様相をもつことを念頭におかねばならない。

2. 問題を早期に発見することはむずかしいことである。高等学校での非行は中学校時代に、中学校での非行は小学校時代にその萌芽があるとなると、むしろ就学以前の家庭教育に欠陥を負わせることになるが、それで涼しい顔をしているわけにはいかない。家庭・学校・社会が協力して子供により環境を与え、よい指導を施すことを通じて問題児を作らぬことと、その早期発見、早期治療につとめることが、人間として、社会人としての責務である。とくに学校や家庭に背を向ける子を作らぬ生活指導こそ先決問題である。

3. 問題児の早期発見の着眼点は、その兆候を早く察知して、早期処理が大切だが、何といっても、個人の内面からその人間構造へ近づいて行くのでなければよい指導は出来ない。

非行は、それが起る前に兆候をとらえて手をうつこと、不幸にも一旦起ったならその最初の機会を見逃さずに最善の処置を講ずることが肝要である。

4. 問題児童・生徒の指導に当っては、学校の指導体制を整え、とくに教師間の共通基盤に行うことが何よりも大切である。生活指導・教育相談など指導組織を検討して、計画化・機能化をはかると共に、P・T・A、社会教育と社会施設の協力、連けいをはかると、それにもまして教科の指導はもちろん、道徳教育、特別教育活

動を含めて、学校行事全領域全機能が児童生徒ひとりひとりへ有機的に結びつき、いかなる社会悪にも動じない人間を作りあげるような学校教育の魅力を作り出すことを最善の早期治療である。

### 3. 矯正技術としての心理療法

中野刑務所 篠田 勝郎

矯正施設に送られてくる少年には、非行の進んだ、人格のゆがんだものが多い。施設は、彼らを隔離しておく社会防衛の仕事と、その社会再適応を図る矯正教育との二つを目的としている。心理療法はこの第二の目的のために工夫された方法の一つである。それは、施設内での彼らの態度、行動、感情が、将来社会で送るべき彼らの生活への見通しと結びついているという事実にもとづく。心理療法は、施設生活の安定化を通して社会再適応を目指すものである。

少年たちは施設に強制的に入れられ、その生活も一定のプログラムに従わざるを得ない。そこで彼らは未分化な攻撃性、自棄的絶望感、退行的受動性などに陥り易い。これらはそれまでの経験から作りあげた権威感に基いている。特に社会の最初の権威像としての教師は重大な影響力を持っている。学校での問題児の扱いが表面的な行動のみを問題とし、真の原因を理解してそれに対処し得なかったために、権威の内化が妨げられ、徒らに反感を加え、事態をこじらせることが多い。まして矯正施設に一度入ると、その後の学校への適応は教師との関係の面で一層困難なものになる。

施設内での心理療法は、成功する場合には、その実施過程に伴って、カタルシス効果の他に、施設に対する不満や恐怖感の減少、攻撃対象の分化、安易な空想や即行・短絡性の減少、困難への耐久力の増大、自己の問題への洞察などの人格上の変化が見られる。しかし自主的意欲を伴った現実的生活能力を育成するのは困難である。これは、施設生活が現実の社会生活と相違しているため、リアリティ・テストができないことによるものである。この対策として心理療法の技術面でも種々の方法が工夫されているが、完全な来談者中心の方法をとり得ないので、一部では、心理劇によって患者の転移に対してセラピストが現実の代表者となって抵抗を与えることを試みている。しかし、心理療法は施設にいる間だけで完全に効果を見出すとは限らない。施設収容の前・後の学校や家庭の一貫した原理による協力が必要と望まれる。

### 4. 心理療法の学校教育への適用

東京学芸大学 品川不二郎

学校における教科指導と生活指導の特性を心理療法（又は精神衛生）の原理と比較すると、前者は一定のワタに型づける「しつけ」の性格をもち、後者と相反する面をもっている。

特に非行や反社会的な行動に対する見方や扱い方において両者は著しい差異を示している。すなわち、児童生徒の問題性に関する教師の見方は道徳的・訓育的であり、その扱いは禁止や叱責に終始する傾向がある。この傾向はウィックマンの研究以来指摘されているところであるが、わが国においては昭和二十二年以来十年間に何ら変化を示していない。

したがって、学校における反社会的な問題の扱いにおいては、精神衛生的な見地が不足し、心理療法的な傾向が稀薄であるといわねばならない。

次に、学校においては、教科学習の偏重が指摘されるから、学習における失敗は、人格形成上マイナスの役割を演ずるものと云いうる。しかるに、非行少年の知能構造は、抽象的思考に劣り、具体的・生活的な行動面に優れている傾向があるから、とかく学習面の失敗を招きやすい傾向にある。

この学習面における失敗経験は、義務教育九ヶ年に亘って累積され、それが精神衛生上の問題として発展する可能性は大きいとみなされる。その結果としての反社会的行動をしつけの原則によって導くことは不可能であろう。

したがって、心理療法的乃至精神衛生的見地に立脚して、義務教育九ヶ年のカリキュラムを徹底的に改善する必要性を強調したい。不良化防止も非行の予防と治療も、学校教育における根本的改革なしには望むことが困難であると考えられるからである。

### 総 括

法務総合研究所 遠藤 辰雄

1. 非行の早期発見、心理学的に非行という人間行動の概念がまだ明らかにされていないので、その早期発見はむづかしい。統計的方法による予測も100%当るといふわけではなく、たとえ何らかの治療を講ずるにしても、人權を考へ慎重でなくてはならない。これは兆候を見つけて、広く問題児（生徒）として診断する場合にも同様である。しかも、実際に非行が起ってからでは遅すぎ

(ある場合にはその発見が遅すぎることもある), その原因は、さらに以前にさかのぼり、対策の失敗に帰せられることが多い。そこで、心理学的な診断と治療の体系の上に立った予測の工夫とその学校教育の場における応用が望まれる。

2. 非行の早期治療 非行は、その起る前にしても、あるいは起ってしまってからにしても、早目に手を打たなければならない。心理学的に、そのような方法の一つとして心理療法の効果が認められてきた。万能薬ではないにしても、矯正施設における経験は、その原則が施設における処遇全体に行き亘ると施設の雰囲気や権威的なものから許容的になり、矯正教育の効果が自ら上ることを示している。また非行性のうすいものほどかつ早いほど、効果があるのだから、学校で早いうちに心理療法を試みてくれたらと思うケースが少なくない。

3. 矯正教育と学校教育 教育のねらいは健全な少年の育成にあるとすれば、学校も施設もそのねらいに違いない筈である。対象が違おうといっても、施設にいる少年は、学校から来るものであり、また中には再び学校へ戻るものもいる。そこで学校側と施設側とがもっと手を結びあって、少年に対して少なくとも心理学的に一貫した指導方針をとり、情報を交換できるようにすれば、非行の矯正あるいは予防の問題解決に一步前進できるのではなからうか。

## 質問要約

(山本) 犯罪予測研究にあたって、非行内容をどのように規定しているのか。

(安香) 累犯者を現在のところ、非行者でない者との差異をはっきりさせるために研究の対象としている。白と黒との中間である灰色のところを研究していくのが望ましいと考えている。

(山本) 今日、グリェックにこだわらず、この種の研究がなされていることに同意する。ブリストルによる研究へ発展を祈る。

地域によっては、かくれた非行少年がいるのではないかとかということが私の調査結果からも出ている。中学生の実態調査をやっていただきたい。

(安田・鳥取大) 心理学そのものが、行動の予測を目的としているわけですが、種々の因子が入ってきて、一般法則を立てることは困難だと思われれます。ただ、ある特定の型の個人についての予測は可能なのではないでしょうか。非行傾向の予測も、この考え方によるものと思われれますが。

問題児の内、どの位が、教師の指導のみでよいのか。

又どの位の問題児が、社会的・国家的体制の改善によってしか救われえないのか。

(渡辺) 問題児の原因は、種々でございます。親の無理解により起る問題は新聞種となります。社会環境とからんだ問題を、学校・地域が解決していくのを都が協力していきたい。

(滝沢・女子美術大) 品川先生のおっしゃるカリキュラムで、どのようなパーソナリティ構造を持った者に、どのような効果があるのか。

(品川) 私は、学習の成就感が、建設的なパーソナリティ、あるいは前進的なパーソナリティをつくっていくと考えています。

(佐藤・学芸大) 『練鑑は恐いとこだ』と、おどすことによって、非行を防止させている教育者がいる。矯正施設のP・Rはどうすべきなのか。

(安香) 犯罪者は病人である。施設を、病院と考えていただきたい。

(佐藤) 非行の条件分析が、学校関係でなされる必要があると思われる。P・T・Aに卒業までに全然出てこない家庭の処置をどうしているか。

(渡辺) 家庭との接触を持つよう呼びかけている。状況の検討をして、十時すぎに家庭訪問をすることがある。

(佐藤) 学校教師の指導の限界をこえるのではないか。社会指導主事の下で、教師以外の者が、そのような仕事をすることが出来ないか。

(渡辺) 目下のところ、学校の先生によってなされる他ない。

## 特別講演

### 欧米における心理学界の現状

九州大学 秋重 義治

日本の大学においては、心理学は、通例、文学部哲学科に所属し、旧制帝大の如き、今もって一講座にすぎない。戦後新設された教育心理学は、教育学部に所属し、これも通常は、講座程度にすぎないこのような講座制度はわが国大学の特色をなすもので、古い講座は、明治初年以來続き、それらがそれぞれ独立して、その間の交流も少なく、今日では学問の進歩をさまたげる大きな障害となっている。これに対してデパートメント・システムをとっている国では、学部はあっても、まったく異なつた機能を営んでおり、各デパートメントが学部に相当する権限と機能と組織とをもつて活動している。大きな心理学教室になると、研究職員の数だけでも200人を超えている。

このように制度がおくれているばかりでなく、研究の段階もまた一時代おけている。最近実験講座にはなつたものの、上記の講座制度に禍されて、研究の規模はいたって小さい。ミンガン大学を訪ねた折、部長のKelley教授は、ミンガン大学七十年史を示しながらこう語った。アメリカでも、はじめは心理学は哲学科に所属していたが、第二の発展段階において Social Sciences の段階に発展し、今や第三の発展段階である、Behavioral Sciences の時代に次第に移行しつつあると。ここにいう行動科学とは、狭義の Humanistic, Social Sciences と Natural Sciences とが総合された新しい学問のことである。確にそのとおりだといふことができる。このような学問の進展をもたらした契機は、いくつもあるであろうが、私は、その有力な契機の一つとして Interdisciplinary Research System という研究体制の普及をあげたい。IDRSとは、ある一つのプロジェクトを解決するために、二つ以上の学問の原理と方法をもちよつて、研究を進めてゆく研究体制のことである。その規模には、いろいろの型がある。(A)私設型、(B)半官半民型、(C)大学附置型、(D)独立の国立研究所型、(E)国際的規模の型。各型は、また、それぞれいくつかの種類をもつている。例えば、(C)の中には、独立のビルディングをもっているもの、単にオフィスだけがある、各デパートメントがそれぞれ協力しているもの、そのほか、デパートメントの中のラボラトリー自体がそのような研究体制をとっているものなど、さまざまであるが、その

本体は、いずれも、各学問が孤立的でなく協力体制にあることである。自然科学対人文・社会科学の対立は、行動科学の段階では、もはや、その本来の意味を失っていると言わねばならない。日本の研究の現状が一時代おけていると言われる所以である。

一九三〇年代に新設されたカリフォルニア大学心理学教室は、今春、これに隣接して五階建の建物を増築した。ところが驚いたことに、新築早々、さらに新館に隣接して、一九六五年度までに建てる予定の十一階建の教室の設計が進められている。その理由を聞いたところ現在の勢で学生および研究者数が膨脹していけば、五年後には、本年増築された新館をもってしても消化しきれないというのである。このすさまじい心理学の膨脹発展の傾向は、たんにアメリカのみの現象ではない。北欧でも、戦後のドイツでも、さらには新興アジア諸国においても共通にみられる現象である。日本のみがその例外でありえよう筈はない。この傾向を定員の枠でおさえることが、果して将来のためにとるべき賢明な策であろうか。慎重に検討さるべき問題である。

この夏、コペンハーゲンにおいて、八月十三日から一週間にわたって開かれた第十四回国際応用心理学会は、右の発展を如実に反映して実に盛大なものであった。参加国42、参加者総数1,400余、産業、教育、犯罪等諸般の問題をとりあげたシンポジウム25、研究発表総数150。なかでも特に光彩を放つたのは、平和問題に関するイリノイ大学オスグット教授の開会講演、平和問題に関するシンポジウムに続いて開かれた東西平和問題委員会の開催であつたらう。今後、これを契機に、平和問題に対する心理学者の関心は、益々大きくなることだろう。

わが国の将来の科学技術の振興方策をたてた科学技術庁の諮問第一号には、人文社会科学は含まれていない。このことに刺戟されて日本学術会議の中に、人文社会科学特別振興委員会が設けられ、総合的人間科学とも称すべき行動科学研究所の設立のことも研究されているが、これに対して、アメリカ科学財団の在り方は、非常な参考となるだろう。即ち、1958年に、新たに社会科学部が増設され、本年度会計予算の如きも340万ドルの巨額が計上されている。考えさせられる問題である。本年12月開かれる予定の日米科学委員会の研究協力事項の一つに、Behavioral Sciences もあげられていたと言われる。もしそうであるならば、行動に関する法則樹立を目標とするわれわれ心理学者もまた、いつでも研究協力に応じられるよう、その研究体制を整えておくことが大切なことであり、この問題は、上記行動科学研究所の設立実現に対する努力とともに、本学会がとりあげて研究すべき重要な課題の一つであらう。

### 常任運営委員会記録

36年4月15日 立教大学五号館会議室に於て 出席者：遠藤辰雄，小保内虎夫，児玉省，長谷川貢，松村康平，三宅守一，本明寛。

36年5月29日 立教大学五号館会議室に於て，出席者：小保内虎夫，児玉省，塩入円祐，鶴田正一，豊原恒男，中野佐三，中村弘道，松村康平，三宅守一。

36年7月10日 立教大学タツカーホール会議室に於て出席者：遠藤辰雄，小保内虎夫，児玉省，塩入円祐，豊原恒男，中村弘道，長谷川貢，松井三雄，松村康平，三宅守一，本明寛，山根薫。

○大会関係の本部からの補助金について——今までは，大会準備金として開催校に貸していた5万円は，今後贈与することにし，従って返す必要がなくなった。又，論文集出版補助金は15万円と決定。

○学会主催で7月28日午後4時から，虎ノ門共済会館に於いて，スーパー氏の講演会をやる事が決定。

36年10月2日 立教大学タツカーホール会議室に於いて 出席者：遠藤辰雄，小保内虎夫，児玉省，塩入円祐，鈴木清，豊原恒男，中野佐三，中村弘道，長谷川貢，三宅守一，本明寛，山根薫。

○本学会機関誌出版計画について，長谷川機関誌出版準備委員より報告。

○心理技術者養成に関する委員会につき，精神神経医学会との交渉の結果を児玉委員報告，更に委員会で検討すること。

### 運営委員会記録

36年10月13日（金）午後3時～午後5時 会場：東京教育大学本館会議室 出席者：秋重義治，天野利武，遠藤辰雄，大場千秋，岡部弥太郎，小木曾恩，小熊虎之助，古賀行義，児玉省，塩入円祐，鈴木清，薄田司，長谷川貢，増田幸一，松井三雄，宮孝一，三宅守一，本明寛，山根薫，横瀬善正，横山松三郎，小保内虎夫，松村康平，豊原恒男。

○昭和35年度学会会計決算報告——児玉委員（別項大会記録参照）

○第27回大会（於，金沢大学）会計決算報告——宮委員（別項大会記録参照）

○昭和36年度学会会計予算案について——豊原委員（別項大会記録参照）

○次期大会開催校について——東京地区で開催するという事だけ決定，その他くわしくは，常任運営委員会

で決めることにする。

○学会機関誌出版の件について長谷川委員より報告。

○運営委員，常任運営委員増員の件について——若干名の委員の増員を認め，会長が最終的に決定することにする。

### 第28回大会総会記録

36年10月14日（土）午後4時～5時 会場：東京教育大報告事項

○事務局移転の件

36年4月1日から学会事務局が立教大学心理・教育学科研究室内に移転したと豊原委員より報告。

○各部会の活動報告

相談部会の増設，心理技術者養成委員会，教員養成委員会，交通事故防止委員会について報告。

○第27回大会会計決算報告——宮委員

〔収入〕

|                    |         |
|--------------------|---------|
| 論文掲載費（100円×235人）   | 23,500円 |
| 大会会費（正会員350円×282人） | 98,700  |
| 大会会費（臨時会員350円×14人） | 4,900   |
| 大会会費（学生会員150円×22人） | 3,300   |
| 写真代（100円×90人）      | 9,000   |
| 懇親会会費（200円×70人）    | 14,000  |
| 論文集出版費（本部から）       | 200,000 |
| 広告料                | 85,000  |
| 本部からの補助金           | 50,000  |
| 金沢大学からの寄付          | 30,000  |
| 寄付                 | 16,786  |
| 雑収入（預金利子）          | 2,416   |

計 537,598

〔支出〕

|               |          |
|---------------|----------|
| 論文集印刷費        | 232,000円 |
| 印刷費           | 69,990   |
| 通信費           | 35,518   |
| 論文集送料（金沢—東京）  | 4,550    |
| 交通費           | 4,620    |
| 懇親会費          | 39,005   |
| 写真代           | 10,020   |
| 講師謝礼          | 10,000   |
| 運営委員会費        | 15,556   |
| 消耗品費          | 26,977   |
| 労務費（学生アルバイト等） | 26,390   |

|             |         |
|-------------|---------|
| 食事代（準委，学生等） | 25,622円 |
| 旅 費         | 31,500  |
| 雑 費         | 5,850   |
| 計           | 537,598 |

## 昭和35年度学会会計決算報告

（昭和35年4月1日～昭和36年3月末日）

|                       |          |
|-----------------------|----------|
| 〔収入〕                  |          |
| 前年度繰越金                | 240,183円 |
| 過年度分学会費（500円×191人）    | 95,500   |
| 35年度分学会費（500円×478人）   | 239,000  |
| 36年度分学会費（500円×22人）    | 11,000   |
| 37年度分学会費（500円×1人）     | 500      |
| 過年度論文集出版補助費（50円×149人） | 7,450    |
| 第27回 “（50円×404人）      | 20,200   |
| 第28回 “（50円×16人）       | 800      |
| 第29回 “（50円×1人）        | 50       |
| 名簿売上代金（200円×16人）      | 3,200    |
| 論文集売上代金（53円）          | 13,250   |
| 名簿代寄付（100円×84人）       | 8,400    |
| 寄 付                   | 65,000   |
| 計                     | 704,533  |

|                |         |
|----------------|---------|
| 〔支出〕           |         |
| 地方部会補助金        | 5,000円  |
| 相談部会補助金        | 5,000   |
| 教員養成委員会補助金     | 5,000   |
| 第27回大会開催補助金    | 50,000  |
| 第27回大会論文集出版補助金 | 122,900 |
| 第28回大会開催補助金    | 30,000  |
| 名簿作成費          | 165,000 |
| 印 刷 費          | 12,830  |
| 郵 送 費          | 40,619  |
| 委員会費           | 1,885   |
| 消耗品費           | 2,290   |
| 交 通 費          | 2,065   |
| 電信・電話費         | 366     |
| 事務局員手当         | 76,000  |
| 事務局員及び臨時手伝夜勤手当 | 2,290   |
| 事務局員金沢出張費      | 5,437   |
| 講師車代           | 1,080   |
| 計              | 527,762 |

|      |          |
|------|----------|
| 〔差引〕 |          |
| 収入   | 704,533円 |

|         |         |
|---------|---------|
| 支出      | 527,762 |
| 36年度繰越金 | 176,771 |

## 昭和36年度学会会計予算案

（昭和36年4月1日～昭和37年3月末日）

|                       |          |
|-----------------------|----------|
| 〔収入〕                  |          |
| 前年度繰越金                | 176,771円 |
| 過年度分学会費（500円×200人）    | 100,000  |
| 過年度論文出版補助費（50円×200人）  | 10,000   |
| 36年度分学会費（500円×550人）   | 275,000  |
| 第28回論文出版補助費（50円×550人） | 27,500   |
| 予 金 利 子               | 3,000    |
| 計                     | 592,271  |
| 〔支出〕                  |          |
| 地方部会補助金               | 5,000円   |
| 36年度5部会補助金            | 25,000   |
| 事務局員手当                | 112,000  |
| 印 刷 費                 | 25,000   |
| 郵 税                   | 60,000   |
| 電報・電話料                | 3,000    |
| 交 通 費                 | 15,000   |
| 消耗品費                  | 5,000    |
| 第28回大会補助金残額           | 20,000   |
| 第28回大会論文出版補助金         | 150,000  |
| 第27回 “ 残額             | 77,100   |
| 予 備 費                 | 95,171   |

○機関誌刊行の件について——長谷川委員報告。

○次期大会開催校の件について——小保内会長。

東京地方で開催することにし、くわしくは、常任委員会に任せることに決定。

○運営・常任運営委員の増員の件について——小保内会長。

ここでは、若干名増員を認めてもらい、後で運営委員会で審議し、最後に会長が決定するということが承認された。

## 常 任 運 営 委 員 会 記 録

36年11月13日 会場：立教大学タツカーホール会議室  
出席者：遠藤辰雄，小保内虎夫，児玉省，豊原恒男，長谷川貢，中村弘道，松村康平。

○学会機関誌出版に関する編集委員及び編集参与委嘱の件。

編集委員を次の諸氏にお願いすることに決定。安倍淳吉、伊藤祐時、清宮栄一、行田忠雄、小見山栄一、坂田一、豊原恒男、永丘智郎、中川大倫、松村康平、三宅守一、三好稔、横瀬善正。(敬略)

尚、編集参与は、運営委員全員がなることに決定。

○運営・常任運営委員に次の諸氏が新たに委嘱された。常任運営委員一植松正、運営委員一山本晴雄、堀内敏夫、竹原東一。(敬略)

36年12月4日 会場：立教大学心理、教育学科研究室  
出席者：小保内虎夫、児玉省、遠藤辰雄、兼子宙、鈴木清、豊原恒男、中村弘道、松村康平、三宅守一。

○次期大回開催校 慶応義塾大学に決定。

37年1月29日 会場：立教大学心理・教育学科研究室  
出席者：遠藤辰雄、小保内虎夫、鶴田正一、豊原恒男、中村弘道、三宅守一、長谷川貢、林銑蔵、松井三雄、山根薫。

○次期大会開催校を慶応義塾大学で受諾、林銑蔵氏が新会長に就任。

その他の委員会記録

○学会機関誌編集委員会

36年12月4日 会場：立教大学心理・教育学科研究室  
出席者：小見山栄一、伊藤祐時、清宮栄一、坂田一、永丘智郎、中川大倫、豊原恒男、松村康平。

36年17月8日 会場：立教大学心理・教育学科研究室  
出席者：伊藤祐時、小見山栄一、永丘智郎、三宅守一。

37年1月24日 会場：立教大学心理・教育学科研究室  
出席者：伊藤祐時、小見山栄一、松村康平、三宅守一。

○心理技術者認定機関創設に関する準備委員会

26年12月11日 会場：日本女子大児童研究所 出席者 児玉省、遠藤辰雄、塩入門祐、三宅守一、松村康平。

新入会員氏名

昭和36年4月～昭和37年2月10日現在

|        |        |        |                          |        |
|--------|--------|--------|--------------------------|--------|
| 飯島 婦佐子 | 飯塚 銀次  | 磯部 治平  | 板垣 正子                    | 市橋 広三郎 |
| 稲吉 千代  | 伊野 宮寛  | 岩淵 正義  | 上野 英夫                    | 上村 益稔  |
| 内田 百合子 | 海野 悦子  | 江川 寿子  | 江刺家 磐男                   | 大石 尚子  |
| 大久保 哲也 | 大熊 喜代松 | 大沢 博   | 大谷 璋                     | 大谷 宗司  |
| 大脇 園子  | 小川 敏通  | 小倉 力三  | 小津 邦夫                    | 小野 勇亮  |
| 小野 敬仁  | 甲斐 志郎  | 海保 正里  | 上総 貴美子                   | 金子 隆芳  |
| 金子 慶夫  | 加納 恒男  | 河添 俊男  | 川原 安正                    | 神作 博   |
| 木津川 家久 | 楠 正三   | 久米 允子  | 倉戸 ヨシヤ                   | 黒江 静子  |
| 小池 健二  | 小坂 明美  | 後藤 寛   | 小山 雅子                    | 篠原 睦治  |
| 波谷 嘉寿子 | 島田 俊秀  | 清水 寛   | 杉村 喜昭                    | 相馬 一郎  |
| 高橋 たまき | 高橋 雅春  | 高橋 勇吉  | 竹野谷 弘子                   | 立石 延子  |
| 塚本 三朗  | 堤 稔    | 富家 直   | 富国 重道                    | 富山 はつ江 |
| 中川 忠男  | 中岡 和夫  | 長岡 青遠  | 中川 英郎                    | 中島 武二  |
| 中田 カヨ子 | 信江 裕子  | 長谷川 浩一 | 長谷川 篤平                   | 服部 広子  |
| 服部 政夫  | 早川 幸夫  | 原 勝一   | 福島 脩美                    | 福富 寿光  |
| 藤井 祥三  | 藤井 千枝  | 藤田 統   | Hellersberg, Elisabeth F |        |
| 堀内 敏   | 本間 周子  | 松尾 幸子  | 松沢 萌子                    | 丸山 直美  |
| 三石 忠徳  | 水口 礼治  | 水野 誠司  | 本林 勝海                    | 森川 正大  |
| 茂呂 森一  | 梁 淑子   | 山片 正昭  | 山本 和郎                    | 山本 大虔  |
| 吉森 護   | 米田 和代  | 渡 辺 克英 |                          |        |

第28回大会 研究発表論文抄録集 第13集

---

昭和 36 年 3 月 発行

発行者 日本応用心理学会  
第28回大会会長 小保内 虎 夫  
編集者 日本応用心理学会大会準備委員  
東京都文京区窪町 2-4  
東京教育大学心理学教室内  
日本応用心理学会本部  
印刷者 小 山 康 三  
印刷所 明 徳 印 刷 出 版 社  
東京都千代田区美土代町 6

---